

京都府遺跡調査概報

第74冊

1. 篠・マル山1号窯跡
2. 名神高速道路関係遺跡
3. 弓田遺跡第2次

1997

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) S D95062遺物出土状況（南東から）



(2) S D95062出土形象埴輪群

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成7・8年度に実施した発掘調査のうち、日本道路公団大阪建設局、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて行った篠・マル山1号窯跡、名神高速道路関係遺跡(長岡京跡左京第361・362・363次)、弓田遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、亀岡市教育委員会・京都市埋蔵文化財調査センター・(財)向日市埋蔵文化財センター・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・大山崎町教育委員会・(財)京都市埋蔵文化財研究所・木津町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 樋口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 篠・マル山1号窯跡
2. 名神高速道路関係遺跡(長岡京跡左京第361・362・363次)
3. 弓田遺跡第2次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

| 遺跡名 | 所在地 | 調査期間 | 経費負担者 | 執筆者 |
|------------------------------------|----------------|---------------------|-----------------|---|
| 1. 篠・マル山1号窯跡 | 亀岡市篠町篠黒岩 | 平8.1.23～ 7.26 | 日本道路公団 大阪建設局 | 石井 清司 野々口陽子 |
| 2. 名神高速道路関係遺跡(長岡京跡左京第361・362・363次) | 京都市南区久世東土川町金井田 | 平7.4.10～ 平8.2.28 | 日本道路公団 大阪建設局 | 戸原 和人 竹井 治雄 岩松 保 中川 和哉 森島 康雄 野島 永 岸岡 貴英 |
| 3. 弓田遺跡第2次 | 相楽郡木津町市坂弓田・上大条 | 平7.4.18～ 11.22 | 建設省近畿地方建設局 | 辻本 和美 森下 衛 橋本 稔 |

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

目 次

| | |
|-------------------------------------|-----|
| 1. 篠・マル山1号窯跡発掘調査概要----- | 1 |
| 2. 名神高速道路関係遺跡平成7年度発掘調査概要 | |
| —長岡京跡左京第361・362・363次(7ANVKN-6・7・8)— | 33 |
| 3. 弓田遺跡第2次発掘調査概要----- | 67 |
| 付載 花粉分析及び樹種同定について----- | 120 |

挿 図 目 次

| | |
|---------------|--|
| 1. 篠・マル山1号窯跡 | |
| 第1図 | 遺跡分布図-----2 |
| 第2図 | 周辺窯跡分布図(1)-----5 |
| 第3図 | 周辺窯跡分布図(2)-----5 |
| 第4図 | 地形測量図-----6 |
| 第5図 | 窯体実測図-----8 |
| 第6図 | マル山1号窯跡実測図-----9 |
| 第7図 | 土層図-----11 |
| 第8図 | 窯跡周辺地形図-----12 |
| 第9図 | 器種一覧-----13 |
| 第10図 | マル山1号窯跡出土遺物(1) 窯体内-----17 |
| 第11図 | マル山1号窯跡出土遺物(2) 上層灰原1-----20 |
| 第12図 | マル山1号窯跡出土遺物(3) 上層灰原2-----21 |
| 第13図 | マル山1号窯跡出土遺物(4) 上層灰原3-----22 |
| 第14図 | マル山1号窯跡出土遺物(5) 整地層-----24 |
| 第15図 | マル山1号窯跡出土遺物(6) 下層灰原-----25 |
| 第16図 | 重ね焼きと土器の設置方法-----27 |
| 第17図 | 篠窯跡群の変遷-----29 |
| 2. 名神高速道路関係遺跡 | |
| 第18図 | 調査地区位置図-----35 |
| 第19図 | 調査トレンチ配置図-----36 |
| 第20図 | 長岡京期主要遺構平面図-----37 |
| 第21図 | 出土遺物実測図(1) 中世～平安時代-----38 |
| 第22図 | 遺構平面図(1) 中世～平安時代-----39 |
| 第23図 | 遺構平面図(2) 長岡京期-----41 |
| 第24図 | 出土遺物実測図(2) 長岡京期-----44 |
| 第25図 | 地鎮跡S X361172実測図 長岡京期-----45 |
| 第26図 | 掘立柱建物跡S B363078・S B363079実測図 長岡京期-----47 |
| 第27図 | 掘立柱建物跡S B362116・S B362117実測図 長岡京期-----48 |
| 第28図 | 出土遺物実測図(3) S B362116柱穴出土礎板 長岡京期-----49 |

| | | |
|------|---|----|
| 第29図 | 地鎮跡 S X 362100実測図及び同出土二彩土器実測図 長岡京期----- | 50 |
| 第30図 | 出土遺物実測図(4) 井戸 S E 363084東辺横板 長岡京期----- | 51 |
| 第31図 | 井戸 S E 363084枳板外面の墨書実測図(上)と刻印拓影(下)----- | 52 |
| 第32図 | 溝 S D 362111遺物出土状況----- | 53 |
| 第33図 | 出土遺物実測図(5) 長岡京期----- | 54 |
| 第34図 | 橋跡 S X 361181(左)・S X 361182(右)実測図----- | 55 |
| 第35図 | 出土遺物実測図(6) 飛鳥時代溝 S D 362201----- | 55 |
| 第36図 | 遺構平面図(3) 飛鳥～弥生時代----- | 57 |
| 第37図 | 環濠及び方形周溝墓群断面図----- | 59 |
| 第38図 | 出土遺物実測図(7) 弥生時代 1 ----- | 60 |
| 第39図 | 出土遺物実測図(8) 弥生時代 2 ----- | 61 |
| 第40図 | 長岡京期建物配置模式図----- | 63 |

3. 弓田遺跡第2次

| | | |
|------|-------------------------|----|
| 第41図 | 弓田遺跡周辺主要遺跡分布図----- | 68 |
| 第42図 | 調査地位置図----- | 69 |
| 第43図 | 弓田遺跡B地区遺構配置図----- | 71 |
| 第44図 | 弓田遺跡B地区北部遺構実測図----- | 72 |
| 第45図 | S D 95062D区遺物出土状況図----- | 73 |
| 第46図 | S H 95063実測図----- | 75 |
| 第47図 | S H 95064実測図----- | 76 |
| 第48図 | S B 95072実測図----- | 77 |
| 第49図 | S E 95030実測図----- | 77 |
| 第50図 | 土器実測図(1) 須恵器 1 ----- | 79 |
| 第51図 | 土器実測図(2) 須恵器 2 ----- | 80 |
| 第52図 | 土器実測図(3) 土師器 1 ----- | 82 |
| 第53図 | 土器実測図(4) 土師器 2 ----- | 84 |
| 第54図 | 土器実測図(5) 土師器 3 ----- | 85 |
| 第55図 | 土器実測図(6) 土師器 4 ----- | 86 |
| 第56図 | 土器実測図(7) 土師器 5 ----- | 87 |
| 第57図 | 土器実測図(8) 土師器 6 ----- | 89 |
| 第58図 | 土器実測図(9) 土師器 7 ----- | 90 |
| 第59図 | 土器実測図(10) 土師器 8 ----- | 91 |
| 第60図 | 土器実測図(11)----- | 92 |
| 第61図 | 土器実測図(12)----- | 93 |
| 第62図 | 埴輪実測図(1)----- | 97 |

| | | | |
|------|------------|-------|-----|
| 第63図 | 埴輪実測図(2) | ----- | 99 |
| 第64図 | 埴輪実測図(3) | ----- | 101 |
| 第65図 | 埴輪実測図(4) | ----- | 104 |
| 第66図 | 埴輪実測図(5) | ----- | 106 |
| 第67図 | 埴輪実測図(6) | ----- | 108 |
| 第68図 | 埴輪実測図(7) | ----- | 110 |
| 第69図 | 埴輪実測図(8) | ----- | 112 |
| 第70図 | 木製品実測図(1) | ----- | 115 |
| 第71図 | 木製品実測図(2) | ----- | 116 |
| 第72図 | 玉類・砥石実測図 | ----- | 117 |
| 第73図 | 採取地点1地層相関図 | ----- | 120 |

付 表 目 次

| | | | |
|----------------------|------------------------|-------|-----|
| 1. 篠・マル山1号窯跡 | | | |
| 付表1 | 器種別個体数一覧表 | ----- | 16 |
| 付表2 | 器種別法量表 | ----- | 26 |
| 2. 名神高速道路関係遺跡 | | | |
| 付表3 | 平成7年度 名神高速道路関係遺跡発掘調査一覧 | ----- | 33 |
| 付表4 | 遺構番号対照表 | ----- | 34 |
| 付表5 | 井戸枠板外面墨書一覧 | ----- | 51 |
| 3. 弓田遺跡第2次 | | | |
| 付表6 | 個体数一覧表 | ----- | 94 |
| 付表7 | 器種別個体数一覧表 | ----- | 95 |
| 付表8 | 円筒埴輪一覧表 | ----- | 113 |
| 付表9 | 木製品一覧表 | ----- | 114 |
| 付表10 | 白玉計測表 | ----- | 117 |

図版目次

1. 篠・マル山1号窯跡

- 図版第1 (1)調査地遠景(南東から) (2)調査地近景(北東から)
(3)掘削前調査地全景(北から)
- 図版第2 (1)窯体・上層灰原検出状況(北東から) (2)窯体検出状況(北東から)
(3)窯体検出状況(北から)
- 図版第3 (1)窯体内土層断面(M-M'土層断面) (2)窯体内完掘状況
(3)焼成部須恵器設置復原
- 図版第4 (1)窯体天井部検出状況(北から) (2)焼成部後半床面(北から)
(3)燃焼部遺物出土状況
- 図版第5 (1)焚き口周辺(東から) (2)上層灰原検出状況(東から)
(3)灰原土層断面(南から)
- 図版第6 (1)窯体天井部断面<N-N'>(南西から)
(2)窯体断ち割り<M-M'>(北東から) (3)窯体完掘状況(北東から)
- 図版第7 (1)窯体燃焼部断ち割り (2)窯体焼成部断ち割り
(3)現地説明会風景(南から)
- 図版第8 出土遺物(1)
- 図版第9 出土遺物(2)
- 図版第10 出土遺物(3)
- 図版第11 出土遺物(4)
- 図版第12 出土遺物(5)

2. 名神高速道路関係遺跡

- 図版第13 (1)調査地全景(中・近世遺構面、南から) (2)調査地全景(西から)
- 図版第14 (1)調査地全景(長岡京期・平安時代遺構面、南から)
(2)調査地全景(西から)
- 図版第15 (1)掘立柱建物跡S B 363119(南から) (2)井戸S E 363115(北から)
- 図版第16 (1)南一条第二小路S F 362140(東から)
(2)南一条第二小路S F 362140轍跡(西から)
- 図版第17 (1)東三坊大路S F 33007(南から)
(2)東三坊大路路面地鎮S K 361172(上が北)
- 図版第18 (1)東三坊大路東側溝橋跡S X 361182(西から)

- (2) 東三坊大路東側溝 S D32901 火舎出土状況(西から)
- 図版第19 (1) 掘立柱建物跡 S B363081(南から)
(2) 掘立柱建物跡 S B363078・363079・363082、溝 S D363120(南から)
- 図版第20 (1) 掘立柱建物跡 S B363079・363080(南から)
(2) 掘立柱建物跡 S B362104(南から)
- 図版第21 (1) 掘立柱建物跡 S B362118(南から)
(2) 掘立柱建物跡 S B362116(西から)
- 図版第22 (1) 掘立柱建物跡 S B362116・362117(南から)
(2) 掘立柱建物跡 S B362116 柱穴ピット14(西から)
- 図版第23 (1) 掘立柱建物跡 S B362116 柱穴ピット5(南から)
(2) 掘立柱建物跡 S B362116 柱穴ピット4(南から)
- 図版第24 (1) 掘立柱建物跡 S B362117 柱穴ピット4(南から)
(2) 掘立柱建物跡 S B362117 柱穴ピット13(南から)
- 図版第25 (1) 地鎮跡 S X362100 検出状況(東から)
(2) 地鎮跡 S X362100 小壺埋納状況(復原、東から)
- 図版第26 (1) 井戸 S E363084(北から) (2) 井戸 S E363084 遺物出土状況(南から)
- 図版第27 (1) 土坑 S X363090 遺物出土状況(東から)
(2) 土坑 S X363089 遺物出土状況(南から)
- 図版第28 (1) 溝 S D362105 遺物出土状況(西から)
(2) 溝 S D362111 遺物出土状況(南から)
- 図版第29 (1) 塀 S A33609(南から) (2) 塀 S A33609 柱穴ピット96(東から)
- 図版第30 (1) 調査地全景(弥生～飛鳥時代遺構面、南から) (2) 調査地全景(西から)
- 図版第31 (1) 溝 S D362201(南東から) (2) 溝 S D363107 牛足跡
- 図版第32 (1) 環濠 S D361162・361168(南東から)
(2) 環濠 S D361162 断面(南東から)
- 図版第33 (1) 方形周溝墓 S D361123・S X363113(東から)
(2) 方形周溝墓 S D361123 周溝東辺出土土器(西から)
- 図版第34 (1) 方形周溝墓群(東から) (2) 道路状遺構 S F363108・363109(南東から)
- 図版第35 (1) 水田畦畔(南東から) (2) 水田畦畔(南から)
- 図版第36 出土遺物(1)
- 図版第37 出土遺物(2)
- 図版第38 出土遺物(3)
- 図版第39 出土遺物(4)
- 図版第40 出土遺物(5)
- 図版第41 出土遺物(6)

- 図版第42 出土遺物(7) 掘立柱建物跡 S B 362116出土礎板
 図版第43 出土遺物(8) 井戸 S E 363084横板(外面)・墨書及び刻印
 図版第44 出土遺物(9)

3. 弓田遺跡第2次

- 図版第45 (1)調査地全景(北西から) (2)調査地全景(垂直、上が北東)
 図版第46 (1)トレンチ北部遺構検出状況(古墳時代、南東から)
 (2)トレンチ南部遺構検出状況(奈良時代、北西から)
 図版第47 (1) S D 95062北部遺物出土状況(A・B区、南から)
 (2) S D 95062南部遺物出土状況(D・C・F・G区、北西から)
 図版第48 (1) S D 95062(A区)遺物出土状況(西から)
 (2) S D 95062(B区)遺物出土状況(西から)
 (3) S D 95062(D区)遺物出土状況(南西から)
 (4) S D 95062(D区)中央遺物出土状況(北東から)
 図版第49 (1) S D 95062(C区)遺物出土状況(南西から)
 (2) S D 95062(F・G区)遺物出土状況(南から)
 (3) S D 95062(B区)人物埴輪1出土状況(西から)
 (4) S D 95062(B区)盾形埴輪1出土状況(北東から)
 図版第50 (1) S D 95062(D区)馬形埴輪1出土状況(北東から)
 (2) S D 95062(D区)蓋・合子形埴輪1出土状況(南から)
 (3) S D 95062(C区)家形埴輪出土状況(南西から)
 (4) S D 95062(F区)馬形埴輪2出土状況(西から)
 図版第51 (1) S D 95062(F区)盾形埴輪2出土状況(西から)
 (2) S D 95062(F区)合子形埴輪2出土状況(北から)
 (3) S D 95062(D区)下層高杯群出土状況(西から)
 (4) S D 95062(D区)高杯群種子出土状況(北から)
 図版第52 (1) S X 95069・70検出状況(南東から) (2) S X 95069(手前の板材が榎、東から)
 (3) S K 95075遺物出土状況(南東から) (4) S X 95070東端部樋出土状況(南から)
 図版第53 (1) S D 95044・45・55検出状況(南から)
 (2) S K 95054遺物出土状況(東から) (3) S D 95044樋出土状況(南から)
 (4) S D 95044梯子出土状況(東から)
 図版第54 (1) S D 95045、S K 95049・50・51検出状況(南から)
 (2) S K 95046検出状況(東から) (3) S K 95047検出状況(北から)
 (4) S K 95048検出状況(南から)
 図版第55 (1) S D 95055検出状況(北から) (2) S H 95054検出状況(南から)
 (3) S H 95063検出状況(東から) (4) S H 95064検出状況(東から)

- 図版第56 (1) S B 95072検出状況(東から) (2) ピット 1 遺物出土状況(南西から)
(3) S E 95030検出状況(北東から) (4) S E 95030曲物出土状況(西から)
- 図版第57 出土遺物(1) 土器 1 須恵器・土師器
- 図版第58 出土遺物(2) 土器 2 土師器
- 図版第59 出土遺物(3) 土器 3 土師器
- 図版第60 出土遺物(4) 土器 4 大型甕
- 図版第61 出土遺物(5) 土器 5 土師器
- 図版第62 出土遺物(6) 埴輪 1
- 図版第63 出土遺物(7) 埴輪 2
- 図版第64 出土遺物(8) 埴輪 3
- 図版第65 出土遺物(9) 埴輪 4
- 図版第66 出土遺物(10) 埴輪 5
- 図版第67 出土遺物(11) 埴輪 6
- 図版第68 出土遺物(12) 埴輪 7
- 図版第69 出土遺物(13) 玉類・砥石、木製品 1
- 図版第70 出土遺物(14) 木製品 2

1. 篠・マル山1号窯跡発掘調査概要

1. はじめに

亀岡盆地の南東部に位置する篠窯跡群は、8世紀中頃から11世紀にかけて百数十基の窯跡が存在することから、古代における須恵器(一部緑釉陶器・瓦を含む)の一大生産地として知られている。篠窯跡群は、京都縦貫自動車道(旧呼称「国道9号バイパス」)に伴う事前調査として、昭和51年度以降、11か年をかけて京都府教育委員会及び(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが試掘調査・発掘調査を実施した。その結果、緑釉陶器を二次焼成した小型特殊窯跡6基を含む須恵器焼成窯跡21基のほか、窯状遺構5基・焼土坑10基と、それに関連した作業場跡などを検出している。

今回の調査は、亀岡市篠町篠黒岩に所在する篠・マル山1号窯跡が京都縦貫自動車道篠インターチェンジ増設予定地の路線内に含まれることから、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて発掘調査を実施した。このマル山1号窯跡は、昭和47年度の京都府教育委員会による「国道9号バイパスに関連する分布調査」で窯跡の存在が知られていた。当時の分布調査では「林道の西側丘陵地に灰原が露出し、(中略)須恵器片の散乱状態から少なくとも2基の窯跡」の存在が推定されていた地点である。

調査は、平成8年1月23日から同年2月28日までの第1次調査(面積約200m²)と平成8年6月6日から同年7月26日までの第2次調査を実施した。第1次調査は、分布調査で確認された灰原を中心にトレンチを設定し、窯跡本体の範囲確認を行った。調査の結果、マル山1号窯跡は1基で構成されており、灰原が焚き口付近から直径約7mの範囲にわたって広がっていることが明らかとなった。第2次調査では第1次調査で明らかとなった窯跡本体と灰原の掘削作業を行うとともに、周辺の関連遺構の有無を明らかにするために発掘調査を実施した。その結果、後述するように、窯跡が半地下式構造で天井部を含めた窯体の遺存状況が良好であり、灰原も整地層を挟んで二層に分かれることが明らかとなった。

第1次調査は調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎・同調査員野々口陽子・同竹下士郎が、第2次調査は調査第2課調査第2係長辻本和美・同主任調査員石井清司・同調査員野々口陽子が担当し、多くの調査作業員・補助員・整理員の協力を得た。また、調査期間中は京都府教育庁指導部文化財保護課・亀岡市教育委員会をはじめ、関係機関からの協力と有益な助言をいただいた。なお、この調査に係わる経費は日本道路公団が全額を負担していただいた。

本概要の執筆は、主に遺構を野々口陽子、遺物を石井清司がそれぞれ分担し、編集を野々口が担当した。

(石井清司)



第1図 遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | | |
|--------------|------------|-----------|-----------|---------|----------|
| 1. 篠窯跡群 | 2. マル山1号窯跡 | 3. 山本遺跡 | 4. 山本城跡 | 5. 馬堀城跡 | 6. 観音芝廃寺 |
| 7. 観音芝遺跡 | 8. 野条古墳 | 9. 瀬ノ花塚古墳 | 10. 樹塚古墳 | 11. 篠遺跡 | |
| 12. 三ツ塚1～3号墳 | | 13. 向山古墳 | 14. 老ノ坂城跡 | | |

2. 位置と環境

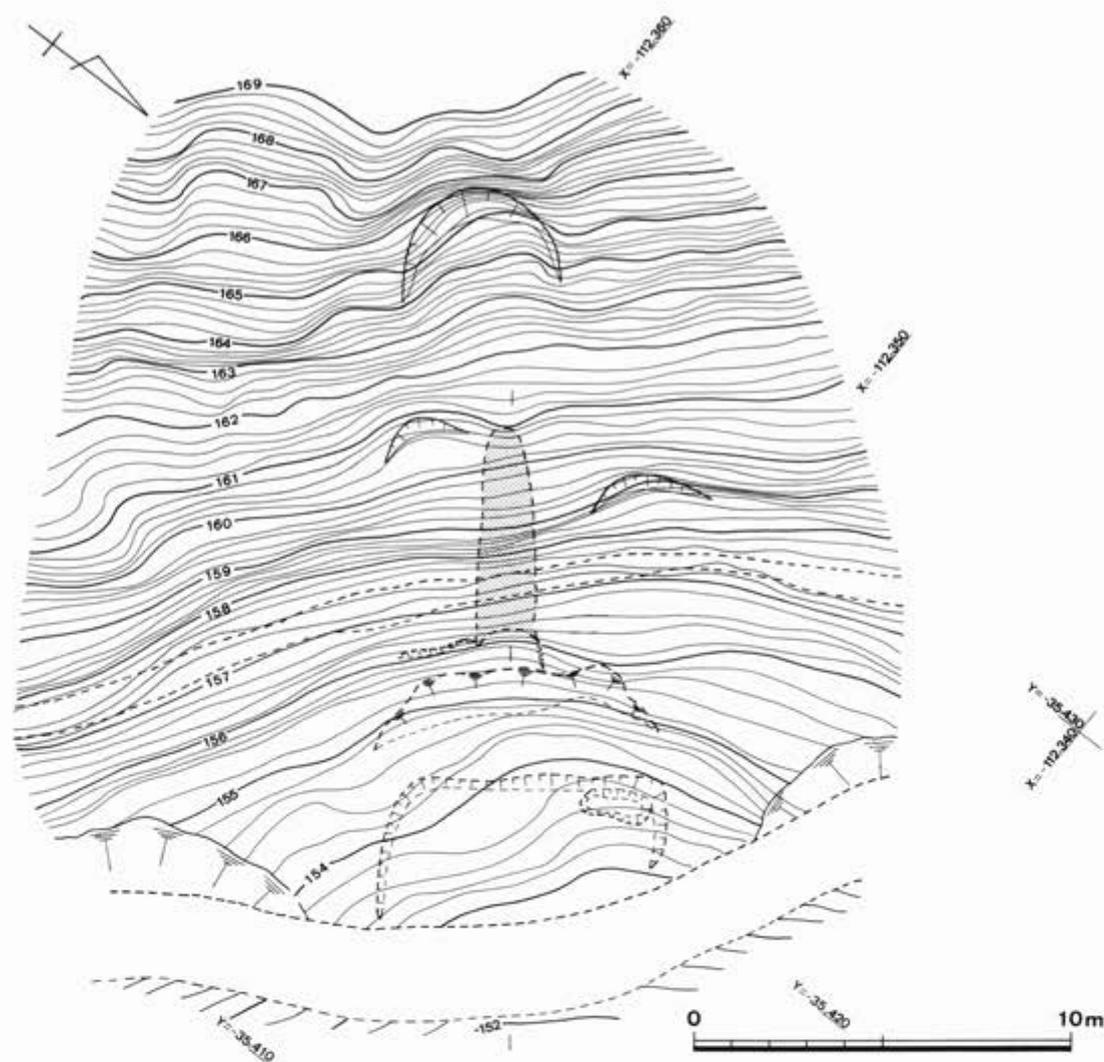
亀岡盆地は、京都府南部に位置し、丹波山地のなかにある標高約100mの段丘地形を特徴とする盆地である。盆地中央部には、桂川が貫流し、保津峡、京都盆地を経て、淀川に合流し、大阪湾へと流れ出る。桂川は、亀岡盆地内では、通称大堰川と呼ばれており、南丹波と都とを結ぶ主に木材などの運搬路として古くから活用されてきた。

篠窯跡群は、亀岡盆地南東部の丘陵縁辺部に分布する南丹波最大級の窯跡群である。この一帯は、地質的には大阪層群の上層をなす礫層から構成されており、高位段丘地形を呈する。

周辺の遺跡には、石庖丁の出土した山本遺跡(第1図3)や弥生土器の出土した観音芝遺跡(第1図7)などの弥生時代の遺跡が分布するが、未調査であり遺跡の全容はまだ明らかではない。篠町周辺に大きく遺跡の広がりがみられるのは、古墳時代であり、山城と丹波を結ぶ古山陰道を眼下に望む篠町王子の丘陵上に位置する向山古墳の築造が嚆矢である(第1図13)。向山古墳は、4世紀後半頃の古墳で、桂川上流域の園部垣内古墳などと並ぶ有力な前期古墳である。墳形は円墳で、径32mを測り組み合わせ式とみられる木棺から、鼈龍鏡、石釧、車輪石、銅鏃などが出土している^(註3)。古墳時代中期前半には、向山古墳の約1km西の丘陵端部に、3基の円墳からなる三ツ塚古墳群が築かれる(第1図12)。このうち、盟主墳の三ツ塚2号墳は、葺石、埴輪を有し、竪穴式石室を内部主体とする^(註4)。副葬品として画文帯神獸鏡、鉄刀、勾玉などが出土しており、5世紀前半頃の築造とみられる。続く5世紀後半頃には、篠町野条にも相次いで有力墳が築造されている。榊塚古墳は、一辺約40mの二段築成の方墳で(第1図10)、5世紀中頃の家形埴輪や、四獣形鏡、内行花文鏡が出土している^(註5)。また、榊塚古墳に隣接して築造された方墳の瀧ノ花塚古墳(第1図9)では、四神四獣形鏡や挂甲片が出土している。この2基に接して、全長約30mの前方後円墳である野条古墳(第1図8)が築造されており、甲冑の出土が伝えられるが築造時期などは明らかではない。盆地内の勢力は、古墳時代中期には北部の坊主塚古墳と天神塚古墳、東部の馬場ヶ崎1・2号墳、南東部の榊塚古墳と瀧ノ花塚古墳というように、主に三つの小地域に分かれ、方墳の築造が特色としてみられる。しかし、後期初頭には、全長約80mの南丹波最大の前方後円墳である千歳車塚古墳が盆地北東部に築造され、南東部の地域的な勢力は次第に弱体化する。

奈良時代以降、亀岡盆地では丹波国府、国分寺、国分尼寺などの造営を中心として、国家的な動きで再開発が進むが、篠町周辺の地域にも瓦積基壇の金堂で知られる観音芝廃寺(第1図6)が造営され、再び興隆するようになる^(註7)。観音芝廃寺は、発掘調査により、金堂、講堂、築地溝などが確認された大規模な寺院跡であるが、平安時代後期には衰退しており、篠窯跡群と動きを一にする点が注目される。また、観音芝廃寺の創建時の瓦は白鳳時代の、重弁蓮華文と呼ばれる高句麗系の瓦であり、山城地域の檜原廃寺の瓦との類似が指摘されている^(註8)。

篠窯跡群は、南丹波に造営された8世紀頃の官衙や地方寺院への供給を遠因として、窯が築かれはじめたと考えられている。篠窯跡群に隣接する篠遺跡(第1図11)は、奈良時代後期の竪穴式住居跡4期、奈良時代末～平安時代中期の掘立柱建物跡24棟などが検出されており、篠窯跡群の工人集団の村とみられている^(註9)。(野々口陽子)



4. 調査概要

今回調査したマル山1号窯跡は、篠窯跡群の中央部やや西側に位置しており、急峻な丘陵の東斜面に、等高線にはほぼ直交する形で、焚き口を北東に向け構築されている。

(1) 窯体

窯体は、半地下式構造の窖窯であり、燃焼部・焼成部ともによく遺存していた。検出全長は奥壁から燃焼部先端まで約8.0m、燃焼部での最大幅1.4m、窯体中軸方位N-53°-Eを測る。

窯体の検出は、重機による表土の掘削作業中、切り株を除去した際、赤変した土色の広がり認め、その下層から、窯体天井部の一部を検出した。天井部外面の直上には、濃赤褐色砂質土の幅約5cmの土層があり、その上に厚さ約0.2mの赤褐色粘質土の堆積がみられた。

窯体内部の構造は、傾斜角の変化点で、焼成部と燃焼部に区分することができる。燃焼部は長さ約2.4m、平均傾斜角18°、焼成部は長さ約8.2m、平均傾斜角43°を測る。焼成部中央付近では、長さ約1.2mにわたって天井部が当初のまま遺存し、焼成部本来の構造をよく残していた。床面から天井部までの高さは平均約1mを測る。窯体天井部は、中央部で厚さ約0.1~0.15mを測る。

窯体には細かな亀裂が多数入っていたが、全体としては安定した状態を保っていた。また、天井部の窯体断面には、側壁同様、多量のイネ科の繊維が含まれていることが観察された。

窯体床面は、焼成部においては岩盤のレベルまで掘削した後、直上に粘土を貼り、壁体を構築している。しかし、焼成部前半部は、岩盤の摂理面が直接現れ還元化しているところがあり、岩盤をそのまま床面として利用した部分がある。焼成部中央から後半部にかけては、岩盤の摂理面にていねいに粘土床が貼られており、粘土塊の上に杯蓋を逆位に設置した焼き台を検出した。この周辺には深さ2～5cmの孤状の窪みが多数認められるが、これらは焼成時に土器を安定させるため、人工的に床面を削り出したものであろう。また、焼成部は、煙り出しに近い後半部分の傾斜角を45°と大きくしたり、焼成部奥壁の約10cm手前に粘土塊によって高さ約7cmの火盾を造り出すことで、効率よく排気を行っていたとみられる。焼成のための須恵器の窯詰めは、奥壁近くに来ており、奥壁手前の火盾周辺にも焼き台の痕跡が残る。窯体側壁は、アーチ状にやや湾曲して立ち上がり、内面には主軸方向の指ナデの跡を顕著に残す。

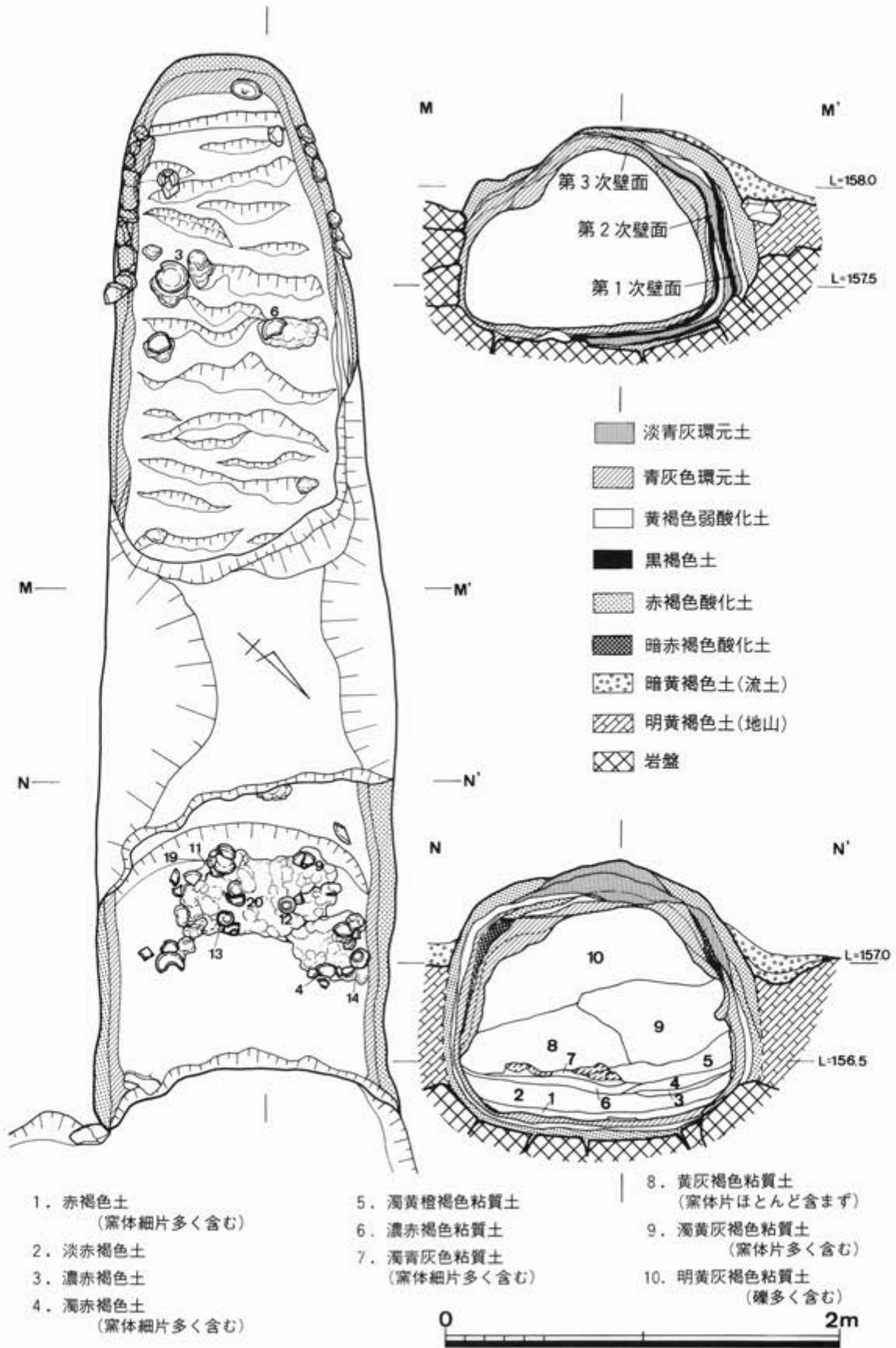
焼成部窯体壁面は、断ち割り調査の結果、断面M—M' (第5図)で、第1次壁面、第2次壁面、及び部分的に第3次壁面が確認され、床面の主軸方向の断ち割りでも第1次床面と第2次床面が確認されている。後述するように、灰原も整地層を挟んで大きく2層に分かれることから、第1次操業後(下層灰原・第1次壁面に相当)、大きく修復及び改変したのち(整地層に相当)、第2次操業を行い(上層灰原・第2次壁面に相当)、さらに部分的な補修を経て第3次操業が行われた(上層灰原の一部・第3次壁面に相当)と考えることができる。したがって、操業回数は少なくとも3回と推定される。

燃焼部は、側壁に自然釉がアメ状に付着しており、強い火勢を受けたことがわかる。灰原から出土した各器種のうち、壺類には自然釉の付着が顕著であり、燃焼部と焼成部の境付近に近い火前に置かれたことがわかる。燃焼部床面には、崩落した窯体片とともに、若干の須恵器が出土した。断ち割り調査では、燃焼部床面は、地山礫層に直接、粘土を貼っており、ピットや舟形土坑などの施設は認められなかった。また、奥壁の後背地の断ち割り調査を行ったが、窯壁に繋がる煙道や排水溝などの遺構はみられなかった。

(2) 焚き口と前庭部

燃焼部の窯体端部の前面には、窯体床面を欠失した長さ約3.5m・幅約1mの東南に向かってのびる平坦部がある。この部分がほぼ最終操業時の焚き口及び前庭部の一部とみられる。焚き口の閉塞の状況は不明であるが、この平坦部床面は地山全体が赤変し、その上面に炭混じり土の広がりが見られる。平坦面の面的な赤変を操業時の窯体外面の熱変化によると考えれば、この平坦部に第1次操業時の窯体床面があったことになり、その後の大規模な修築により、窯体長は現状のように約1m短く改修された可能性が高い。

平坦部は東南方向に続いており、作業通路として機能していたと推定される。前庭部は、焚き口前面の作業スペースとしては狭いことや、焚き口から上層灰原の始点までの距離が大きいことから、斜面側にさらに拡張していた可能性は高いが、急峻な傾斜上にあるため流失したのであろう。



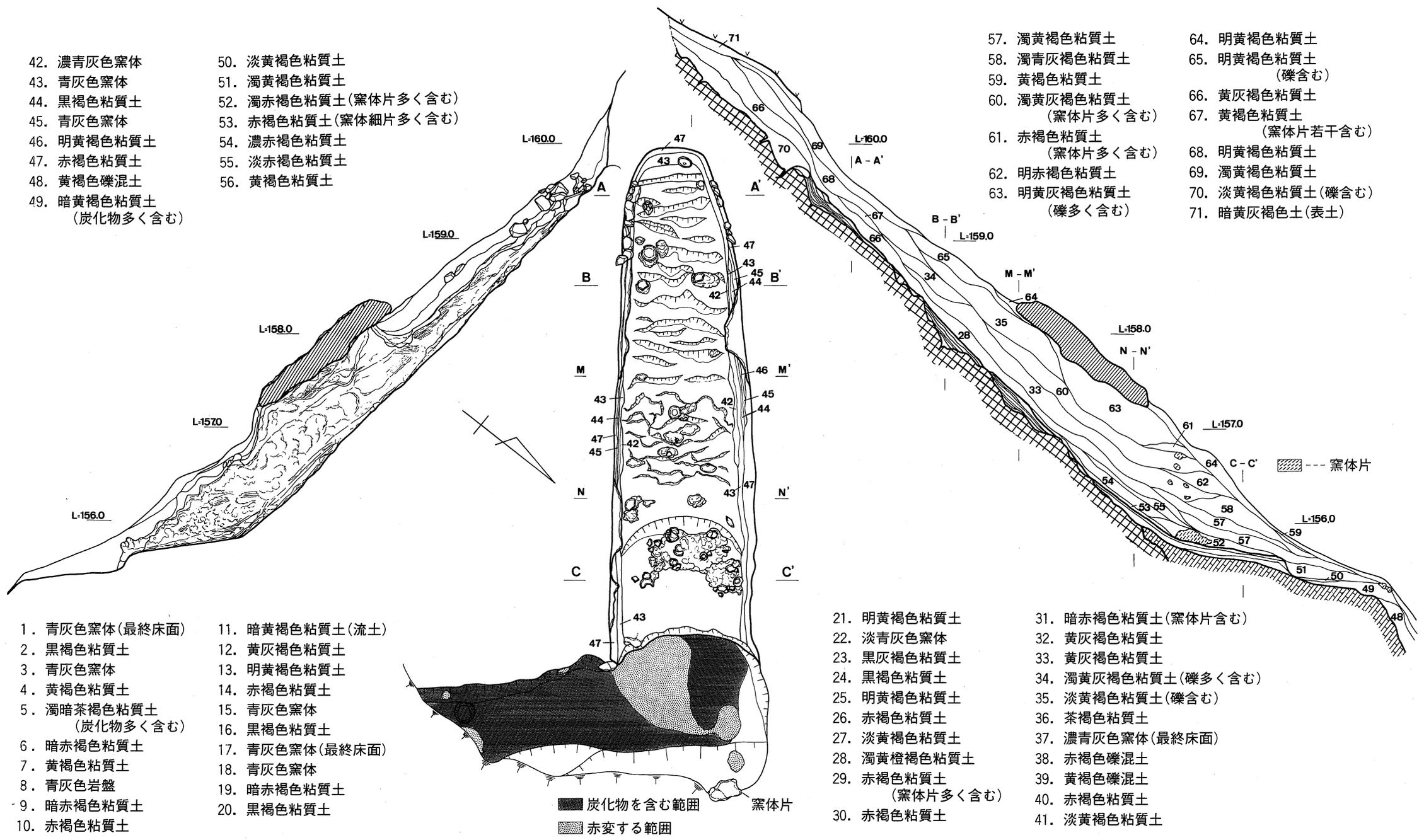
第5図 窯体実測図

- 42. 濃青灰色窯体
- 43. 青灰色窯体
- 44. 黒褐色粘質土
- 45. 青灰色窯体
- 46. 明黄褐色粘質土
- 47. 赤褐色粘質土
- 48. 黄褐色礫混土
- 49. 暗黄褐色粘質土
(炭化物多く含む)

- 50. 淡黄褐色粘質土
- 51. 濁黄褐色粘質土
- 52. 濁赤褐色粘質土(窯体片多く含む)
- 53. 赤褐色粘質土(窯体細片多く含む)
- 54. 濃赤褐色粘質土
- 55. 淡赤褐色粘質土
- 56. 黄褐色粘質土

- 57. 濁黄褐色粘質土
- 58. 濁青灰褐色粘質土
- 59. 黄褐色粘質土
- 60. 濁黄灰褐色粘質土
(窯体片多く含む)
- 61. 赤褐色粘質土
(窯体片多く含む)
- 62. 明赤褐色粘質土
- 63. 明黄灰褐色粘質土
(礫多く含む)

- 64. 明黄褐色粘質土
- 65. 明黄褐色粘質土
(礫含む)
- 66. 黄灰褐色粘質土
- 67. 黄褐色粘質土
(窯体片若干含む)
- 68. 明黄褐色粘質土
- 69. 濁黄褐色粘質土
- 70. 淡黄褐色粘質土(礫含む)
- 71. 暗黄灰褐色土(表土)

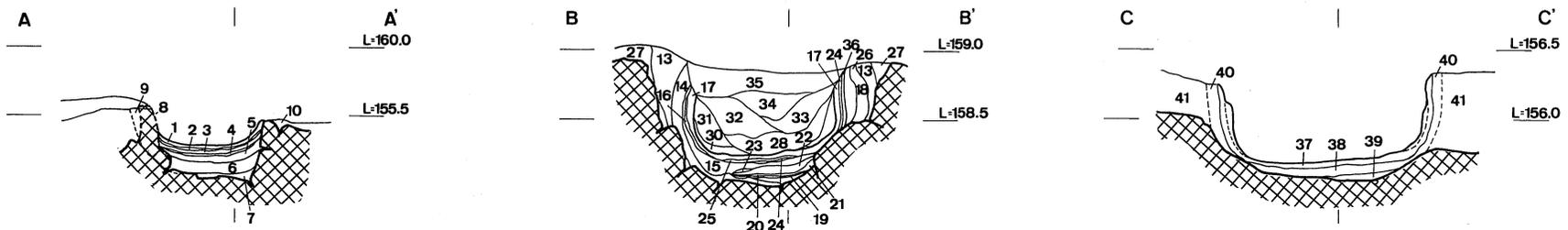


- 1. 青灰色窯体(最終床面)
- 2. 黒褐色粘質土
- 3. 青灰色窯体
- 4. 黄褐色粘質土
- 5. 濁暗茶褐色粘質土
(炭化物多く含む)
- 6. 暗赤褐色粘質土
- 7. 黄褐色粘質土
- 8. 青灰色岩盤
- 9. 暗赤褐色粘質土
- 10. 赤褐色粘質土

- 11. 暗黄褐色粘質土(流土)
- 12. 黄灰褐色粘質土
- 13. 明黄褐色粘質土
- 14. 赤褐色粘質土
- 15. 青灰色窯体
- 16. 黒褐色粘質土
- 17. 青灰色窯体(最終床面)
- 18. 青灰色窯体
- 19. 暗赤褐色粘質土
- 20. 黒褐色粘質土

- 21. 明黄褐色粘質土
- 22. 淡青灰色窯体
- 23. 黒灰褐色粘質土
- 24. 黒褐色粘質土
- 25. 明黄褐色粘質土
- 26. 赤褐色粘質土
- 27. 淡黄褐色粘質土
- 28. 濁黄橙褐色粘質土
- 29. 赤褐色粘質土
(窯体片多く含む)
- 30. 赤褐色粘質土

- 31. 暗赤褐色粘質土(窯体片含む)
- 32. 黄灰褐色粘質土
- 33. 黄灰褐色粘質土
- 34. 濁黄灰褐色粘質土(礫多く含む)
- 35. 淡黄褐色粘質土(礫含む)
- 36. 茶褐色粘質土
- 37. 濃青灰色窯体(最終床面)
- 38. 赤褐色礫混土
- 39. 黄褐色礫混土
- 40. 赤褐色粘質土
- 41. 淡黄褐色粘質土

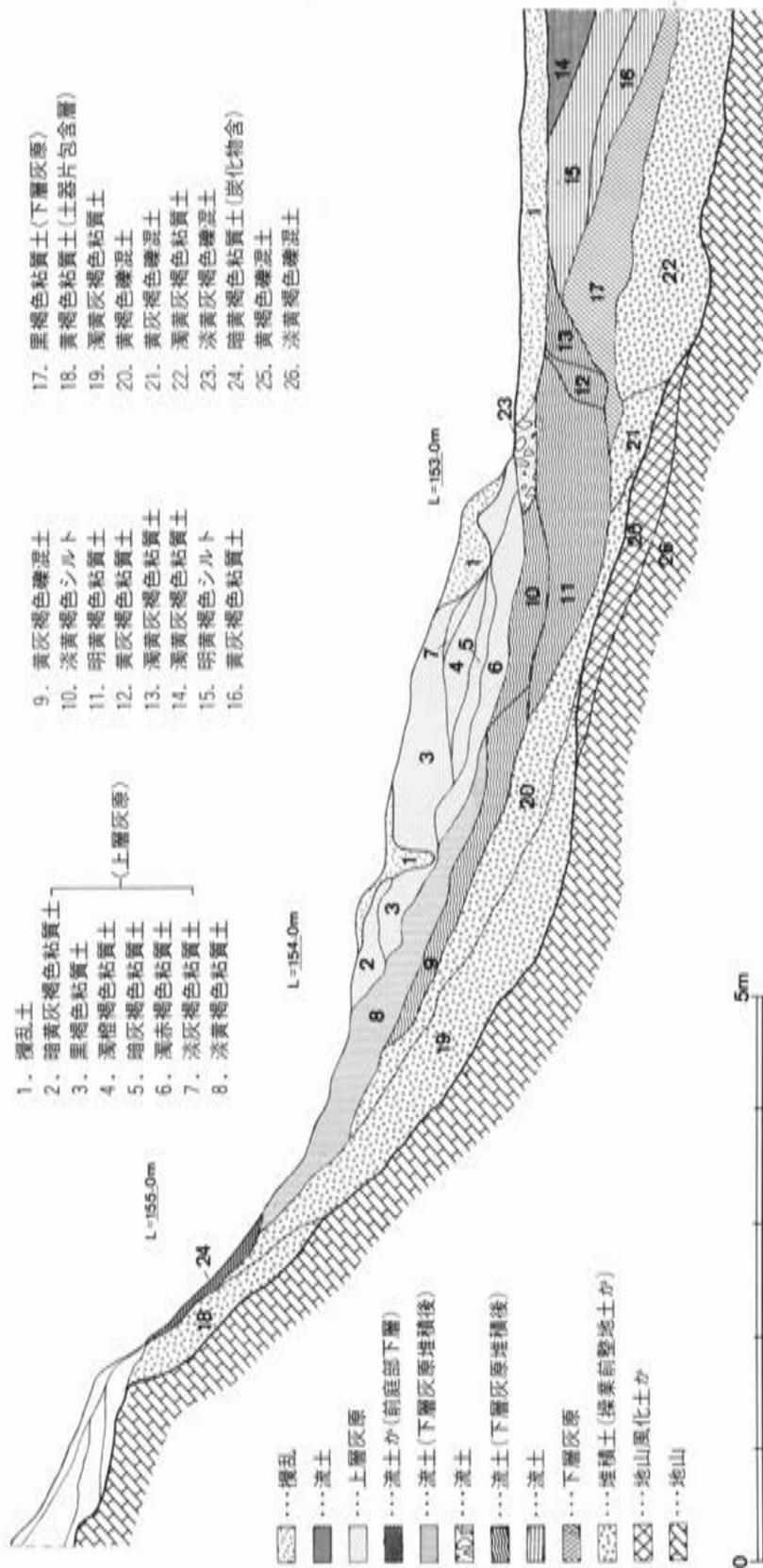


第6図 マル山1号窯跡実測図

床面の一部とみられる窯体片が燃烧部窯体端部から東へ約2mの斜面上に認められた。これは流土上にあり、現位置を示すものではない。また、焚き口部北西では、径約0.7m・深さ約0.2mの円形の浅い土坑を検出した。

(3) 灰原

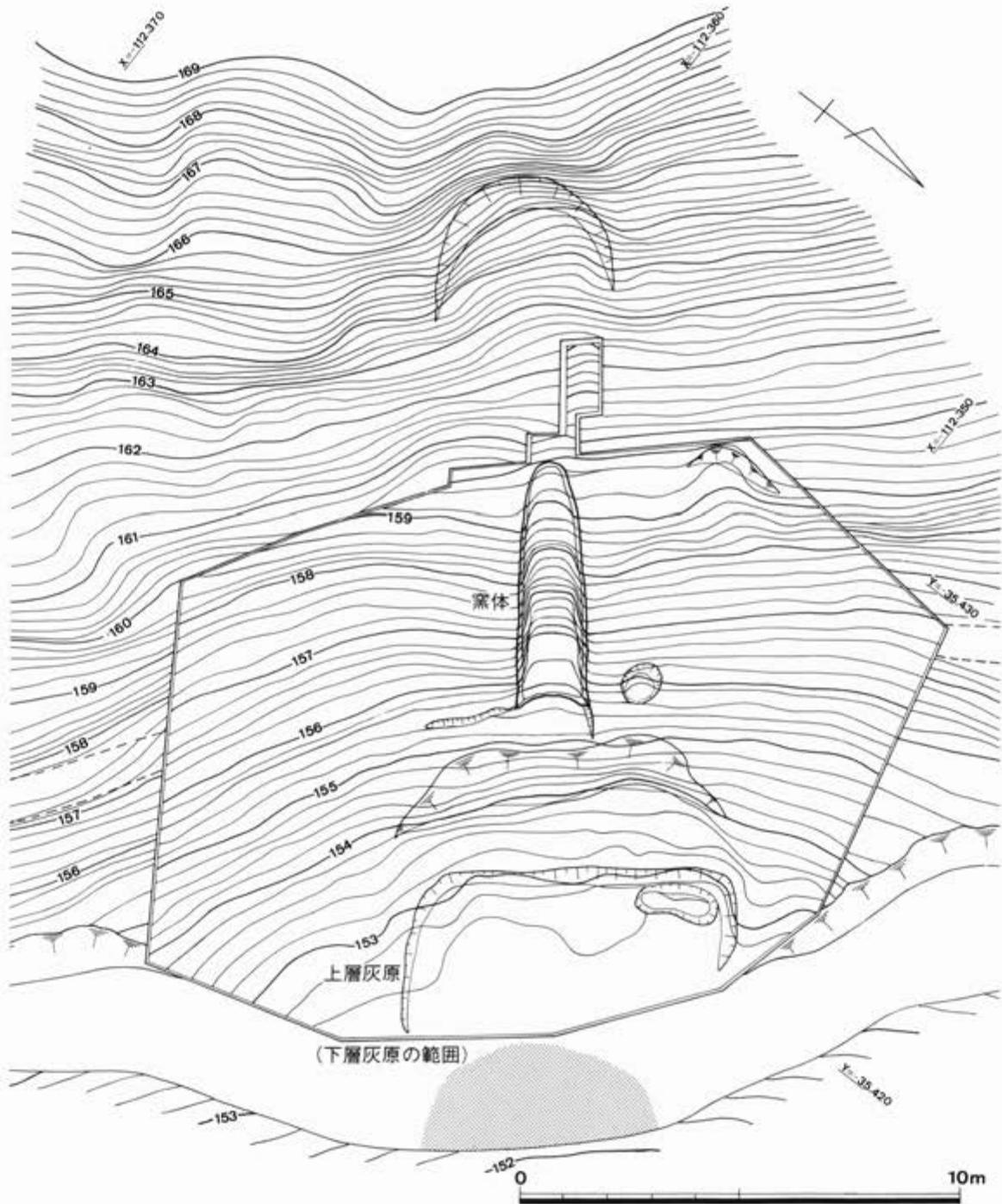
灰原には、大きく2層の堆積層がある。まず、窯体下端から斜面下方へ約4.3mのところ、長さ約3.8m・幅約7.5mにわたって2・3回目の操業に伴うとみられる上層灰原を検出した。さらに、第1回目の操業に伴うとみられる下層灰原を、林道部の下層で検出した。林道部での検出長は長さ約3.7m・幅約5m、中央部の厚さ約0.4mを測る。この2層の間には、流土及び整地層があるため、両者は明確に分けられ、下層灰原が窯体側壁の第1次壁面に、上層灰原が第2次壁面及び第3次壁面に対応



第7図 土層図

するとみられる(第5図)。

灰原の土層断面(第7図)で注意されるのは、下層灰原と上層灰原の間の整地層の土砂堆積量が改修によるとするには多すぎることである。下層灰原の上層の一部が斜面上方からの圧力によって、掻き上げられたような堆積状況を示すことや、下層灰原の上に明黄褐色シルト層が堆積していること、上層灰原の下に淡黄褐色礫混じり層が堆積していることから、下層灰原は、地盤の崩れによって斜面下方に流され、その後、整地が行われたのち、上層灰原が堆積したと推定される。



第8図 窯跡周辺地形図

須恵器の出土量は、上層灰原が整理箱40箱と最も多く、下層灰原や整地層からも各10箱程度出土している。上層灰原からは、長さ約6cmの断面方形の鉄釘6本が癒着して出土した。また、下層灰原の範囲は、林道部下方の北東斜面に一部拡大する。

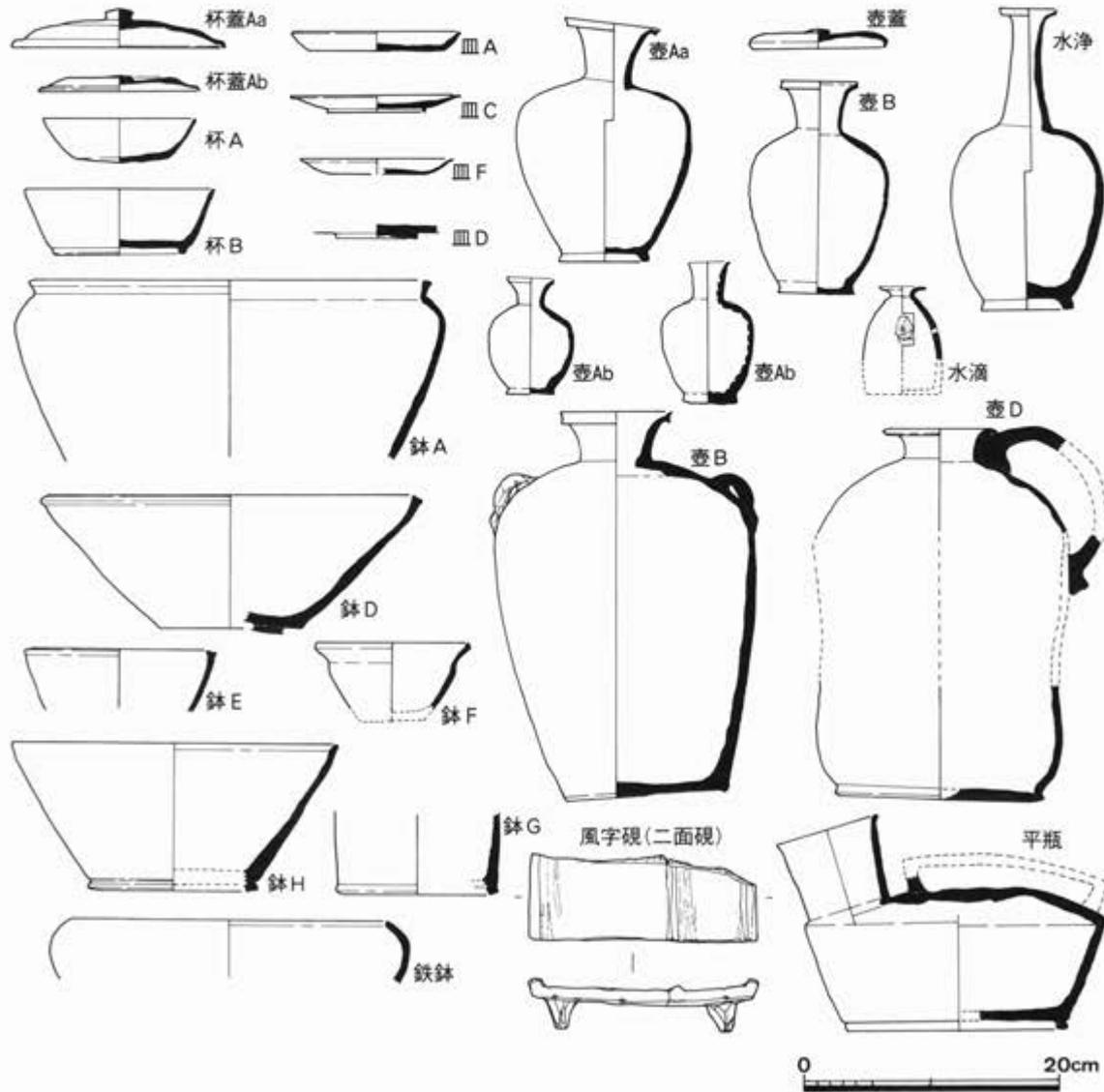
(野々口陽子)

5. 出土遺物

マル山1号窯跡では、窯体及び灰原内から整理箱60箱以上の土器が出土し、その大半は焚き口の前面に広がる灰原と整地層からで、窯体内からの出土遺物は2箱程度にすぎない。出土遺物は、窯に関連した須恵器のみであり、土師器などは出土していない。ここでは、まず出土遺物の分類基準を設定したのち、各遺構や層位ごとにその概略を記す。

(1) 分類基準

篠窯跡群出土の須恵器については、「篠Ⅰ」・「篠Ⅱ」で分類基準が設定されているが、「篠



第9図 器種一覧

I」・「篠Ⅱ」では一部分類基準が異なっている。ここでは最近刊行された「篠窯須恵器」⁽¹⁰⁾の分類基準に沿って記述を行い、一部「篠Ⅰ」・「篠Ⅱ」の分類基準を援用する。

マル山1号窯跡出土の須恵器には、甕などの比較的大きなものは少なく、杯A・杯B・皿A・皿C・皿D・皿F・杯蓋A・壺Aa・Ab・B・D、水浄、水滴、鉢A・D・E・F・G・H、平瓶、鉄鉢、風字硯などの中・小型品が出土している。

杯Aは、平底ぎみの底部から口縁部が直線あるいは内湾ぎみに斜め上方に立ち上がり、口縁端部は尖りぎみにおわる。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面は一方向のナデ調整を行う。口径11~16cm・器高2~4cmを測り、口径12.5cm・器高3cmに集中する傾向がある。

杯Bは、底部から斜め上方に立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみにおわる。底部には高台を貼り付けるが、その高台の位置は底部と口縁部の屈曲部に接しているものが大半である。高台の形状には外方にやや踏ん張った台形のほか、方形を呈するものがある。調整は、口縁部内・外面にロクロナデ、内底面には一方向のナデ調整を施す。杯Bは、口径11~18.5cm・器高4~6.5cmとばらついている。

皿Aは、平底の底部から斜め上方に直線的に短く立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部は外方にならずに肥厚するものが多い。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面はナデ調整を施す。皿Aは、口径9.0~16.0cm・器高1.1~2.0cmで、口径13~14cm・器高1.0~1.5cmに集中する傾向がある。なお、マル山1号窯跡では皿Aに高台を貼り付けた皿Bは出土していない。

皿Cは、輪高台の底部で水平あるいは斜め方向に立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部を水平方向に尖りぎみにおわるものが多い。調整は、外底面も含めて全面に細かいミガキ調整を施している。皿Cの表面にミガキ調整を施していることから、現地調査の段階では緑釉陶器の素地と見ていたが、灰原を含めて緑釉陶器が出土していないこと、二次焼成のためのトチンが含まれていないことから、マル山1号窯跡出土の皿Cは緑釉陶器の素地ではなく、金属器を模倣したものであると考えられる。

皿Dは、水平あるいは斜め方向に立ち上がる口縁部で、底部は平高台である。マル山1号窯跡では口縁部片は出土していないが、1点蛇ノ目高台のものが出土している。調整は磨減が著しく、不明である。

皿Fは、高台をもたない平底で、口縁部はやや内湾ぎみに斜め方向に短く立ち上がり、口縁端部は水平方向に短く肥厚する。マル山1号窯跡出土の皿Fは、内・外面とも皿Cと同様、ミガキ調整を施している。皿Fは1点出土しているのみである。

杯蓋Aは、水平ぎみの天井部から口縁部へ屈曲しながら続き、口縁端部が内側に巻き込んで丸みをもつもの(杯蓋Aa)と、口縁端部が杯蓋Aaにくらべて外方に広がり、尖りぎみにおわるもの(杯蓋Ab)がある。杯蓋Aaの天井部には、比較的高い宝珠形のツマミを貼り付けているものが多いが、杯蓋Abでは天井部に扁平な宝珠形ツマミを貼り付けるもののほか、鉤状のツマミを貼り付けているものもある。口縁部内・外面はロクロナデ、天井部内面は一方向のナデ調整で、天井部外面にはケズリ調整を施している。杯蓋Aは、口径11.5~21.0cmまでのものが大半である。な

お、マル山1号窯跡ではツمامミをもたない杯蓋Bは出土していない。

壺蓋は、水平ぎみの天井部から口縁部が直角ぎみに下方に屈曲し、端部は尖りぎみにおわる。天井部中央には高い宝珠形ツمامミを貼り付けている。口径11cmの小型のものである。

壺Aは、倒卵形の体部から頸部が直線的にやや長く立ち上がり、口縁部が外反した後、端部を肥厚させる。口縁端部を上・下方向に尖り気味に肥厚させるもののほか、上方のみに肥厚させるもの、また壺Aのなかには筒状の頸部からそのまま外反することなく口縁部へ続き、口縁端部をわずかに肥厚させるものがある。この形態のものは器高12cm未満の小型品で、底部は平底に限られ、個体数としては10点に満たない量である。壺Aは、底部の形態から、糸切りの後、輪高台を貼り付ける壺Aaと、底部が平底で糸切り痕をそのまま残す壺Abに分けられる。壺Aa・壺Abとも口径2.1~10.0cm・底径5.4~12.8cmとばらついているが、大きくは大中小の3つに分けられ、小型品には平底の壺Abが、中・大型品には輪高台をもつ壺Aaが主体となる傾向がある。

壺Bは、平底の底部から直線的に立ち上がる体部へ続き、体部上半は丸みをもった肩部を形成する。頸部は、壺Aに比べて短く立ち上がり、口縁部が外反した後、端部を上・下方に尖りぎみに肥厚させる。肩部には、断面円形の耳を2か所貼り付けている。

壺Dは、徳利形の体部で口頸部が短く外反ぎみに立ち上がり、断面長方形の把手を頸部から肩部にかけて一方向に貼り付けている。壺Dは、完形に復原できる資料がないため底部の形態は断定できないが、底部片の資料から、平底で底部と体部の境でわずかに内湾ぎみに屈曲すると思われる。底部外底面には糸切り痕がなく、ヘラ切りと思われる。口縁部内・外面にはロクロナデ、体部外面にはナデ調整を施す。なお、釣鐘形の体部で筒状の頸部から外反する口縁部へ続き、口縁端部を上・下方に尖り気味に肥厚させた壺Cは、マル山1号窯跡では出土していない。

水浄は、卵形の体部で、頸部が細長く立ち上がり、口縁部が外反した後、上方にわずかに尖りぎみにおわる。底部にはやや外方に踏ん張った高台を貼り付けている。水浄も皿Aと同様、金属器を模倣した器形と思われる。

水滴は、壺Cの形態に近似しており、下膨れの体部下半からナデ肩の体部上半へ続き、口頸部が強く外反する。体部に円孔を穿った後、注口を貼り付けている。

平瓶は、肩部の張った扁平な体部を整形した後、上面中央の円孔を粘土で塞ぎ、肩部中央よりに円孔をあけて直立する注口を貼り付けており、体部上面には断面長方形の把手を貼り付けている。底部には高台を貼り付けている。

鉢Aは、半球形の体部で口縁部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部を内・外方にわずかに肥厚させる。鉢Aには、これまでの篠窯跡群の底部に高台を貼り付けた鉢Aaと、平底で糸切り痕を残す鉢Abとがある。マル山1号窯跡の鉢Aには底部まで復原できるものがなく、断定できないが、その大半が平底の鉢Abと思われる。

鉢Dは、平底の底部で斜め上方に直線的に立ち上がる体部へ続き、口縁部がわずかに内湾したのち、端部を上・下に尖りぎみに肥厚させる。底部は突出ぎみの平底で、糸切り痕を残すもののほか、ヘラ切りのものもある。

鉢Eは、斜め上方に直線的に立ち上がる体部で口縁部がわずかに内傾し、端部は内側に尖りぎみにおわる。鉢Dに近似するが、口径が鉢Dよりも小さく、体部の立ち上がりも強い傾向にある。

鉢Fは、半球形の体部で口頭部が「く」字形に屈曲し、口縁端部が内側に尖りぎみにおわる。

鉢Gは、高台をもち、体部が直線的に直立ぎみに立ち上がる。口縁部の明瞭な破片がなく、不明である。鉢Gは、「篠Ⅱ」で壺Bbと分類されている。

鉢Hは、底部から直線的に立ち上がる体部で、口縁部がわずかに内傾する。形状は杯Bに近似しているが、口径が20cmと広く、体部の口縁部の立ち上がりが深いことから、ここでは杯Bと分離して鉢Hを設定した。

鉄鉢は、尖りぎみの底部で、体部下半が斜め上方に直線的に立ち上がる。体部上半は内湾ぎみに屈曲し、口縁端部は丸みをもっておわる。マル山1号窯跡では口縁部片が1点出土しているのみである。

風字硯は、縁が「風」の字状にめぐる硯で、硯背端に多面体の低い脚を2本付けている。風字硯には陸部に堤を設けて区画した二面硯があり、マル山1号窯跡でも1点二面硯が出土している。

(2) 器種構成

前述のように、窯体及び灰原から出土した遺物は整理箱で60箱以上を数える。各器種ごとに須

付表1 器種別個体数一覧表

| 器種 | 個体数 | 比率(%) | | |
|---------|-------|--------|-------|------|
| 食 | 杯A | 996 | 23.60 | |
| | 杯B | 1,486 | 35.20 | |
| | 杯蓋A | 672 | 15.90 | |
| | 皿A | 468 | 11.10 | |
| | 皿C | 9 | 0.21 | |
| | 皿D | 1 | 0.02 | |
| | 皿F | 1 | 0.02 | |
| | 器 | 鉢A | 137 | 3.24 |
| | | 鉢D | 167 | 3.95 |
| | | 鉢E | 2 | 0.04 |
| 鉢F | | 1 | 0.02 | |
| 鉢G | | 1 | 0.02 | |
| 鉢H | | 5 | 0.11 | |
| 貯 | | 壺A a | 92 | 2.20 |
| | | 壺A b | 92 | 2.20 |
| | 壺B | 36 | 0.80 | |
| | 蔵 | 壺D | 14 | 0.30 |
| | | 壺その他 | 3 | 0.07 |
| | 器 | 壺蓋 | 16 | 0.40 |
| 平瓶 | | 13 | 0.30 | |
| 水浄 | | 6 | 0.14 | |
| その 他 | 水滴 | 1 | 0.02 | |
| | 風字硯 | 5 | 0.12 | |
| | 鉄鉢 | 1 | 0.02 | |
| 合計 | 4,225 | (100%) | | |

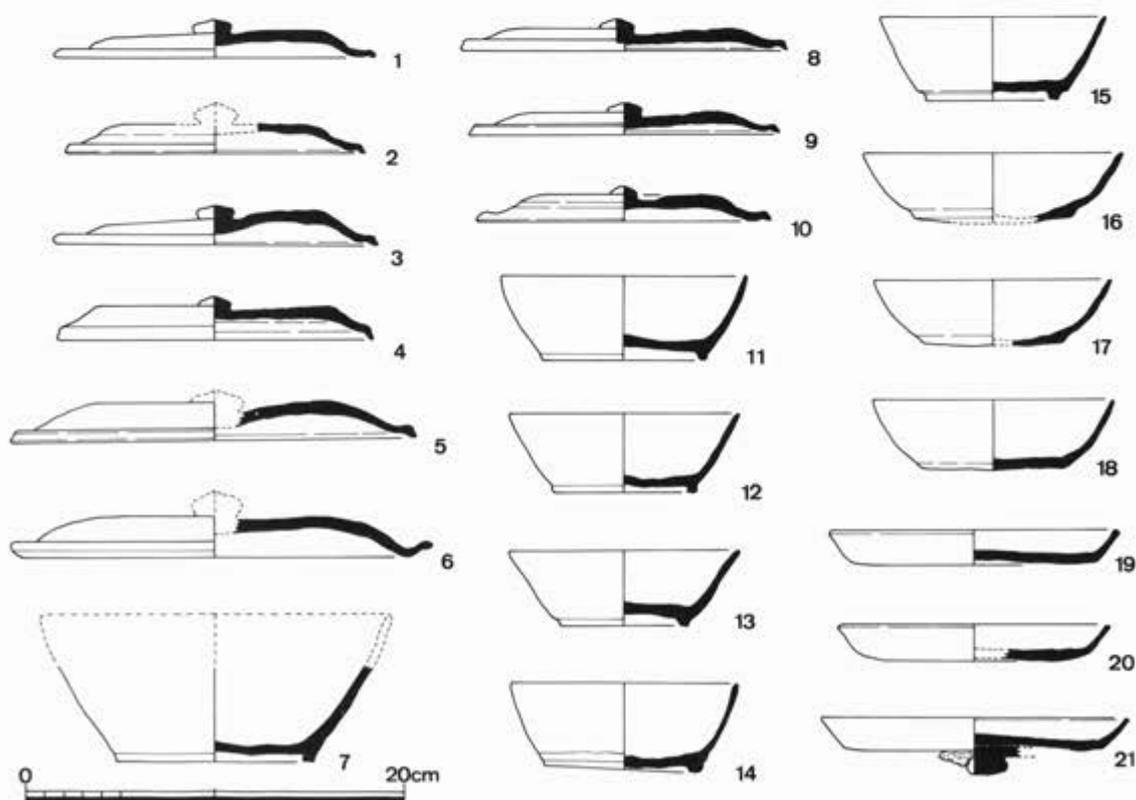
恵器の個体数を数えたのが付表1である。杯は、口縁部片では杯A・Bの分類が明瞭でないため、底部片(主に高台の有無)を基準に数えると、杯Aは996個体、杯Bは1486個体で、1:1.5の割合で杯Bの個体数が多い。杯Bとセットとなる杯蓋Aは、672個体(主にツマミをもとに計測)ある。皿は、皿C 9個体、皿D 1個体、皿F 1個体に対して、皿Aは468個体(皿における皿Aの割合97.7%)で、主に皿Aを中心に焼成している。壺は、壺Aが184個体(壺における壺Aの割合は77.0%)で、次に壺B 36個体(壺における壺Bの割合15.5%)、壺D 14個体(壺における壺Dの割合6.0%)となる。鉢A 137個体・鉢D 167個体と多いが、口縁部の細片も含めて計測しているため、実数としてはその5割程度となると思われる。ちなみに、鉢A・鉢Dの底部片と思われるものは92個体であり、この92個体が鉢A・Dの実数に近いと思われる。鉢Eは2個体、鉢F・Gは1個体、鉢Hは5個体と極少である。他には平瓶13個体、水浄6個体、水滴1個体、鉄鉢1個体、風字硯5個体で、各器種とも3%に満たない量である。

(3) 出土遺物

①窯体内出土遺物 窯体内からは杯A・B、杯蓋A、皿Aが出土した。そのうち、燃焼部床面出土の遺物は焼台として使用された杯蓋Aが大半であり、杯A・B、皿Aなどは燃焼部床面から出土したものが多い。ただ、燃焼部から出土したものは製品として取り残されたものであり、細片が多い。杯蓋Aには、口径20cm以上のもの(5・6)と、口径15.0~17.2cmを測るもの(1~4・8~10)がある。杯蓋Aには、1のように頂部が尖り気味のツマミで口縁端部が内側に丸く折り返す古相のものと、8~10のようにボタン状のツマミで口縁端部が直線的で尖りぎみに広がる新相のものが混在している。杯A(16~18)は、平底の底部から口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は尖りぎみにおわる。口径12.5~13.7cm・器高3.7cm前後を測る。杯Bは、底部と口縁部の境の屈曲部から内側に断面方形の高台を貼り付けたもの(15)と、屈曲部に方形あるいは台形の高台を貼り付けたもの(7・11~14)がある。口縁部が内湾ぎみのもの(11・14)と、直線的に立ち上がるもの(12・13・15)がある。杯Bは、口径12cm前後・器高4.0~4.9cmを測る。皿A(19~21)は、平底の底部から直線的に短く立ち上がる口縁部をもち、口縁端部が平坦な面をなす。口径14.0~16.2cm・器高1.8cm前後を測る。なお、皿21は、底部に杯蓋Aが反転した状態で付着しており、底部に付着した杯蓋Aは焼き台として使用されたと思われる。

②上層灰原出土遺物 上層灰原からは杯蓋A、杯A・B、皿A・C・D、壺Aa・Ab・B・D、壺蓋、鉢A・D・E・F・G、平瓶、水浄、水滴、風字硯などが出土した。

杯蓋Aは、窯体内出土遺物と同様、宝珠形ツマミで口縁端部を内側に丸く折り返した古相のも



第10図 マル山1号窯跡出土遺物(1) 窯体内

の(22~28)と、変形した宝珠形ツマミで口縁端部が直線的に広がるもの(36~41)がある。特に、杯蓋A40は、断面台形状のツマミを呈しており、ツマミとしての用途もあまりない形状である。杯蓋Aには、口径12.0cmに満たないもの(39)、口径12.0以上14.5cm未満のもの(27・28・37・38)、口径14.5cm以上18.5cm未満のもの(22~26・36・40)、口径18.5cm以上のもの(41)がある。

杯Aは、口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部が尖りぎみにおわる。口径12.0~13.5cmを測り、器高が3.0cmに満たないもの(63~65)と、器高3.0cm以上のもの(66・67)がある。杯Bには、口縁部が直線的に立ち上がるもの(29~33・35・42~45)、内湾ぎみに立ち上がるもの(34・46)、口縁部中央で内湾ぎみに屈曲した後、強く外反するもの(47・48)がある。杯Bには、口径10.0~14.0cm前後・器高3.5cm以上5.0cm未満までの一群(29~32・45)と、口径14.0cm以上17.0cm未満・器高4.5cm以上6.0cm未満の一群(33~35・43・44・46~48)、口径17.5cm以上を測る一群(42)がある。

皿Aは、口縁部が直線的に立ち上がり、口径12.0cm以上13.5cm未満・器高1.3~16.5cmを測るもの(51~54)、底部から口縁部への屈曲部が不明瞭で口縁部が斜め上方に曲線的に立ち上がるもの(76)がある。76は、口径20.8cm・器高2.3cm前後を測る。なお、76のような口径20cm以上を測る皿Aは、後述する下層灰原を含めて3点である。皿C(55~60)は、口縁部が斜め上方に浅く立ち上がり、口縁端部が水平ぎみに広がり、底部には断面方形の高台を整形している。皿Cは、外底面も含めて全面に細かいミガキ調整を施している。口径12.2~15.0cm・器高1.2~1.9cmを測る。皿D(62)は、平高台で底部外面をわずかに窪ませた蛇ノ目高台の皿である。皿Dは、上層灰原で1点出土しているのみである。皿F(61)は、平底の底部から曲線的に口縁部へ続き、口縁部はわずかに外反する。皿Fも皿Cと同様、内・外面ともていねいなヘラミガキ調整を施す。皿61は、口径12.0cm・器高1.2cmを測る。

壺蓋(49・50)は、水平な天井部から口縁部が直角ぎみに屈曲し、口縁端部が尖りぎみにおわる。天井部には扁平な宝珠形ツマミを貼り付けている。口径10.3~11.0cmを測る。

壺Aは、倒卵形の体部から筒状にのびる頸部へ続き、口縁部が外反した後、端部を上・下方に肥厚させる。底部に輪高台を貼り付けた壺Aaと、平底で糸切り痕をとどめる壺Abがある。壺Aaと壺Abの法量を比較すると、底部径6cm以上のものは壺Aa、6cm未満のものは壺Abになる傾向にある。壺Aaの底部片(71~73・75)は、底部糸切りの後、方形の外方に踏ん張った輪状の高台を貼り付けたものである。なお、71・72は、底径6.0cm未満であるが、高台及び体部下半の立ち上がりの形状から、壺Aaとみるよりも後述する水浄の底部片の可能性が高いと思われる。壺Abは、突出ぎみの平底で底部外面には糸切り痕をそのまま留める。完形に復原できるものでは器高11cm未満のものが多いが、86は壺Abのなかでも器高16.6cmと中型品である。壺Bには口縁部片(88)・体部上半部片(89)・体部下半部片(90)がある。口縁部片は、壺Aに比べて頸部の立ち上がりが短く、口縁端部は上・下方に肥厚して尖りぎみにおわる。体部上半部には断面円形の把手を2個貼り付けている。体部下半部は平底の底部から直線的に立ち上がる体部へ続き、壺Aのように、底部から体部へ変換する部分が内湾するものはない。底部外面には糸切り痕をとどめてい

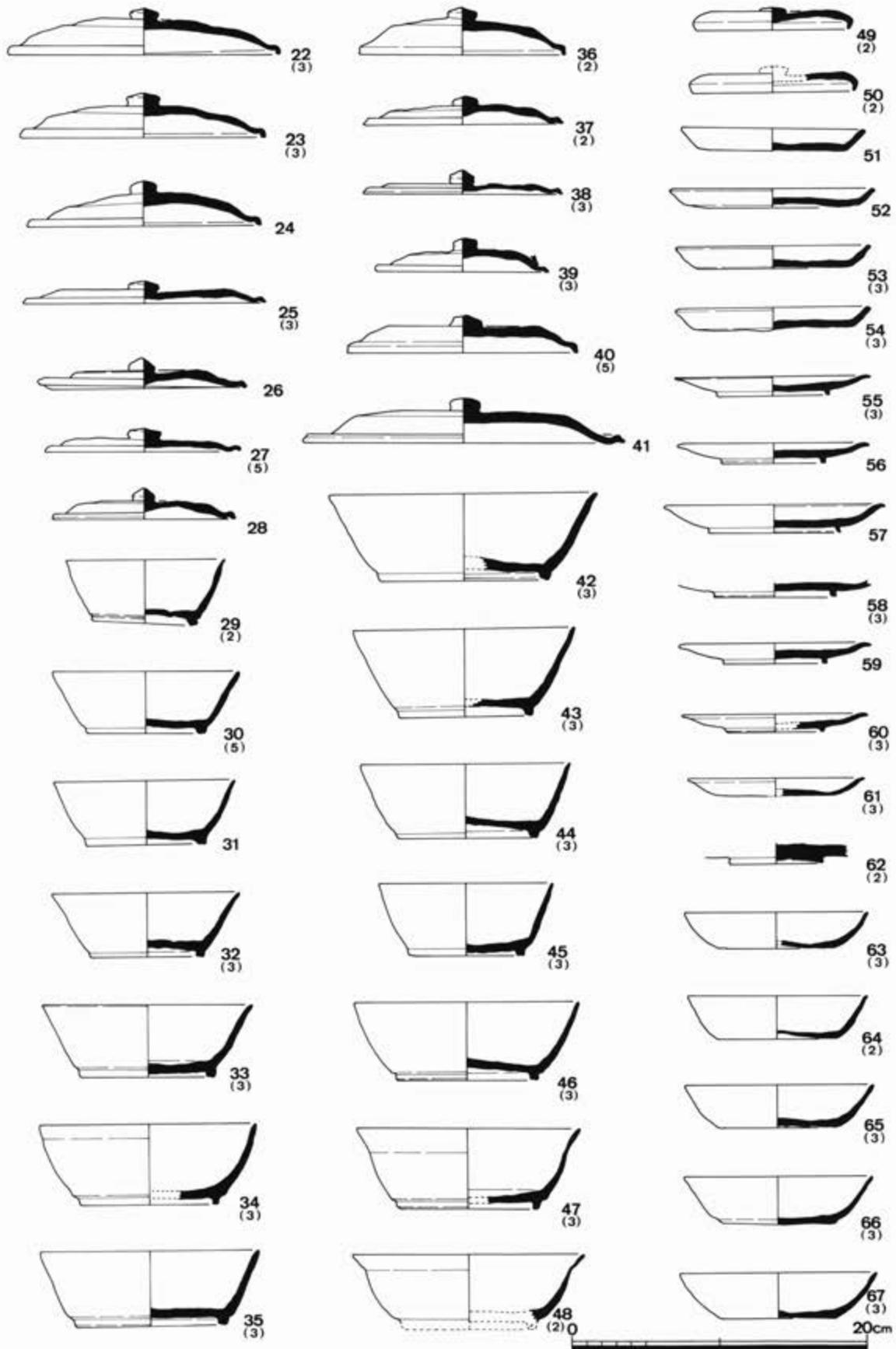
る。壺D(91)は、完形に復原できないが、口縁部及び体部上半部とその底部と思われるもの(92)が出土している。体部上半部はナデ肩で、口頸部は短く立ち上がる頸部から強く水平ぎみに立ち上がる口縁部へと続き、口縁端部は丸くおわる。体部上半で口縁部との屈曲部には断面方形の把手は貼り付いている。壺Dの底部は断定できないが、92のような平底で一端内湾した後、外反ぎみに立ち上がる下膨れの体部片がつくと思われる。92の底部外面にはヘラ切り痕をとどめ、壺A・Bのような糸切り痕をとどめるものとは異なっている。なお、92の底部には焼台として使用された杯蓋Aが反転した状態で付着している。

水浄(84)は、ナデ肩の体部で頸部が長く立ち上がり、口縁部は強く外反したのち、端部を上方につまみあげている。なお、完形に復原できる資料では、体部は卵形の体部で、底部には輪高台が貼り付いている。水滴(83)は、ナデ肩の体部上半から口頸部が強く外反している。底部には復原できる資料はないが、下膨れの体部と思われる。体部中央には焼成前に直径3mmの円孔がけられており、円孔の周辺部外面にはヘラ当てによる線痕があり、円孔から続く注口部があったと思われる。83のような水滴は、これまでの篠窯跡群の資料にはなく、初見であり、同じ形態のものは猿投窯跡の黒笹14号窯跡から出土している。85は、口縁部片で直口壺か平瓶の口縁部片と思われる。

鉢A(94~98)は、半球形の体部で、口縁部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部は内・外方にわずかに肥厚する。鉢Aには完形に復原できる資料がないが、底部は平底で糸切り痕を明瞭にとどめるとと思われる。鉢D(99~101)は、平底の底部から斜め上方に立ち上がる体部へ続き、口縁部はわずかに内湾し、端部は上方に肥厚させて尖りぎみにおわっている。鉢E(87)は、鉢Dよりも体部が直立ぎみに立ち上がり、口縁端部が内側に肥厚し尖りぎみにおわる。鉢Eの口径が鉢Dの25cm以上であるのに対して、口径20cm以下となる。底部は完形に復原する資料がないため明らかではないが、鉢Dが平底であるのに対して、輪高台になる可能性が考えられる。鉢F(106)は、半球形の体部で、口頸部が「く」の字形に屈曲した後、口縁端部を内側に肥厚させ尖りぎみにおわらせる。口径10.6cm・推定器高6.0cmを測る小型品である。なお、鉢Fは上層灰原で1点出土しているのみである。鉢G(107)は、直線的に立ち上がる体部下半部で底部には輪状の高台が貼り付いている。体部上半及び口縁部は完形に復原できるものがなく不明である。鉢H(103・104)は、底部から直線的に高く立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部がわずかに内傾する。底部には高台を貼り付けている。103は、口径20.5cm・器高21.5cmを測る。形状としては杯Bに近似しているが、ここでは鉢Hとして分類した。鉄鉢(102)は、内湾ぎみに立ち上がる体部で、口縁端部は丸みをもっておわる。口径24.2cmを測る。鉢底部片(108~110)は、平底の底部で、底部と体部の境がわずかに内湾したのち、直線的に斜め上方に立ち上がる体部へ続き、鉢Aの底部片となると思われる。

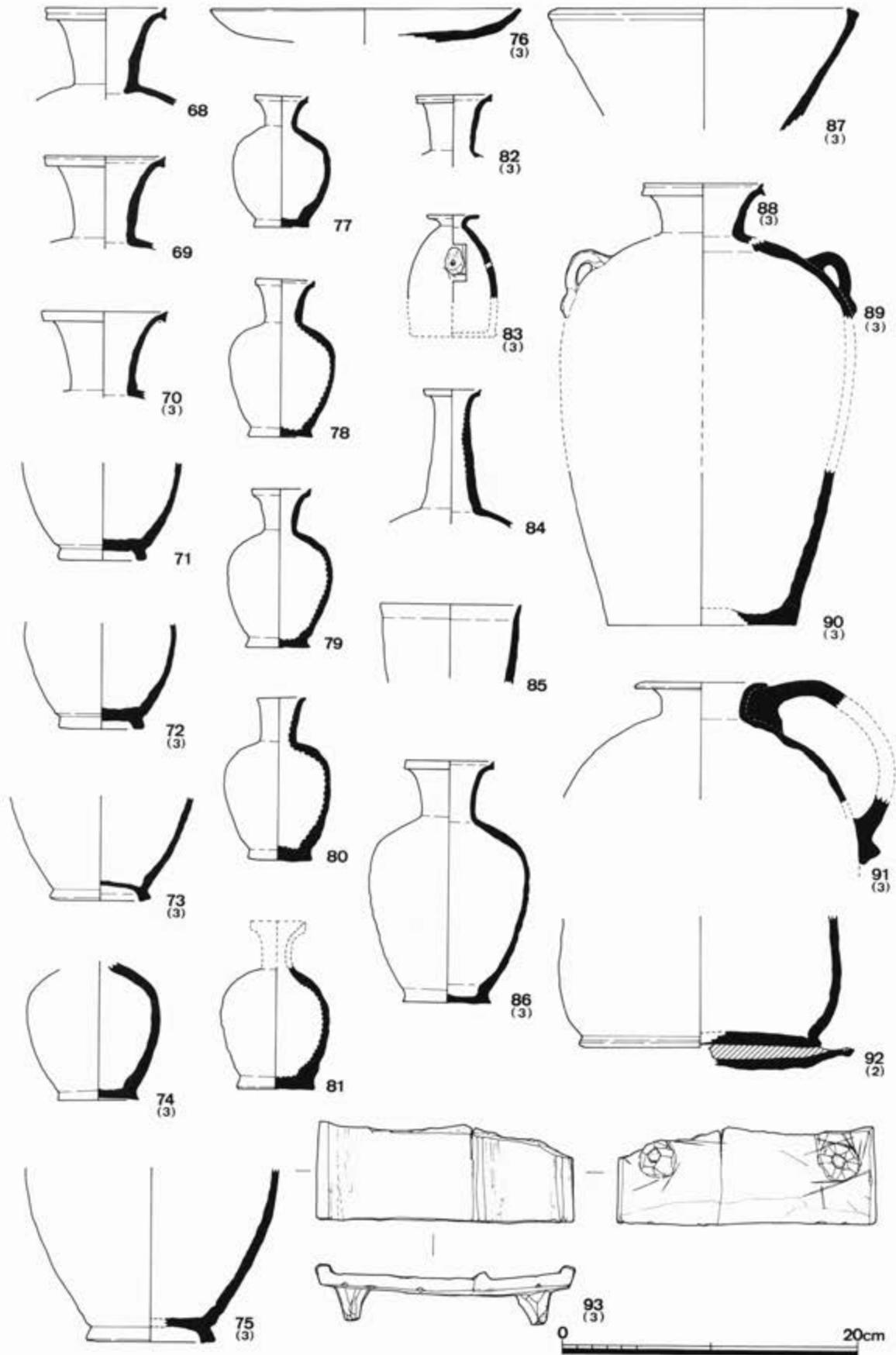
平瓶(105)は口縁部片で、口縁端部が内・外方に肥厚し丸みをもっておわっている。口径9.2cmを測る。

風字硯(93)は、平坦な陸部で陸部の3分の1の地点に断面台形の堤部を設けている。底部には



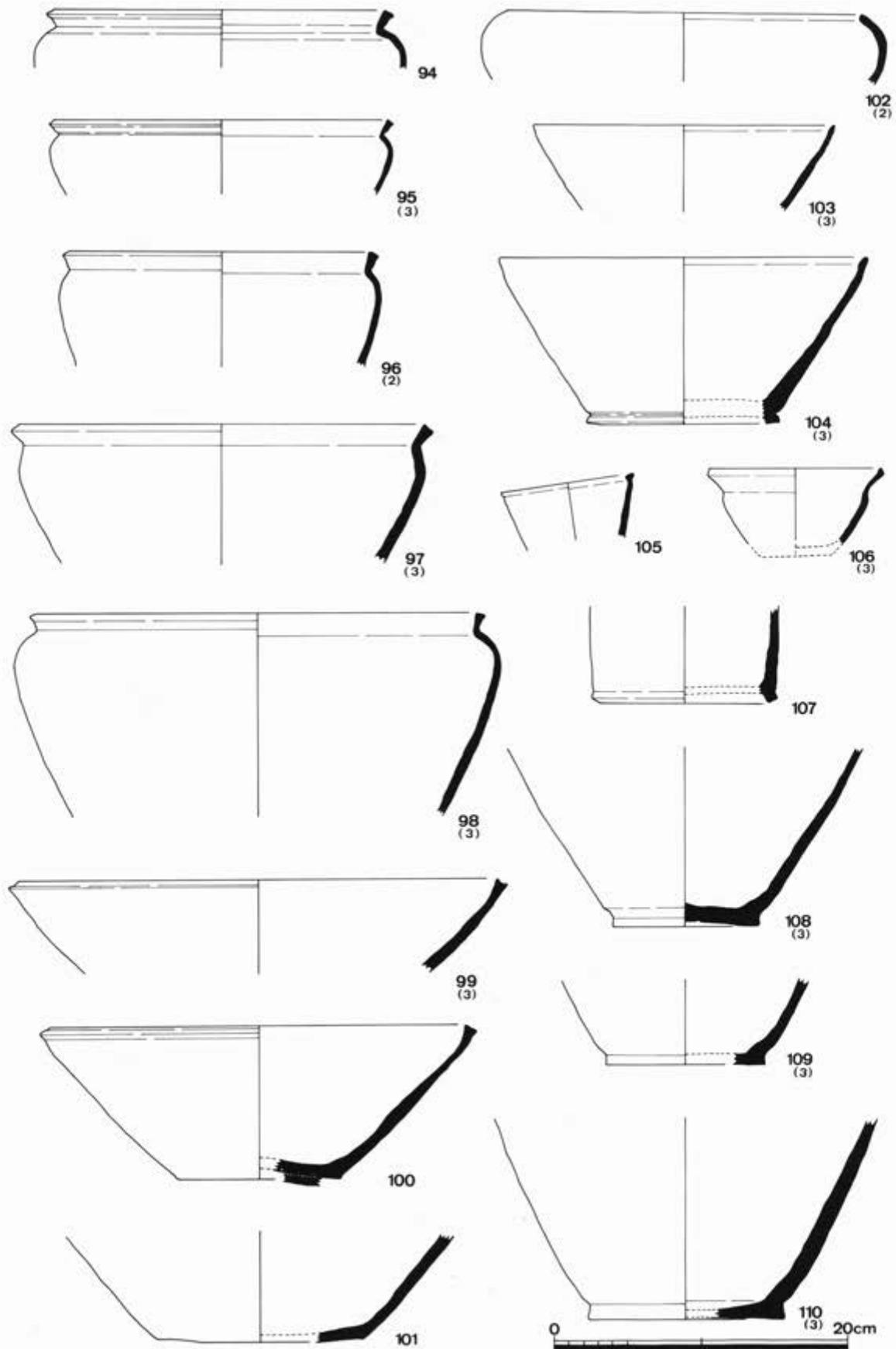
第11図 マル山1号窯跡出土遺物(2) 上層灰原1

* () 数字は第7図上層灰原層位



第12図 マル山1号窯跡出土遺物(3) 上層灰原2

* () 数字は第7図上層灰原層位



第13図 マル山1号窯跡出土遺物(4) 上層灰原3

* ()数字は第7図上層灰原層位

多面体の短い脚部を貼り付けている。

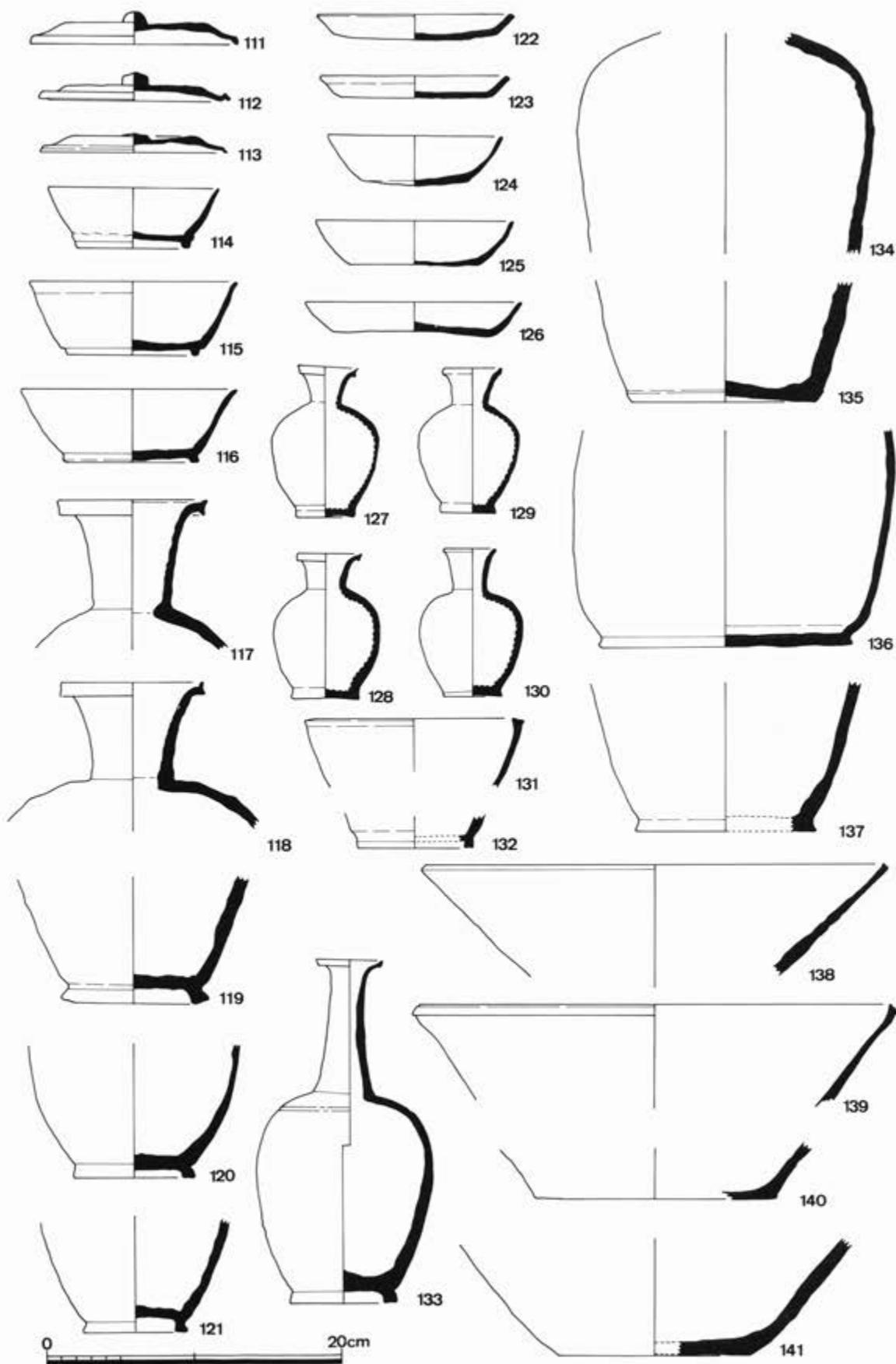
③整地層出土遺物 上層灰原と下層灰原に挟まれた黄褐色粘質土から出土した遺物で、杯蓋A、杯A・B、皿A、壺Aa・Ab・B・D、水浄、鉢A・Eが出土した。

杯蓋A(113)は、ボタン状のツマミを貼り付けており、形状としては杯蓋Aのなかでも最も新しいタイプと思われる。杯A(125)は、口径13.4cm・器高3.0cmを測り、杯Aのなかでは浅い形状である。皿Aは、122・123のような口縁部が直線的にのび、口縁端部が平坦ぎみのものと、126のように杯Aのような底部から丸みをもって口縁部へ続き、端部が丸みをもっておわるものがある。壺Aには、口径9.5cm以上の中型品(117・118)と、口径4.5cm以下の小型品(127~130)とがあり、中型品には119のような高台を貼り付けて底部がつくと思われ、小型品は平底と思われる。壺Ab(130)は、口縁部がわずかに外反し、丸みをもって終わる。底部片(137)は、壺Abの底部の可能性が有る。水浄(133)は、今回出土の水浄の中では唯一完形に復原できる資料で、卵形の体部から長い頸部へ続き、口縁部は水平ぎみに強く外反したのち、端部をわずかにつまみ上げている。底部には外方に踏ん張った高台を貼り付けている。口径4.5cm・底径7.2cm・器高23.4cmを測る。壺底部片(120)は、水浄の底部片と思われる。134は、壺Bの体部片、135は壺Bの底部片、136は壺Dの底部片と思われる。鉢Dには、口縁端部が上方のみ肥厚するもの(138)と、上・下方に肥厚するもの(139)がある。140・141は、鉢Dの底部片と思われる。鉢E(131)は、直立ぎみに立ち上がる体部で、口縁部がわずかに内傾し尖りぎみにおわり、底部下半を欠損している。132の底部片は、杯Bか鉢Eの底部片の可能性が考えられる。

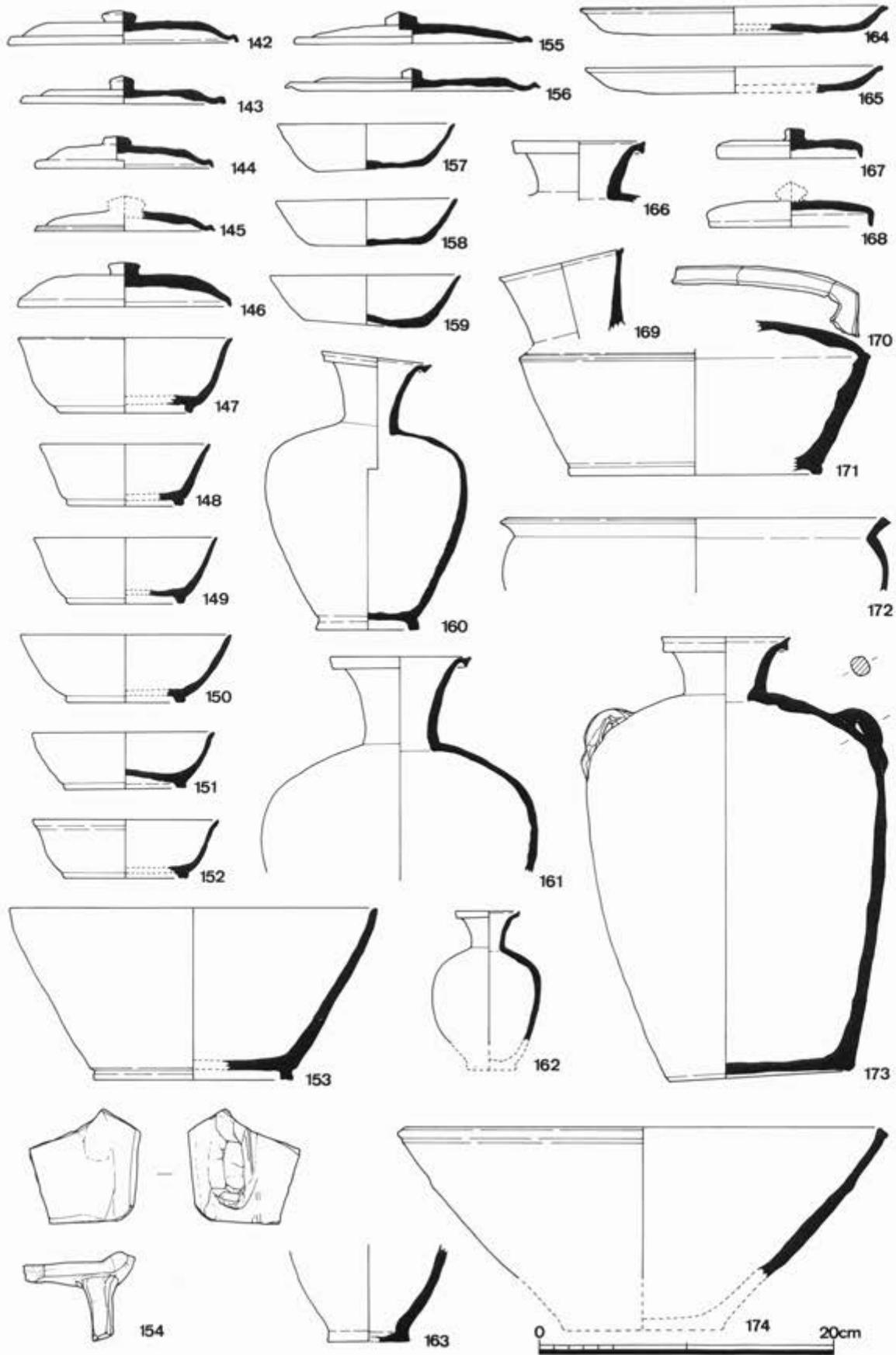
④下層灰原出土遺物 下層灰原からは杯蓋A、杯A・B、皿A、壺Aa・Ab・B、壺蓋、鉢A・D・H、平瓶、風字硯などが出土した。

杯蓋Aは、口縁端部が丸く折り返した古相のもの(142・143・145)と、口縁端部が直線的に広がる新相のもの(144・146・155・156)とがある。145は、口径12.2cmと小さい。杯Aには、口縁部が直線的に立ち上がるもの(158)と、わずかに外反するもの(157・159)とがある。杯Bには、口縁部が直線的なもの(148・149)と、底部からわずかに内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部がわずかに外反するもの(147・151・152)とがある。皿Aは、口径16.0cmに満たない小型のもの、164・165のような口径20.0cm以上のものがある。皿(165)は、口縁端部が丸みをもっておわる。壺蓋(167・168)は、口径11.0cm前後を測る。壺Aa(160)は、今回の調査では唯一完形に復原できる壺Aaで、口径17.0cm・底径6.0cm・器高17.0cmを測る中型品である。壺A(161)は、体部下半が欠損しているため明らかではないが、法量から壺Aaとなると思われる。壺Ab(162)は、推定器高11.0cm未満の小型品である。壺B(173)は、今回出土の壺Bの中で唯一完形に復原できる資料で、口径8.7cm・器高30.0cmを測り、肩部に断面円形の把手を2か所貼り付けている。166は、口縁部片である。鉢D(174)は、口径30.0cm・推定器高14.0cmを測る。平瓶は、口縁部片(169)、体部片(171)、把手部(170)が出土している。風字硯(154)には、多面体の長い脚を貼り付けている。

(石井清司)

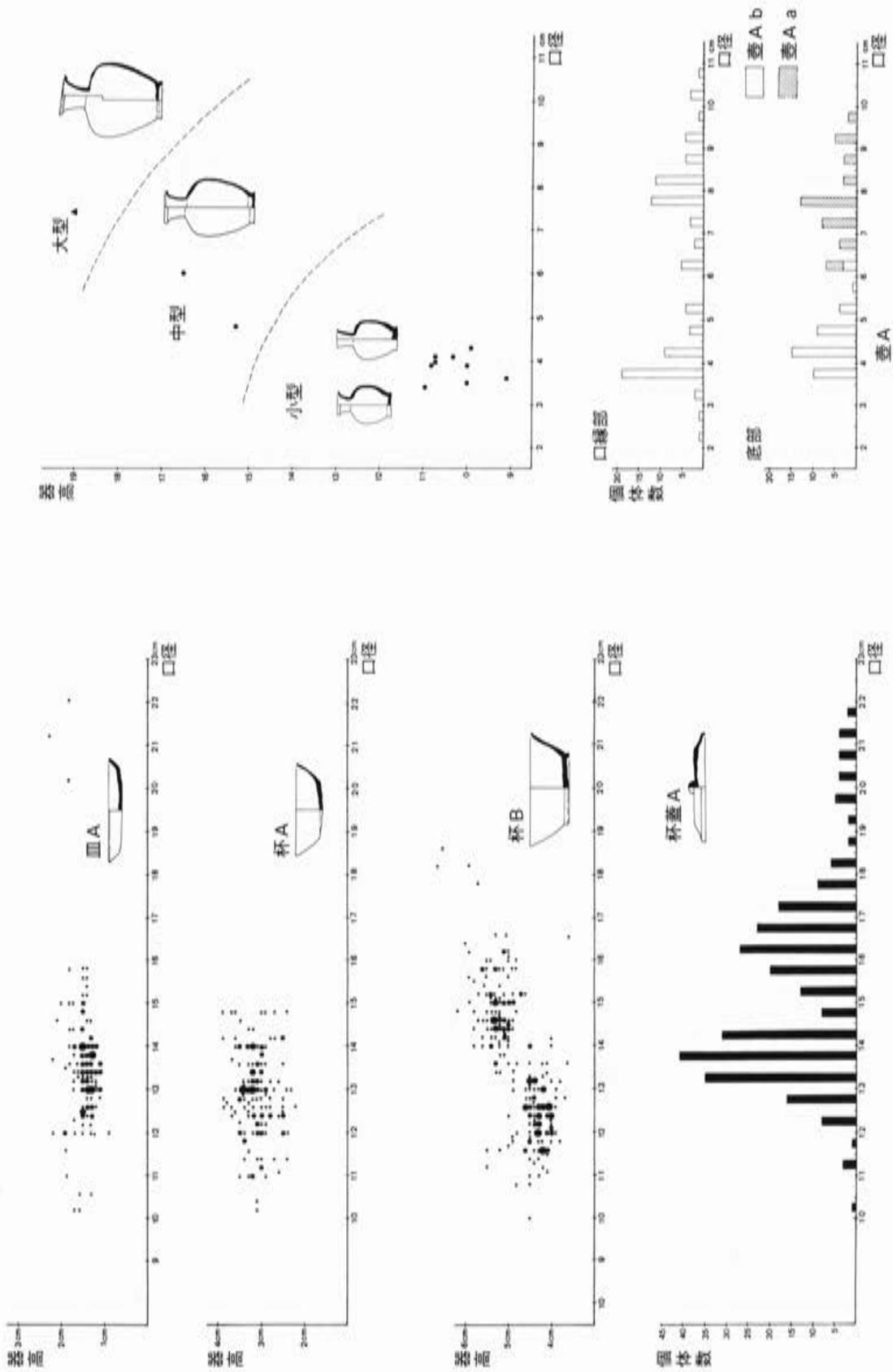


第14図 マル山1号窯跡出土遺物(5) 整地層



第15図 マル山1号窯跡出土遺物(6) 下層灰原

付表2 器種別法量表



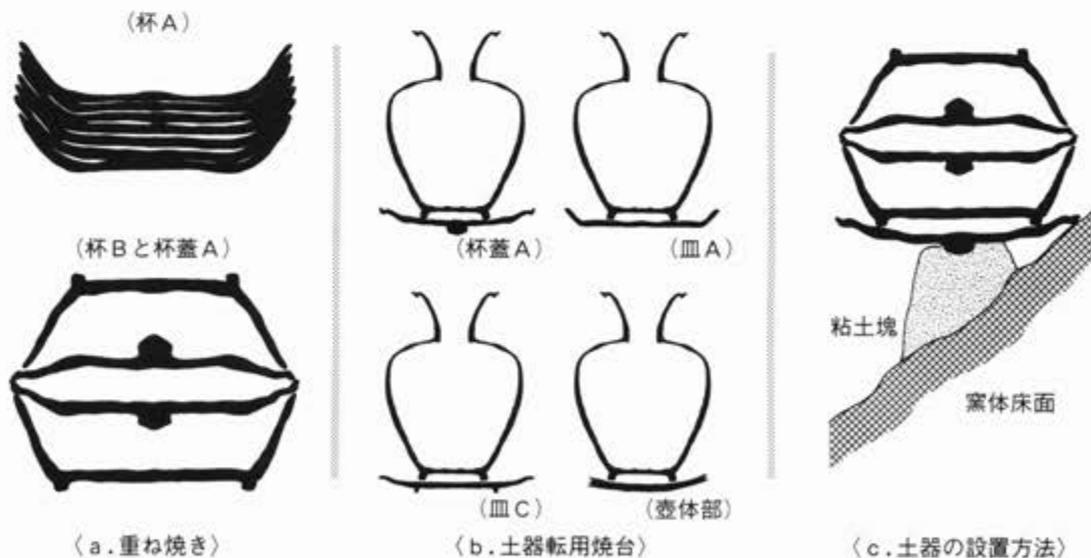
⑤重ね焼きとその設置方法

重ね焼き 土器の焼成では、重ね焼きの技法は、生産規模と技術系譜の双方において重視される。近年、癒着資料や降灰の状況から、重ね焼き技法が詳細に検討されているが、マル山1号窯でも、灰原及び整地層から重ね焼き技法の復原できる癒着遺物が含まれており、以下にその概要を記す。

杯Aは、上層灰原から、正位で重ねた癒着資料が出土している。杯の口径は、いずれも12.5～12.6cmとほぼ等しい同一規格で、7点の杯を重ねて焼いている(第16図a)。最上部の杯内面に降灰が認められないことから、さらに数点を重ねて焼いたとみられる。杯Aに関して、このほかの方法による癒着資料は認められない。

杯Bは、上層灰原、整地層、下層灰原の各地点で癒着資料が出土した。杯Bは、杯蓋Aとセットで焼成されている。重ね方は、杯Bに対して杯蓋Aを逆位に組み合わせ、その上に別の杯蓋Aを正位で合わせ、さらに杯Bを逆位に重ねる(第16図a)。これを一単位として、算盤状に積み重ねる方法をとる。

一単位(杯B 2点+杯蓋A 2点)として出土した癒着資料の降灰の状況を検討すると、一方の杯Bの高台に窯体床面との接着痕があり、上部に逆位に重ねた杯Bの高台内側には降灰がみられないことから、少なくとも2単位以上、積み上げたことが確認できる。この積み方の場合、杯Bの底部高台どうしを重ねるため、やや安定感を欠くが、高台径の調整によって異なる規格のものを重ね焼きすることができるという利点がある。また、杯蓋Aどおしの重ね合わせ部分は、癒着したまま出土した5点の資料を検討する限り、いずれも一方の口径が約5～6mm小さい。重ね焼きの破損品のなかには、蓋部のずれたものがいくつかみられることから、破損率を抑えるため、口径がやや小さくなる蓋を逆位に合わせたと推定される。杯蓋Aについては、降灰が蓋部上面全体に及ぶものがなく、ほとんどが口縁端部外面のみに一周しており、ほぼすべての個体で、杯Bと



第16図 重ね焼きと土器の設置方法

セットで、算盤状の積み上げによる重ね焼きが行われたとみられる。この方法により、大量の焼成が可能であると同時に、杯蓋Aの器面は降灰から保護される。

本来、焼成は製作、乾燥と一体であるから、杯蓋Aは、重ね焼き時の約5mmの口径差を意識した製作を当初から行って、計画的に重ね焼きを行えば、焼成における量的な課題を達成できる。杯蓋Aの口径の分布を検討すると、口径は13.5～14.0cm・16.0～16.5cmの二つのピークの間を、個体数が徐々に推移している(付表2)。こうした口径の変化は、当初から重ね焼き時の口径差を意識し、計画的に製作された可能性を示しているといえよう。

土器の設置 焼成時の土器の設置方法に関しては、窯体床面上に、焼台に転用された土器や手捏ねの粘土台を検出しており、その設置方法を知ることができる。

焼台として出土したものは、すべて土器の転用によっており、この時期に北陸地方などでしばしばみられる専用の焼台はない。焼台として確認できる資料は少ないが、使用された器種は、杯蓋Aが7点と最も多く、他には皿A 2点、皿C 1点、壺の体部片 1点が認められる。杯蓋Aは、宝珠形のツマミを下に向け、逆位にして使用されている(第16図b)。

土器は、窯体床面の一部を削り出した部分に、径約15cm・高さ約10cm程度の円柱状の手捏ねによる粘土塊を固定させ、その上に転用土器を設置したものがほとんどである(第16図c)。

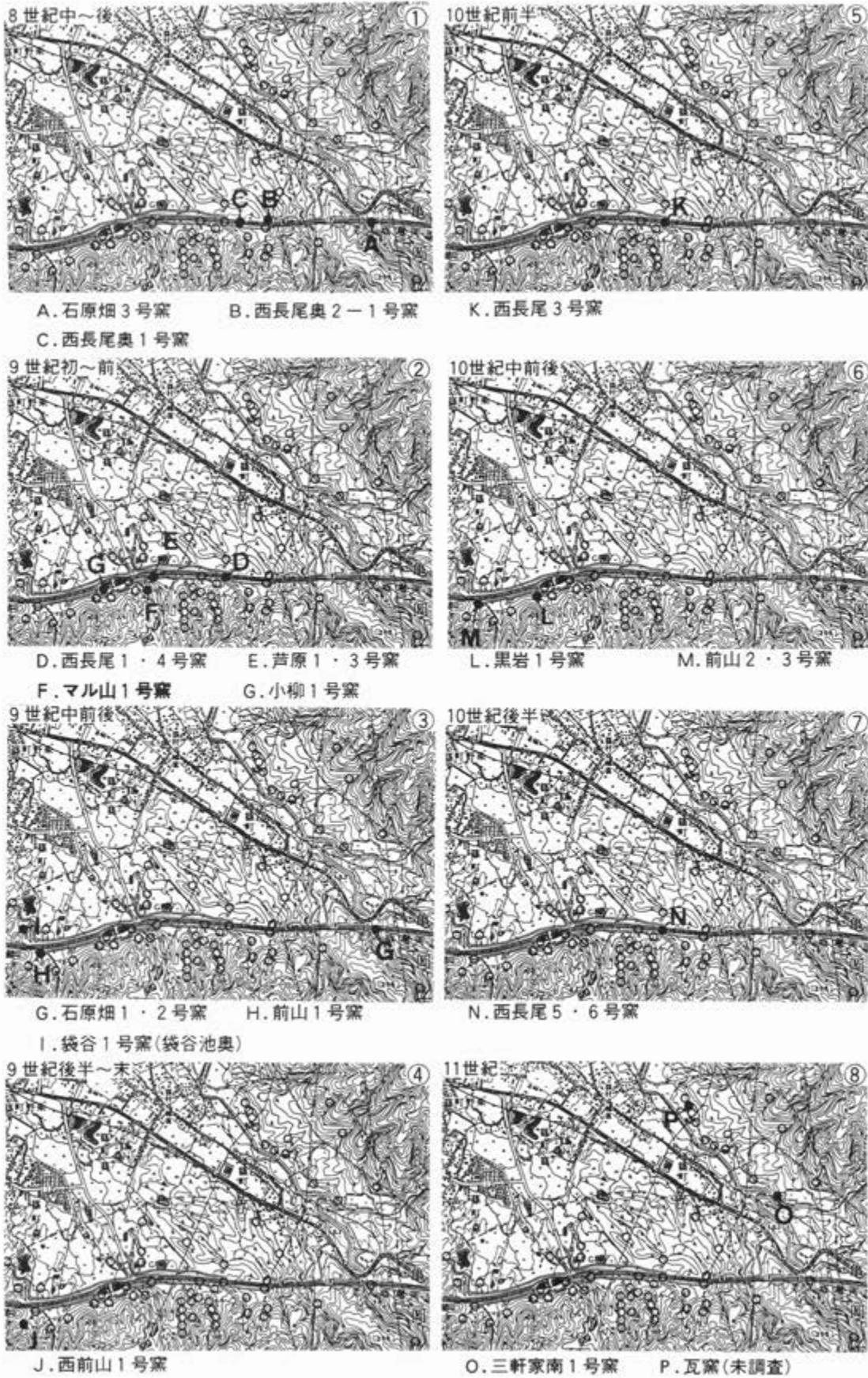
(野々口陽子)

6. ま と め

南丹波地域には、園部盆地の園部窯跡群と亀岡盆地の篠窯跡群という二大窯業跡が存在する。このうち園部窯跡群は古墳時代後期に操業をはじめ、7～8世紀に最盛期を迎える。一方、篠窯跡群は、これと交替するように、少なくとも8世紀中頃には操業をはじめており、9～10世紀に興隆する。操業の契機は、亀岡盆地内の丹波国府、国分寺、国分尼寺への須恵器の供給を目的としたと考えられているが、やがて主として平安京へ供給するようになり、官窯的性格を持つようになる。篠窯産の須恵器は、緑釉陶器が生産された10世紀から11世紀の初めにかけて、近畿地方周辺部のみでなく、美作国府や伯耆国府など西日本一帯に広がり、遠くは東北地方の多賀城跡や、九州地方の大宰府まで流通していることが明らかにされている⁽⁸¹¹⁾。

篠窯跡群は、亀岡市南東部の丘陵縁辺部に東西約3.5km・南北2kmにわたって広がっており、分布調査などの成果から、少なくとも百数十基以上の窯跡の存在が推定されている。操業期間は、8世紀中頃の石原畑3号窯跡、西長尾奥1-1号窯跡から、11世紀の前半の西長尾5号窯跡までの約300年間にわたっており、その最終段階の11世紀から12世紀には瓦生産に移行し、終焉を迎える。

窯跡の分布状況については、これまでに小河川と谷を単位とした支群単位の把握が試みられており、7支群に分けられている⁽⁸¹²⁾が、操業期間の明らかな窯跡が少ないため、支群ごとの様相を比較できる状況にはない。操業時期が発掘調査によって判明している窯跡からその変遷をみると、8世紀中頃の操業初期とみられる窯跡は、山城盆地との境であり、古山陰道の丹波の入り口とも



第17図 篠窯跡群の変遷

いえる老ノ坂峠の麓に位置するが、時期を追うごとに、西へ徐々に立地を移していることがわかる(第17図)。こうした移動は、基本的には燃料材としての薪の確保に伴うのであろう。薪の樹種については、11基の窯跡の灰原から出土した炭化材をもとに、樹種鑑定が行われている。これによれば、2基の窯を除いて、初期の窯から終末期の窯まですべてカシ類・シイ類という自然の照葉樹林を構成する樹種が用いられているが、9世紀中葉以降の窯には一部に森林の二次林化を示す二葉松類を含むものがあるとされる⁽¹³⁾。そこで、篠窯跡群が最も隆盛する9世紀中頃の分布状況に注目すると(第17図③)、操業初期の8世紀中頃(第17図①)に築かれた石原畑地区に再び石原畑2号窯が構築され、9世紀中頃の分布域に大きな広がりが見られる。石原畑2号窯跡では、樹種鑑定が行われ、サンプルが1点ながら、二葉松類であることが判明している。こうしたことから、9世紀以降、生産規模の拡大に伴い、新たな燃料材の確保、補充のためマツ材の育成が進められ、その結果、石原畑地区にみるようにかつて窯跡が構築された地区での操業を再び可能にしたと考えられる。

今回調査した、マル山1号窯跡は、天井部が崩落せずに遺存していたという点で、過去の篠窯跡群の半地下式窖窯の調査のなかで、最も良好な状態で窯体を検出しており、焼成部の本来の構造を知る貴重な資料が得られた。窯体の検出全長は、長さ約8.0m・燃焼部約2.4m・焼成部約8.2mを測る。焼成部の平均傾斜角は43°と急峻で、床面には焼成の際、土器を安定させるため、孤状の窪みを削り出している。窯体の断ち割り調査により、窯壁は大きな改修を一回、その後部分的な修復を一回経ており、操業は合計3次にわたると推定される。一方、灰原の堆積状況を見ると、整地層を挟んで下層灰原、上層灰原とした2層の連続しない堆積層がある。上層灰原は分層が可能であり、2回以上の操業に対応する可能性が高く、大きく改修した2次操業と、部分的な修復を行った3次操業に対応するものであろう。

マル山1号窯跡の窯体及び灰原内からは杯A・B、皿A・C・D・F、杯蓋A、壺Aa・Ab・B・D、壺蓋、水浄、水滴、鉢A・D・E・F・G・H、平瓶、鉄鉢、風字硯などが出土しており、概して小型品を焼成した須恵器窯である。

これらの器種をこれまで発掘調査が実施された篠窯跡群の出土遺物と比較し、篠窯跡群におけるマル山1号窯跡の位置づけを検討したい。

篠窯跡群の中では、マル山1号窯跡に先行する時期の窯跡として西長尾1・4号窯跡、芦原1・3号窯跡が、マル山1号窯跡に後出するものとして小柳1号窯跡、前山1号窯跡などがあり、いずれもが9世紀後半でおさまる時期に操業されている。これらの出土遺物とマル山1号窯跡の出土遺物を比較すると、後述のように、その中間の時期の資料であることが明らかである。以下、簡単にその説明を行う。

杯A・B、皿Aは西長尾1・4号窯跡、芦原1・3号窯跡、前山1号窯跡でも出土している。皿Aに高台を貼り付けた皿Bは西長尾1・4号窯跡で1点、芦原1・3号窯跡で2点出土しているが、マル山1号窯跡でも前山1号窯跡でも出土しておらず、マル山1号窯跡以前に皿Bの消滅が考えられる。皿C・Dは西長尾1・4号窯跡、芦原1・3号窯跡では出土していないが、小柳

1号窯跡、前山1号窯跡では出土しており、篠窯跡群での器種のなかでは9世紀段階でも新しい傾向にあり、後述する器種構成ではマル山1号窯跡が皿C・Dの出土例としては最も古い一群となる可能性が高い。ただ、出土量としては皿Cが6点、皿Dが1点であり、皿のなかでは主体とならない器種である。杯蓋Aは西長尾1・4号窯跡、芦原1・3号窯跡、小柳1号窯跡でも出土しているが、マル山1号窯跡の杯蓋で細分したように、杯蓋Aaはなお奈良時代的な器形であり、西長尾1・4号窯跡、芦原1・3号窯跡では杯蓋Aaが主体である。一方、杯蓋Abは杯蓋Aaに後出する器形であり、マル山1号窯跡ではAbが主体となる。また、小柳1号窯跡では杯蓋Aとともに、宝珠形ツمامミをもたない杯蓋Bが出土しているが、マル山1号窯跡では杯蓋Bは出土していない。壺Aは、底部の形状から輪高台の壺Aaと平底で糸切り痕を残す壺Abに細分でき、マル山1号窯跡では1:1の割合で出土している。ただ、壺Aaと壺Abの法量をみると、底部直径5cm以上のものが壺Aaであり、5cm以下の小型品が壺Abとなることがマル山1号窯跡で看取できる。なお、西長尾1・4号窯跡では小型品を含めて壺Aaが大半であり、わずかに数点の壺Abが出土しているのみであるが、小柳1号窯跡では中型品を含めて壺Abが主体であり、壺Aaは主体とはならない。壺Dはマル山1号窯跡で14点出土しているが、西長尾1・4号窯跡、芦原1・3号窯跡、小柳1号窯跡では出土していない。わずかに石原畑1・2号窯跡で1点出土しているのみである。水滴は、これまでの篠窯跡群では出土していないが、愛知県猿投窯跡で類似した形状のものが出土している。鉢Aは、完形に復原できる資料がなく、口縁部の形状と底部の形状をむすびつけることができないが、西長尾1・4号窯跡では輪高台、小柳1号窯跡では平底で糸切り痕をとどめるものに変化しており、マル山1号窯跡も鉢の底部片をみる限り、小柳1号窯跡の形状になる可能性が高い。

マル山1号窯跡のなかでも出土量が多い杯A・B、皿A、杯蓋Aの法量を他の窯跡出土遺物と比較すると、器種構成の変化と同様の傾向を示す。杯Aは、西長尾1・4号窯跡では口径11~14cmの一群(A I)と口径14cm以上のA III、口径17cm以上のA IVのものがあるが、マル山1号窯跡では口径15cm以上のものは皆無となる。また、法量が明らかな石原畑2号窯跡では口径15cmを超えるものは少なくなる。杯Bは、マル山1号窯跡で口径11.5cm・器高4.0~4.5cmを測る一群(B I)、口径14~16cm・器高5.0~5.5cmを測る一群(B II)、口径17.5cm以上・器高6cm前後を測る一群(B III)に大別でき、B IIIは比較的少なく、B I・B IIが主体である。西長尾1・4号窯跡では杯Bに法量のばらつきがあり、口径20cm以上を測るものがあるが、マル山1号窯跡では口径20cm以上を測るものはない。口径に対する器高の割合を比較すると、西長尾1・4号窯跡では口径11.5~13.0cmのものでは器高3.0~4.0cmにその分布の中心があり、口径に対する器高の割合は、西長尾1・4号窯跡よりも高くなる傾向にある。マル山1号窯跡と同じ傾向は、石原畑1・2号窯跡にみられる。皿Aは、西長尾1・4号窯跡では口径11.0cmから17.5cm以上・器高1.0~2.5cmと法量にばらつきがあるが、マル山1号窯跡では口径10.0~16.0cm・器高1.5cm前後の小型品に限られる。

このように、器種構成では奈良時代的な皿A・壺Aaなどが含まれているが、法量変化からす

れば、平安時代的な様相へと変化していく傾向にある。また、器種構成では皿C・D・F、杯蓋Ab、水滴など平安時代以降の新しい器種がある。奈良時代的なものと平安時代的なものが混在した時期であり、篠窯跡群での他の窯跡出土遺物と比較したように、西長尾1・4号窯跡、芦原1・3号窯跡と小柳1号窯跡の間を埋める資料と考えられる。絶対年代としては、9世紀中葉でも古い段階の時期を想定したい。

(石井清司・野々口陽子)

- 注1 堤圭三郎「国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1976)』 京都府教育委員会) 1976
- 注2 御教示いただいた方々 樋口隆久・中澤 勝(亀岡市教育委員会)、百瀬正恒・平尾政幸・小森俊寛・上村和直(京都市埋蔵文化財研究所)、山田邦和(京都文化博物館)、尾野善裕(京都国立博物館)、菱田哲郎(京都府立大学)、木立雅朗(立命館大学)、森内秀造・岡本一秀(兵庫県教育委員会)・高橋照彦(国立歴史民俗博物館)、藤原 學(吹田市立博物館)
- 調査参加者 石田初美・大西幸江・原田浩正・人見幸代・松本芳雄・村嶋みよ子・湯浅彰郎・上田真一郎・小川正志・大西稔子・大橋宜雄・尾田洋子・伴 和彦・井内美智子・奥井 愛・荻野冨沙子・柿谷悦子・勝山紀子・小滝初代・澤田佳子・鈴木弥生・関口睦美・高橋あかね・伊達優子・松下道子・松元順代・森川敦子・山内 雅・山本弥生
- 注3 a 亀岡市教育委員会編『新修 亀岡市史』 1995
b 梅原末治編『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十八冊 1938
- 注4 梅原末治編『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊 1920
- 注5 a 梅原末治編『近畿地方古墳墓の調査』2 日本古文化研究所 1937
b 安井良三・白石太一郎『先史学研究』1 同志社大学先史学研究会 1959
- 注6 注5 aに同じ
- 注7 樋口隆久『観音芝廩寺発掘調査報告書』 亀岡市教育委員会 1988
- 注8 注3 aに同じ
- 注9 注3 aに同じ
- 注10 石井清司「篠窯須恵器」(『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会) 1995
- 注11 a 伊野近富「篠原型須恵器の分布について」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
b 石井清司・水谷壽克「共同研究 古代における生産と流通—篠窯跡群を中心として—」(『京都府埋蔵文化財情報』第61号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注12 注3 aに同じ
- 注13 山口慶一・千野裕道「マツ林の形成および窯業へのマツ材の導入について」(『研究論集』Ⅷ 東京都埋蔵文化財センター) 1990

2. 名神高速道路関係遺跡平成7年度発掘調査概要

—長岡京跡左京第361・362・363次(7ANVKN-6・7・8)—

1. はじめに

日本道路公団では、大阪茨木インターチェンジから京都南インターチェンジ間の慢性的な交通渋滞解消のため、走行車線の拡張工事を計画された。本調査は、この名神高速道路拡幅工事に伴い影響を受ける遺跡(名神高速道路関係遺跡)の事前調査で、同公団大阪建設局の依頼を受けて実施した。

名神高速道路関係遺跡の調査は、昭和63(1988)年度から開始し、本年度で8年目となる^(注1)。このうち、PA工区の調査は、平成5年度から開始し、同工区内の本線部分について4地点で3,100㎡を、平成6年度には、当初6地点で9,250㎡を予定したが、年度後半に工事工程による見直しがあり、2,000㎡を追加調査した。

平成7年度の調査は、道路公団、京都府教育委員会、当調査研究センターとの協議により、工事完成期限が先行されるパーキングエリア上り線側について、14,880㎡を発掘した(第19図)。

現地調査の期間は、平成7年4月10日から平成8年2月28日までである。本調査にかかわる経費は、日本道路公団大阪建設局が負担した。

調査地名及び面積、期間、長岡京の調査回数については、付表3に示した。検出した遺構の番号は、基本的に各地区ごとの連番としたが、条坊遺構など広域に及ぶ遺構については、調査区内で検出した先行する調査成果をもとに、付表4に示した。条坊呼称は、基本的に旧呼称で行い、適宜()内に新呼称を併記する。

調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第4係長平良泰久、同主任調査員戸原

付表3 平成7年度 名神高速道路関係遺跡発掘調査一覧

| 工区 | 地区名 | 回数 | 調査記号 | 所在地(字名) | 推定遺構(遺跡) | 面積 | 開始 | 終了 | 担当者 |
|--------|------|------|----------|---------------|---|--------|------|------|-------------|
| 桂川PA工区 | A-4 | L361 | 7ANVKN-6 | 南区久世東土川町(金井田) | 左京南一条四坊四町 東三坊大路 南一条第二小路 東土川遺跡 | 4,672 | 4/10 | 2/28 | 中川・森島 |
| | A-6a | L362 | 7ANVKN-7 | 南区久世東土川町(金井田) | 左京南一条三坊十三町 東三坊大路 南一条第二小路 東土川遺跡 | 5,104 | 4/10 | 2/28 | 戸原・野島 岸岡 |
| | A-6b | L363 | 7ANVKN-8 | 南区久世東土川町(金井田) | 左京南一条三坊十三町 南一条第二小路 東土川遺跡 | 5,104 | 4/10 | 2/28 | 竹井・岩松 |
| | | | | | 合計 | 14,880 | | | |

付表4 遺構番号対照表

| 遺構番号 | 現説資料 No. 95-07 | 現説資料 No. 96-01 | 左京 第361次 | 左京 第362次 | 左京 第363次 | その他の 調査 | 備考 |
|-------------------------------------|-------------------|--------------------|----------------|-------------|----------------------|------------|------------|
| S D362101 | 溝 1 | | | S D101 | S D76 | | 南一条第二小路北側溝 |
| S D362102 | 溝 2 | | | S D102 | S D75 | | 南一条第二小路南側溝 |
| S D362103 | 溝 3 | | | S D103 | S D77 | | 十三町宅地内北辺溝 |
| S D363100 | 溝 4 | | | | S D88で 一部取り あげ | | 十三町宅地内東辺溝 |
| S D33001 | 溝 5 | | 西側溝 | | | | 東三坊大路西側溝 |
| S D32901 | 溝 6 | | 東側溝 | | | | 東三坊大路東側溝 |
| S A32903 | 堀 1 | | | | | S A33609 | |
| S D32908 | | 溝 1 | | S D201 | S D107 | | 底面に牛足跡 |
| S F363108 | | 大畦畔10 | | | S F108 | | 道路状遺構・畦畔 |
| S F363109 | | 大畦畔10 | | | S F109 | | 道路状遺構・畦畔 |
| S D361123 | | 方形周溝墓 5 | S D123 | | S X113 | | |
| S X363111 | | 方形周溝墓 6 | | | S X111 | | |
| S D361161 S D361159 S X363112 | | 方形周溝墓 7 方形周溝墓 8 | S D161・ 159 | | S X112 | | |
| S D361160 | | 方形周溝墓 9 | | | | | |
| S D361168 | | 環濠 3 | S D168 | | | S D32909 | |
| S D361162 | | 環濠 4 | S D162 | | | S D32909 | |
| S D32909 | | 自然流路 2 | S D166 | | | | |
| — | | 水田畦畔11 | | | | | |

和人、同主査調査員竹井治雄、同調査員岩松 保・中川和哉・森島康雄・野島 永・岸岡貴英が
あたった。本書の執筆は、その分担執筆分を文末に記した。

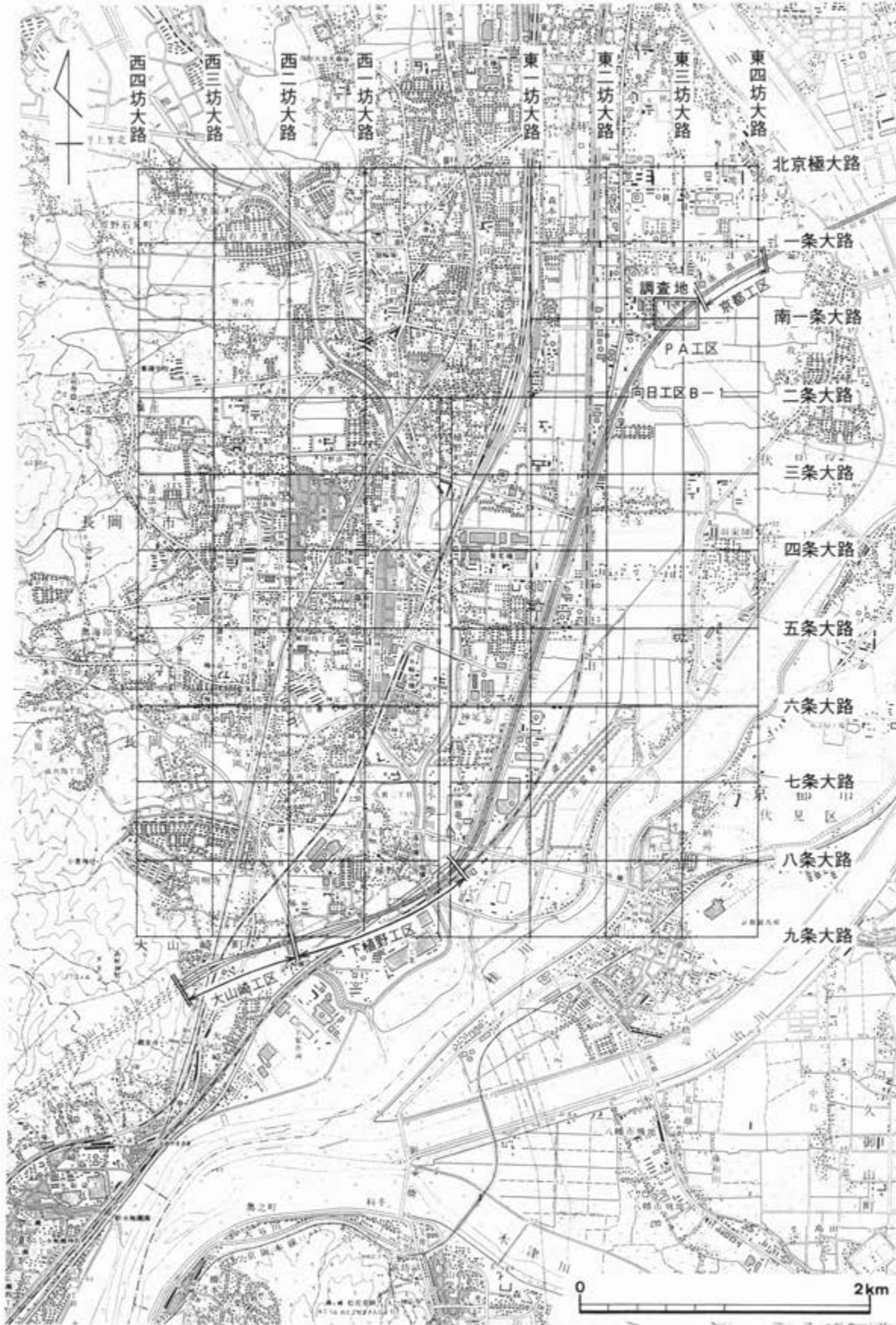
調査については、日本道路公団、大山崎町教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋
蔵文化財センター、向日市教育委員会、(財)向日市埋蔵文化財センター、(財)京都市埋蔵文化財
研究所などの関係各機関の協力を得た。また、現地調査には多くの方々の参加を得た。

(戸原和人)

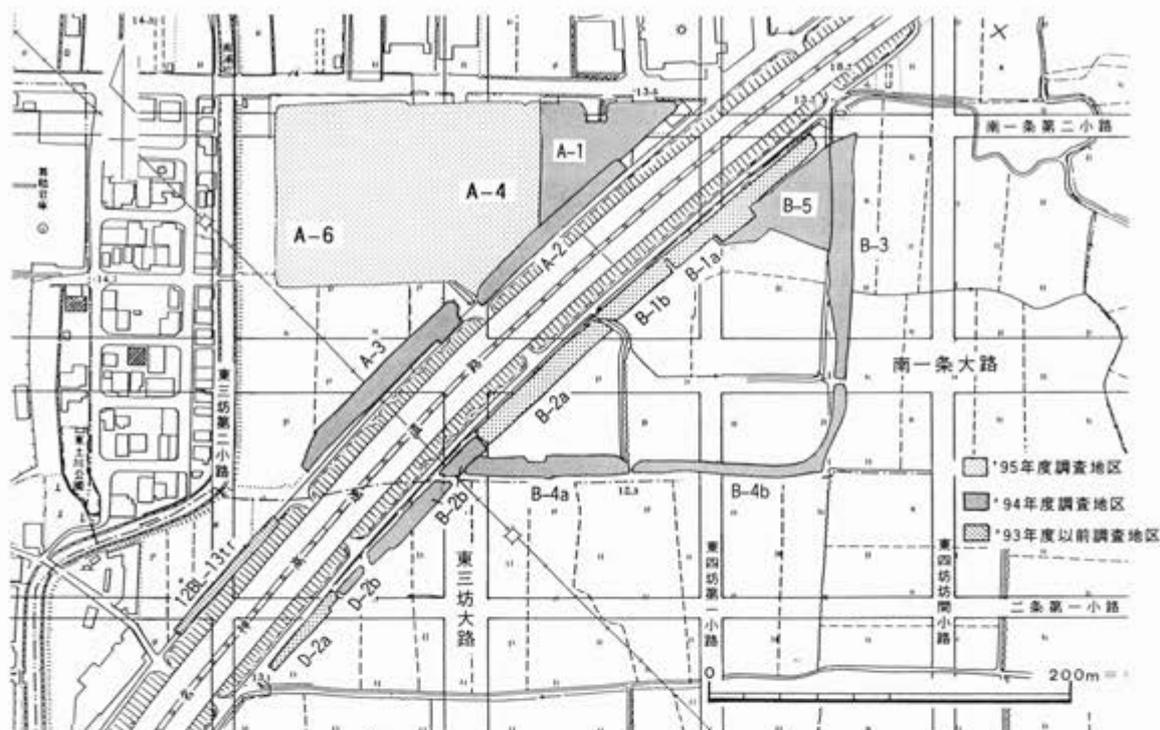
2. 調査の概要

調査地は、長岡京の条坊復原によると、東三坊大路と南一条条間第二小路(新呼称では、二条
条間北小路)の交差点の南側にあたる。周辺の調査によって、調査地の北辺付近に南一条第二小
路が、調査地の中央やや東寄りに東三坊大路が検出されるものと推定された。調査地は、東三坊
大路によって東西に二つの町に分かれ、西側が南一条三坊十三町(新呼称では、左京二条三坊十
五町:以後、十三町と呼ぶ)、東が同四坊四町(新呼称では左京二条四坊二町:以後、四町と呼ぶ)
となる。調査面積の6割余りが十三町にあたり、四町が2割を越える程度である(第20図)。

昨年度の名神高速道路関係遺跡の調査では、今回の調査地の東側と南側で調査を行っており、
四町域で多数の掘立柱建物跡が検出されている。



第18図 調査地区位置図(長岡京全体図)



第19図 調査トレンチ配置図(平城京型で復原)

この調査地の基本層位は、調査地北側部分では、アスファルトやコンクリートの含まれた現代盛り土(約80~90cm)―旧耕作土(灰色シルト)と床土(橙褐色シルト~粘土)の互層(20~30cm)―黄灰褐色シルトの長岡京遺構面(17~20cm)―西側部分でのみ検出される橙褐色粘質土及び灰色粘土の無遺物層(15~40cm)―黄褐色砂質土の弥生時代小区画水田面がある。

今回の調査では、ほぼ同一の調査面で大きく五時期に分けて遺構を検出した。まず、中世素掘り溝を主とする中世以降の遺構群と、平安時代の掘立柱建物跡・井戸・小溝群、長岡京の条坊遺構及び宅地関連遺構、古墳時代から奈良時代にかけての数条の溝、弥生時代の環濠・水田遺構・方形周溝墓などを検出した。これらの遺構は、長岡京の宅地利用の状況とともに、東土川遺跡の実態の解明に大きく寄与するものである。以下、各時期に分けて、検出した遺構の概略を述べる。

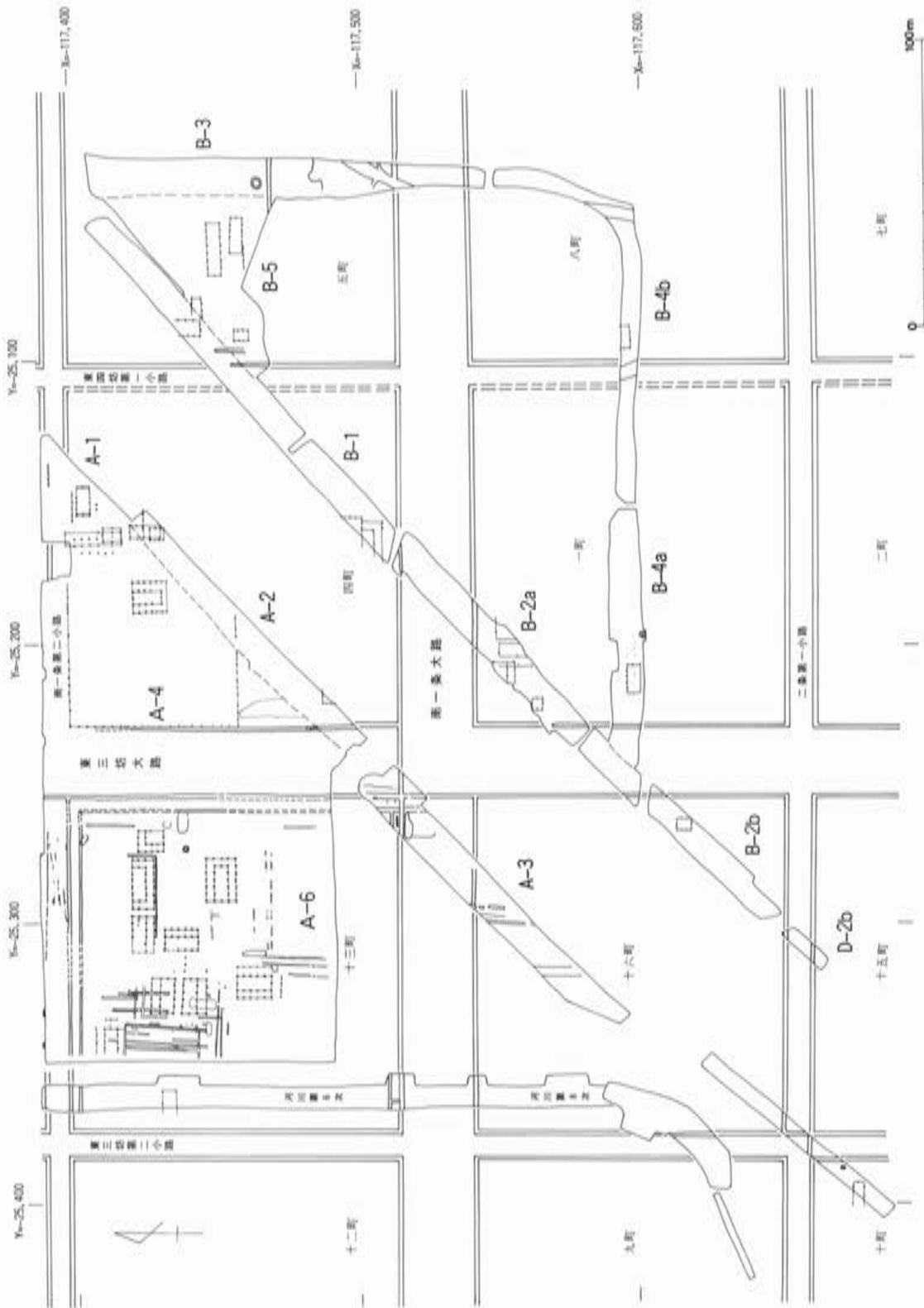
(岩松 保・野島 永)

3. 検出遺構

(1) 中・近世(第22図)

調査地のほぼ全域で、東西約5mの間隔をおいて、5~7本程度の南北方向の溝が2~3mの範囲に集中して掘られている状況を確認した。溝内から、13世紀から14世紀にかけての瓦器碗が出土しており、従来の調査結果と一致する(第21図)。溝群は、ほぼ同じ位置で何度も掘り直されていることから、条里型地割りの水田耕作や畑作に伴う一筆の区画を表わしていると考えられる。

調査地の北辺付近では、上記の溝に並行して、10mおきに東西の一辺約1m・南北約1.5m程度の水溜めと考えられる土坑が数基ずつ掘られている。これらの土坑は、遺構の切り合い関係か



第20図 長岡京期主要遺構平面図

らみて中世溝より新しく、出土遺物から近世に埋まったと考えられる。

調査地の南辺では、東西方向の溝が掘られているが、これらの溝内からも、13世紀から14世紀の瓦器椀片が出土している。現在の水田区画の畦畔もこの溝と一致している。また、調査地の中央やや東側では、現在の里道の真下及び、その周囲でこれに平行する溝が検出されており、同様に13～14世紀頃にまでさかのぼる。これらのことから、地表に残る水路や里道、畦が13世紀までさかのぼる条里型地割りを踏襲していると推定される。

また、調査地の中央で、現在まで使用されていた水路と里道は、これに平行する溝が同様に中世までさかのぼることが明らかになった。(岩松 保)

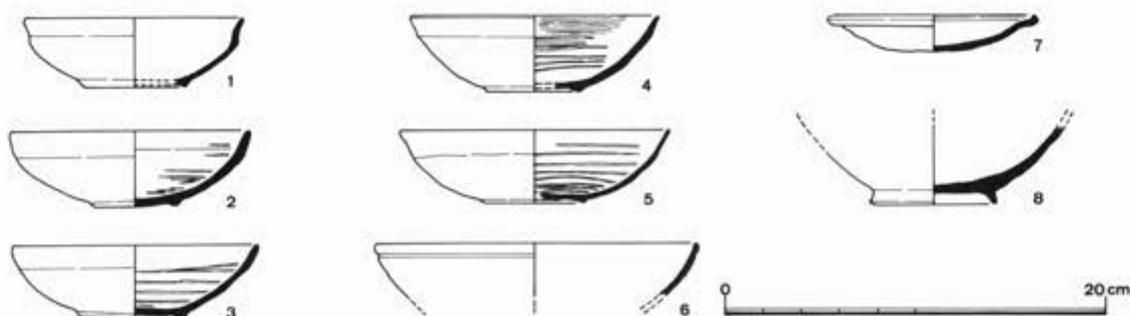
(2) 平安時代(第22図)

掘立柱建物跡 S B 363119 十三町の北東部で検出した建物跡で、東西3間・南北1間の身舎に、南と北に廂を持つ東西建物跡である。身舎の柱間寸法は、梁間3.9m(13尺)・桁行2.55m(8.5尺)、西側1間は1.8m(6尺)である。身舎北東隅の柱穴の座標は、X=-117,408.5、Y=-25,265.5である。また、北西隅ではX=-117,408.2・Y=-25,272.6である。

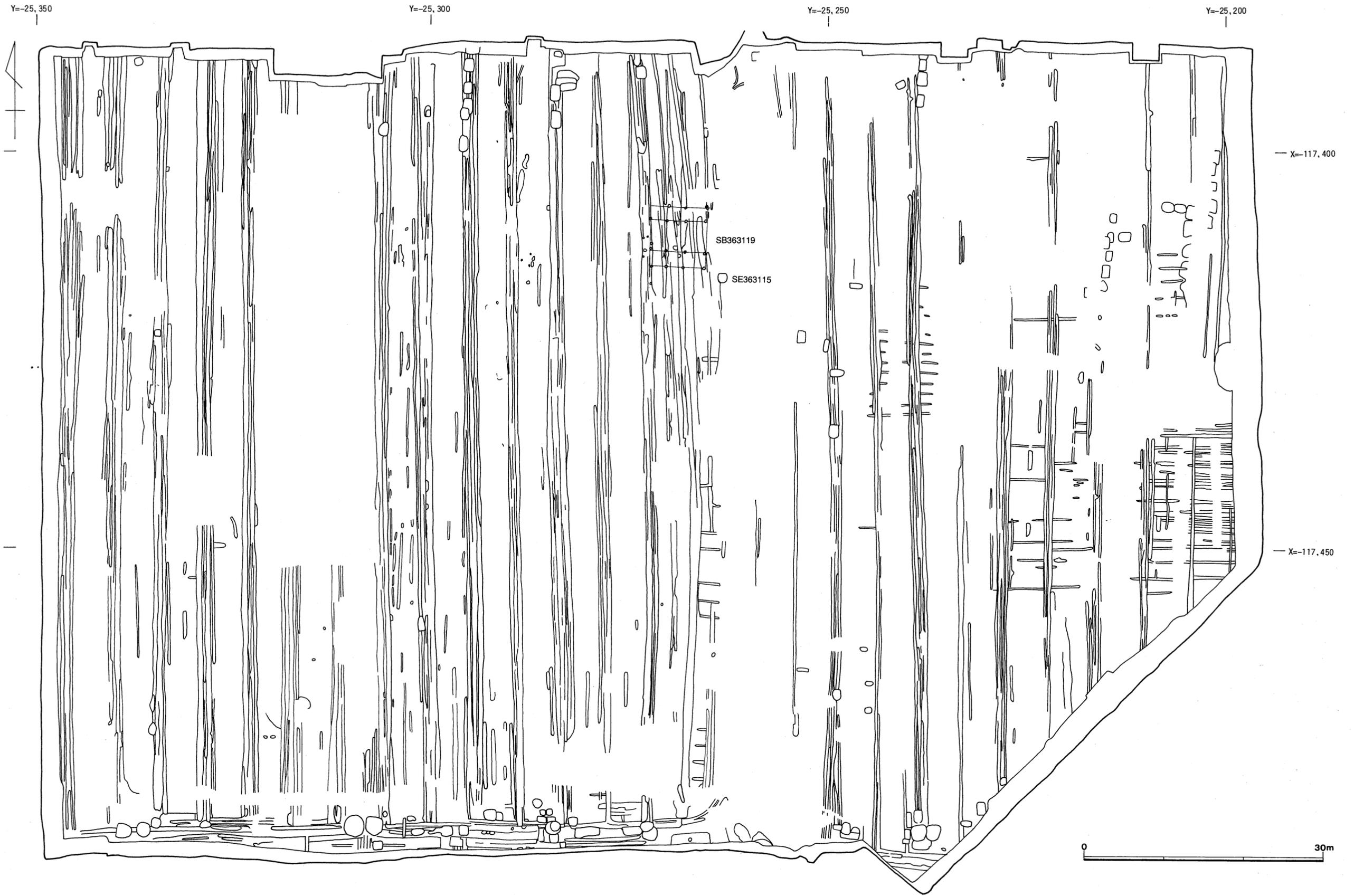
井戸 S E 363115 建物跡 S B 363119の東南約2.0mで検出した縦板組横棧止で、底部に曲物を置く井戸である。井戸の掘形は、直径1.2mの円形を呈し、深さ1.2mを測る。井戸底には直径48cm・高さ31cmの曲物が中央に設置されていた。曲物は厚さ5.0cmで、内面は板目に直交して約1cm間隔で刻まれており、さらに板目に斜行して線刻が追加され、あたかも斜格子状の文様を呈している。曲物の外側の上端と下端には幅8cm・厚さ0.5cmのたがが木釘、紐で結合されている。井戸側はほとんど抜き取られており、内法は不明である。残存する板材は長さ100cm・幅20cm・厚さ2cmを測る。

(竹井治雄)

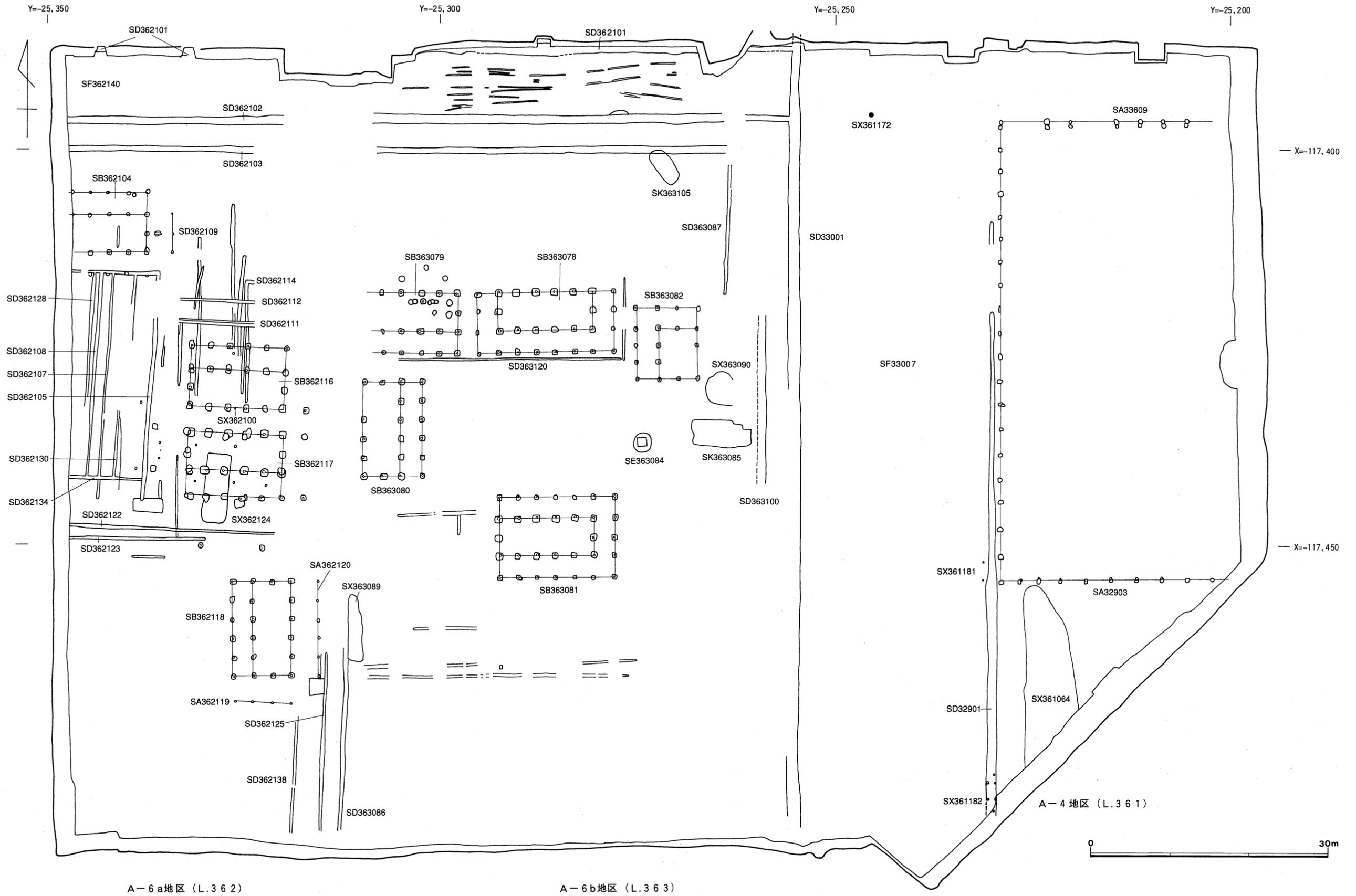
東西方向溝群(第22図) 四町の北半で検出した溝群で、東三坊大路の路面上にまで達しており、長岡京廃都後の畑の溝と考えられる。時期を決めるのは困難であるが、四町の南半分には溝が見られないことから、廃都後あまり経過しない平安時代初期のものと考えている。道路としての機能を失った直後の東三坊大路の土地利用を示す、興味深い遺構である。(中川和哉)



第21図 出土遺物実測図(1) 中世～平安時代
 1～6. 中世溝群 7・8. S E 363115
 1～5. 瓦器 6. 白磁 7. 土師器 8. 須恵器



第22図 遺構平面図(1) 中世~平安時代



第23図 遺構平面図(2) 長岡京期

(3)長岡京期(第23図)

①条坊関連遺構

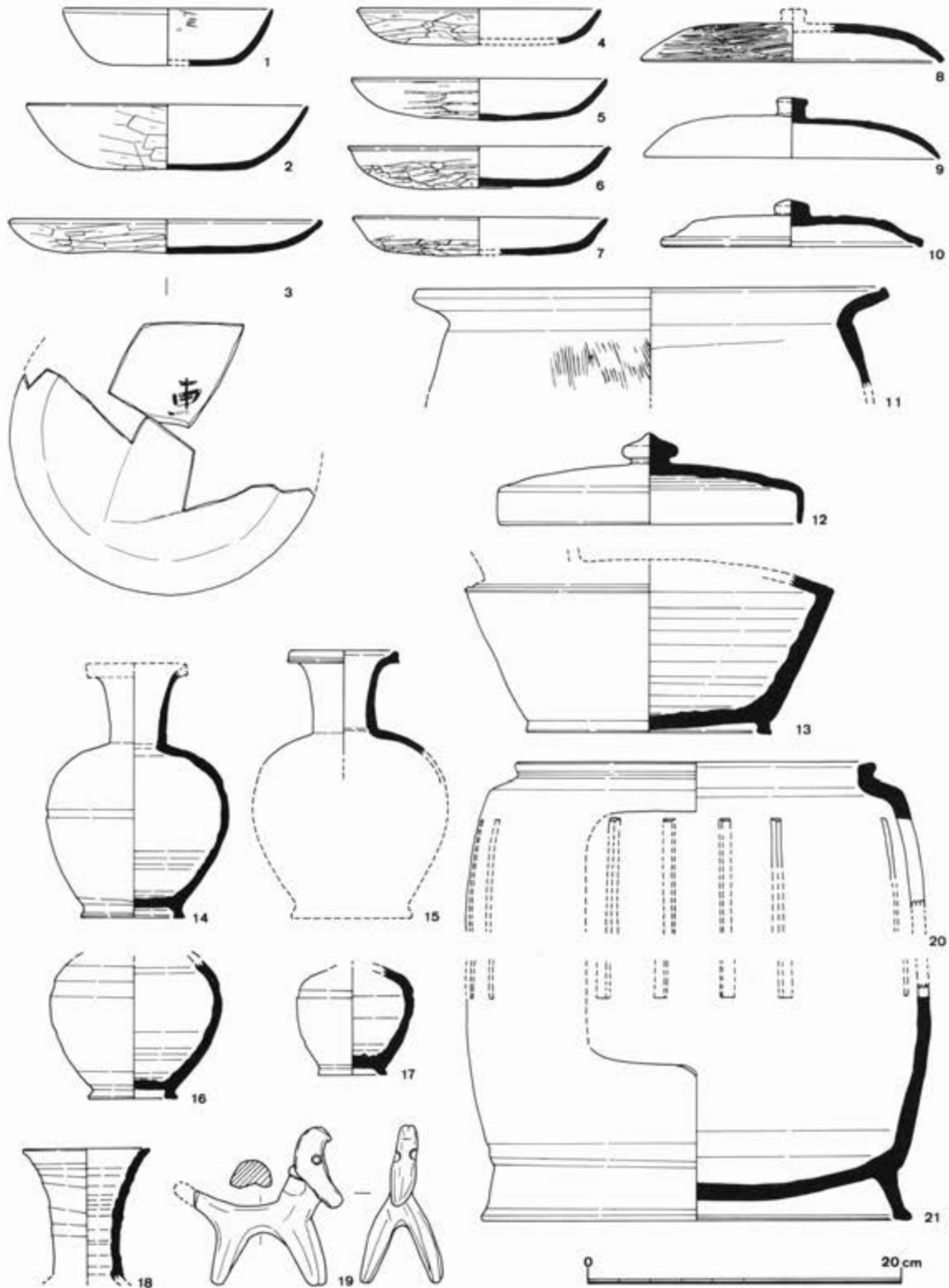
南一条第二小路北側溝 S D 362101(二条条間北小路北側溝) 調査地の北辺に沿って検出した東西方向の溝である。一部拡張を行って溝の断面形態とその規模を確認した。断面の形状は「U」字形を呈し、幅約1.65m・深さ約0.35mを測る。東三坊大路西側溝とは「T」字形に接合し、大路の路面上にはのびていない。溝内からは、緑釉の火舎をはじめとした各種の土器とともに瓢箪や桃の種子などが出土している。この土師器の中には「車」と墨書されたものがあった(第24図)。拡張を行って溝幅を確認したところでは、溝心の座標値は、 $X=-25,287.0 \cdot Y=-117,387.1$ である。

南一条第二小路南側溝 S D 362102(二条条間北小路南側溝) 北側溝の約8m南で検出した東西方向の溝である。調査地の西端から東三坊大路西側溝まで、途中攪乱のため検出できなかったが、総長89mにわたって検出した。北側溝と同じく、東三坊大路の西側溝と「T」字形に接続している。溝の断面形は浅い「U」字形を呈し、幅約1.2m・深さ約0.25mを測る。溝心の座標値は、調査地の西端部で $X=-117,396.25 \cdot Y=-25,347.20$ 、東三坊大路との接合部分で $X=-117,395.9 \cdot Y=-25,256.0$ である。

南一条第二小路路面 S F 362140(二条条間北小路路面) 南一条第二小路両側溝に区画された東西の道路面である。両側溝の心々間の距離は約9m、路面幅は約8mを測る。路面上では、両輪の幅1.55mの轍を検出している。この轍内には淡褐色砂質土が堆積しており、検出した轍で最も深いものは約10cmあった。

十三町宅地内北辺溝 S D 362103 南一条第二小路南側溝と2.9~2.95mの空閑地を隔てて、南側で検出した東西方向の溝である。南一条第二小路南側溝と同じく、調査地の西端から東三坊大路の西側溝付近までを検出したが、東三坊大路西側溝との接合部分は、遺構面が削平されて一段低くなっているために、検出できなかった。これは、溝の断面形が浅い「U」字形で深さ約0.15mと、南一条第二小路南側溝よりもかなり浅いためである。溝幅は約0.9mである。この溝は、後述の十三町宅地内東辺溝と同じく、十三町を画する条坊側溝から約3.0mを隔てて、宅地側に掘削されている。この一連の溝は、十三町の周囲に設けられた築地に伴う宅地内側の雨落ち溝と推測される。溝心の座標値は、調査地の西端で $X=-117,399.9 \cdot Y=-25,346.8$ 、東三坊大路との接合付近で $X=-117,399.85 \cdot Y=-25,363.8$ である。

十三町宅地内東辺溝 S D 363100 東三坊大路西側溝から2.8mの空閑地を隔てて、西側で検出した南北方向の溝である。現代道路の側溝や埋設管による攪乱のため、遺構の遺存状態が悪く、全体の規模は確認できなかった。S K 363085の東側を中心に、南北約22.5mにわたって、東肩のみが検出できた。断面形状は、台形状で、検出高は約10cmである。内部からは長岡京期の土器が出土した。溝 S D 362103と同じく、築地の雨落ち溝と推測される遺構である。昨年度に今回の調査区の南側で調査した左京第330次で検出した溝 S D 33005は、断面の形状が皿状であったので、この溝とは直接には繋がらないと判断される。東肩の座標値は、 $X=-117,430.0$ のとき、 $Y=-25,258.55$ である。



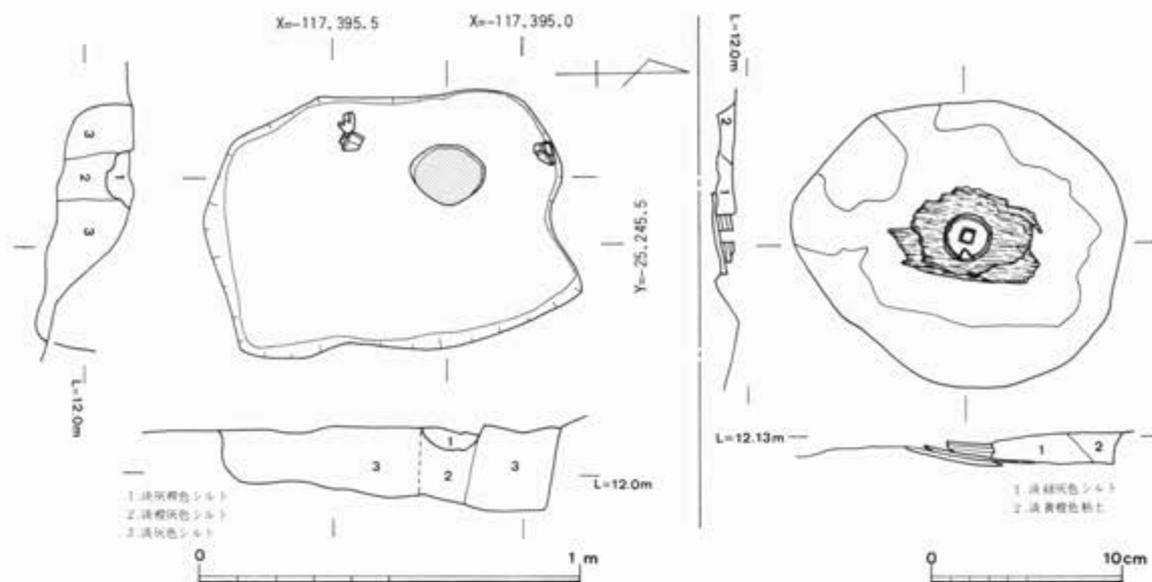
第24図 出土遺物実測図(2) 長岡京期

1・10・11・13~15・17. S D33001(東三坊大路西側溝)

2・16・21. S D32901(東三坊大路東側溝)

3・4・6~8・12・18・20. S D362101(南一条第二小路北側溝)

5・9・19. S D363100(南一条三坊十三町宅地内溝)



第25図 地鎮跡 S X361172実測図 長岡京期

東三坊大路西側溝 S D 33001 幅約1.5m・深さ約0.15mを測る断面が浅い皿状の溝である。調査地の北寄りでは、後世の削平を受けているため、北半では深さが数cmしか残っていない。溝心の座標は、北側でX=-117,390.0でY=-25,255.0、南側ではX=-117,480.0でY=-25,254.7である。溝の南端付近からは、瓦や土器類がまとまって出土した。

東三坊大路東側溝 S D 32901 東三坊大路西側溝の約23m東で検出した南北溝である。調査地北端の約18mは後世の削平によって検出できなかった。この溝は、四町の北半と南半で検出状況が変わっている。南半では、幅も深さも大きく、幅約1.3m・深さ約0.5mを測り、断面逆台形を呈しているのに対し、半町の地点より北では急に浅く狭くなり、断面も皿状になり規模も幅約0.9m・深さ約0.2mを測り、やがて削平のため北側で検出できなくなる。溝心での座標は、検出できた北端ではX=-117,421.0・Y=-25,230.2、南端ではX=-117,480.0・Y=-25,230.2である。溝内からは須恵器、土師器とともに緑釉の火舎が出土した。

東三坊大路路面 S F 33007 溝 S D 33001と溝 S D 32901で画される南北道路面である。両側溝の心々間の距離は約24.5mあまり、路面の幅は約23mを測る。西側溝付近では路面を改良するためと考えられる整地の跡が見られる。

地鎮跡 S X 361172(第25図) 東三坊大路の路面部の南一条第二小路南側溝の延長上に位置する方形の遺構である。近世以降の攪乱によって、上部を斜めに削平されている。内部からは木製の箱に納められたと考えられる銅銭が3枚出土した。銭名は、和同開珎、神功開寶で、残りの1枚は腐蝕のため、銭名は不明である。また、掘形内からは土師器が出土している。遺構の大きさは、東西方向の一辺が約90cm、南北方向が約60cmである。

(中川和哉・森島康雄)

②十三町宅地内検出遺構

掘立柱建物跡 S B 363081 十三町の東半部のほぼ中央で検出した掘立柱建物跡で、東西5間・南北2間の身舎に、南・北・東の3面に廂を持つ東西棟である。身舎の柱間は2.4m(8尺)の等間隔で、廂の出の柱間は2.7m(9尺)である。以上の計画的な配置と井戸がこの建物跡の北側にあることから、十三町の中の中心的な建物跡の一つと考えられる。廂の東南隅の柱穴の座標値は、 $X=-117,454.0 \cdot Y=-25,277.7$ で、身舎の北辺の中心座標値(身舎の三番目と四番目の柱穴の間)は $X=-117,446.65 \cdot Y=-25,286.6$ である。

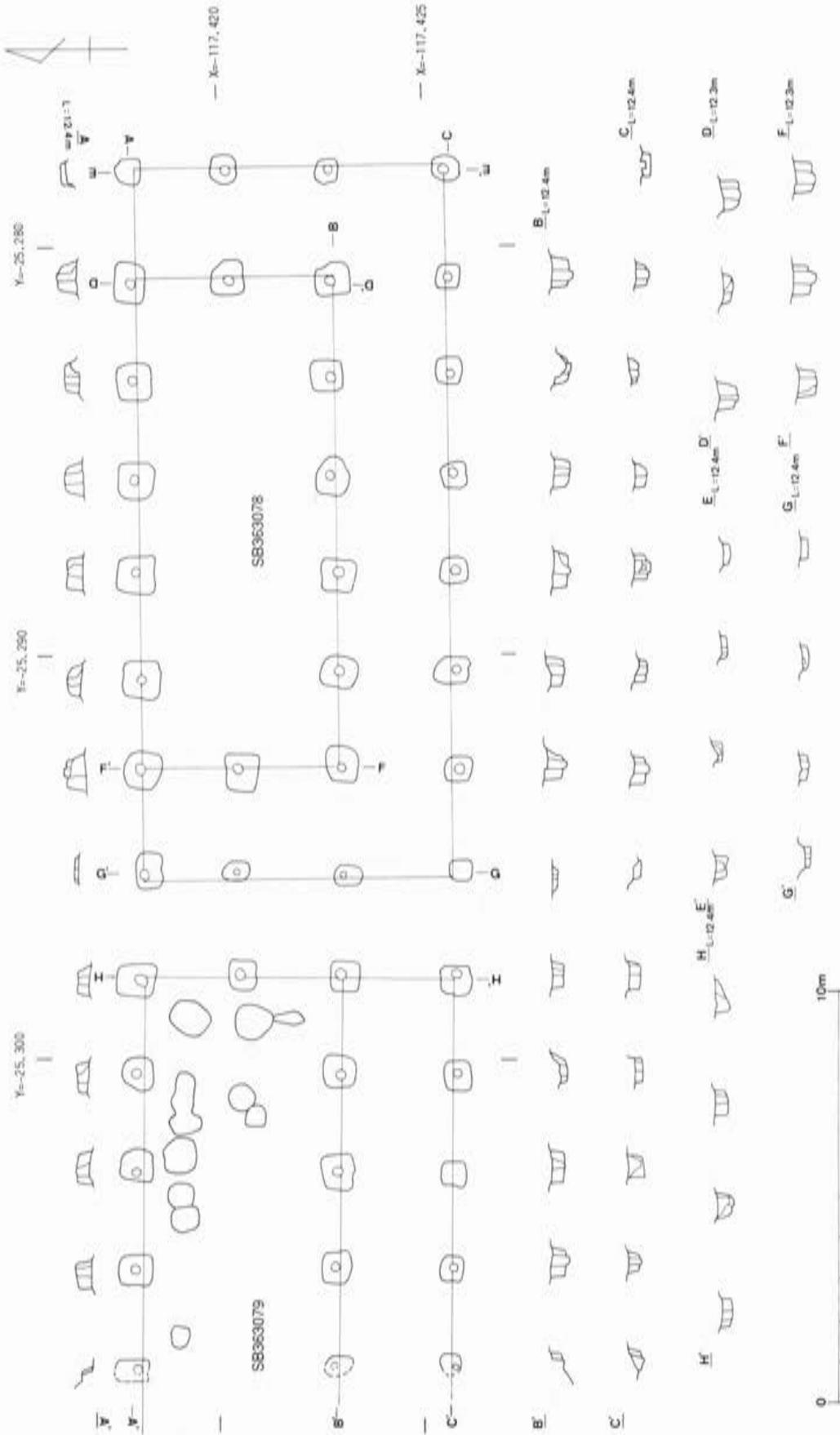
掘立柱建物跡 S B 363078(第26図) 掘立柱建物跡 S B 363081の北側で検出した建物跡で、建物跡 S B 363081と南北方向の柱筋がそろっている。東西5間・南北2間の身舎を持ち、東・西と南に廂を持つ東西方向の建物跡である。身舎の柱間は2.4m(8尺)の等間隔である。廂の出の柱間は基本的に2.7m(9尺)であるが、身舎から西に出る柱間だけは2.4m(8尺)で廂を造っている。廂の東南隅の柱穴の座標値は、 $X=-117,425.4 \cdot Y=-25,278.1$ で、身舎の北辺の中心座標値(身舎の三番目と四番目の柱穴の間)は $X=-117,417.8 \cdot Y=-25,286.85$ である。

掘立柱建物跡 S B 363079(第26図) 掘立柱建物跡 S B 363078の西側で検出した建物跡で、東西4間以上・南北2間の身舎に、南に廂を持つ東西棟である。身舎の柱間は2.4m(8尺)で、南側の廂の出は2.7m(9尺)を測る。東西の柱列は S B 363078と S B 363079とで微妙にずれている。西半は現代建物の基礎によって攪乱を受けているため、東西4間分しか確認できなかったが、十三町で検出した大多数の掘立柱建物跡が2間×5間の身舎を有していること、それらと同規模の柱間や柱穴を有していることから、この建物跡も5間であったと推定できる。この建物跡の身舎の中には、直径約0.9m・深さ約0.1mの丸底の土坑を10か所で検出している。これらの土坑は、甕を据え付けた穴と考えられ、何らかの貯蔵施設であったと推測される^(註4)。廂の東南隅の柱穴の座標値は、 $X=-117,425.65 \cdot Y=-25,297.85$ で、身舎の北東隅の柱穴の座標は $X=-117,418.25 \cdot Y=-25,297.9$ である。

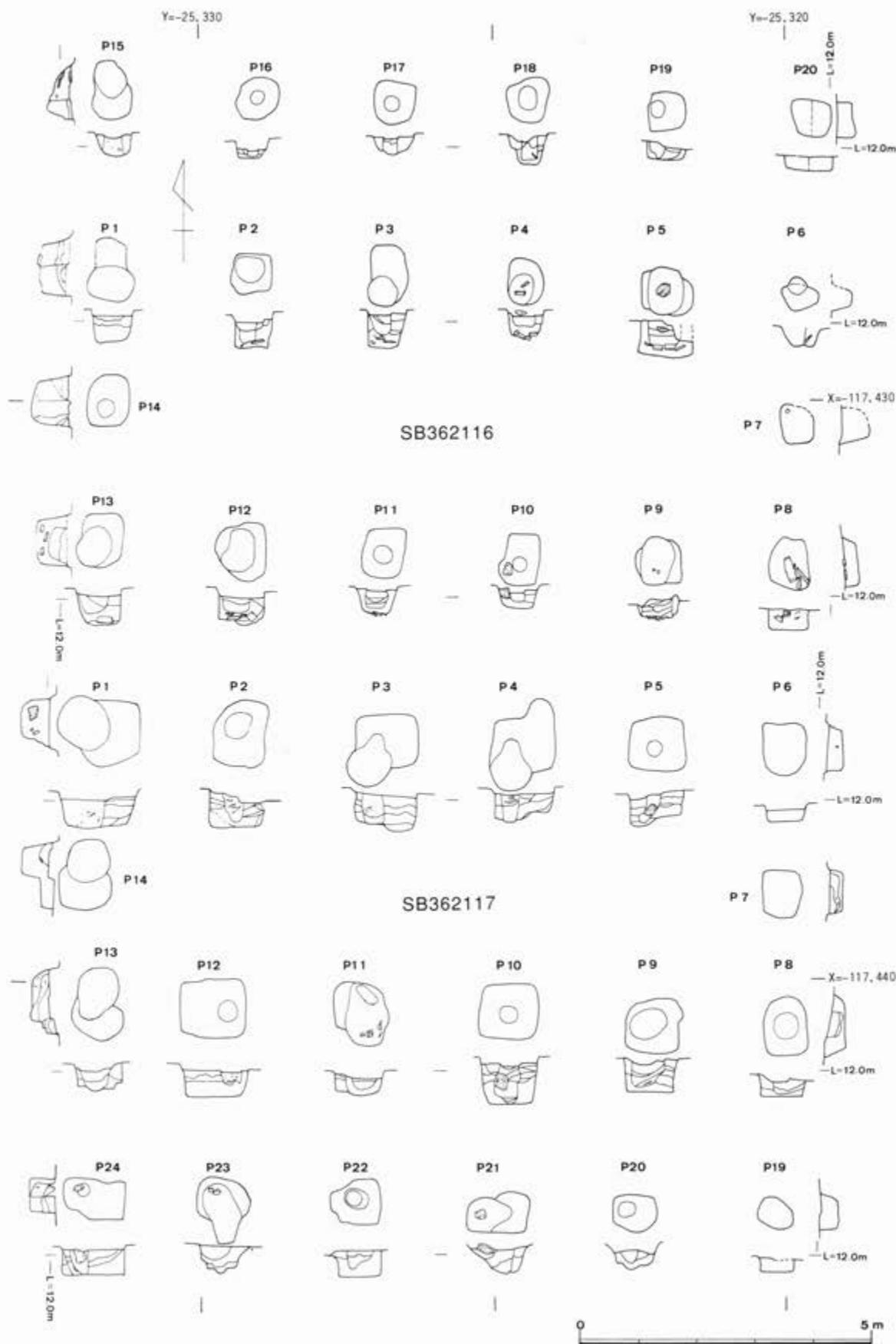
掘立柱建物跡 S B 363082 東西2間・南北3間の身舎に、北と西に廂を持つ南北棟である。身舎の柱間は2.4mで、廂の出は2.7mである。溝 S D 363120は、建物跡 S B 363082の北廂の出の位置のみが途切れており、これを建物跡 S B 363078と建物跡 S B 363082をつなぐ通路があったと考ええると、この北廂は「渡り廊下」として建物跡 S B 363078に通じていたと推定される。建物跡 S B 363078の東廂と建物跡 S B 363082の西廂との間の柱間は2.7mで、廂の出の長さに一致する。身舎の東南隅の柱穴の座標値は、 $X=-117,428.9 \cdot Y=-25,267.35$ で、西廂の南端の柱穴の座標は、 $X=-117,429.05 \cdot Y=-25,274.95$ である。

掘立柱建物跡 S B 363080 東西2間・南北5間の身舎で、東に廂を持つ南北棟である。身舎と廂の出の柱間は、他の建物跡と同様にそれぞれ2.4mと2.7mである。廂の東南隅の柱穴の座標値は、 $X=-117,441.2 \cdot Y=-25,302.1$ で、身舎の東南隅の柱穴の座標値は、 $X=-117,441.2 \cdot Y=-25,304.9$ である。

掘立柱建物跡 S B 362104 東西3間以上・南北2間の身舎に、南及び北に廂を持つ東西棟であ



第26図 掘立柱建物跡 S B 363078・S B 363079実測図 長岡京期

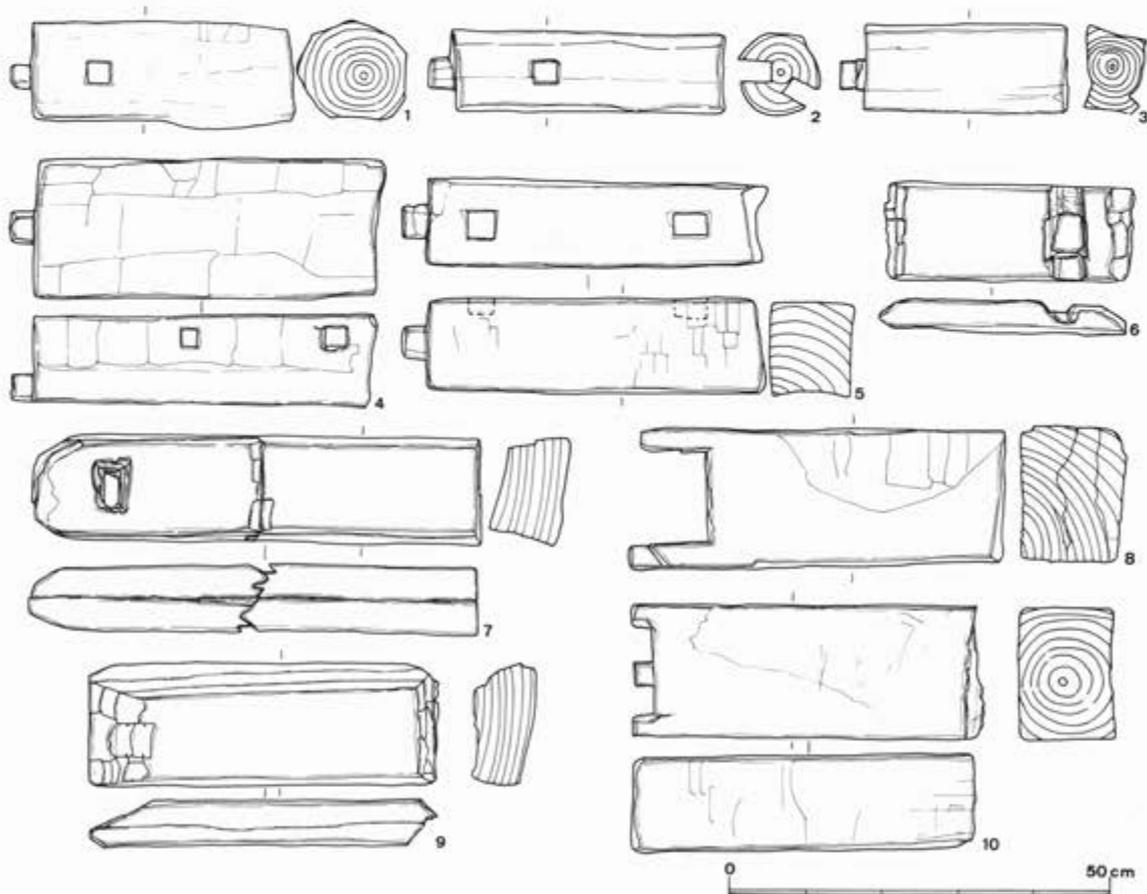


第27図 掘立柱建物跡S B362116・S B362117実測図 長岡京期

る。身舎の柱間は約2.4m(8尺)の等間隔で、身舎梁間東辺外側に独立した棟持柱柱穴が検出された。廂の出の柱間は約2.7m(9尺)を想定できるが、やや不揃いである。柱掘形は、身舎で一辺50~60cmの隅丸方形で柱の直径はおよそ15cmを測る。建物跡の東、3.3mほどに南北に一直線の直径15cmほどの3つの柱穴を検出した。東側の敷地に対して目隠しのための塀が施されている。北側廂の西端柱穴の座標値は、 $X=-117,405.31 \cdot Y=-25,346.74$ である。

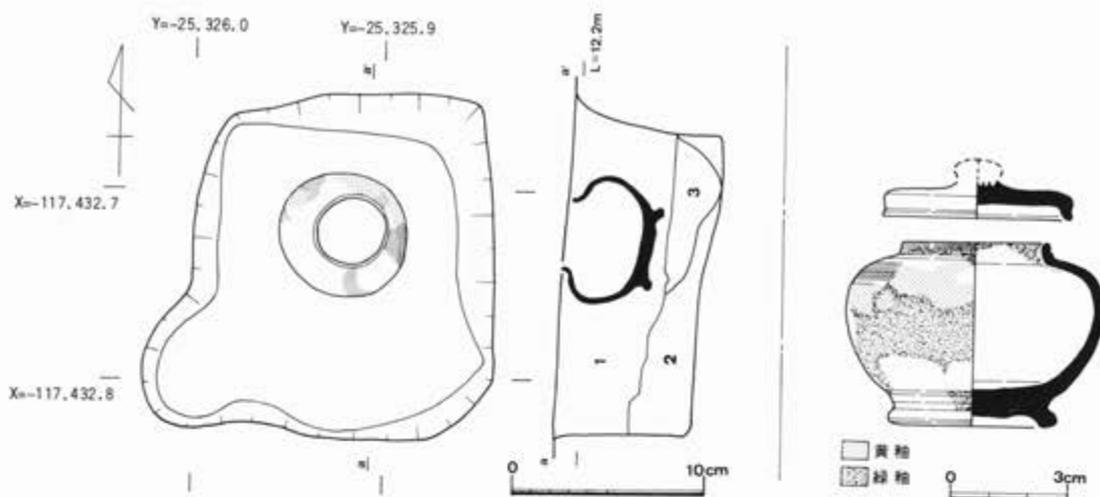
掘立柱建物跡 S B 362116(第27図) 東西5間・南北2間の身舎に、北に廂を持つ東西棟である。身舎の柱間は約2.4m(8尺)の等間隔で、廂の出の柱間は約3.0m(10尺)を測る。身舎の西辺中央の柱穴では、直径30cmの柱根を残していた。ほとんどの柱穴掘形で柱抜き取り痕を確認した。底面には建築部材の一部を分割した割板が遺存しており、礎板として使用された状況を示していた(第28図)。梁間柱筋が北側で2~2.5°ほど西に振る。北側廂の西端の柱穴の座標値は、 $X=-117,424.65 \cdot Y=-25,331.50$ である。

地鎮跡 S K 362100(第29図) 十三町の西よりに建てられた掘立柱建物跡 S B 362116に付設する小土坑である。身舎の南側柱列の中央部で検出した。15cm×17cmの小さな穴に、二彩釉の小壺を埋納したものである。小壺は、宝珠つまみをもつ蓋を持つ。遺構検出時に、原位置から移動したため実測図(第29図)には示していないが、小壺口縁部を塞いだ状態で出土した。中からは、ガラ



第28図 出土遺物実測図(3) S B 362116柱穴出土礎板 長岡京期

- 1.ピット5-6 2.ピット10-23 3.ピット1-1 4.ピット12-19 5.ピット12-30 6.ピット11-2
7.ピット4-1及びピット10-22・25・26(接合資料) 8.ピット14-3 9.ピット2-8 10.ピット1-2



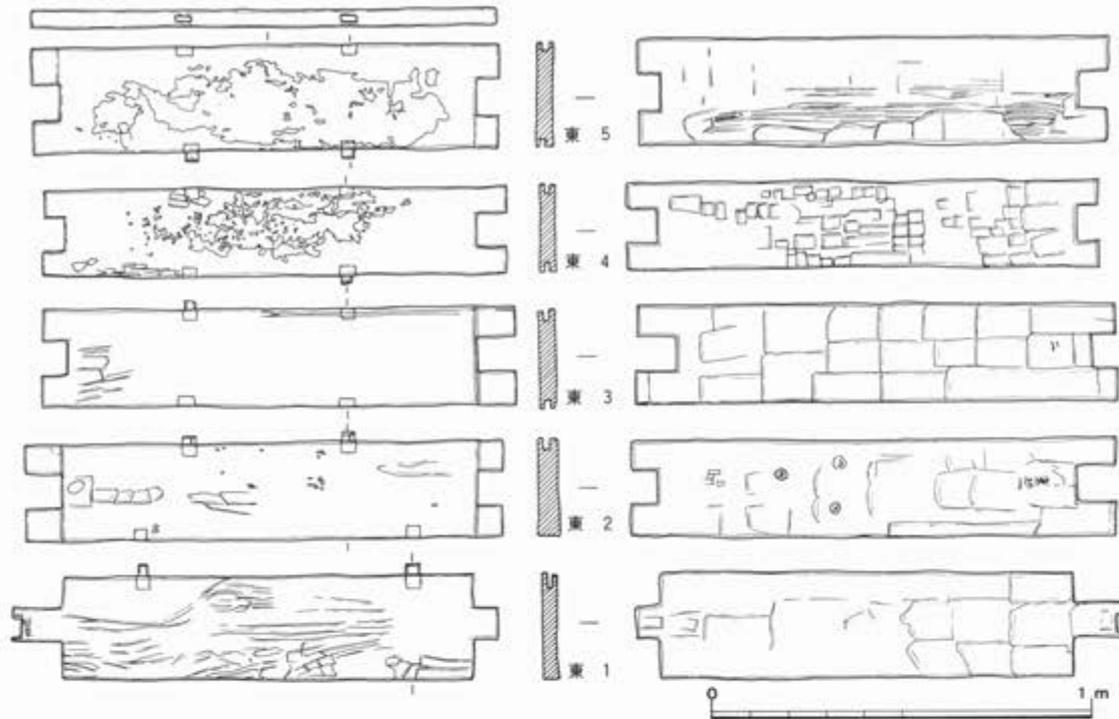
第29図 地鎮跡 S X362100実測図及び同出土二彩土器実測図 長岡京期

ス小玉10点が出土した。中心座標は $X=-117,432.728 \cdot Y=-25,325.924$ である。

掘立柱建物跡 S B 362117(第27図) S B 362116と柱筋をそろえて隣接する建物跡で、東西5間・南北2間の身舎に、南に廂を持つ東西棟である。身舎の柱間は約2.4m(8尺)の等間隔で、廂の出の柱間は約3.3m(11尺)を測る。すべての柱掘形に重複するように柱の抜き取り痕がみられたが、その抜き取り方向に統一性はない。柱の抜き取り痕掘形には、拳大の石や漆喰、檜皮が投棄されていた。S B 362117は、S B 362116と対になり、双堂として建てられた可能性が高い。南側のS B 362117のみ、白壁と檜皮葺きの屋根を持っていたと思われる。身舎の桁行北辺西端の柱穴の座標は、 $X=-117,435.52 \cdot Y=-25,332.00$ である。なお、建物跡内に直径30cm前後・深さ7.0~10.0cmの小規模な土坑を5つ検出し、東、西、南の三方向にS B 362117に付随すると思われる直径70~90cm前後の柱穴及び、同規模の土坑を6基検出した。つまり、東側には、建物跡梁間東辺の柱筋から1間分(2.7m)離れた、身舎北側の柱筋と廂柱筋に柱穴が2穴穿たれており、柱痕跡を確認した。西側にも建物跡梁間西辺から4.5mほど離れ、身舎の北側と南側の柱筋に、東側と同規模の土坑が穿たれるが、これには、柱痕跡は認められなかった。さらに、廂柱筋から南に6.4m離れ、建物跡梁間東辺と西辺からそれぞれ1間ずつ内側に入った柱筋にも柱穴が2穴穿たれていた。

掘立柱建物跡 S B 362118 東西2間・南北5間の身舎に、西に廂を持つ南北棟である。身舎の柱間は約2.4m(8尺)の等間隔で、廂の出の柱間は約2.7m(9尺)を測る。ただし、塀と考えられるS A 362120は、S B 362118東側の土間廂として付設された可能性も否めない。また、身舎の南側には、東西に4つの小規模な柱穴が並ぶS A 362119が検出されたが、S B 362118の梁間には平行せず、東側で南にわずかに振れている。のちに付設した塀と考えられる。西側廂の北端の柱穴の座標値は、 $X=-117,454.69 \cdot Y=-25,326.32$ である。

井戸 S E 363084(第30・31図・付表5) 掘立柱建物跡 S B 363081の北側で検出した横板井籠組の井戸である。上半の井戸側は抜き取られていたが、下から五段分の井戸側が残っていた。井戸側の内法は1.1m四方である。井戸側は、長さ約1.27m・幅約25cm・厚さ約3.0cmの板材の両端を



第30図 出土遺物実測図(4) 井戸S E 363084東辺横板 長岡京期(左：内面、右：外面)

凹凸に加工して組み合わせており、上下の板は、一辺に各2か所に柄穴を設けダボで接合している。井戸の掘形は、一辺約2.3mの隅丸の方形で、検出した深さは2.55mである。井戸底には厚さ60cmにわたって拳大の河原石(コンテナバッド16箱分)と木炭(同4箱分)を敷き詰めて、浄水機能を持たせている。井戸側の底からは、口縁部を打ち欠いた須恵器の壺が1点出土した。埋土中から、桃の種などの植物遺存体が出土した。

井戸側の外面(土で埋め戻される面)の両端には、「東北」、「西南」などの文字が記されているのが認められた。以下、下段から上段へ向けて1→5とすると、第30図と付表5のようになる。

これらは、井戸を組む際に、どの位置にどの部材を組むのかを記した符号と判断される。これには、“その板材をどの方角の面に用いるのか” についての情報は記されておらず、南2の東端の「東西」を除いてすべて、①その板材が最下段から何段目であるか、②その端をどちらの方向に向けるか、という内容が記されている。(一部には「どの面に用いるか」も記されている；東2・西1)。部材を組む位置を記しているため、少なくとも現地で板材を加工したのではなく、

付表5 井戸枠板外面墨書一覧

| 段 番号 | 東枠板 | | 西枠板 | | 南枠板 | | 北枠板 | |
|---------|-----|----|-----|-----|-----|----|-----|----|
| | 北辺 | 南辺 | 北辺 | 南辺 | 東辺 | 西辺 | 東辺 | 西辺 |
| 5 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 4 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 東□ | 不明 | 不明 | 不明 |
| 3 | 二 | 不明 | 不明 | 不明 | 東重二 | 不明 | 東三 | 不明 |
| 2 | 東北二 | 不明 | 不明 | 不明 | 東西 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 1 | 不明 | 不明 | 西□ | 西南一 | 東本 | 不明 | 不明 | 西一 |



第31図 井戸 S E 363084 枳板外面の墨書実測図(上)と刻印拓影(下)

某所から運搬されたと推測できる。また、「どの面に用いるか」を記していないので、運搬の際には、それぞれの面ごとに板材をひとまとめにして運搬したと推定される。

また、南3の東端の「東重二」は、最下段の上に「重ねる二枚目」と解釈でき、南1の東端の「東本」は「最下段(=本)の東側」と考えられる。さらに、西1の南端の「西南一」の上に「一」状の墨痕があるが、これは誤った文字を刀子状の工具で削った上に文字を記している。また、東2外面(第30・31図)などに「⊕」という刻印がなされている。

土坑 S K 363085 井戸の東約5.0mで検出した東西約7.8m・南北約3.8m・深さ約0.3mを測る長方形の土坑である。井戸に近接していることから、井戸に関連して利用された施設と考えられる。

土坑 S X 362124 東西約3.0m・南北約8.8m・深さ約0.2mを測る長方形の土坑である。S B 362117が建てられる前に埋め立てられていた。土坑の中には土師器・須恵器・瓦などが投棄されていたが、その量は多くはなかった。西辺は南側で西に約6°傾く。

土坑 S X 363089 建物跡 S B 362118の東で検出した東西約1.9m・南北約8.7mを測る隅丸の長方形の穴である。出土遺物としては、土師器・各種須恵器のほか、炭・焼土がある。

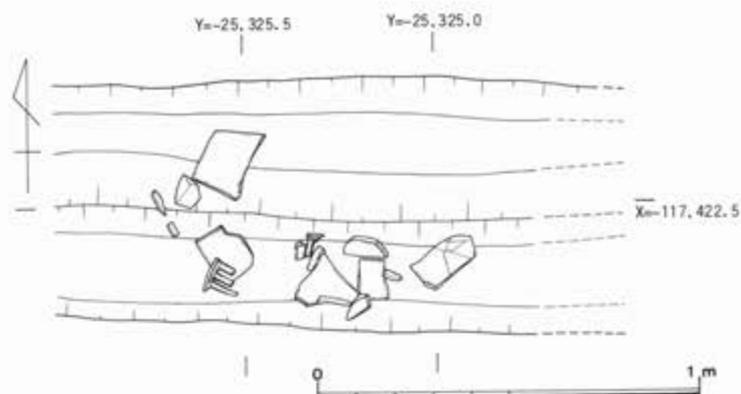
土坑 S K 363105 古墳時代の溝 S D 363116の上で検出した4.8m×2.3mの隅丸方形の土坑である。南一条第二小路南側溝 S D 362102に切り負けており、しかもその軸が下層の溝と同じく北西-南東を有している。焼土や炭が埋土に多く混じっていた。長岡京の条坊造営直前のものと考えられる。

土坑 S X 363090 S K 363085の北側で検出した土坑で、4.0m×4.2mの範囲にわたって多量の土器が出土した。土器は、中央部が最も低いレンズ状に堆積しており、その下面に炭が数cm堆積していた。

溝 S D 363120 建物跡 S B 363078・S B 363079の東辺と南辺に沿って「L」字形に検出した雨落ちと考えられる溝である。幅25~30cmで、検出高5.0cmである。廂の柱穴列より南に1.0m、東に1.3mの位置で検出した。先述のように、建物跡 S B 363078と建物跡 S B 363082の間が一部途切れている。コーナー部分の座標は、X=-117,426.50・Y=-25,276.75である。

溝 S D 362114 建物跡 S B 362116より古い時期に掘られた「L」字形に曲がる溝である。ほぼ真北を向いており、建物跡 S B 363078

～363082と同じ時期に作られたと考えられる。東側が現代の建物基礎の攪乱によって失われているが、西側の溝群(S D362105～108・128など)のように何本もの溝が掘られていたと考えられる。



第32図 溝 S D362111 遺物出土状況

溝 S D362111 N 及び 362111 S (第32図) 建物跡 S B362116 に平行する 2 本の溝

で、東西方向に掘削されている。北側の溝 S D362111 N は、建物跡 S B362116 の北側廂柱筋から約 3.0m (約 10 尺) 離れている。東から約 2° 南に傾いており、東側は現代建物の基礎の攪乱で失われている。

溝 S D362105～S D362108・S D362128～S D362130・S D362134 建物跡 S B362104 の南で検出した、東西 10m 以上・南北約 26m の範囲に掘られた溝群である。北側で東に約 4～4.5° 東に傾いている。検出面から 0.15m ほどの深さがあり、底面は平坦で、断面「コ」字状を呈する。S D362105 からは、黒色土器・土師器碗などが投棄された状態で出土した。

溝 S D362122 建物跡 S B362117 に平行する溝である。S B362117 の南側廂柱筋から 4.4～4.5m (約 15 尺) 離れており、東から約 2° 南に向いている。

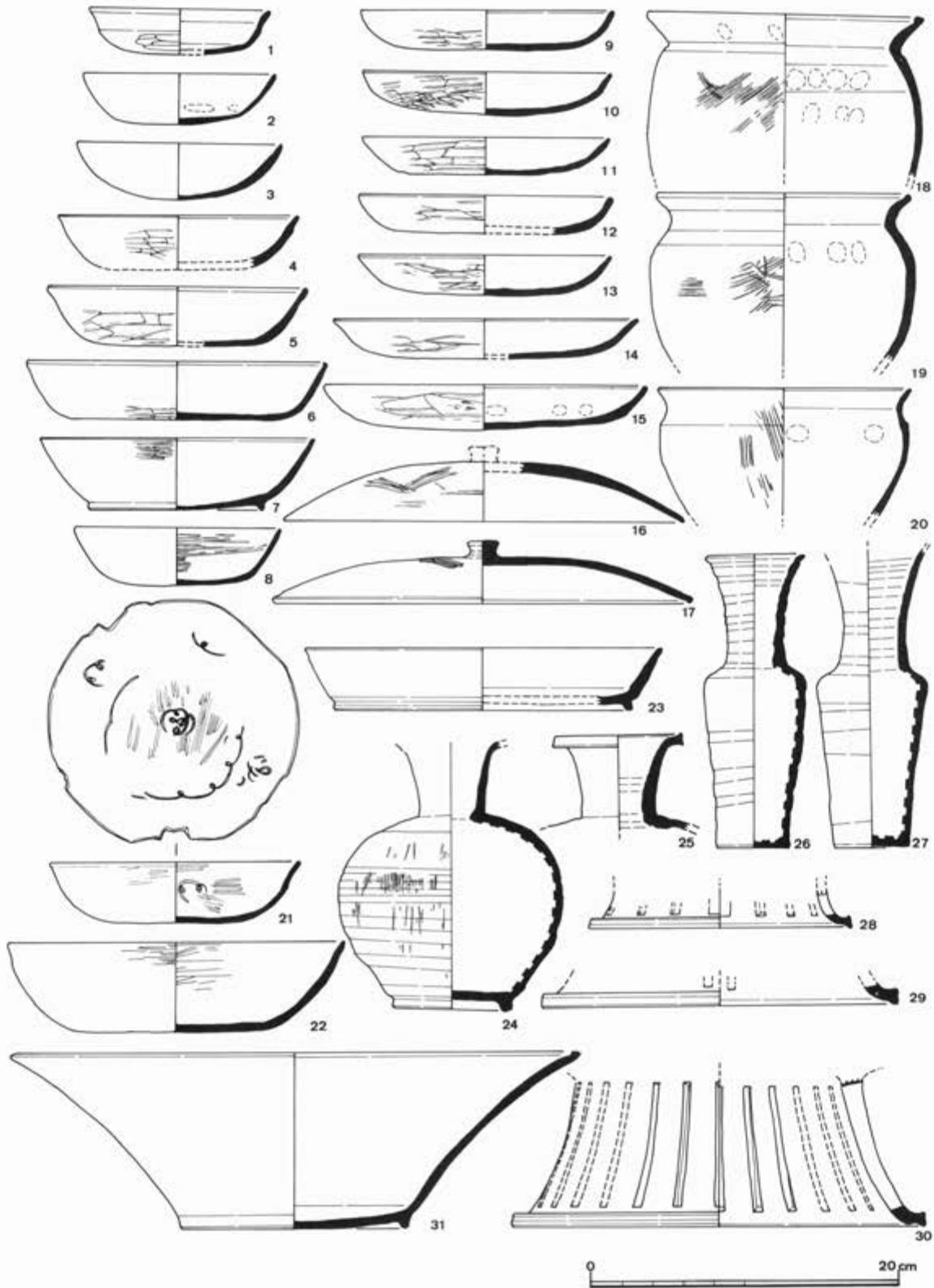
溝 S D362125・S D362138・S D363086 溝 S A362119 の南側で検出した 3 本の溝である。S D362125 及び S D362138 は北側で東に約 4° 振っている。S D363086 は中世南北溝の掘削のため、西側肩部のみ検出したため、幅・断面形状は不明である。東側の 2 本 (S D362125 と S D363086) は十三町の宅地を東西に二分する中心付近にあり、町内道路の区画溝と考えられる。東側の溝は、S X363089 の西辺と重なるが、中世溝の重複のため、その先後関係は確認できなかった。溝の心々は約 2.6m で、道幅約 2.0m である。

溝 S D363087 建物跡 S B363082 の北東部で検出した南北方向の溝で、北側は攪乱のため条坊関連遺構との接続関係は不明であるが、南端は急激に浅くなって終わる。断面「コ」字形をしており、幅約 0.4m で、検出高 0.1～0.15m で、総長 16.4m にわたって確認した。内部からは長岡京期の土器が多量に出土した。溝の南端の中心座標は、X=-117,410.00・Y=-25,263.75 である。

(竹井治雄・岩松 保・野島 永)

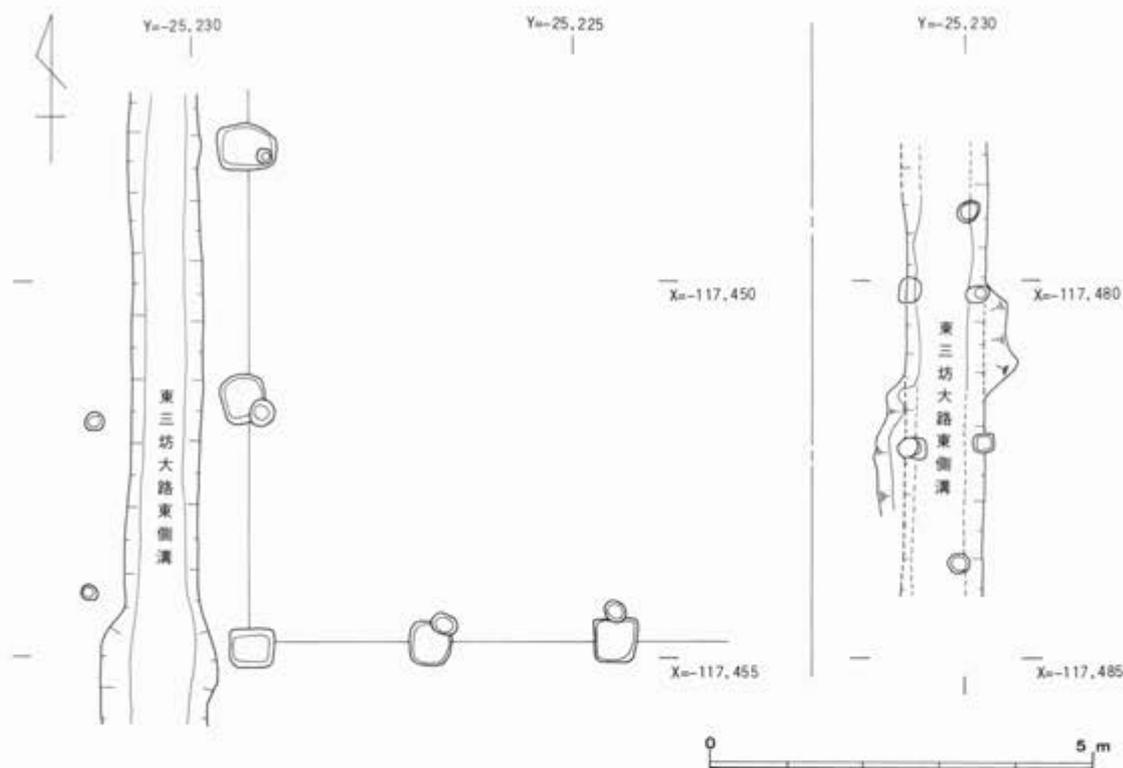
③ 四町宅地内検出遺構

堀 S A32903・33609 四町の北半分(半町)を区画する施設である。1 辺 40～60cm 程度の方形の掘形に直径約 10cm の柱を埋めている。柱穴の深さは南で深く、約 90cm を測る。北端では、後世の削平が激しく約 30cm しか残っていない。それぞれの柱間は、北辺では約 3m、西辺では約 2.8～3.5m のものまでばらである。



第33図 出土遺物実測図(5) 長岡京期

- | | | | |
|--------------------|-----------------------------|--------------------|---------------|
| 1. S D362134 | 2~4・15・27. S X362124 | 5・7・31. S X363090 | 6. S D362103 |
| 8. S B362118-ピット12 | 9・10・14・18・19・26. S X363090 | 11. S D362103 | |
| 12・13. S D362109 | 16・17・22・28・30. S D362105 | 20. S B362117 | 21. S B363079 |
| 23・29. 中世溝群 | 24. S E363084 | 25. S B362117-ピット4 | |



第34図 橋跡 S X 361181(左)・S X 361182(右)実測図

橋跡 S X 361181(第34図) 堀 S A 32903の西南のコーナーでは、東三坊大路の路面上に約2mの間隔で2基の小さな穴が掘られており、大路の東側溝を渡す橋のような施設(出入口か)があった可能性が考えられる。

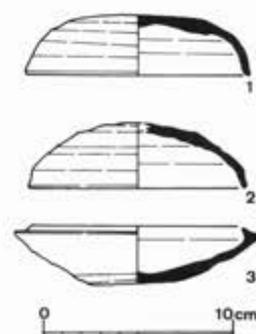
橋跡 S X 361182(第34図) 町は後述するように南北に1/2町に分かれており、その南側の宅地のさらに1/2に当たる部分で、橋の跡と考えられる柱穴が6個確認されている。

(中川和哉)

(4)古墳時代～飛鳥時代(第36図)

溝 S D 362201 調査地の中央を北西から南東に流れる溝で、約110mにわたって検出した。溝は幅2.5～4.5m・深さ約0.5mで、その中からは飛鳥時代の須恵器杯などが出土した(第35図)。溝の底では、ほぼ全域にわたって牛や人の足跡が見つかった。この溝は、水が流れた形跡があり、飛鳥時代の頃に埋没しはじめたと考えられる。

溝 S D 363104 調査地の中央部北端から南東方向(N-41°-W)に向かうやや蛇行した溝である。溝幅は0.8～1.2m・深さ0.1～0.2mを測る。断面は浅い皿状を呈し、堆積土は淡灰褐色泥砂である。出土遺物がないため、埋没時期の限定は難しいが、方形周溝墓 S D 361123・S D 362201より新しく、井戸 S E 363115や南一条第二小路南側溝 S D 362102より古



第35図 出土遺物
実測図(6)
飛鳥時代溝 S D 362201

いため、古墳時代のものと考えられる。A-4地区では、この延長線上に複数の溝があり、間に攪乱があるため、どの溝とつながるか確定できない。この南側では、昨年度に調査したA-2地区(左京第329次)のS D32908の延長部と推定される。

自然流路 S D 32909 北から南に流れる流路で、東に曲がって昨年度の調査区A-1に続く。出土遺物から古墳時代の川であったと考えられる。

(竹井治雄・岩松 保・中川和哉)

(5) 弥生時代(第36図)

環濠 S D 361168 北西から南東にやや弧を描いて横切るこの溝は、弥生時代の集落を囲んだ溝と考えられ、「V」字形の断面を示している。上部がS D32909に削られているために、幅約1.7m・深さ約0.7mしか残っていない。

環濠 S D 361162 環濠 S D 361168に平行するこの溝も「V」字形の断面を示す。濠は、幅約3.0m・深さ約1.2mを測る。溝の北端は、方形周溝墓 S D 361123の南東角に取り付く。溝は、しまりのよい礫層を掘り込んで造られているが、一部分断面が台形になるよう浅く掘られた部分があり、入口の施設があったと想定できる。出土遺物には、弥生時代中期の土器がある。

環濠 S D 361174 方形周溝墓 S D 361123の南東隅からはじまり、南東方向に向かう溝である。断面は、逆台形を呈し、検出面における幅は1.7m・深さは1.0mを測る。出土遺物には、時期を特定できるものはなかったが、方形周溝墓の屈曲部分から溝が始まっていることから、方形周溝墓の溝の掘削時か溝の埋没するまでに掘削されたと考えられる。

溝 S D 363121 左京第363次調査区中央部で、北北西から南東方向(N-38°-W)に蛇行する素掘り溝を約90m確認した。溝幅は30~50cmを測り、断面は逆台形を呈している。この溝は道路状遺構 S F 363109の西側に沿っているように見えるが、旧地形の影響を受けたようである。出土遺物がないので時期はよくわからないが、S F 363109の西辺に沿って掘削されている点を重視し、一応弥生時代としておきたい。

溝 S D 361176 環濠 S D 361160と環濠 S D 361174に囲まれた部分を弧状にめぐる溝である。断面形は、中央部が一段、深くなる形状を示している。

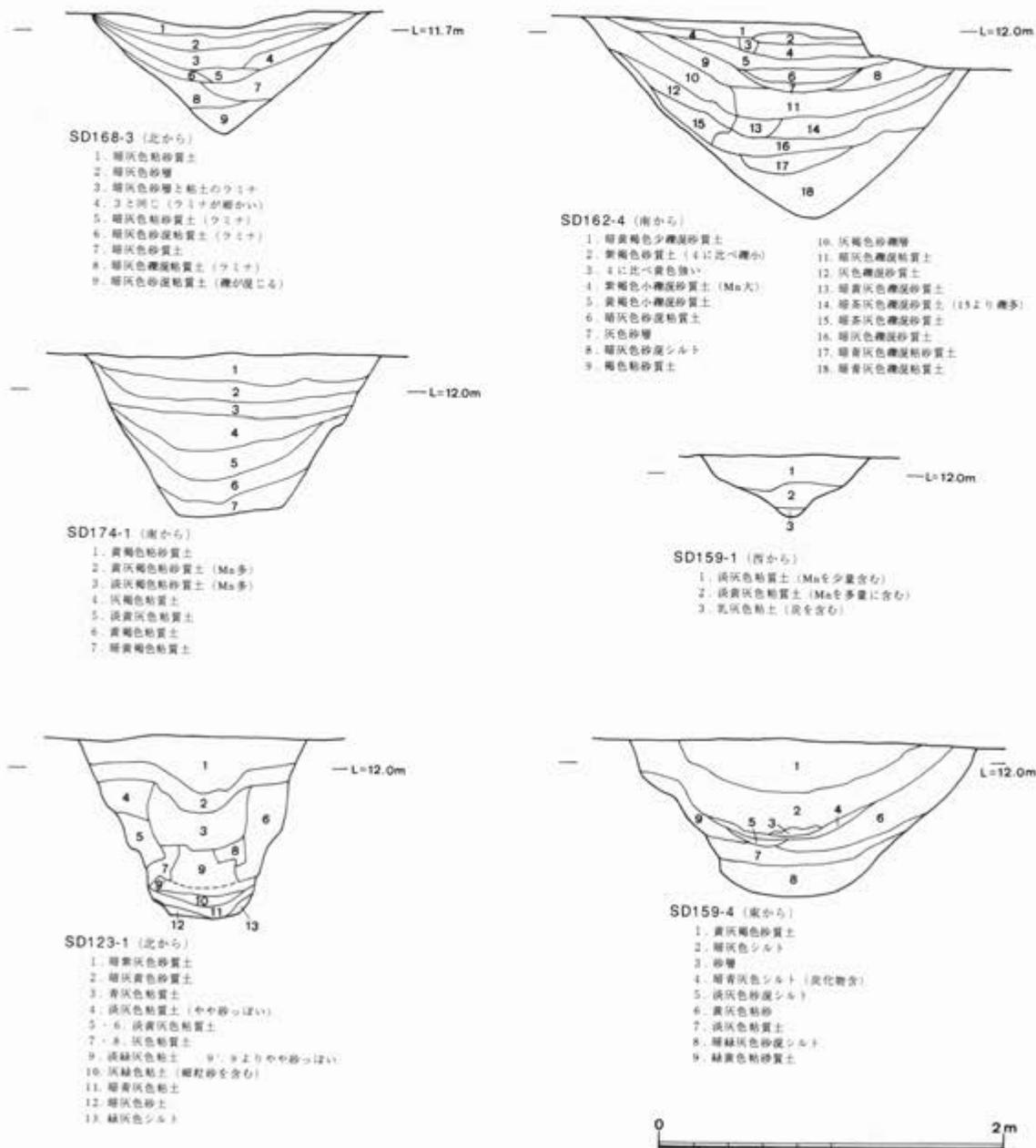
方形周溝墓 S D 361123・S X 363113 方形周溝墓群のうち、南端で検出した方形周溝墓で、唯一周溝が全周して検出できたものである。台状部は、南北約17m・東西約15mを測り、周溝の幅は1.5~1.8m・深さ0.75~1.0mである。周溝の断面形状は、北側周溝では、半円形状をなしており、西・南側周溝は逆台形を呈している。断面観察により、周溝墓 S X 363111の西辺溝と S X 363113は、それ以前にあった南北溝を再掘削して築造したと推測される。周溝を検出した面の台状部上には淡灰色粒混暗黄灰色土が堆積しており、この土層が周囲の「地山」と異なり、盛り土の可能性があった。そのため、この層を20cm程度掘り下げて除去し、主体部の検出に努めたが、明確な主体部は確認できなかった。また、淡灰色粒混暗黄灰色土層からは遺物は全く出土しなかった。それに対して、四周の溝のそれぞれ中央付近では、埋葬主体と考えられる遺構を検出して



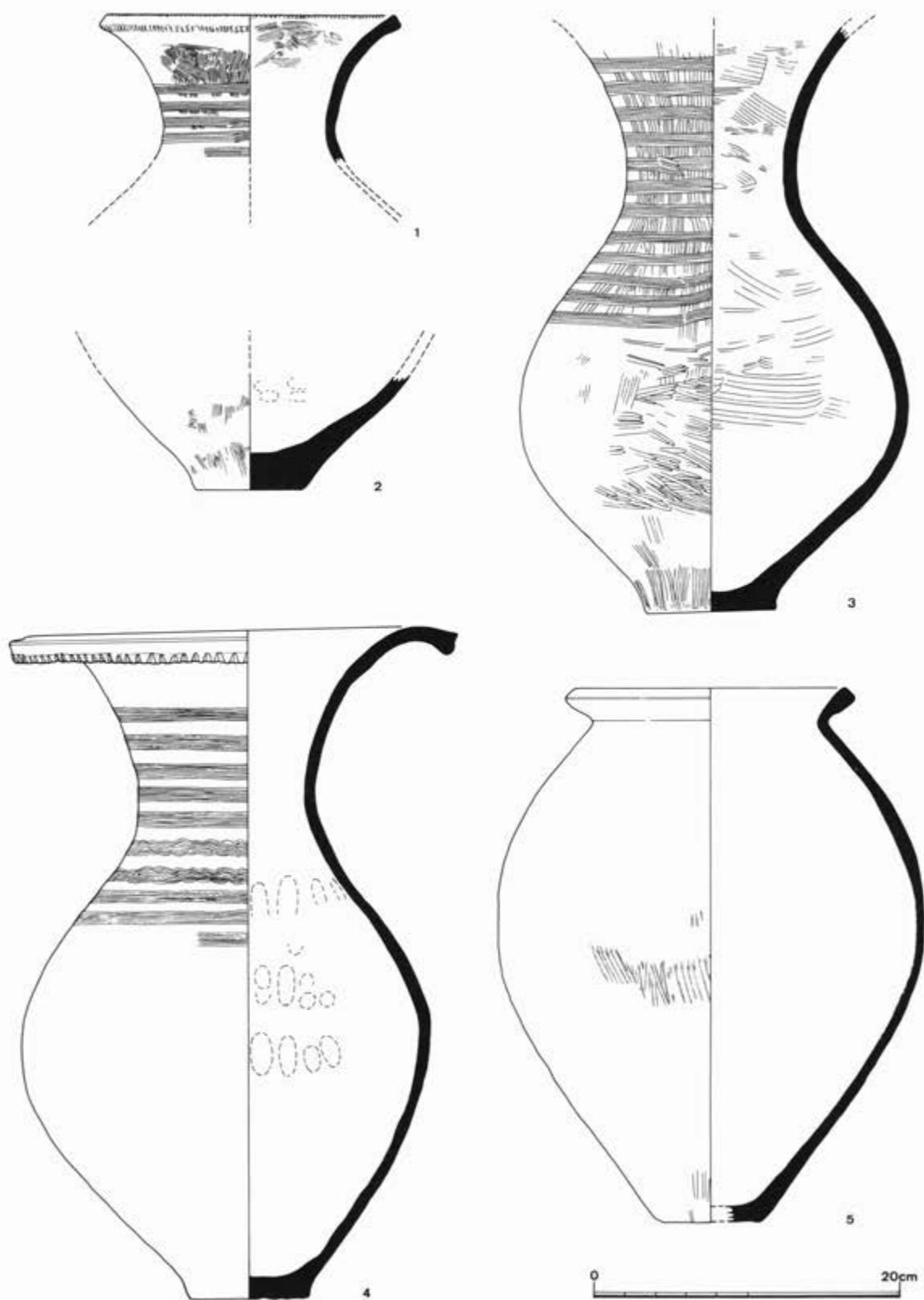
第36図 遺構平面図(3) 飛鳥~弥生時代

いる。周溝の西辺の溝底で検出した土坑は、長辺1.2m・短辺0.45mで、検出高0.25mである。方形周溝墓S X363111と西北コーナー部で重複しており、方形周溝墓S X363111に後出する。溝の南辺中央からやや西にかけての溝底付近からは、土器片が集中して出土したが、それ以外ではまったく出土していない。

方形周溝墓S X363111 西辺溝のみを検出したが、主体部などを確認できなかったため、方形周溝墓であるかどうかは不明である。一応、方形周溝墓として報告する。西溝は幅1.65m・検出高0.8~1.0m、断面逆台形を呈しており、約11mにわたって検出した。北端と南端は、それぞれ方形周溝墓S D361159-1~3・S D361161・S X363112、方形周溝墓S D361159-4~6の周溝によって切られている。溝内から遺物はほとんど出土しなかった。方形周溝墓S D361123と同じく、



第37図 環濠及び方形周溝墓群断面図



第38図 出土遺物実測図(7) 弥生時代 1
1・2. S X363113 3・5. S D361123 4. S X363113

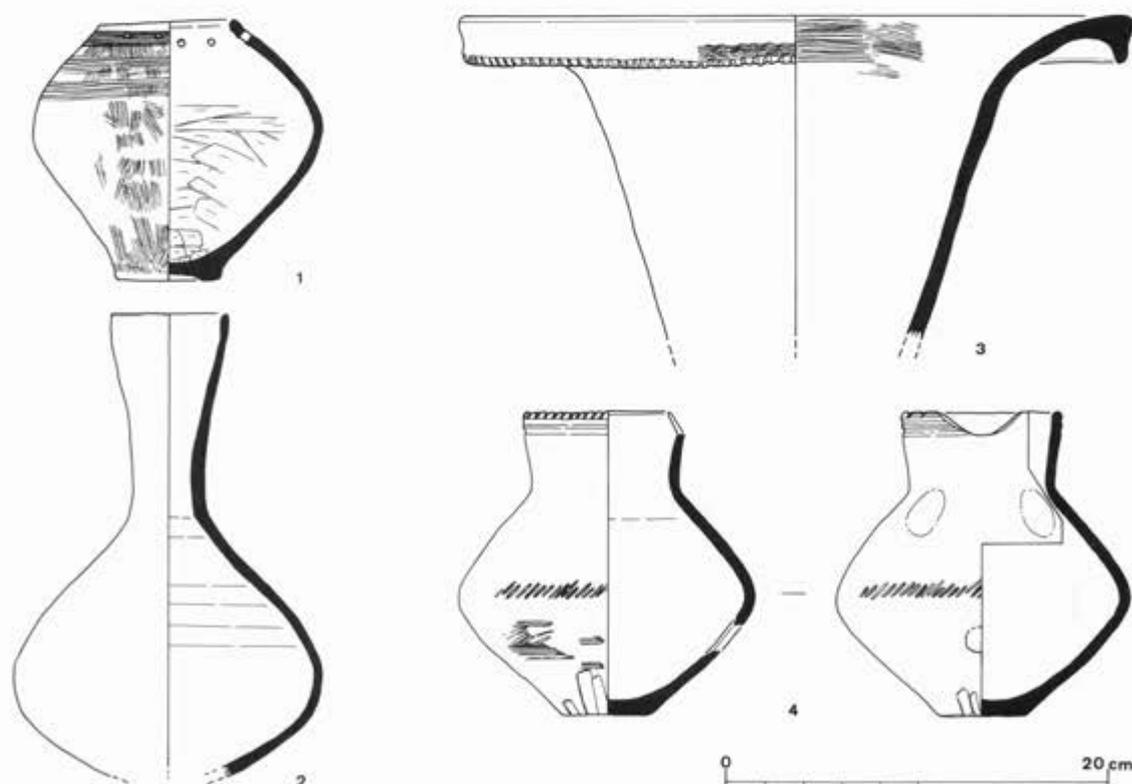
淡灰色粒混暗黄灰色土が台状部の西半で認められたので、盛り土の可能性を考え、これを除去して精査をしたが、明確な主体部は確認できなかった。また、その層中からの遺物の出土は認められなかった。

方形周溝墓 S D 361161・S D 361159-1~3・S X 363112 調査地の北端で検出した方形周溝墓で、北半部は調査地外にのびる。台状部は、東西約12m、南北は現存約8.0mで、溝幅約1.3m・深さ約0.5mである。溝の断面は「コ」字形を呈している。溝内から、遺物はほとんど出土しなかった。また、台状部及び周溝内では明確な主体部は確認できなかった。

方形周溝墓 S D 361159-4~6 東西約11mを測り、周囲の溝は幅約2.0m・深さ約0.7mで、北半部は調査地外にのびる。溝内からは遺物はほとんど出土せず、削平のために主体部を検出できなかった。

方形周溝墓 S D 361160 東西約13mを測り、周囲の溝は幅約2.2m・深さ約1.0mで、東側の溝は、近世以後の攪乱によって形状は不明である。遺物が少ないため、時期は確定できていない。また、主体部も検出できなかった。

東西に並ぶこれら3基の方形周溝墓は、西から東へと順に溝が掘られて切り合い関係を見せるが、断面の検討の結果、周溝墓の再掘削が認められ、また、切り合い関係は必ずしも築造年代を反映しないことがわかった。方形周溝墓 S D 361160の溝は、環濠 S D 361162が埋まったあとにも掘られている。



第39図 出土遺物実測図(8) 弥生時代2

1・3. S D 361159 2・4. S D 363117

方形周溝墓 S D 363106・S D 363117 上述の方形周溝墓群 S D 361123～S D 361160の西側で検出した二本の溝で、東側は現代の道路によって大きく削平されている。方形周溝墓群 S D 361123～S D 361160は、周溝の辺をほぼ東西、南北に向けて造られており、深くしっかりとした溝が四周にめぐっているが、この方形周溝墓 S D 363106・S D 363117では、周溝の辺が北で約45°西へ傾いていることや、周溝の深さが20～30cmと浅く、他の方形周溝墓と様相が異なっている。溝の内部から弥生土器が出土したことや、S D 363106・S D 363117を検出した近辺での弥生時代の遺構は方形周溝墓しかないこと、検出した二本の溝が平面的に「L」字形になっており、その接合部は浅くなって“途切れて”いることなどから、現時点では方形周溝墓の残欠と判断している。西辺の溝は、古墳時代の溝が重なっており、その幅はわからないが、南辺の溝は幅約2.0mで、断面皿状の形態を示している。溝に区画された方台部は、一辺約15m程度あったと推定される。

道路状遺構 S F 363108 溝 S D 362201より古い道路状遺構であり、畦畔としても機能していたと推定される。北で約37°の傾きをもって北西から南東方向にのびている。幅3.0m・高さ約0.3mが残っており、調査地の中央で二股に分れて、それぞれが直線的に走っている。S F 363108は、道幅2.45m・高さ0.3mを測る。北端では幅0.5mの側溝があった。道路状遺構の断面は台形で、堆積土は茶褐色粘質土、砂質土が混在し、人為的な盛り土と考えられる。盛り土下層には水田土壌がある。

道路状遺構 S F 363109 2.5～3.0m・高さ0.2～0.3mを測る。この道路状遺構の断面、堆積土は S F 363108と酷似しているが、下層には水田の痕跡は認められなかった。道路状遺構 S F 363108と S F 363109の新旧関係は平面的には確認できなかったが、上述の水田との関係から、S F 363109が先に土盛りされ、S F 363108が後に造りかえられたと思われる。

水田畦畔 調査地の西半部のほぼ全域で100区画を越える水田跡を検出した。水田は、それぞれ幅30～60cm・高さ20～30cm程度の畦によって区画されているが、一区画の面積には大小がある。平均面積は10.4㎡である。北で約30°西に傾きをもったやや大きめの畦は、2m前後の間隔で平行しており、これに直交する小さめの畦は不ぞろいに造られている。小さめの畦には、水口が設けられてる。耕作土内から出土した遺物はないが、その形や大きさ、周辺での遺構の分布状況から弥生時代の水田と思われる。

今回検出した水田は、八幡市内里八丁遺跡で検出された弥生時代後期の水田^(注6)や、京都市伏見区淀樋爪町の水垂遺跡で検出された古墳時代の水田^(注7)より、かなり小さく区画されている。

(竹井治雄・岩松 保・中川和哉・森島康雄)

4. ま と め

今回の調査は、東西約150m・南北約100mの範囲に及び、上層では条里型の遺構として、東西で坪境を越え、南北でもほぼ1坪の範囲を調査した。中層遺構として調査した長岡京跡については、左京南一条三坊十三町内で主要な遺構のほぼ全体像をつかむことができ、同南一条四坊四町では、北を占める1/2町の宅地割り^(注8)が明らかとなった。さらに、下層遺構の調査では、東土川遺

跡の縁辺部として周知されていたのにもかかわらず、弥生時代の集落を囲んでいたであろう環濠の検出や、その外縁で墓域としての方形周溝墓、生産遺構としての水田跡の検出という当初の予想を上回る調査成果を得ることができた。

これまでの周辺での調査結果も含め明らかとなった点を簡単にまとめると以下のとおりである。

(1)上層遺構

①調査地の北辺から南に約100mまでの範囲に南北方向の区画溝が約5m間隔で、3～5条の掘り替えを単位として掘られている。これらの溝幅5m単位の区画は、調査をした東西約150mの範囲に及び、南及び北辺部では、10mごとに小溝群と切り合いをもつ野井戸や土坑が新しい段階に掘削されている。近世以降と考えられる野井戸や土坑の掘削された幅は、当時から現在までの水田区画に対応して掘られていると考えられるが、13～14世紀の溝区画はさらに半分となる。これは、この一坪内での当時の耕作の単位を示していると考えられる。

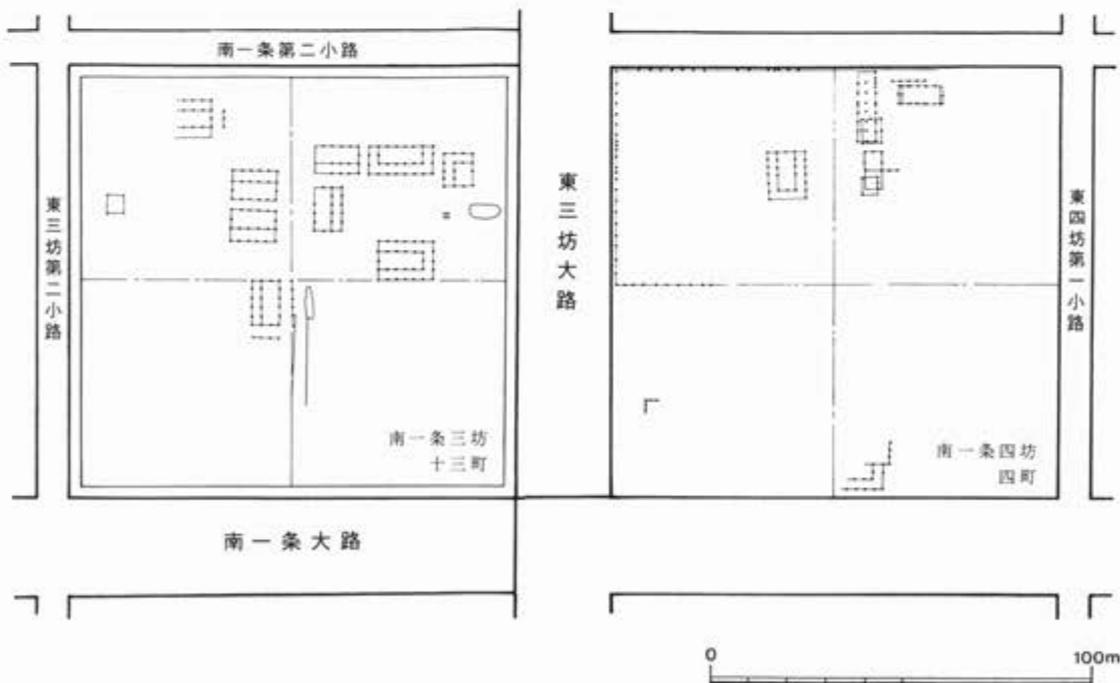
②南北溝の南端には坪境を示す東西溝が掘られている。そして、調査地の北端には、現在東西に水路が走っている。今回検出の東西溝は、この溝から約100mを測り、現在の地割りとも一致している。

③調査地の中央部東寄りでは、坪境の里道や水路が現在まで踏襲されている。この里道や水路はゆるやかに「S」字のカーブを描いており、調査で検出した溝もこの方向に平行している。

④これら東西・南北の溝群は、いずれも出土遺物から13・14世紀までさかのぼることが明らかとなった。

⑤平安時代の東西方向の溝群や、掘立柱建物跡、井戸を検出した。

これらの遺構群のうち東西方向の溝群は、平成5年度に調査した左京第329次調査、平成6年度に調査した左京第336次調査に次ぐもので、長岡京廃都後の土地利用を示している。



第40図 長岡京期建物配置模式図

(2) 中層遺構

- ①長岡京の左京南一条三坊十三町の宅地は、1町の区画で班給がなされていることが明らかになった。左京第139次調査^(注10)の成果も含め十三町は、築地によって区画される1町の班給を受けた土地と考えられる。現在までの調査では、宅地以外の用途を示す積極的な資料を得ていないため、現段階ではこの土地は宅地として班給されたと考えておきたい。1町の宅地班給約14,756㎡(約4,470坪)は、『続日本紀』の記載から推定すると、三位以上の高位の貴族になされている。
- ②十三町の宅地では、北東の4分の1に整然と建物跡が配置されている。建物跡S B 363081の南の辺は1町敷地の南北を2分する線にほぼ一致しており、建物跡S B 363078・363079の南の辺は同じく4分割する線にほぼ一致している。さらに、建物跡S B 363081・363078の2棟は、身舎の中軸線が1町敷地の東西を四分割する線にほぼ一致している。
- ③十三町宅地の東南の空間は空閑地(空き地)になっている。北側を建物跡S B 363081、西側を建物跡S B 362118、東を東三坊大路を画する築地によって囲まれる範囲は、建物や井戸などの構造物もなく、広場の様相を呈しており、前庭と考えられる。
- ④検出した建物群のうち、甕据え付け穴を伴った建物跡S B 363079は、特殊な機能を持った建物と考えられる。この建物跡の身舎の中の穴は、酒などを造った甕を据えた穴と考えられており、官衙・官衙関連遺跡・有力寺院の出先機関、または王臣家などの家政機関に伴うものと考えられている^(注11)。
- ⑤今回検出した井戸は、横板井籠組の構造である。長岡京では、長岡京期の井戸が報告されたもので110例以上あるが、横板井籠組の井戸は、今回で10例目になる。
- ⑥十三町の宅地の班給者を特定する史料は得られなかった。長岡京の営まれた、延暦3～13(784～794)年に三位以上の地位にいた貴族は、文献によると17名が明らかであるが、宅地の班給者の地位や、名前のわかるような文字資料は出土していない。
- ⑦四町では、北を占める1/2町の宅地が班給がされていることが明らかとなった。1/2町の宅地は、五位以上の貴族の宅地と想定される。また、大路に門を開けることができるのは、『延喜式』によると三位以上と考えられており、来年度予定される南一条大路を含む調査で、門の検出が期待される。

(3) 下層遺構

- ①調査地内を北西から南東に向かって流れる飛鳥時代及び古墳時代の溝を検出した。これらの遺構内からの出土遺物は少なく、飛鳥時代の溝内からは牛の足跡を検出していることなどから、周辺の土地利用として水田耕作などの生産地としての状況が想定される。
- ②調査地の北東で二重に掘られた弥生時代の環濠を検出した。環濠S D 361168・361162の東側では、平成6年度の左京第336次調査の際、弥生時代の集落を示す遺構が確認されており、環濠に囲まれた集落の存在が推定される。また、平成5年度に行った左京第304次調査^(注12)では弥生時代以前から流れていたと考えられる旧羽東師川の河道跡を検出しており、今回検出の環濠の時期にも並行して流れていたことが明らかになっている。両者の距離は約100mを測り、この幅の中に集

落の範囲を想定することができる。

③環濠の西側で方形周溝墓群を検出した。全体の規模のわかるものはS D361123のみであるが、その北側では、一辺を共有しながら連続して営まれた墓域の状況を見ることが出来る。これらの遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期に属する。

④方形周溝墓群の西側では水田跡を検出した。水田跡の時期は今のところ特定されていないが、少なくとも環濠S D361162や方形周溝墓S D361123は、弥生時代中期のものであり、水田も弥生時代の可能性が高いと思われる。

以上の調査成果は、調査者全員の調査中及び調査後の整理時の検討によって得られた。

(戸原和人)

注1 a 「長岡京跡左京第200次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

b 「長岡京跡左京第216・右京第343次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

c 「長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第47冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

d 「名神高速道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

e 「名神高速道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第57冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

f 「名神高速道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

g 「名神高速道路関係遺跡平成6年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

注2 調査中の現地指導をはじめ、検出した遺構の解釈などは、以下の方々に指導・助言を得た(敬称略)。宮本長二郎(東京国立文化財研究所)、浅川茂雄、町田 章、金子裕之、工楽善通、肥塚隆保、深澤芳樹(以上奈良国立文化財研究所)、堀内明博、百瀬正恒(以上京都市埋蔵文化財研究所)、山中 章(向日市埋蔵文化財センター)、清水みき(向日市埋蔵文化財事務所)、木村泰彦(長岡京市埋蔵文化財センター)、足利健亮、西山良平、藤沢 彰(以上京都大学)、川上 貢(当センター理事)、都出比呂志、福永伸哉(以上大阪大学)、井上満郎(京都産業大学)、藤田勝也(ノートルダム女子大学)。

注3 阿部達雄・石井祐子・伊勢由佳子・井上 綾・上野由香・尾崎高宏・太田明美・奥村茂輝・神賀明子・川端佐和子・木戸久美子・小島孝修・小谷加奈子・杉本厚典・武島良寛・戸谷邦隆・中瀬古友佳・羽生夕紀子・廣田紀子・深堀 茜・淵井孝泰・堀 躍子・松本健一郎・丸 悦子・宮本純二・森下恵美子・安井園絵・八津谷 都・吉沢 貴・脇村有美・明日礼子・荒川仁佳子・小澤和子・倉辻万里子・竹内千賀子・竹内友美・田村重野・内藤チエ・長尾美恵子・那須春美・西村敏子・長谷川マチ子・村上優美子・米澤裕子。

注4 木村泰彦「長岡京時代の生活と文化」(『長岡京市史 本文編』1 長岡京市役所) 1996
堀内明博「長岡京出土の特殊建物遺構に関する2・3の覚書—所請裏掘付穴付掘立柱建物の類型分析」(『長岡京古文化論叢』II 中山修一先生喜寿記念事業会 同朋舎) 1992

- 注5 文字の判読には、(財)向日市埋蔵文化財センターの山中 章氏、向日市埋蔵文化財事務所の清水みき氏の御協力を得た。
- 注6 竹原一彦「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注7 吉崎 伸・木下保明・上村和直「長岡京左京六条三坊・水垂遺跡」(『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1995
- 注8 注1-fによる。
- 注9 注1-gによる。
- 注10 久世康博・上村和直「長岡京左京一条三坊」(『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1988
- 注11 堀内注4文献による。
- 注12 左京第304次調査(名神京都工区A-2地区)注1-fによる。

3. 弓田遺跡第2次発掘調査概要

1. はじめに

この報告は、京都府相楽郡木津町大字市坂小字弓田・上大条に所在する弓田遺跡の発掘調査の概要を記したものである。この調査は、国道24号京奈道路建設に伴い、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受けて実施した。

弓田遺跡では、平成6年度に予定路線範囲の試掘調査を行った結果、弥生時代から奈良・平安時代に属する遺構・遺物が確認されたため、関係機関との協議により、国道24号に近接するA地区の発掘調査を実施した。この調査(第1次調査)では、弥生時代後期の溝跡群をはじめ、奈良～平安時代にかけての掘立柱建物跡2棟のほか、欄列跡・土坑・井戸などを検出した。また、わずかながら縄文時代晩期の土器片が出土し注目された^(注1)。

今回報告するB地区の調査(第2次調査)は、平成7年度に実施した。

調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美・同主任調査員引原茂治・同調査補佐員橋本 稔が担当した(係は当時)。

現地調査は、平成7年4月18日に着手し、同年11月22日まで実施した。調査面積は、約3,700㎡である。なお、今回の第2次調査では、多量の遺物が出土したため、出土遺物の整理及び概要報告の作成作業は、平成8年度に実施することになった。今回の現地調査及び整理に係わる経費は、建設省近畿地方建設局が負担した。

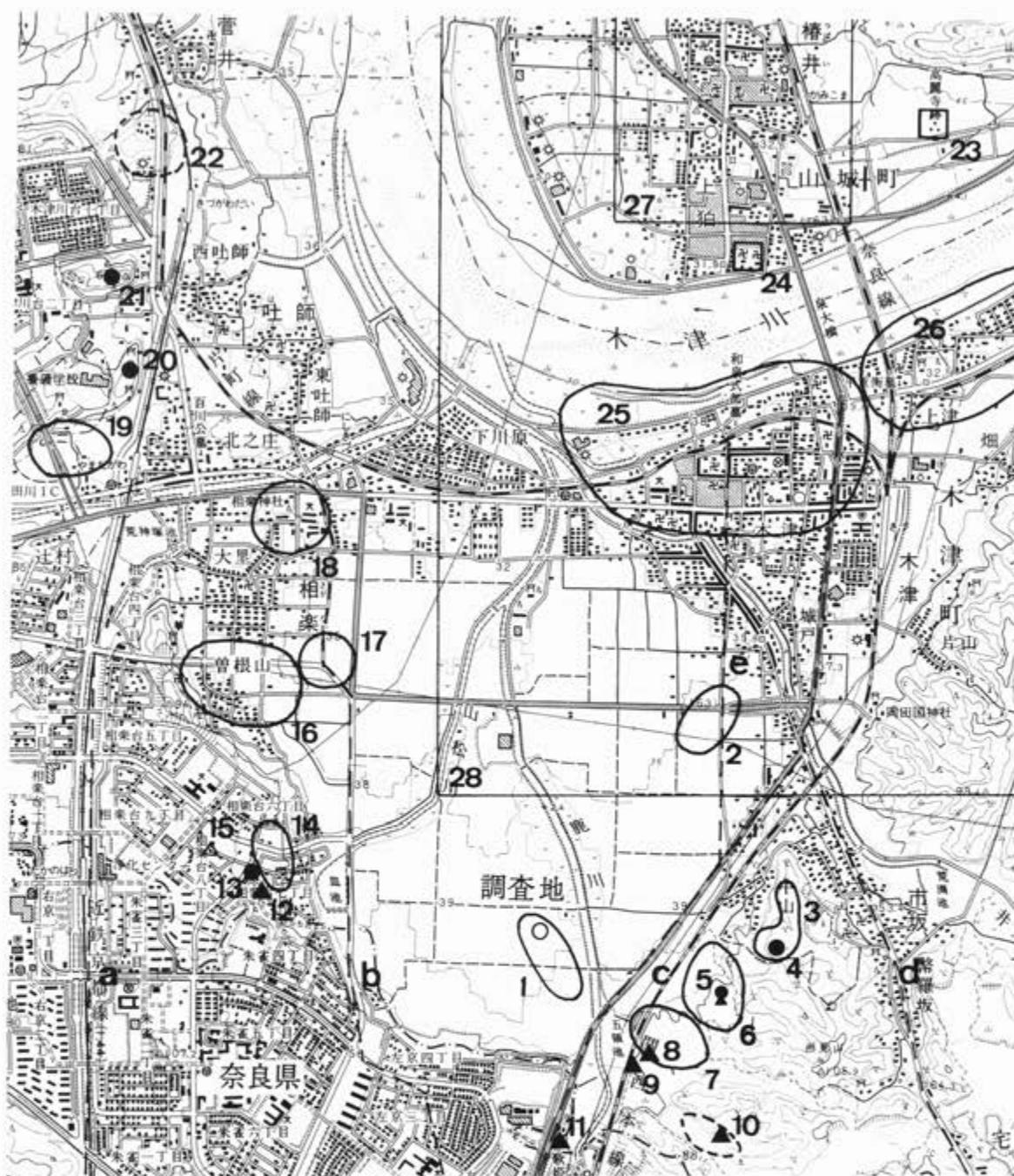
調査の実施にあたっては、木津町教育委員会をはじめ、関係諸機関及び学生諸氏、有志の方々の協力やご教示を得た^(注2)。また、鐘方正樹(奈良市埋蔵文化財調査センター)・高橋克壽(京都大学)・高橋美久二(滋賀県立大学)・和田晴吾(立命館大学)の諸先生方ほか、多くの方々から調査全般にわたって有益な助言をいただいた。それぞれのご厚意に感謝いたします。

(辻本和美)

2. 遺跡の立地と歴史的環境

弓田遺跡の所在する木津町は、京都府の南端部に位置し、奈良県と境を接する。弓田遺跡は、木津川の南岸に広がる沖積平野の一角に位置し、北方を除く東西と南側は、標高100m前後を最高所とする丘陵地形が取り囲んでいる。調査地のすぐ東側には、現在は小河川の鹿川が木津川に向かって北流する。微細な地形復原によると、弓田遺跡は、この鹿川の河川堆積によって形成された舌状の微高地上に立地することがわかる。

弓田遺跡の性格を考える上に参考となる周辺の遺跡に目を向けると、弥生時代には、西方丘陵に袈裟襷文式銅鐸の出土地として知られる相楽山遺跡と、その母村と考えられる大畠遺跡が立地

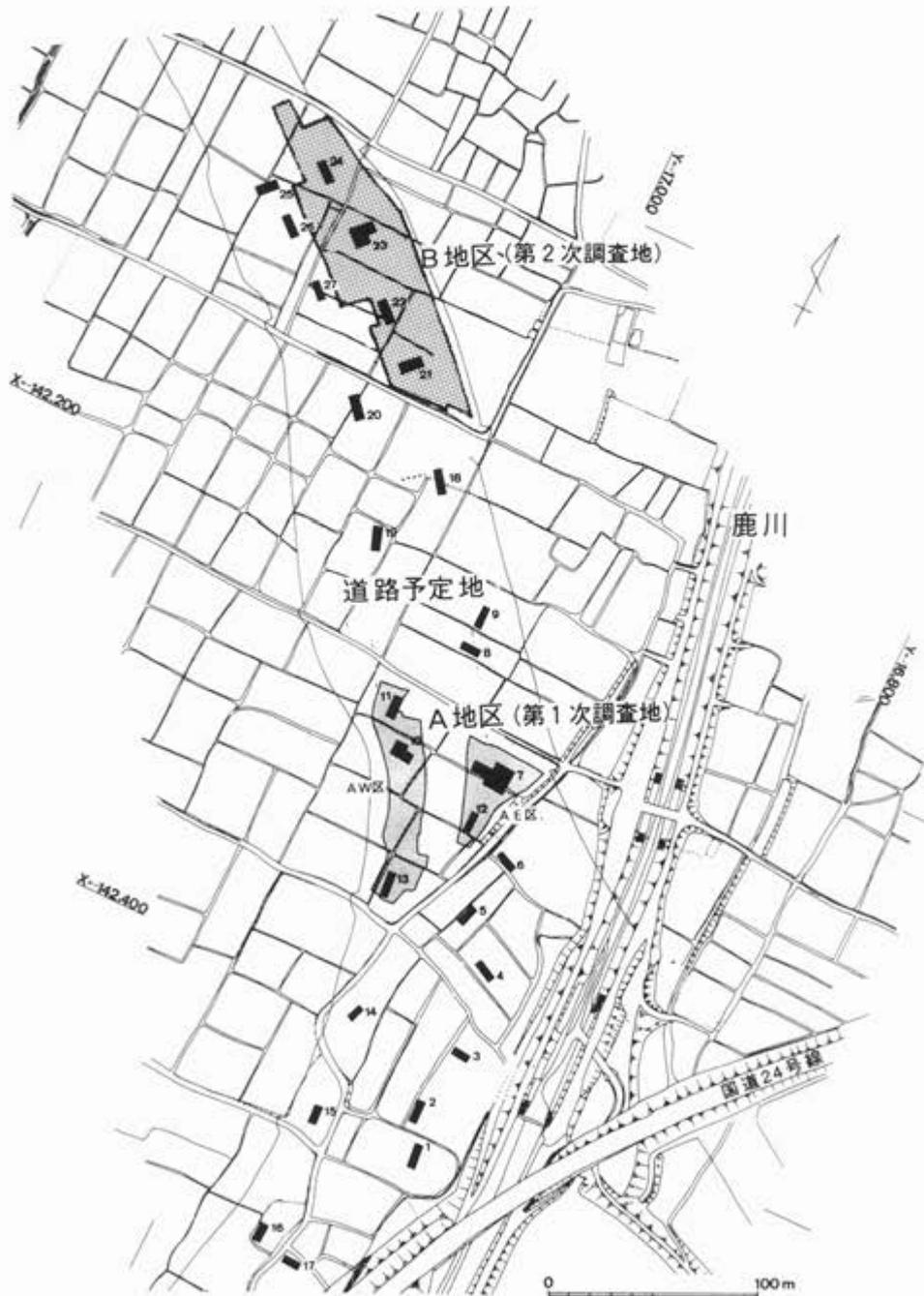


第41図 弓田遺跡周辺主要遺跡分布図(1/25,000 奈良)

- | | | |
|-----------------------------|--------------------|-------------------------|
| 1. 弓田遺跡(縄文～中世) | 2. 八後遺跡(奈良) | 3. 西山遺跡・古墓(古墳～奈良・平安) |
| 4. 西山塚古墳(古墳中期) | 5. 瓦谷1号墳(古墳前期) | 6. 瓦谷遺跡・古墳群・埴輪窯跡(古墳～中世) |
| 7. 上人ヶ平遺跡・古墳群・埴輪窯跡(弥生後期～奈良) | 8. 市坂瓦窯跡(奈良) | |
| 9. 五領池東瓦窯跡(奈良) | 10. 瀬後谷瓦窯跡(奈良) | 11. 歌姫瓦窯跡(奈良) |
| 12. 音如ヶ谷瓦窯跡(奈良) | 13. 音乗谷古墳(古墳後期) | 14. 大畠遺跡(弥生中期) |
| 15. 相楽銅鐸出土地(弥生中期) | 16. 曾根山遺跡(弥生後期～中世) | 17. 八ヶ坪遺跡(奈良) |
| 18. 相楽遺跡(古墳～奈良) | 19. 樋ノ口遺跡(奈良) | 20. 白山古墳(古墳後期) |
| 21. 坊谷古墳(古墳後期) | 22. 吐師七ツ塚(古墳中期) | 23. 高麗寺跡(飛鳥) |
| 24. 泉橋寺跡(奈良) | 25. 木津遺跡(奈良) | 26. 上津遺跡(奈良～平安) |
| 27. 山城国府推定域(奈良) | 28. 恭仁京跡右京推定域(奈良) | |
- 古道(a. 渋谷越え b. 歌姫街道 c. コナベ越え(車道) d. 奈良坂越え(奈良街道) e. 作り道)

する。また、木津東部の木津川を望む丘陵地には、方形周溝墓群を伴う燈籠寺遺跡や赤ヶ平遺跡・上人ヶ平遺跡などが分布する。続く古墳時代前期には、木津川が山城盆地へ流出する地点に椿井大塚山古墳が築造され、副葬された多量の銅鏡群を通して他地域との広範な交流がうかがわれる。

古墳時代前・中期にかけての時期には、平城山丘陵の奈良側南斜面に、大規模な前方後円墳で構成される佐紀盾並古墳群が造営され、木津川流域をも含めた強大な勢力圏の存在が想定される。木津町域では、弓田遺跡とは至近距離にある木津町東部の丘陵地に、4世紀後半の前方後円墳で



第42図 調査地位置図

ある瓦谷1号墳(全長約48m)が築造され、以後、中期から後期前半にかけて、西山塚古墳(円墳・径約26m)や上人ヶ平古墳群などに代表される中小規模の古墳が順次築造されていく。上人ヶ平古墳群では、円墳を取り囲むように小型方墳が配置され、墳丘は削平を受けているものの、周濠内から円筒・形象などの埴輪類が多量に出土した^(註3)。同じ丘陵地には、瓦谷・上人ヶ平の2か所の埴輪窯跡群が存在し、埴輪の生産場所と供給先とが判明する良好な事例となっている。一方、古墳時代後期には、古墳の築造数が著しく減少するが、これについては、墓域の移動なども含め、今後の課題として残されている。

奈良盆地は、言うまでもなく古代には歴代の都城が営まれた地であり、物資運搬や交易の中継地として、木津の地域は、重要な位置を占める。平城山丘陵の南側斜面に平城京が営まれた奈良時代には、平城京の外港が所在した木津川流域とを結ぶ幾筋かの交通路が、平城山丘陵の狭隘な谷筋を利用して通じていた。また、都の後背地として宮の施設や官寺の屋根瓦を焼く瓦窯が木津町周辺の丘陵地に数多く構築される。昭和59年度から5か年をかけて当調査研究センターが発掘調査を行った上人ヶ平遺跡では、平城宮大膳職の造営に係わる大規模な瓦工房跡がみついている。同じ丘陵の斜面には、市坂瓦窯が築かれており、奈良時代の造瓦所の具体像を知ることができる^(註4)。また、木津町南部の平野部には、条里地割りが遺存しており、木津川を挟んだ山城町の一部を含め恭仁京の右京域に想定されている^(註5)。

(辻本和美)

3. 検出遺構

平成6年度の試掘の成果を受けて、B地区の調査を実施した。現耕作面の直下で、A地区と同じく、中・近世の耕作にかかわる素掘り溝を確認した。しかし、部分的な断ち割りによって、下層で多量の土器とともに埴輪を含む遺物包含層を確認したため、その下層面の調査に主力を注いだ。遺構は、すべて旧鹿川の氾濫によって堆積した青灰色シルト層で検出した。検出遺構としては、トレンチ北部では古墳時代中期末から後期前半にかけての集落と、それを取りまく溝、流路、土坑などがあり、それらの遺構からは土器以外に埴輪が多量に出土した。南部では奈良時代の掘立柱建物跡1棟と井戸跡1基を検出した。以下、古墳時代の遺構から順に説明する。

(1)古墳時代の遺構

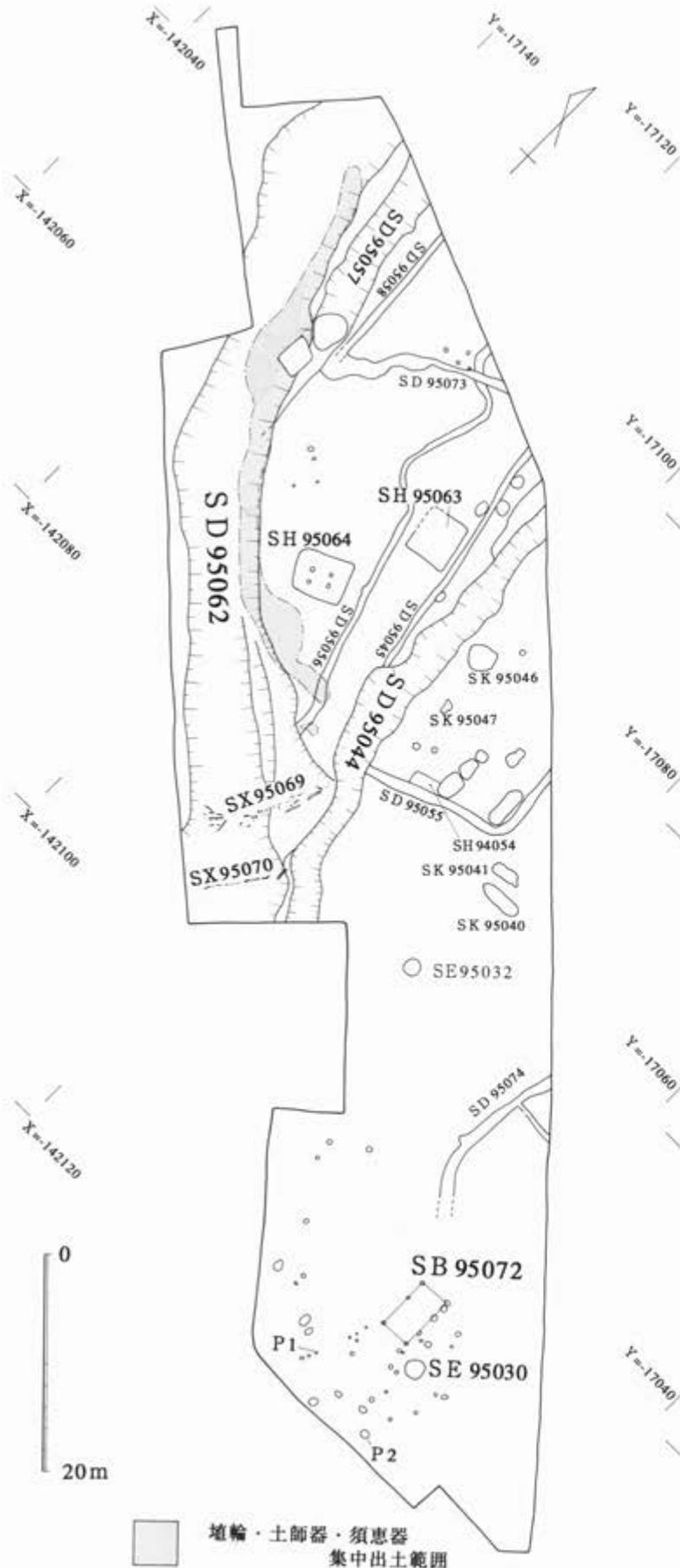
①溝

S D 95062 調査地北西部で検出した北から南西方向にかけてやや狐を描いて北流する流路である。規模は、幅8~10m・深さ約1.5m・検出長79.5mを測る。流路の断面は皿状を呈し、底には河床礫が厚さ約20cm堆積し、礫層より上は、ゆるやかな流れの中で堆積しており、砂層、シルト層が占めている。流路の東側斜面には黒褐色の有機層が幅2~3m・厚さ約10~15cmで堆積し、その有機層に覆われていた大量の土器とともに埴輪が流路の東岸に沿って出土した。遺物の出土範囲は南北約60mにも及び、円筒埴輪以外に盾形・馬形・人物・蓋などの形象埴輪が多く含まれていた。出土遺物として、このほかに、ミニチュア土器(手捏ね土器)・棒状や板状の木製

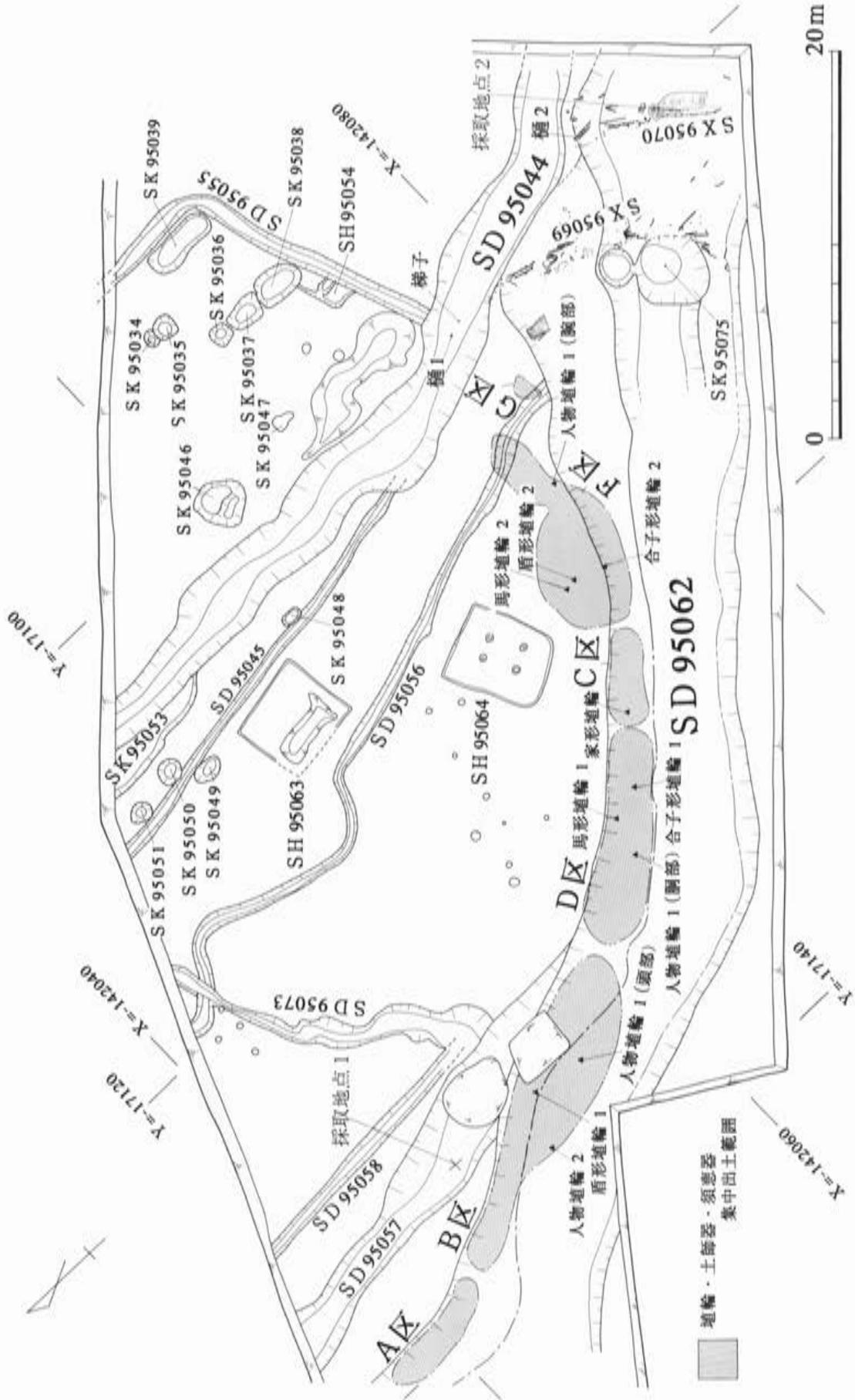
品・滑石製白玉・滑石製勾玉・土錘・製塩土器・種子などがある。また、流路の南端には2か所の杭列SX95069、SX95070がみられ、それらの杭列によって上流から2か所の堰を設けていた。この溝は5世紀末から6世紀初頭にかけて存続したと思われる。遺物群は北からA、B、D、C、F、G区の6区に分けて取り上げた。なお、E区は欠落している。

A区 流路岸の上半部に遺物が集中する。土師器の壺、高杯、甌、鍋、竈、須恵器の蓋杯、甕などがある。これらの遺物は岸辺に沿って一定間隔に配置されたように並んで出土した。この地区では、黒褐色有機層の堆積はなく、埴輪は出土しなかった。

B区 延長約17mにわたる。南北に分けて説明すると、北側では、須恵器甕・蓋杯・高杯、土師器壺・高杯・杯・鍋・甌などの土器や円筒埴輪、形象埴輪が黒褐色有機層から出土した。流路中からは建築部材である木製品が出土した。南側では、土器には同様な器種が認められるが、円筒埴輪、石見型盾形埴輪、人物埴輪(衝角付冑)2個体、不明形象埴輪などの形象埴輪が



第43図 弓田遺跡B地区遺構配置図



第44図 弓田道路B地区北部遺構実測図

この地区の南側で、まばらながら出土している。この付近は、S D 95057、及び近代の野井戸によって削平を受けているために出土遺物の密度は低い。

D区 延長約10mにわたる。遺物の密集度は、F区についで高い。土師器には杯・高杯・壺・甕・甌・甗・鍋、須恵器には蓋杯・高杯・甕などがある。埴輪は、地区の中央部で馬形埴輪、その周囲から人物埴輪胴部、円筒埴輪、蓋形埴輪、合子形埴輪、不明形象埴輪が出土した。馬形埴輪の周辺には滑石製勾玉1点、白玉23点、ヘラ状木製品、小杭状木製品、製塩土器が散布する。馬形埴輪の北側では、下層から土師器高杯がまとまって出土した。その高杯のう



第45図 S D95062D区遺物出土状況図

ちの1点は、桃の種がまとまって入れられた状態で出土した。D区では上記の遺物を取り上げた後、断ち割りを実施したが、護岸施設などは確認できず、川岸から落ち込んだ自然木、ナスビ形木器、椅子の側板と推定される木製品が出土した。

C区 D区の南側延長約6mにわたる。区画D区と同様の出土状況であるが、遺物の密集度は低い。家形埴輪が出土している。

F区 遺物は、流路斜面から肩付近にかけての平坦面に集中する。遺物の密集度は最も高い。SH95064南付近の平坦面にまで遺物の出土範囲は広がり、青灰色シルトが混じる黒灰色土中に、多量の土師器、須恵器、埴輪が混在して出土した。土器には、土師器の高杯・杯・壺・甕・甌、須恵器の蓋杯などがある。埴輪には、円筒埴輪以外に人物・馬形・盾形・合子形・蓋などの形象埴輪がある。特に、B・D地区出土の人物埴輪と同一個体の左腕部分が出土している。

G区 F区の南側、若干の遺物が集中するところをG区とした。埴輪はなく、土師器のみがわずかに出土した。

SD95062の西側斜面でも土器が若干出土し、集落はSD95062の東側を中心として西側へも広がっている。堰跡SX95069の東側ではSD95062の東肩を明瞭に検出できず、一時期SD95062とSD95044がつながっており、SX95069によってせき止められた水がSD95044に流れ込んでいたと思われる。

SD95044 トレンチ中央で南北方向に北流する溝で、幅1.2~1.9m・深さ約0.7m・検出長43.4mを測る。出土遺物には、土師器、須恵器、埴輪、板状の木製品、自然木などがある。各遺物の器種構成は、土師器では甕、壺、高杯、杯、ミニチュアであり、須恵器では蓋杯、甕である。埴輪は円筒、蓋立ち飾り、動物足部があり、蓋立ち飾りの1点はSD95062出土のものと接合した。SD95044出土の遺物はSD95062と一連のものと考えられる。したがって、SD95044は、SD95062と北端で一部合流していたと思われ、その付近で半截くり抜きの樋(樋1)と梯子が出土した。5世紀末から6世紀中頃まで存続したと思われる。

SK95053 SD95044北端に位置し、SD95044に含まれる。検出長7.7m・最大幅2.0m・最深部で0.15mを測る。出土遺物は土師器を主体として、埴輪、須恵器とともにミニチュア土器が混じる。

SD95045 SD95044の西側に平行する。幅0.5~0.8m・深さ0.1~0.25m・検出長23.3mを測り、断面形は舟形を呈する。溝の底部から、須恵器、土師器、埴輪片が出土した。

SD95055 東西方向に直線的にのび、東端で「L」字形に北に曲がる。幅0.5~0.8m・深さ約0.4m・検出長19.8mを測り、断面「U」字形を呈する。西端部でSD95044に切られる。遺物は少なく、底部で土師器壺片1点が出土したのみであった。

SD95056 SD95045と平行し、SH95063付近から北側で「S」字状に蛇行する南北方向の溝である。幅約0.25~0.4m・深さ約0.15~0.25m・検出長43.0mを測り、断面は「U」字形を呈する。遺物から時期は特定できないが、SH95063・SH95064を避けて流れることから、住居跡と同時期の溝と思われる。

S D95057 西方向に流れる溝で、幅約4m・深さ約0.6mを測る。埋土は上層で青灰色シルト、下層を灰白色砂とする。近代の攪乱によって混入した遺物以外には出土遺物はない。

S D95058 現代まで存続する南北方向の水田側溝である。幅約0.4m・深さ0.3mを測る。断面「U」字形をなす。

S D95073 北西方向に流れ、S D95062と合流する溝で、幅0.3~1.4m・深さ0.3~0.6mを測り、断面「V」字形をなす。埋土は灰白色砂である。自然流路である。

S D95074 奈良時代遺構のベース面を切り込む溝で、幅0.7~1.1m・深さ0.3mを測る。断面「V」字形で、南北方向に蛇行する。灰白色砂を埋土とし、出土遺物はない。自然流路である。

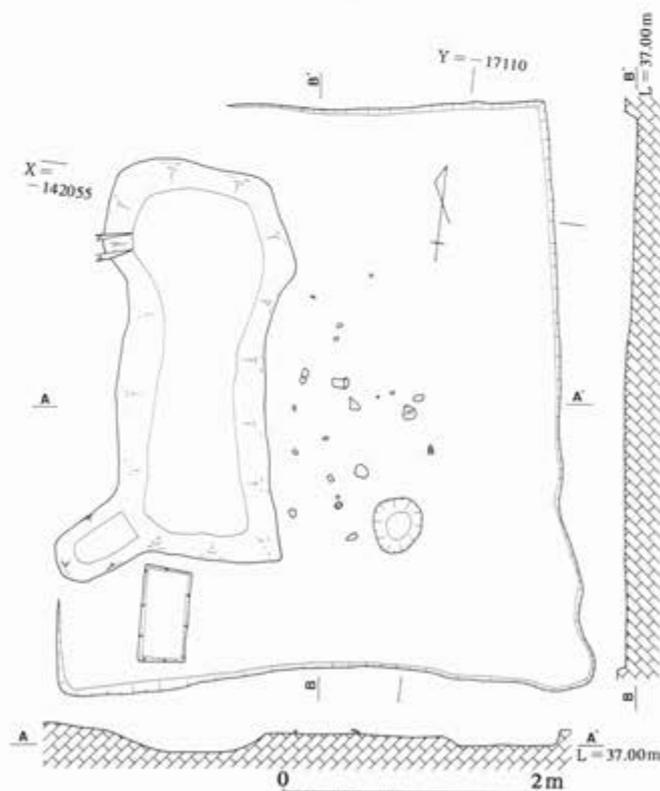
②堰跡

S X95069 S D95062の南端部を横切るように3条の杭列を検出した。直径5.0~8.0cm・長さ約70~120cmの木杭を20~40cm間隔で打ち込んでいる。そして、それらの杭で板材を固定し、川の流れをせき止めて水量を調節していた。この板材に扉の上枠である櫓（まがし）が転用されていた。S X95069の中央北側で直径約3.5m・深さ約0.7mを測る楕円形の落ち込みを検出した。その底から長胴形の土師器甕（土師器53）、須恵器甕が並べて置かれた状態で出土した。堰に関する祭祀の遺物であると思われる。

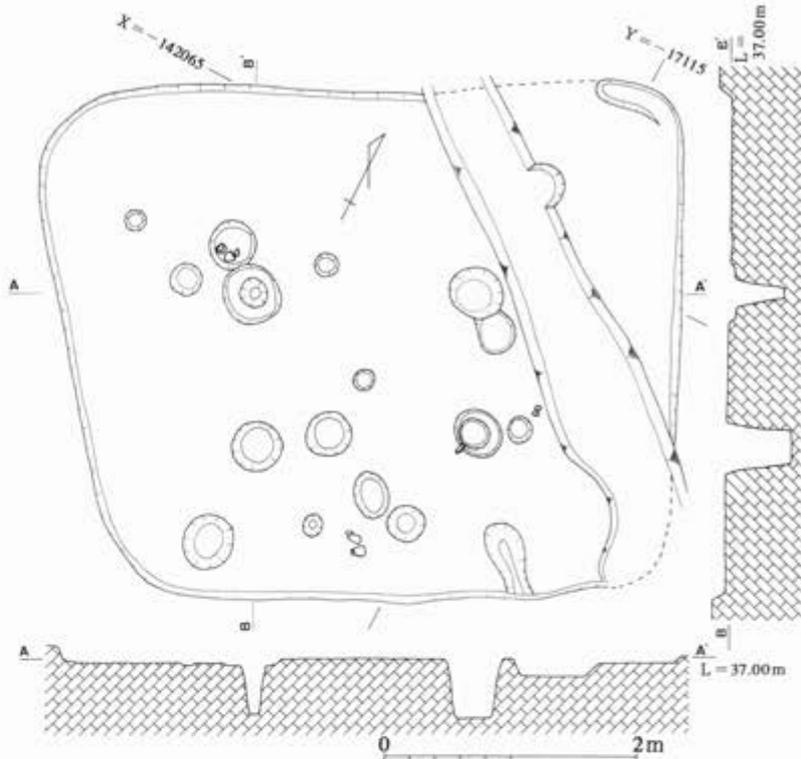
S X95070 S X95069の南側でS X95069と平行に検出した。S X95069と同様に杭列が並ぶ。杭間は20~40cmで、直径5~7cm・長さ50~70cmの杭を使用していた。杭間には板・棒状の木材を使わずに、イネ科の植物の茎を敷き詰めていた。茎は、まず流れの方向に並べ、その上にそれと直交する方向に厚さ1cmで敷かれていた。東端のS D95062の肩で、くり抜きの丸太材を利用した樋が出土した。樋によってS D95062でせき止めた水をS X95044に流していた。遺物は、S X95070より下流側で出土したが、上流側では出土しなかった。敷き詰められた植物については草本同定を行った。

③堅穴式住居跡

S H95054 S K95040の西側に位置する。幅20cm・深さ5cmの周壁溝を東西2.2m・南北1.4mにわたって検出した。住居跡の北西コーナー部分と思われる。床面までの深さは10cmである。土師器の高杯・壺に混じって埴輪の蓋立ち飾り部分が出土



第46図 SH95063実測図



第47図 SH95064実測図

した。主柱穴、貯蔵穴などはない。削平を受けて、全体の規模は不明である。5世紀末から6世紀初頭の時期である。

S H95063 東西4.4m×南北4.7mを測る。主軸はN-6°0'-W傾く。床面の深さは10cmを測る。北西コーナーが削平を受けているため、周壁溝、主柱穴、貯蔵穴、竈、炉跡なども検出できなかった。遺物は、土師器片が床面で出土しただけで、ほかに時期を限定できる遺物はなかった。

S H95064 東西5～4.4m×南北5.3m・深さ5cmを測り、台形状のプランを持つ。主軸はN-25°58'-Wに傾く。直径約40cm・深さ約50cmの主柱穴を4か所で検出した。周壁溝、貯蔵穴、竈、炉跡なども検出できなかった。遺物は床面から若干出土したが、まとまった遺物はなく、須恵器杯片、土師器片、埴輪片が見られるにすぎない。それらによれば、5世紀末から6世紀前半の時期と推定される。S D95062の出土遺物と同時期と思われるが、若干新しい可能性もある。

④土坑

S K 95046 直径約2.5m・深さ約0.15mの円形の土坑である。底部に炭化物が堆積し、土師器片が出土した。

S K 95047 1.4m×0.7m・深さ約0.15mの不定形な土坑である。黒褐色土が堆積し、埴輪片が出土した。

S K 95048 一辺0.93m×0.53m・深さ約0.4mの隅丸方形の土坑である。黒褐色土が堆積し、埴輪片が出土した。

S K 95049 長軸1.55m・短軸1.5m・深さ約0.5mの菱形に近い楕円形の土坑である。出土遺物はなかった。

S K 95050 直径1.3m・深さ約0.2mの円形の土坑である。底部には、1.3cmの厚さで黒褐色の有機層が堆積する。土師器杯1点、高杯脚部1点が出土した。S D95044より後出する。

S K 95051 直径1.1～1.2m・深さ0.35mの不定形な円形をなす。埋土は、灰褐色シルトである。埋土上層から、埴輪、土師器、高杯片が出土し、底部から枕と板状木製品が出土した。S D

95044と同時期か、または先行する。

(2) 奈良時代の遺構

掘立柱建物跡 S B 95072 身舎は梁間1間×桁行3間の東西棟の掘立柱建物跡である。桁行はほぼ真北方向である。各柱間は、梁間2.9m・桁行1.6~1.8mである。各ピットは長径30~70cmの楕円形をなし、深さ15cmを測る。柱当たりの直径は約10cmである。ピットからの遺物はない。

井戸 S E 95030 長径約1.70m・短径約1.85mの円形で、掘形は掘り鉢状をなす。検出面からの深さは1.35mを測る。掘形内からは、大形曲物の蓋や底板を井戸枠に転用したものが出土した。井筒として、その内、楕円の大形曲物を上下から2段使用し、最下段の3段目に円形の曲物が使用されていた。井戸内からは、須恵器杯身片・長頸壺片、土師器片が出土した。

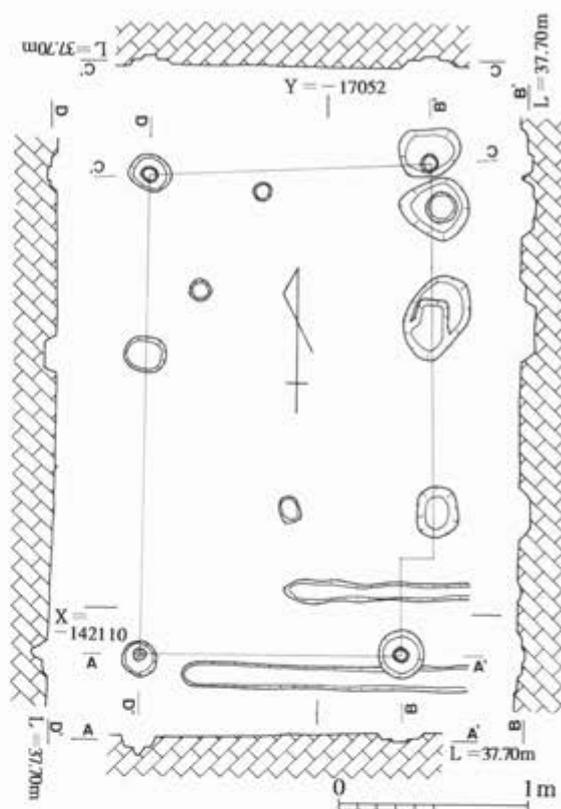
井戸 S E 95032 直径約1m・深さ0.8mの円形プランをなす素掘りの井戸である。掘形は掘り鉢状をなす。出土遺物はなく、時期は不明である。

ピット群

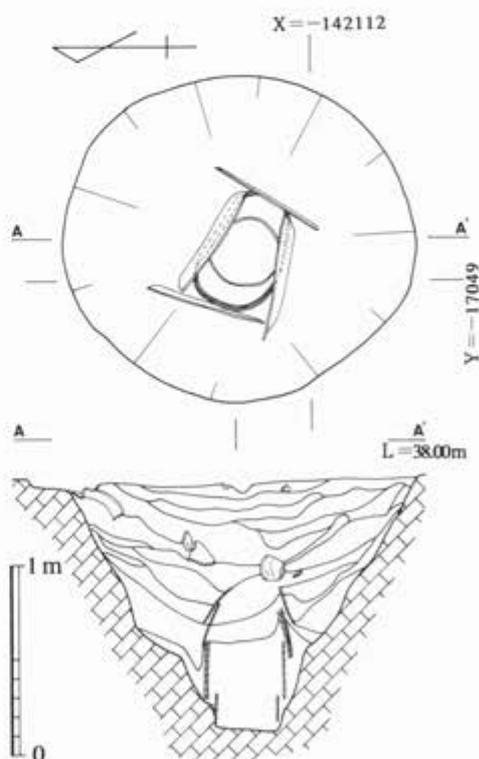
ピット1から土師器皿、ピット2から須恵器長頸壺壺体部が出土した。

その他の遺構

S K 95034~41 上層の中・近世耕作面で検出した土坑で、0.4~0.5mの深さである。いずれも、その主軸方向が現在残る条里方向と一致している。断面は「U」字形をなし、2~3cmの河床礫が混じる灰色砂を埋土としているが、遺物は、わずかにS K 95039の底部から土師器皿片、瓦器片が出土したにすぎない。中世以降のものである。砂礫によって一気に埋まったような状況を呈する。



第48図 S B 95072実測図



第49図 S E 95030実測図

(橋本 稔)

4. 出土遺物

a. 土器

弓田遺跡の発掘調査で出土した土器類は、整理箱にして総数85箱に及ぶ。これらを時期的にみると、古墳時代、奈良時代、平安時代末葉～鎌倉時代のものであり、ほぼ先に述べた検出遺構に対応する。ただし、出土量からすれば、古墳時代後期初頭のものでその大半を占め、整理箱約80箱を数えるのに対し、奈良時代のもので整理箱4箱、平安時代末葉～鎌倉時代初頭のもので整理箱1箱にすぎない。

ここでは、S D 95062出土土器(古墳時代後期初頭)を中心にその概略を提示するにとどめ、詳細な資料の提示及び問題点の検討については、将来の課題としたい。

(1)古墳時代後期初頭

① S D 95062出土土器^(注6)

S D 95062からは、先に述べたように整理箱約80箱に及ぶ土器類が出土した。これらのうち、現在までに器形の判明したものとして、須恵器では杯身・杯蓋・有蓋高杯・同蓋・甕・壺・甕などがあり、土師器では杯・高杯・小型丸底壺・壺・鉢・甕・鍋・甌などがある。また、あくまで大雑把な把握ではあるが、完形品並びに形態の判明した破片を1個体と数えて、須恵器で43個体、土師器で364個体を確認した。また、このほかに移動式竈、ミニチュア土器、製塩土器、土錘などを認めた。

なお、以下に示す土器類に関しては、その出土状況から一括性の高い資料とはいいがたい面もあるが、形態的な面からは大きな時期幅は想定できない。時代の物差しとなりうるだけの形態的な変化を追えない土師器類は別としても、須恵器類の形態的特徴からすれば、陶邑編年によるTK47を前後する頃、すなわち5世紀末から6世紀前半を中心とするものと考えている。ただ、これ以上の細かな時期決定については、伴出している埴輪類の編年上の問題や、周辺地域、特に南山城地域におけるこの頃の良好な対比資料を欠いているため、今後の課題とせざるをえない。

報告に際しては、須恵器・土師器とも器種分類を行った上で、主要なもののみを図示した。以下、提示した図に従って出土資料の概略を報告する。

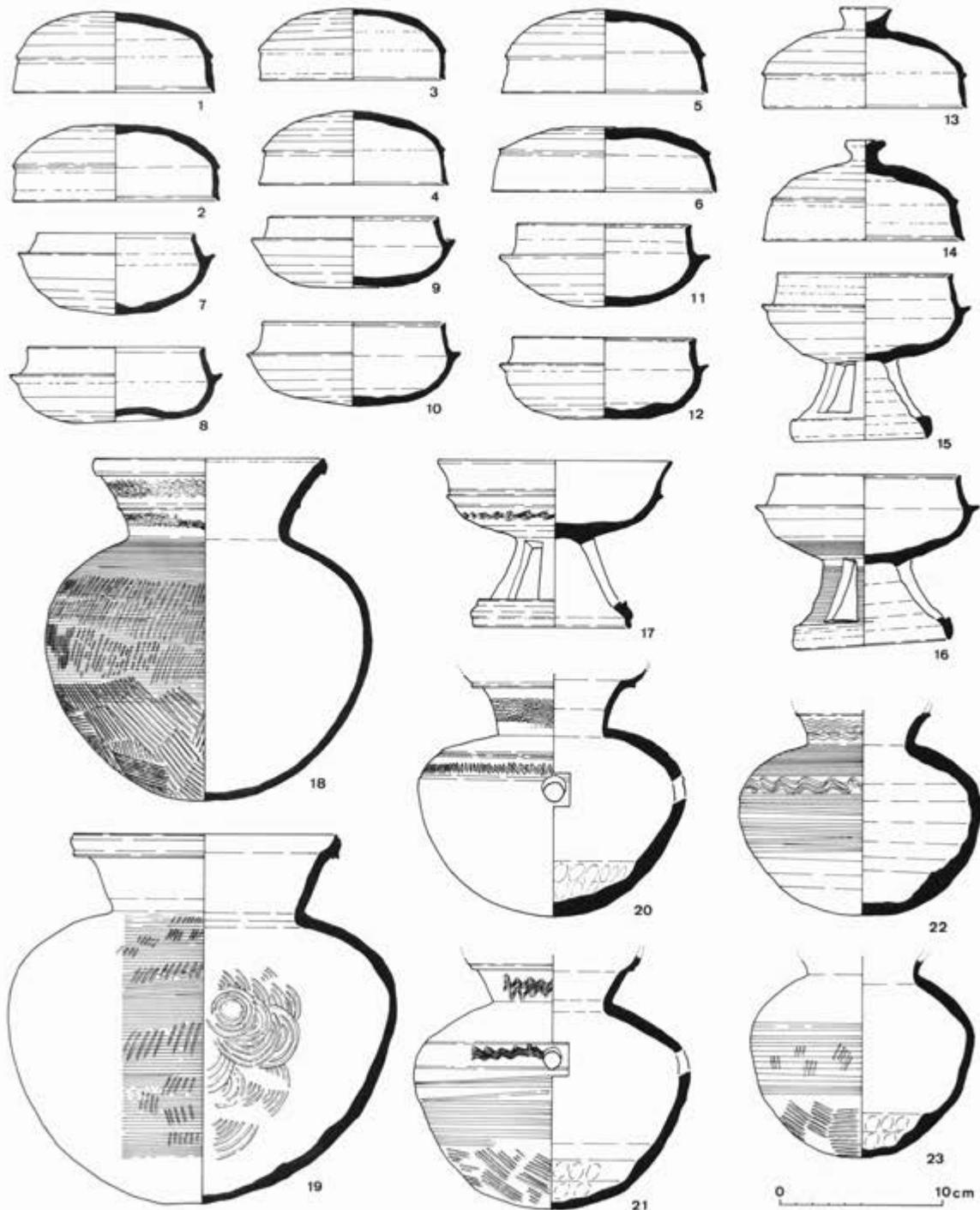
須恵器(第50・51図1～25)

杯蓋(1～6) いずれも丸味のある天井部から外下方へ下がる口縁部を有し、天井部と口縁部との境は突帯状の稜をなす。口縁端部は外側へ若干つまみ出され、内側には凹面ないしは段をもつ。天井部のヘラ削りは稜近くまで及ぶ。口径12.5cm前後・器高5.1cm前後を測るもの(1・2・5)と、口径11.5cm前後・器高4.5cm前後のやや小ぶりのもの(3・4)があるが、量的には前者が多い。また、口径13.8cm・器高4cmを測り、口径の大型化を認めるもの(6)もある。6の口縁端部は丸くおさめ、わずかに面をもつ程度となる。若干新しい要素(陶邑編年のMT15に近い)と考えられる。ただし、須恵器杯蓋は総数で6点を数えたが、6のようなタイプはこの1点を認めるのみであった。

杯身(7～12) いずれも丸味のある体部から口縁部が高く立ち上がり、端部を上外方へわずか

につまみ出し、内面に内傾する凹面をもつ。なお、8・10は、端部を丸くおさめ、端部の面も平坦である。底部外面のヘラ削りは受け部近くまで及ぶ。法量的には、杯蓋に対応し、口径10cm前後を測り、受け部の径が11.5cmのもの(7・9)と、口径11cm前後を測り、受け部の径が12.5cmのもの(8・10~12)の二者がある。6に対応するものは認められなかった。

有蓋高杯蓋(13・14) 形態的には、杯蓋とはほぼ同一で、丸味のある天井部から突帯状の稜を経て口縁部がわずかに開き気味に下がり、その天井部中央につまみが付される。14は、13に比べや



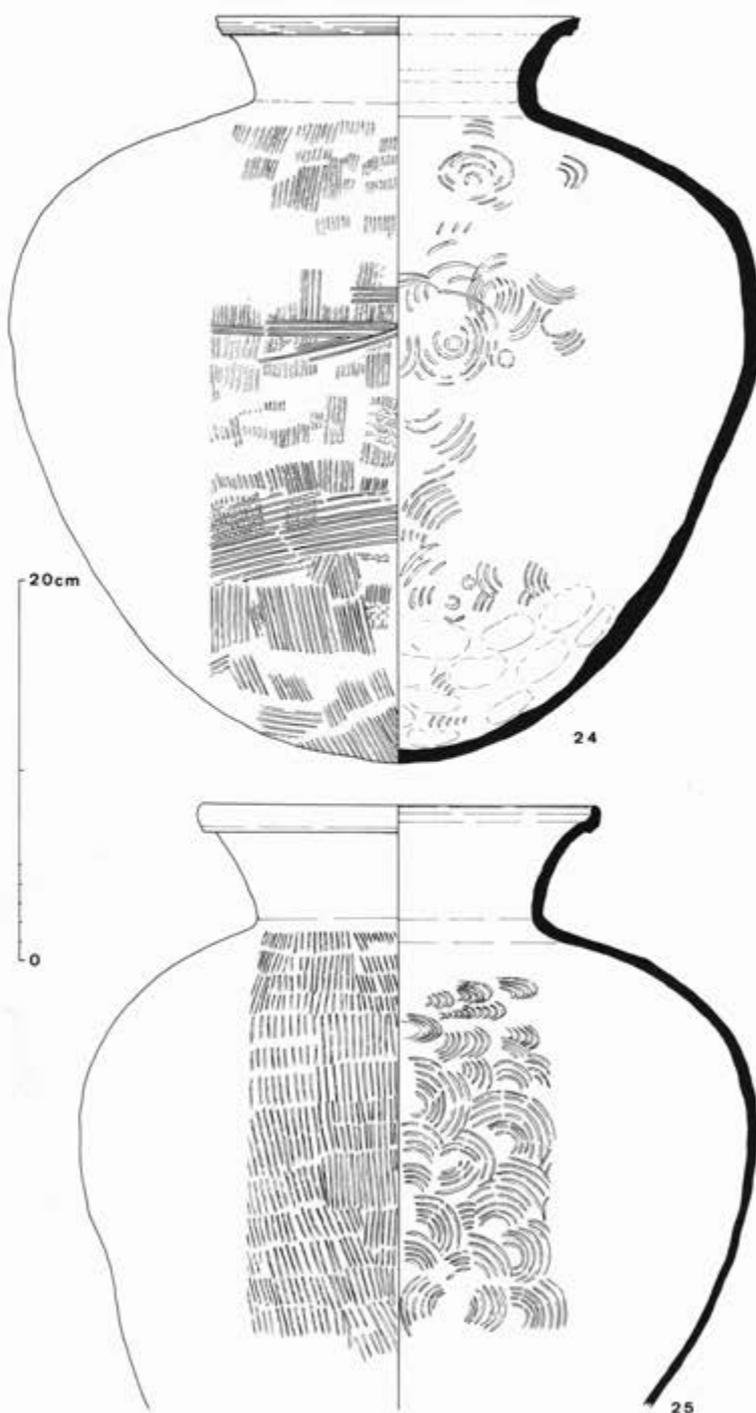
第50図 土器実測図(1) 須恵器 1

や器壁が厚いが、13・14ともに、口径12.5cm前後・器高6.2cm前後を測る。

有蓋高杯(15・16) 杯部は、立ち上がりやや高い傾向があるものの、杯身類とはほぼ同一の形態をなし、脚部は「ハ」の字状に下がった後、端部付近で屈曲して垂下する。なお、16は、この屈曲部で端部を上方へ折り返した痕跡をとどめる。15・16は、いずれも脚柱部に三方向の長方形の透かしを穿つ。16は杯部底から脚柱部にかけてカキ目を施している。いずれも口径11cm前後・器高10.4cm前後を測る。

無蓋高杯(17) わずかに丸味のある底部から、突帯状の稜線を経て口縁部が外反気味に立ち上がり、端部は丸く終わる。稜線の下方に波状文が施される。脚柱部は、「ハ」の字状に開いて下がり、三方向に長方形の透かしを穿つ。端部は下方へ屈曲し垂下するが、屈曲部で上方に拡張され、外方に面をなし、2条の幅広の凹線がめぐる。口径14.4cm・器高10.2cmを測る。

甕(20・21) いずれも口縁端部付近を欠損するが、肩の張った体部から、外反気味に頸部が立ち上がった後、屈曲して内湾気味の口縁部がのびるものである。口縁部と頸部の境となる部分の屈曲は強く、内面に明瞭な稜線が、外面には断面三角形の突帯がめぐる。20では、頸部に波状文が、また肩部には2条のわずかな凹線によって区切られた部分に刺突文が施される。21は、頸部と肩部にそれぞれ



第51図 土器実測図(2) 須恵器2

波状文を施す。

小型壺(22・23) 球形の体部から外反気味に立ち上がる口頸部をもつ。ただし、いずれも口縁部の大半が欠損しており、詳細な形状は不明である。一部が遺存する22では、頸部から屈曲して立ち上がる口縁部の一部が認められ、上記の壺と極めて類似した形態をなすと理解される。体部に円形の穴が穿たれていないことのみが、これらを小型壺と分離しうる要因である。22は、頸部及び肩部に波状文が施され、体部外面をカキ目によって仕上げる。23は、体部外面上半に平行叩きの後カキ目が、下半は平行叩きの後ナデが施される。

小型甕(18・19) 18は、球形の体部から上外方へ外反気味に高く立ち上がる口頸部をもち、口縁端部は上下にわずかに拡張される。頸部は、その中位にある断面三角形の突帯によって上下に二分され、それぞれに波状文が施される。体部外面上半は平行叩きの後カキ目が、下半は平行叩きのみが認められる。体部内面は、同心円文叩きがナデによって消される。口径14.2cm・器高21cmを測る。19は、肩部の張った体部と、直線的に上外方へ立ち上がった後、短く外反する口頸部からなる。口縁端部は上下に拡張され、上外方に凸面をなす。体部外面には平行叩きの後、カキ目が施され、内面には同心円文叩きが認められる。口径16cm・器高22.8cmを測る。

大型甕(24・25) 肩の張った体部から外反して立ち上がる口縁部をもつ。24は、口縁端部が上下にわずかに拡張され、外方に2条の凹線がめぐる面をもつ。口径19cm・器高39.8cmを測る。25は、口縁部が大きく立ち上がり、端部はさらに内湾気味に上方へ拡張される。口径26cmを測る。いずれも、体部外面には平行叩き、内面には同心円文叩きが認められる。

土師器(第52～59図1～88)

杯(第52図1～9) 器形の判明するもので105点を確認した。現状では、これらを口縁部の形態やその大小などから、5種類(A～E)に分類している。

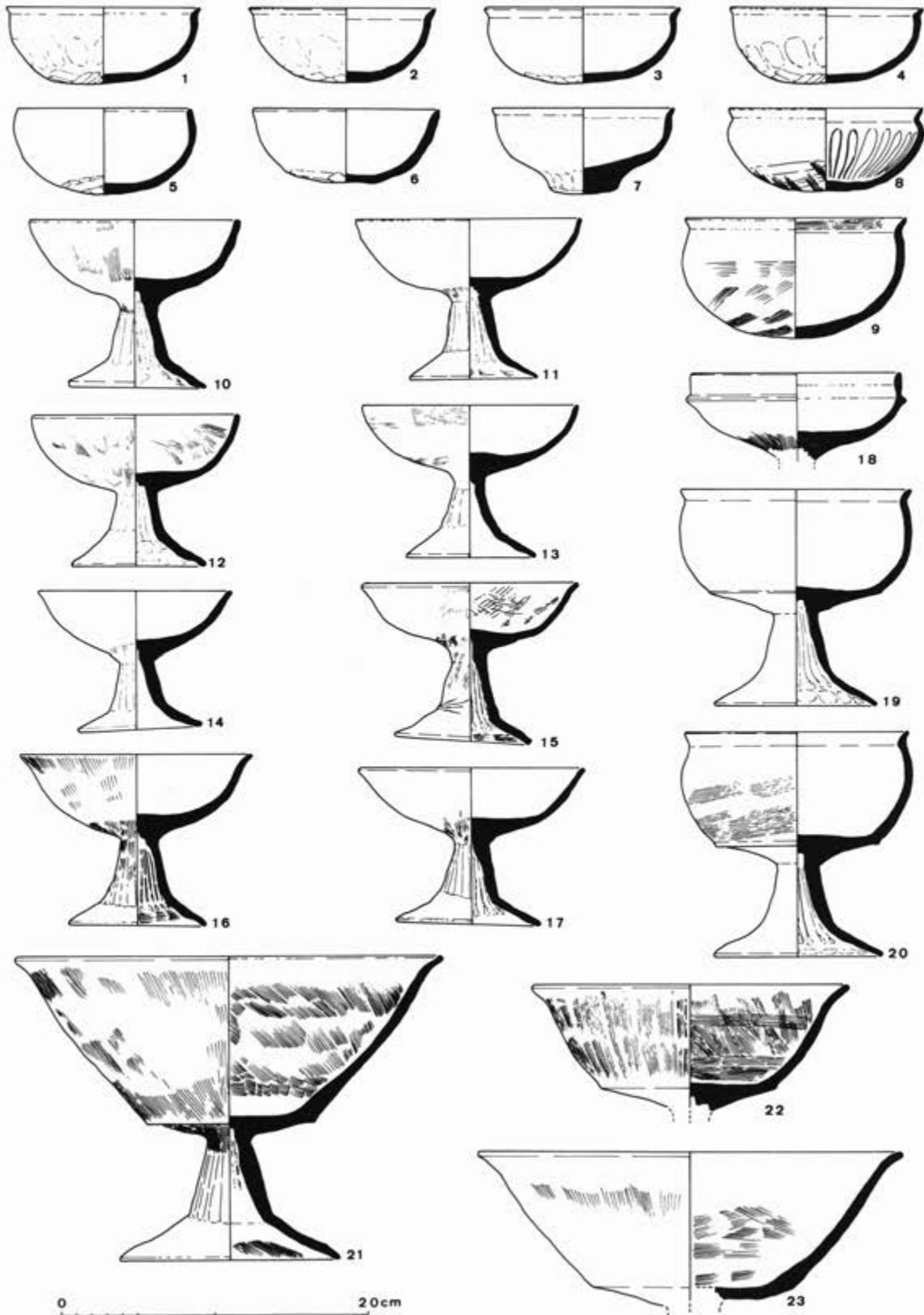
杯A(1～5) 丸味のある体部から短く外反する口縁部を有し、口径12cm前後・器高5cm前後を測るものが主体をなす。基本的に、底部外面をヘラ削りするほかは、ヨコナデ調整によって仕上げる。ただ、口縁部及び体部内面にハケ目調整の痕跡を残すものもある。また、体部内面に暗文を施す例を1点確認している(5)。杯Aは、85点を確認しており、杯の大半を占めている。ここでは5点を図示した。なお、細かく見れば、器高の若干低いもの(体部が扁平気味のもの)や、口縁部の外反度の弱いもの(2)、口径のやや大きいものなどがあり、細分することも可能と思われるが、現状ではこれらを一括している。

杯B(6) 丸味のある底部と内傾する口縁部とからなり、口径11cm前後・器高5.5cm前後を測る。底部外面をヘラ削りするほかは、ていねいなヨコナデ調整によって仕上げる。9点を確認しているが、ここでは1点のみ図示した。

杯C(7) 丸味のある体部と上外方へのびる口縁部を有する。口径12cm前後・器高5cm前後を測る。基本的に杯Bと同様、底部外面をヘラ削りするほかはていねいなヨコナデ調整によって仕上げる。7点を確認し、ここでは1点のみ図示した。

杯D(8) 高台状に突出する底部と上外方へ屈曲して立ち上がる口縁部とからなり、口縁端部は

わずかに外反する。口径約12cm・器高6.5cmを測る。器壁は、磨滅が著しく調整手法などを確認できないが、基本的にナデ調整によって仕上げられているようである。ここに図示した1点のみ



第52図 土器実測図(3) 土師器1

を確認した。

杯E(9) 基本的な形態は杯Aと同じであるが、口径14cm前後・器高8cm前後を測る大型品を杯Eとした。調整手法も基本的に杯Aと同じ。3点を確認しているが、ここでは1点のみ図示した。なお、杯Aタイプの大型品としては、口径20cm・器高12cmを測るさらに大型品を1点確認しているが、ここでは杯Eに一括しておく。

高杯(第52図10~23) 器形の判明するもので96点を確認した。現状では、これらを杯部の形態及びその大小などから、5種類(A~F)に大別した。

なお、脚台部は、器形の大小による多少の差異はあるが、その大半は裾広がり脚柱部と、ラッパ状に大きく広がる裾部からなる。脚柱部の多くには、外面に幅1cm前後の面取りが行われ、上端付近には杯部との接合面から続くハケ目調整が、内面には粘土シボリ痕が認められる。裾部内面には、指オサエ痕とともに、横方向のハケ目調整が確認されるものが多い。また、脚柱部内面上端には径6mm程度の穴が認められる。断面観察が可能な破片からすると、竹管状のものがその成形段階に挿入された痕跡と考えられる。竹管状のものが挿入された脚頂部は、断面で杯底部の上面近くまで及んでおり、杯部と脚部が個別に作成され接合されたとすれば、接合に際して杯底部外面から脚部を挿入するための穴が穿たれたこととなる。ただ、高杯の製作手順としては、一般的には、脚部を作成した後、これに杯部を作り足していくと考えられており、上記の土器断面観察の結果も、このように考えた方がより合理的に思える。脚頂部に挿入された竹管状のものは、こうした作業を行いやすくするための軸と考えることもできるであろう。

高杯A(10~13) 口径14cm前後・器高10cm前後を測る小型品。口縁部が内湾して立ち上がり、半球状の杯部をなす。23点を確認したが、うち、ここでは4点を図示した。杯部内外面ともハケ目の後、ナデ調整によって仕上げる。

高杯B(14~17) 口径14cm前後・器高12cm前後を測る小型品。平坦な底部からゆるやかに屈曲して口縁部が立ち上がり、端部が外反気味に終わる。58点を確認し、ここでは4点を図示した。杯部内外面ともハケ目調整の後、ナデ調整によって仕上げる。なお、杯部内面に暗文を施すものを1点確認している。

高杯C(18) 杯部のみの破片1点を認めたにすぎない。口径15cmを測り、杯部はあたかも須恵器の杯身を模したような形態をなす。すなわち、丸みのある底部から口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁部下方に須恵器杯身の受け部を思わせる凸帯がめぐる。杯部内面及び口縁部はヨコナデ、杯部外面をハケ目調整によって仕上げる。

高杯D(19・20) 口径12cm前後・器高23cm前後を測る。杯部は、平らな底部から段をなして内湾する口縁部が立ち上がり、端部は短く外反して終わる。段より上部の形態は、一見杯Eに類似する。8点を確認し、うち1点を図示した。口径・器高とも15cm前後を測り、体部外面及び口縁部内面にハケ目調整の痕跡を認めるほかは、基本的にいねいなヨコナデ調整によって仕上げられる。

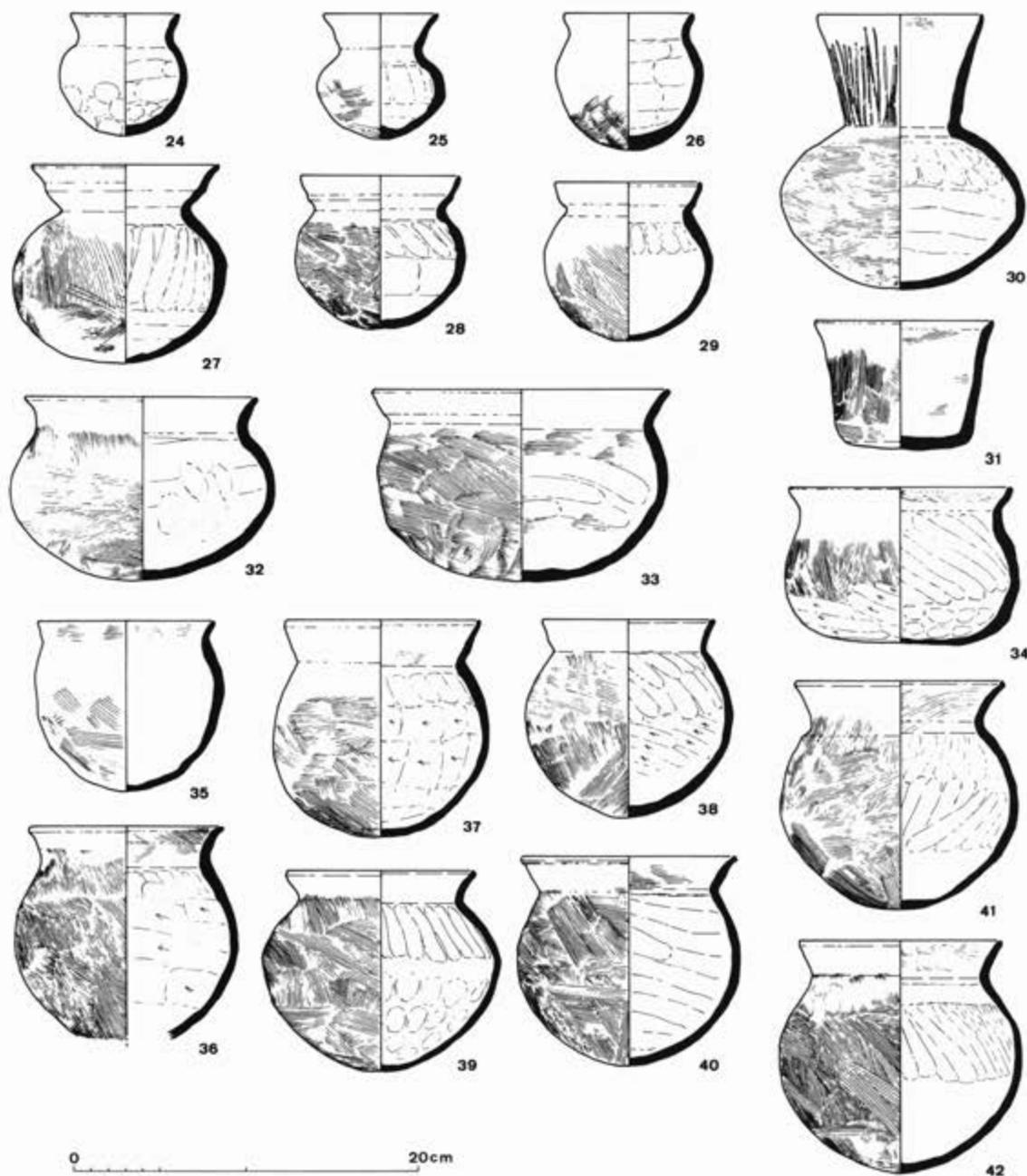
高杯E(22) 杯部は、底部から段をなして内湾気味の口縁部が大きく広がり、端部は外反する。

3点を確認し、ここでは1点を図示した。口径20cm前後・器高18cm前後を測り、杯部はハケ目の後、ナデ調整によって仕上げる。

高杯F(21・23) 杯部の形態、調整手法とも基本的に高杯Eと同じであるが、口径28cm前後・器高20cm前後を測る大型品を高杯Fとした。3点を確認し、ここでは2点を図示した。

小型丸底壺(第53図24～26・28・29) 形態の判明するもので7点を数える。大・小の二者があり、これをA・Bとした。

小型丸底壺A(24～26)は、3点を確認し、すべてを図示した。球形(24・26)ないしやや偏球状(25)の体部から外反する口縁部をもち、口縁部の外反は、前者は短く、後者は大きい。こうした細部の形態差でさらに細分可能と思われるが、口径・器高とも7～8cmを測るものを小型丸底壺



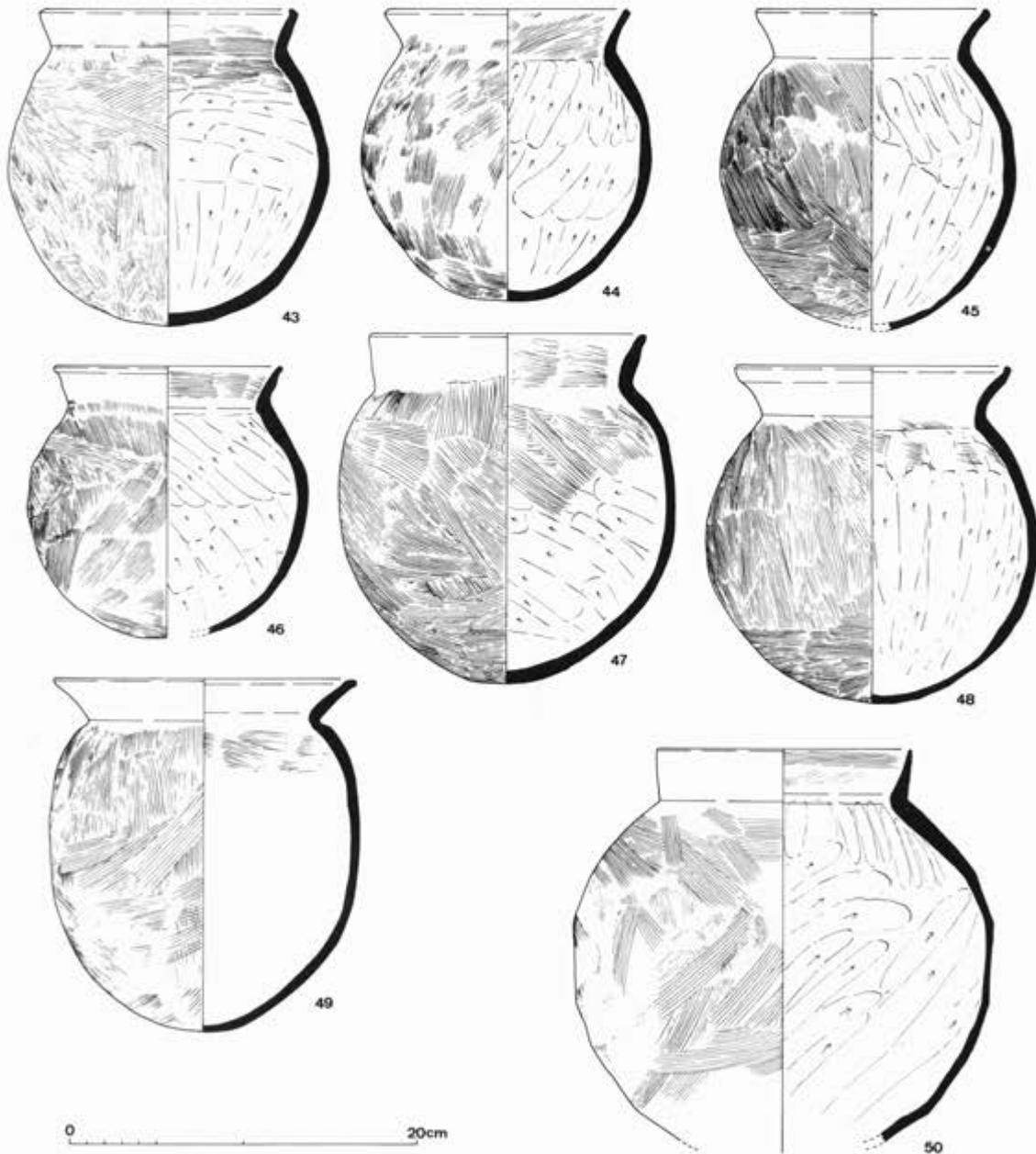
第53図 土器実測図(4) 土師器2

Aとした。24は、内外面ともナデ調整を基本として仕上げられる。25は、体部外面にハケ目、その他はナデ調整によって仕上げられる。26は、体部外面にハケ目、内面にヘラ削り調整が観察される。

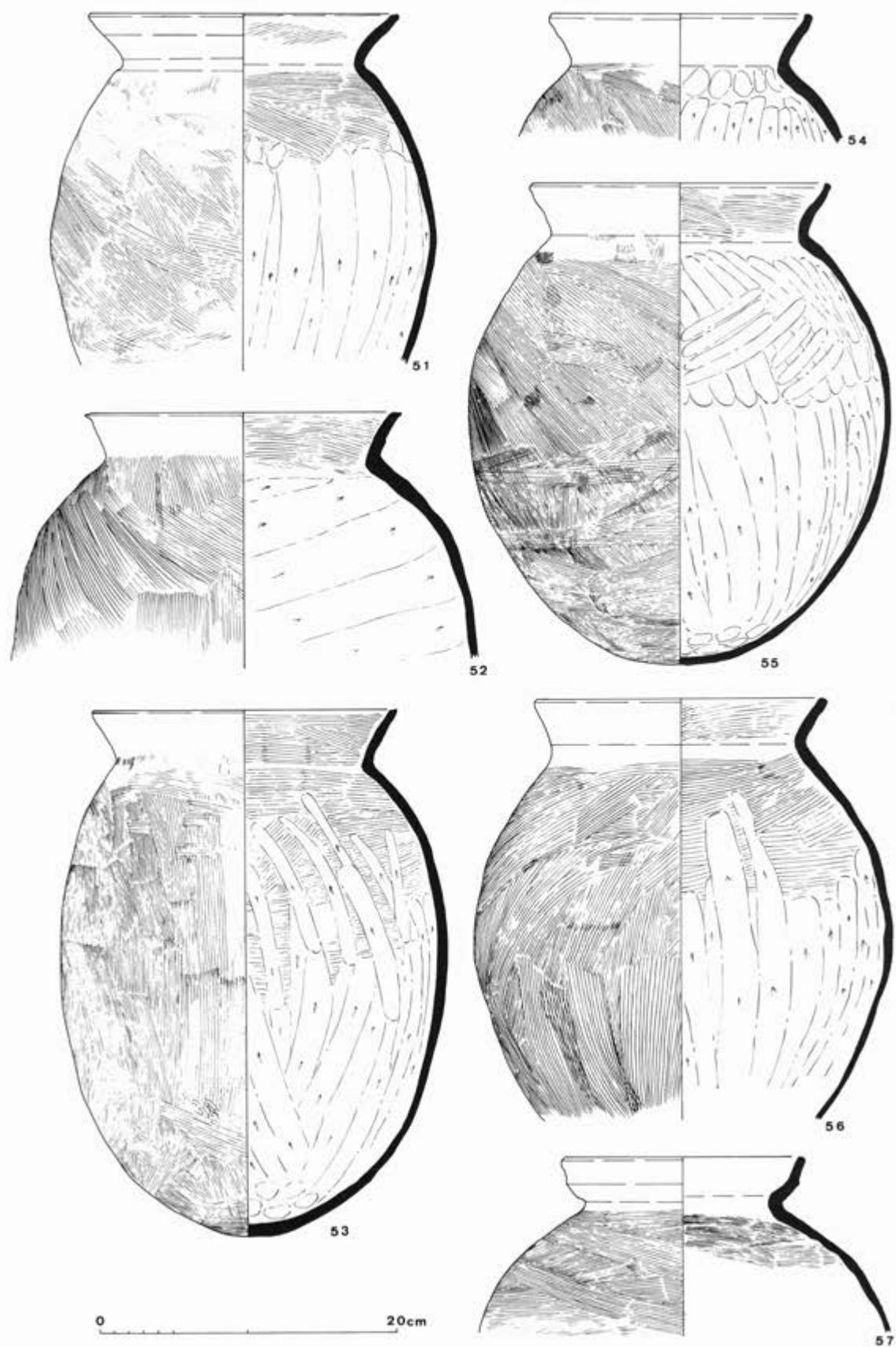
小型丸底壺B(28・29)は、口径・器高とも9cm前後を測り、球形の体部から内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。体部外面をハケ目、内面をナデ、頸部から口縁部をヨコナデ調整によって仕上げる。3点が確認され、うち2点を図示した。

壺(第53図27・30) 総数12点を確認した。形態的に、A・Bの2種に分類される。

壺A(30) 偏球状の体部から外反気味に立ち上がる口縁部を有する。口径10cm前後・器高16cm前後を測る。11点を確認し、1点のみ図示した。体部外面にハケ目、内面にナデ調整が施され、口縁部は内外面ともハケ目調整の後、ナデによって仕上げられる。また、図示したものには口縁



第54図 土器実測図(5) 土師器3



第55図 土器実測図(6) 土師器 4

部外面に暗文状の粗いヘラ磨きが施される。

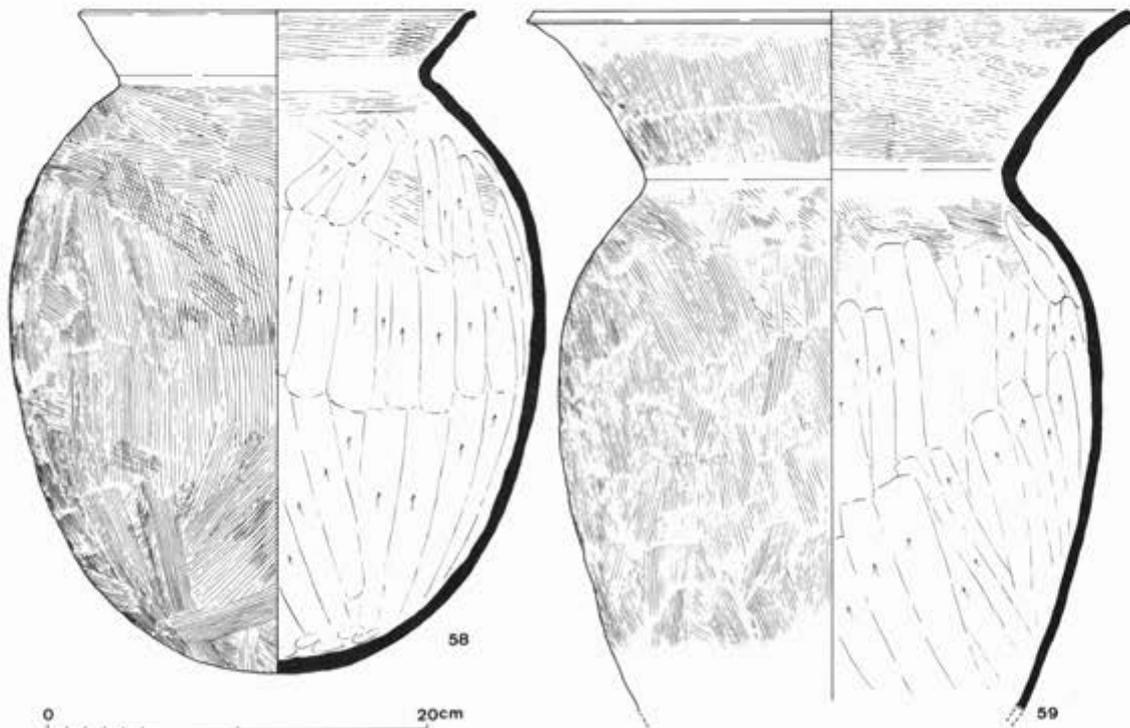
壺B(27) 球形の体部と二重口縁状の口縁からなる。口径約11cm・器高約12cmを測る。体部外面はハケ目、内面をナデ、口縁部をヨコナデ調整によって仕上げる。ここに図示した1点のみを確認した。

鉢(第53図31~34) 鉢として認識したものは6点を数える。形態的には、扁平な甕状のもの(鉢A)とコップ形のもの(鉢B)の2種類がある。

鉢A(32~34) 偏球状の体部と短く外反する口縁部とからなる。甕もしくは壺の一種として認識すべきかもしれない。基本的に共通した形態を設定することはむずかしく、ここでは体部が扁平なため、口径が器高を大きく上回るものを鉢Aとして抽出した。鉢Aと認識されるものは5点を確認したが、うちここでは3点を図示した。32は、口径13cm・器高11cmを測り、体部外面をハケ目、内面をナデ調整で仕上げ、口縁部にはヨコナデ調整を施す。33は、口径16.5cm・器高11.5cmを測り、体部外面をハケ目、内面をハケ目の後ナデ調整で仕上げる。34は、口径13cm・器高9.2cmを測り、平底気味の底部、下膨れ気味の体部、内湾気味に短く上外方へ立ち上がる口縁部からなる。底部外面をヘラ削り、体部外面はハケ目、内面をナデ調整で仕上げ、口縁部は内面にハケ目調整の痕跡を認める。

鉢B(31) コップ状の形態をなし、平底から直立気味に口縁部が立ち上がった後、端部はわずかに外反する。ここに図示した1点のみが確認されたにすぎない。全体にハケ目調整の後、ナデによって仕上げられる。口径10cm・器高7.5cmを測る。

甕(第53~56図35~59) 甕は、形態の判明するもので101点を確認した。ここでは、これらを基本的に大・中・小の3タイプに分類した。また、3タイプそれぞれで主に口縁部の形状によ



第56図 土器実測図(7) 土師器5

て細分が可能と思われるが、ここでは大まかな傾向のみを記すこととした。なお、長胴甕については、体部下半が遺存する例が少なく、現状では明らかにこれと認識できるものはない。

小型甕(第53図35~42) 小型甕として認識したものは、口径10~13cm・器高12~14cmを測る。19点を確認し、ここでは7点を図示した。基本的に、体部外面はハケ目、内面は下半部をヘラ削り、上半部をナデ、口縁部内面をハケ目の後、ヨコナデ調整によって仕上げるものが多い。口縁部の形態には、上外方に面をなし、端部を内上方へつまみ上げるもの(Aタイプ; 37~39・41)、上外方に面をなし、端部を下外方へつまみ出し気味に終わるもの(Bタイプ; 40)、端部を上外方へ強く外反させるもの(Cタイプ; 36)、上記3タイプ以外のもので、端部には明瞭な手を加えず丸く終わるもの(Dタイプ; 35・42)の4タイプがある。特に、Dタイプに属する35は、小型甕のなかでもさらに小型品で、口縁部は短く外反して終わる。体部外面上半及び内面下半のナデも粗く、粗製品の感を受ける。形態的に甕とするより、鉢とすべきかもしれない。数量的には、Aタイプとしたものが9点と最も多く、Bタイプ2点、Cタイプ2点、Dタイプ6点を数える。

中型甕(第54図43~50) 中型甕として認識したものは、口径15~18cm・器高16~20cmを測る。ここでは42点を確認し、うち8点を図示した。小型品と同様、基本的に体部外面はハケ目、内面は下半部をヘラ削り、上半部をナデもしくはハケ目、口縁部内面をハケ目の後、ヨコナデ調整によって仕上げるものが多い。口縁部の形態には、小型甕と同じA~Dタイプがあるほか、端部付近を内湾させるもの(Eタイプ; 48)や、口縁部が上方へ直立気味に立ち上がるもの(Fタイプ; 50)がある。数量的には、Aタイプとしたものが15点と最も多く、Bタイプ2点、Cタイプ6点、Dタイプ14点、Eタイプ4点、Fタイプ1点を数えた。なお、Fタイプとした50は、球形の体部から内湾気味に短く口縁部が直立しており、ここでは甕としたが壺と認識すべきかもしれない。また、これには体部外面に赤色顔料の塗布が認められる。

大型甕(第55・56図51~59) 大型甕として認識したものは、口径20cm以上・器高25cm以上を測る。完形品がわずかなため全形の判明する資料は少ないが、基本的にはフットボール形もしくは倒卵形の体部と外反してのびる口縁部からなる。また、体部外面をハケ目、内面は下半をヘラ削り、上半はヘラ削り、^(注7)ナデもしくはハケ目調整によって仕上げ、口縁部内面はハケ目の後、ヨコナデ調整を施す。41点を確認し、ここでは9点を図示した。口縁部の形態は、下記のとおり大きく4種類に分けられる。端部を上外方もしくは外方へつまみ出すもの(Cタイプ; 51~53・58)、端付近を内湾させるもの(Eタイプ; 54~56)、二重口縁状に一旦外半した後、屈曲して上外方へびるもの(Gタイプ; 57)。口縁部がラッパ状に大きく外反するもの(Hタイプ; 59)である。数量的には、Cタイプが25点、Eタイプが13点、G・Hタイプがそれぞれ1点確認された。なお、Hタイプとした59などは壺と認識すべきかもしれない。

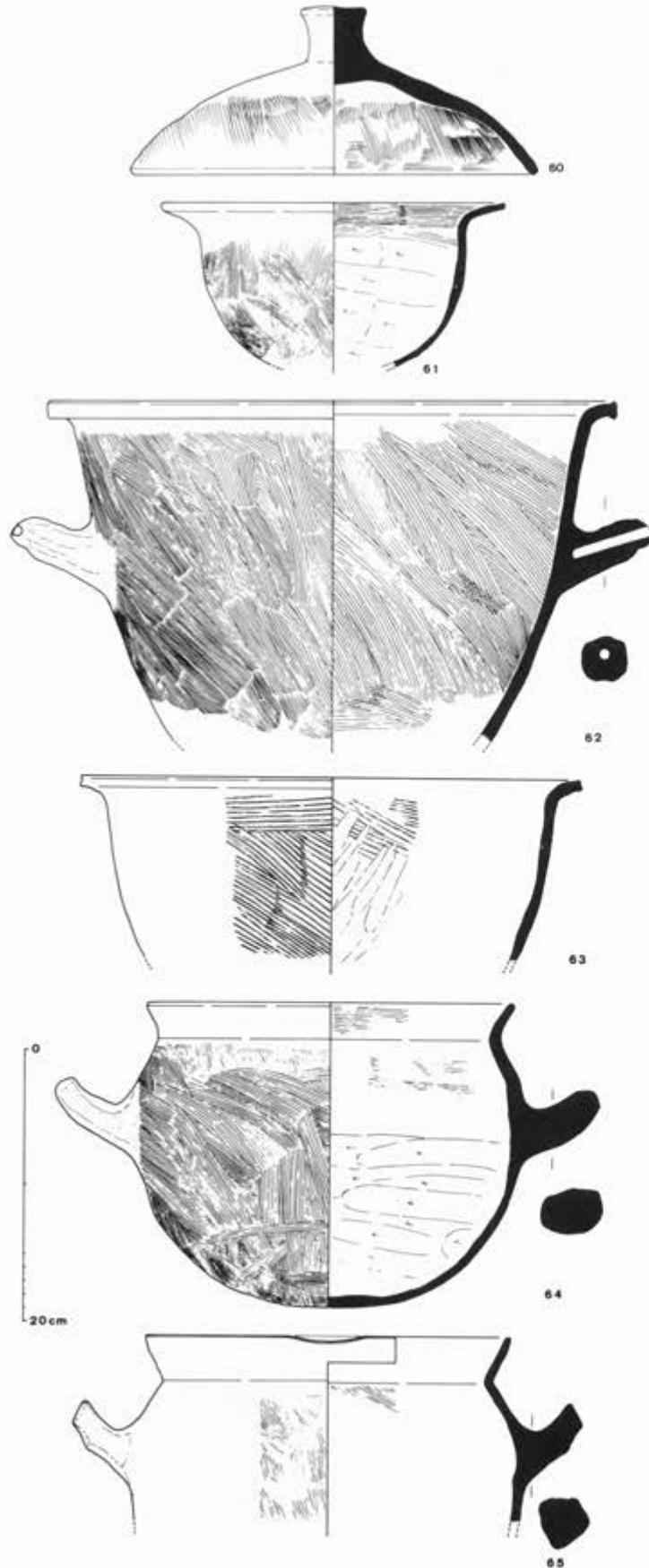
以上の中では、明らかに長大な胴部を有する、いわゆる長胴甕とされるものは抽出できない。ただ、数少ない完形品の一つである53などは、口径20cmに対し器高35.5cmを測り、あまり体部に張りが認められない点で、長胴系と考えることもできる。こうした形態のものを長胴系の甕と認識できるとすれば、口縁部のAタイプ25点中に3点、Bタイプ13点中に2点が確認される。

鍋(第57図61~65) 形態から鍋と判断したものは8点あり、3タイプのものが認められた(A~C)。

鍋A(61) 2点を確認し、うち1点を図示した。半球状の体部から水平近く屈曲してのびる口縁部を有するもので、口径25.3cm・器高12.8cmを測る。体部外面をハケ目、内面にヘラ削り調整を施す。

鍋B(62・63) 完形品がなく、底部の形態は不明であるが、内湾気味に斜め上方へ立ち上がる体部と、短く外反する口縁部を有する。口縁端部は上下にわずかに拡張される。3点を確認し、2点を図示した。62は、体部中位に一对の把手が確認され、その先端から径7mm程度の円孔が穿たれている。体部内外面とも縦方向のハケ目調整が施され、口縁部は横方向のナデによって仕上げられる。63は、口縁部から体部の一部を残す破片であるが、口径37cmに復原される。遺存部分では把手が認められないが、本来は付いていたと考えている。体部内外面とも目の粗いハケ目調整が施され、口縁部はハケ目調整の後、横方向のナデによって仕上げられる。

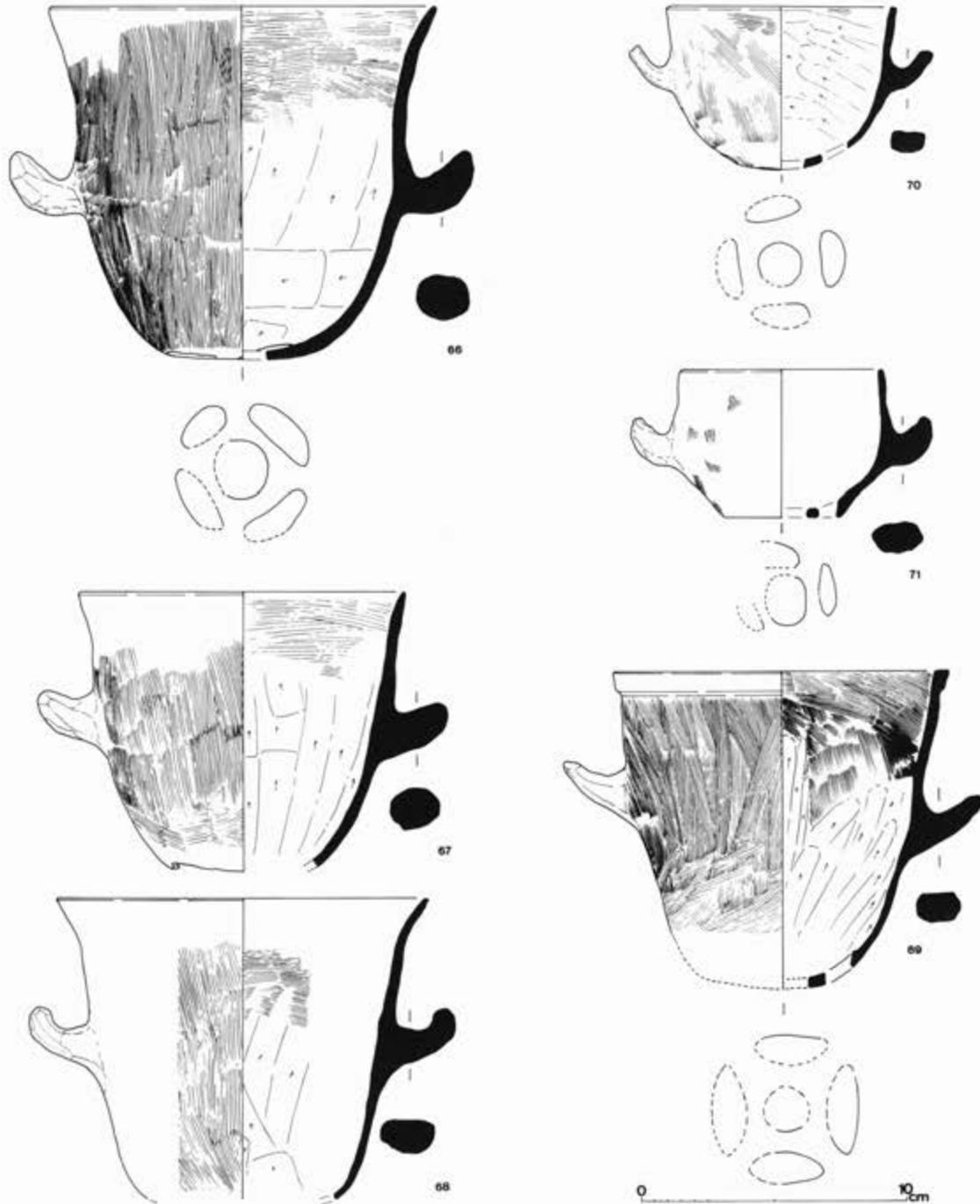
鍋C(64・65) 偏球状の体部から外反する口縁部を有し、体部中位やや上方に一对の把手が



第57図 土器実測図(8) 土師器6

確認される。形態の判明するもので3点を確認し、うち2点を図示した。ともに口径26cm前後・器高22.5cm前後を測り、基本的に体部外面にハケ目、内面下半に横方向のヘラ削り、上半にハケ目調整が施される。65には、口縁部に片口部を認めた。

蓋形土器(第57図60) 当初、高杯とも考えたが、器壁の厚さや脚台とは考えがたい突出部の形状などから、蓋ではないかと判断している。口径29.5cm・器高12.3cmを測り、傘形の体部と円柱状に上方に突出した後、若干広がり気味に終わるつまみ部分からなる。口径からみて、鍋もしくは後述する甌の蓋ではないかと考えているが、類例を知らない。体部は内外面ともハケ目調整が



第58図 土器実測図(9) 土師器 7

施され、上方突出部(把手部)はナデによって仕上げられる。2点を確認している。

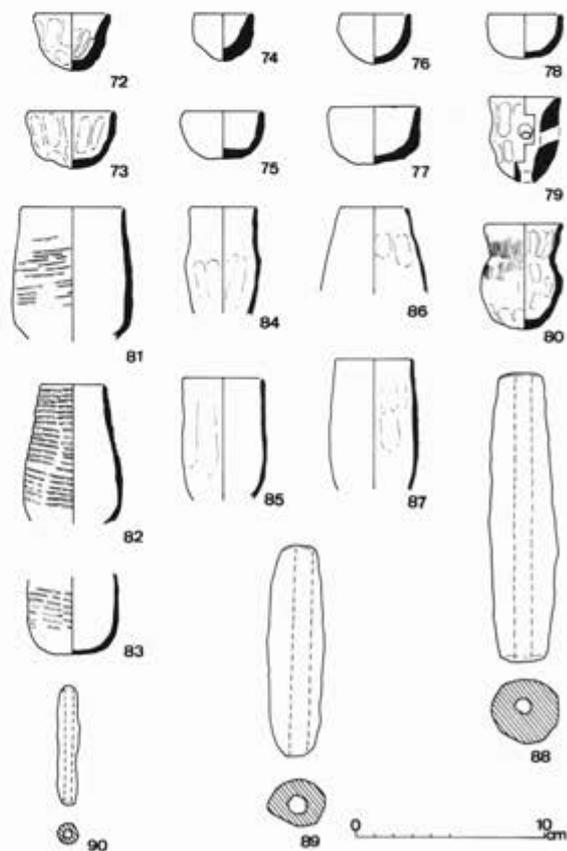
甌(第58図66~71) 円筒状もしくは椀形の形態をなし、底部に幾つかの蒸気孔を穿つものを甌と認識した。17点を確認したが、その形態から円筒形のものを甌A、椀形のものを甌Bとした。

甌A(66~69) 15点を確認した。やや丸みのある底部から斜め上方へ内湾気味に体部が立ち上がる。口縁部がゆるやかに外反するもの(甌A-1)と、口縁端部にタガ状の突帯をめぐらすもの(甌A-2)がある。確認されるものでは、いずれも底部の中心に円形、その周囲に4つの楕円形の蒸気孔を穿ち、体部中位に一对の把手を付す。甌A-1は14点を確認したが、ここでは3点を図示した(66~68)。66~68は、口径25~28cm・器高25~28cmを測り、全体に、口径と器高がほぼ同数値となるものから、やや器高が上回るものが多い。体部外面に縦方向のハケ目、内面には口縁部付近に横方向のハケ目、それ以下にヘラ削りを施す。甌A-2はここに図示した1点を確認のみである(69)。口径20cm・器高19.2cmを測り、基本的に甌A-1と同様の調整手法によって仕上げられるが、体部外面のハケ目は非常に細かい。

甌B(70・71) ここに図示した2点を確認のみである。70は、口径17cm・器高12.5cmを測り、丸みのある底部から上外方へ直線的に体部及び口縁部が立ち上がる。底部の中心に円形、その周囲に4つの楕円形の蒸気孔を穿ち、体部中位に一对の把手を付す。体部外面はハケ目、体部内面にヘラ削りを施し、口縁部内面に一部ハケ目調整を認める。71は、口径15cm・器高11.5cmを測り、平らな底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は上方へ直線的にのびる。底部の中心に円形、その周囲に3~4つの楕円形の蒸気孔を穿つようであるが、遺存状況が悪く、明らかでない。体部中位に一对の把手を付す。磨減が著しく、調整手法の観察は困難であるが、体部外面にハケ目、内面にヘラ削りの痕跡を確認することができる。

ミニチュア土器(第59図72~80) 総数で21点を確認し、9点を図示した。その大半は手捏ねによる小型の椀形を呈する(19点)。中に砲弾形の体部を呈し、体部中位及び底部に円形の孔を穿つもの(79)や、小型丸底壺状の形態を呈するもの(80)がそれぞれ1点ずつ認められた。

製塩土器(第59図81~87) 細片となったものを除き、形態の判明するもので38点を確認した。いずれも器壁は1~2mmと薄く、丸味のある底部から直立気味に体部及び口縁部が立ち上がるものや、内傾気味に立ち上がり、



第59図 土器実測図(10) 土師器8

下膨れとなるものなどがある。また、体部外面にタタキを施すもの(81~83; 15点を確認)とナデによって仕上げるもの(84~87; 24点を確認)がある。

土錘(88~90) 土錘は、総数で5点を確認した。長さ15cm・径3.6cmの大型品(88)、長さ11.2cm・径3cmの中型品(89)、長さ6.4cm・径1.2cmの小型品(90)がある。

S D 95062出土資料には以上のほかに移動式竈の破片があるが、小片のため図示できなかった。

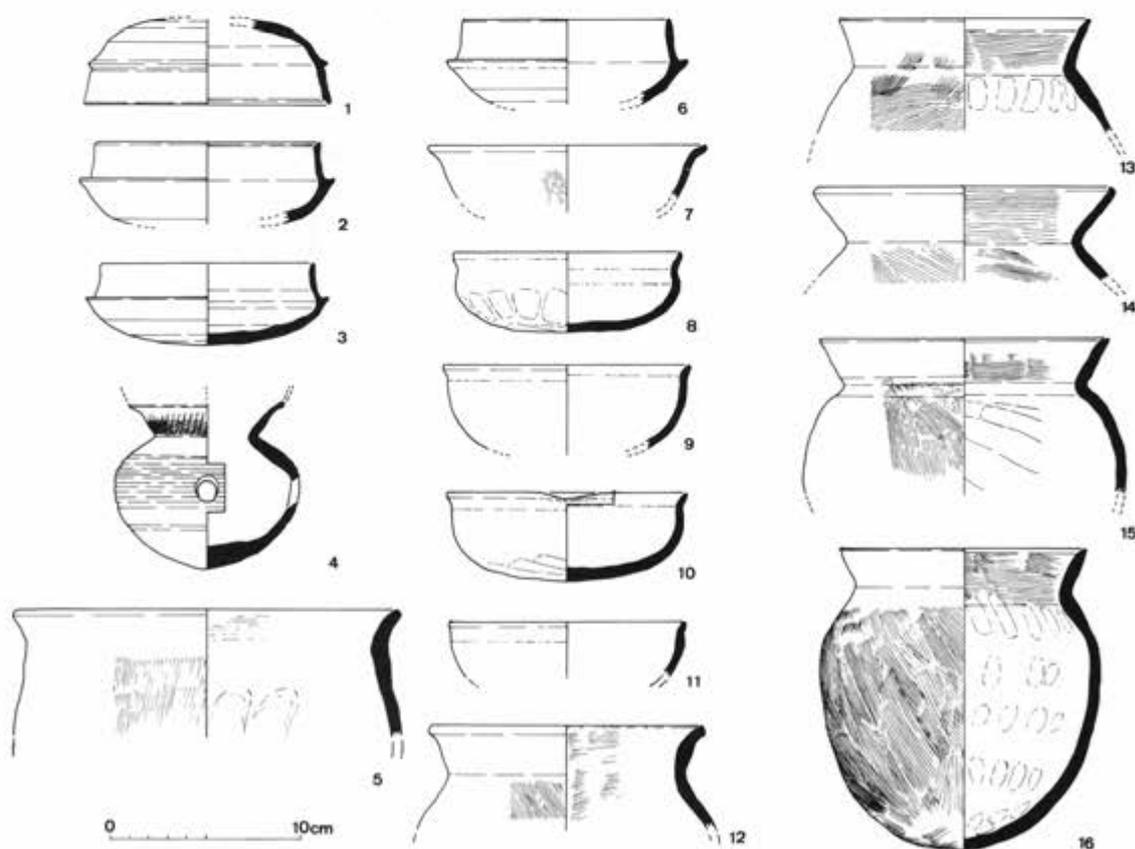
②その他の遺構出土土器(第60図)

遺構出土土器に関しては、上記のS D 95062以外から主なものを第60図に一括して図示した。時期的には、S D 95062とほぼ同時期と考えられるものから、これを前後するものを含む。

S D 95044出土遺物(1・2・16) 1は、須恵器杯蓋で、丸味のある天井部から突帯状の稜を経てやや開き気味に口縁部が下がる。口縁端部内面に面を有する。口径13cmに復原される。2は、須恵器杯身の口縁部片で、口縁部の立ち上がりは大きく、端部内面に凹面をもつ。口径11.8cmに復原される。16は土師器小型甕で、口径13cm・器高16.1cmを測る。やや縦長の体部から外反する口縁部をもち、口縁端部はわずかに外側につまみ出され、内面に凹面を有する。体部外面は縦方向のハケ目、内面はナデ、口縁部外面はナデ、内面は横方向のハケ目によって仕上げられる。

S D 95045出土遺物(3) 3は、須恵器杯身で、浅身の体部から口縁部が高く立ち上がる。口径11.3cm・器高4.3cmを測る。

S D 95053出土遺物(4・5・8~10・13~15) 4は、須恵器甕で、口縁部を欠く。頸部に波



第60図 土器実測図(11)

状文、体部中位に粗いカキ目を施す。8～10は、土師器杯で、口縁部が短く外反する。先のS D 95062出土資料の土師器杯Aに相当する。8は、口径12cm・器高4.4cmを測り、口縁端部は外反した後、わずかに上方へつまみ上げる。9は、口径13cmに復原される口縁部片であるが、深身で半球状の体部をなす。10は、口径12.7cm・器高4.7cmを測り、口縁の一部を片口状に外方へつまみ出す。5・13～15は、土師器甕である。5は、大型に属する甕の口縁部片で、口径20.3cmに復原される。内傾して立ち上がる体部上半からゆるやかに短く外反する口縁部を有する(上述のS D 95062出土資料にみるDタイプの口縁形態)。13～15は、中型甕に属し、口径15～16cmに復原される口縁部片である。それぞれで異なった口縁部の形態をなす。13は、外反して上外方へのびるもので端部は丸くおさめる(同Dタイプの口縁形態)。14は、「く」の字状に外反し、端部は内側につまみ出して終わる(同Aタイプの口縁形態)。15は、「く」の字状に外反し、端部を外側へつまみ出し、上方に面をなす(同Cタイプの口縁形態)。

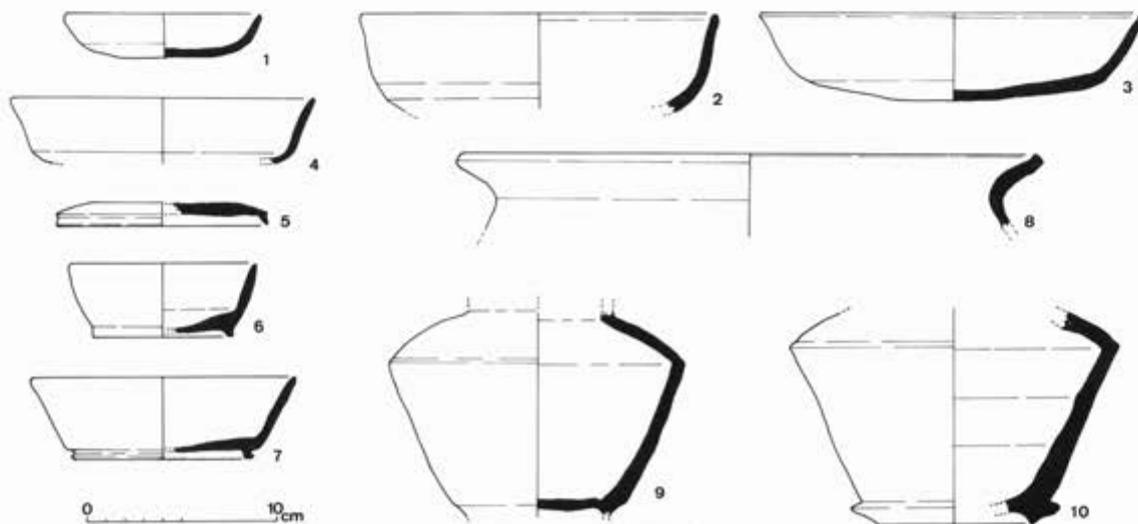
S D 95056出土遺物(11・12) 11は、土師器杯の口縁部片で、口径12.7cmに復原される。丸味のある体部からわずかに外反する口縁部をもつ。12は、土師器甕の口縁部片である。中型甕に属し、口縁部は端部付近で外側へつまみ出される。口径14.2cmに復原される。

S D 95064出土遺物(6・7) 6は、須恵器杯身の口縁部片で、口径11cmに復原される。口縁部の立ち上がりは大きく、端部を丸くおさめ、内側に面をなす。7は、土師器杯ないしは高杯の口縁部片と考えられ、上外方へのびる杯部上半から短く外反する口縁部を有する。口径14.9cmに復原される。

(2)奈良時代の土器(第61図)

奈良時代の土器類は、主に遺構埋土中(S K 95030など)から出土したが、量的には決してまとまったものではない。ここでは、S K 95030から出土した土器を中心に主なものを示した。时期的には、8世紀後半を中心とすると考えている。

S E 95030出土土器(1・2・4・8・9) 1は、土師器皿で、口径10.2cm・器高4.3cmを測る。丸味のある底部から短く立ち上がる口縁部を有する。底部外面はナデ、口縁部はヨコナデによっ



第61図 土器実測図(12)

て仕上げられる。2は、土師器杯の口縁部片である。平らな底部から屈曲して立ち上がる口縁部は、端部付近でわずかに外反し、端部は内側へ折り返され肥厚する。口径18.5cmに復原される。4は、須恵器杯身の口縁部片で、口径15.9cmに復原される。平らな底部から上外方へ口縁部が立ち上がり、端部付近はわずかに外反する。8は、土師器甕の口縁部片で、口径30.4cmに復原される。強く外反する口縁部は、端部が内側へ折り返され肥厚する。9は、須恵器壺体部片で、口縁部及び高台部を欠くが、広口壺ないしは長頸壺の体部と考えられる。

その他(3・5～7・10) 3は、土師器杯で、平らな底部から上外方へ口縁部が立ち上がり、端部は内側へ折り返され肥厚する。口径20.2cm・器高4.7cmを測る。ピット1から出土した。5～7は、包含層から出土した。5は、須恵器杯蓋で、つまみ部を欠くが、口径10.9cmに復原される小型品である。6・7は、須恵器杯身で、いずれも底部に高台を付す。6は、口径9.6cm・器高4cmに復原される小型品である。7は、口径13.9cm・器高4.5cmを測り、高台は外方へふんばる。10は、須恵器壺で、口縁部を欠くが、9と同様に肩の張る長頸壺ないしは広口壺の体部片と考えられる。ピット2から出土した。

(3)まとめ—土器類—

今回の弓田遺跡の発掘調査では、これまで南山城地域で出土資料の少なかった古墳時代後期初頭(6世紀初頭)を中心とする土器類が多量に出土した。ここでは整理期間の関係からその様相を十分に整理・検討したわけではないが、以下、若干気付いた点を述べておく。

①まず、土器群の時的な面に関して、須恵器、特に杯身・杯蓋類では6世紀初頭頃(陶邑TK47を前後する頃)の特徴をみるものが主体をなすと考えられる点については先に述べたとおりである。時期の把握に関して問題となる共伴した埴輪資料については、後述するように、大半の資料がいわゆるV期に位置づけられる点で、両者の年代観にほぼ矛盾はないと判断される。

②一方、土師器類に関しては、これまで南山城地域では数少なかった時期のまとまった資料といえる。特に、布留式以後、山城・近江といった7・8世紀に旧国名をもって呼称される地域ごとの特性をもった土師器(特に煮炊具を中心に)が出現するまで(認識されるまで)のものであり、今後、南山城地域のこの時期の土師器の様相を解明するうえで極めて重要な資料といえる。

③全体の器種構成表を改めて付表6・7に記した。あくまで、整理途中において器形の判明し

付表6 個体数一覧表

| | 個体数 | % |
|-------|-----|-----|
| 杯蓋 | 6 | 14 |
| 杯身 | 11 | 26 |
| 有蓋高杯蓋 | 2 | 5 |
| 有蓋高杯身 | 8 | 19 |
| 無蓋高杯身 | 1 | 2 |
| 甕 | 2 | 5 |
| 小型壺 | 3 | 7 |
| 小型甕 | 3 | 7 |
| 大型甕 | 7 | 16 |
| 須恵器合計 | 43 | 100 |

た資料に限って求めた数字であり、大まかな把握として理解すべきである。ただし、全体のなかで杯類、高杯類、甕類がそれぞれ30%前後を占めている点は、その他の破片をみても変更を必要としないと理解している。以下、この3者について、みることにする。

④まず、上記のように、7・8世紀に地域的な特色を持つ煮炊具としての甕を中心とした本資料の特徴についてみる。甕は、体部外面にハケ目、内面は下半部にヘラ削り、上半部はヘラ削りもしくは強いナデが施されるといった点で大半が共通する調

整手法によっている。これは、前段階の布留式土器の成形技法が踏襲されたと理解される。また、その法量から大・中・小の3種類があり、それぞれで口縁部の形態から数種類に細分した。口縁部の形態に関しては、特異な例を省いて、基本的に口縁端部を、上方へつまみ上げ気味に終わるもの(A・Eタイプ)、外下方へつまむもの(Bタイプ)、上外方へ強くつまみ出すもの(Cタイプ)、端部をなでて丸くおわるもの(Dタイプ)の4者に分けられる。それぞれの形態の出現頻度は、法量ごとに差異が認められるようで、ほぼ小・中型甕ではA・Bタイプが主体を占めるのに対して、大型品ではC・Eタイプが主体を占めるといった傾向を指摘することができる。

⑤また、甕の口縁部の形態といった面では、地域的な問題としうる点がある。南山城地域では数少ないこの時期の対比資料として指摘できる八幡市内里八丁遺跡出土資料がある。ここの資料は、その多くが堅穴式住居跡からの出土品であり、量としては多くはない。しかし、内里八丁遺跡出土の土師器甕では、布留式土器のように口縁端部内面が肥厚気味のもものが若干認められるほかは、上記Cタイプとした形態の口縁部をなすもので占められるといった傾向を指摘することができる。すなわち、こ

のCタイプの口縁形態の甕は、少なくとも弓田遺跡と内里八丁遺跡では共通すると理解される。将来、南山城地域のこの時期の土師器甕における地域色として把握される可能性をもつといえるだろう。なお、この内里八丁遺跡と弓田遺跡の両遺跡の甕は、このように形態的には類似するものが存在するが、その胎土及び器壁の厚さなどの点で明瞭な差異を認めることができる。こうした意味では、両者は共通した形態を指向しつつも、異なった集団によって製作されたことは明らかである。

⑥土師器杯・高杯類に関しては、他地域のデータではあるが、古墳時代中期後半から後期において、須恵器が日常雑器として導入されるのに伴って、急激に減少する傾向が指摘されている^(注5)。また、今回出土した杯・高杯類の形態は、これに対して把握した6世紀初頭という時期の一般的な杯・高杯類に比べると、やや古相を呈しているようでもある。こうした面からは、今回の土師器群では、土師器杯・高杯類が他地域に比して古相を呈するものが存在すること、器種構成の中で大きなウェイトを保っていること、の2点が指摘される。

⑦こうした土師器杯・高杯類にみる様相がある意味では、この地域の地域色といえるかもしれない。しかし、先の内里八丁遺跡などでは、その出土量及び形態的な面で他地域の様相と大差な

付表7 器種別個体数一覧表

| | 個体数 | 器種内% | % |
|--------|-----|------|------|
| 杯A | 85 | 80.2 | 29.1 |
| 杯B | 9 | 8.5 | |
| 杯C | 7 | 6.6 | |
| 杯D | 1 | 0.9 | |
| 杯E | 4 | 3.8 | |
| 高杯A | 23 | 24.7 | 25.5 |
| 高杯B | 58 | 62.4 | |
| 高杯C | 1 | 1.1 | |
| 高杯D | 8 | 8.6 | |
| 高杯E | 3 | 3.2 | |
| 小型丸底壺A | 3 | 42.9 | 1.9 |
| 小型丸底壺B | 4 | 57.1 | |
| 壺A | 11 | 91.7 | 3.3 |
| 壺B | 1 | 8.3 | |
| 鉢A | 5 | 83.3 | 1.7 |
| 鉢B | 1 | 16.7 | |
| 大型甕 | 44 | 39.3 | 30.7 |
| 中型甕 | 44 | 39.3 | |
| 小型甕 | 24 | 21.4 | |
| 鍋A | 3 | 33.3 | 2.5 |
| 鍋B | 3 | 33.3 | |
| 鍋C | 3 | 33.3 | |
| 蓋形土器 | 2 | | 0.6 |
| 甌A | 15 | 88.2 | 4.7 |
| 甌B | 2 | 11.8 | |
| 土師器合計 | 364 | | 100 |

いようであり、現状では弓田遺跡の特異性のみが注目され、別の要因を考える必要性を感じず。すなわち、「5. まとめ」の章で述べるように、弓田遺跡資料が、単に日常に使用した土器類ではなく、土師器杯・高杯類が多用された何らかの特異な行為(祭祀的なものか)に伴って投棄されたものとしての可能性や、須恵器のみからは読みとれない比較的時期幅のある資料としての可能性などを想定する必要がある。しかし、伴出している埴輪や須恵器の資料が単一時期のものと理解されている点などからみて、後者の可能性は低いと判断せざるをえない。ここでは、埴輪を伴い、土師器杯・高杯類を多用した何らかの特異な行為が行われた後に投棄された一群の土器と理解しうることを指摘しておきたい。

⑧なお、先の内里八丁遺跡出土資料の中には、一見、韓式系土器もしくはその影響下で作成されたのではないかと思えるものが数例存在する。こうした観点から、弓田遺跡出土資料をみた場合、明らかにそれと指摘しうるものはない。ただ、鍋とした第57図62などに見られる把手の先端部から円形の孔が穿たれている例などはその可能性がある。ただ、それ以外は、明確に韓式系土器の影響を認めうる資料は存在しない。

(森下 衛)

b. 埴輪

弓田遺跡B地区出土の埴輪は、整理箱85箱ほど出土している。大部分がS D95062の出土であるが、他にS D95044・45、S K95051、S H95054からも出土している。S D95044・S D95062で出土したもののうち、接合する遺物が存在している。ここではS D95062を中心に器種の代表的なものを報告する。

(橋本 稔)

(1) 円筒埴輪(第62・69図、図版第62)

① 形態と法量

完形に近いものは1点だけであるが、破片なども含めて観察すると、形態には底部からゆるやかに外反するタイプ(1・2・3・5・6・8・9)と、底部からまっすぐ立ち上がるタイプ(4・7)がある。また、口縁部は、胴部からまっすぐ上がるもの(1・2・3・5・6・8)と、やや屈曲し外反するものがある。器高の平均は42.1cm、口縁部径22.0~32.6cmで平均25.9cm、底部径14.5~24.0cmで平均16.9cmである。円筒埴輪の格段は、3条のタガによって4段に区切られ、透孔は第2段、第3段に交互に配されている。第1段の高さは、他の段に比べて高い。

② 内外面調整

外面調整は、全個体とも第1次調整にタテハケを施し、タテハケだけのものが多い(2・3・5・9・11・12・13)。この中には、第1段をヘラ状工具による強いナデで調整するもの(13)や、第2段付近から左上がりのナナメハケのあと、右上がりのナナメハケを施すもの(9)がある。第2次調整としてヨコハケを施すもの(1・4・7・8・10)もある。完全に復原できた(1)は、第2段・第3段にB種ヨコハケを施している。また、7は、第2段から第5段にわたりヨコハケを



第62図 埴輪実測図(1)

施し、第4段にはB種ヨコハケ、第2・3段はA種ヨコハケを施している。

内面調整は全体にわたりタテナデによって調整され、ユビオサエの痕がタガの内面や基部付近に残る。第3段から第4段にわたりタテハケ(1・3)、第2段から第4段にタテハケ(5・13)、口縁部付近にヨコハケ(4)をそれぞれ施すものがある。

③口縁部の形態

口縁部が直線的に立ち上がる直口系(A)

A 1 端面が水平のもの(1・11・12)

A 2 端面が外傾するもの(3・6)

A 3 端部が肥厚するもの(8)

A 4 外面に突帯を貼りつけているもの(7)

端部が外方に屈曲する屈曲系(B)

B 1 やや屈曲度が弱く端面が水平のもの(4)

④タガ

タガは、第1次調整後に貼り付けている。貼り付けるときのヨコナデの強さによって形態もかなり変わってくる。タガ下縁の不完全な成形のために、接合痕が残るものが多い。とりわけ、第1段タガに顕著にあらわれている。タガの断面形状を以下のように分類できる。

a 側面幅が広く、ほぼ台形のもの(4)

b 側面幅が広く、下側の突出度が少ない「M」字形のもの(1・3・5・6・7・8・9・11・12)

c 側面幅がやや広く、上側の突出度が少ない台形のもの

d 側面幅が狭く、台形に近い「M」字形のもの(13)

e 上面長と下面長がほぼ等しく、先端が鋭い三角形のもの(10)

f 上面長と下面長がほぼ等しく、先端がやや丸みを帯びた三角形のもの(2)

⑤透孔

透孔はすべて円形である。第2段と第3段の透孔は直交する方向に穿たれている。孔を穿つところにその位置を記してから穿孔されている。

⑥ヘラ記号

ヘラ記号は、記号的なもの(3)がある。施文位置は、口縁段か第5段の外面である。条痕幅は1～2mmを測る。

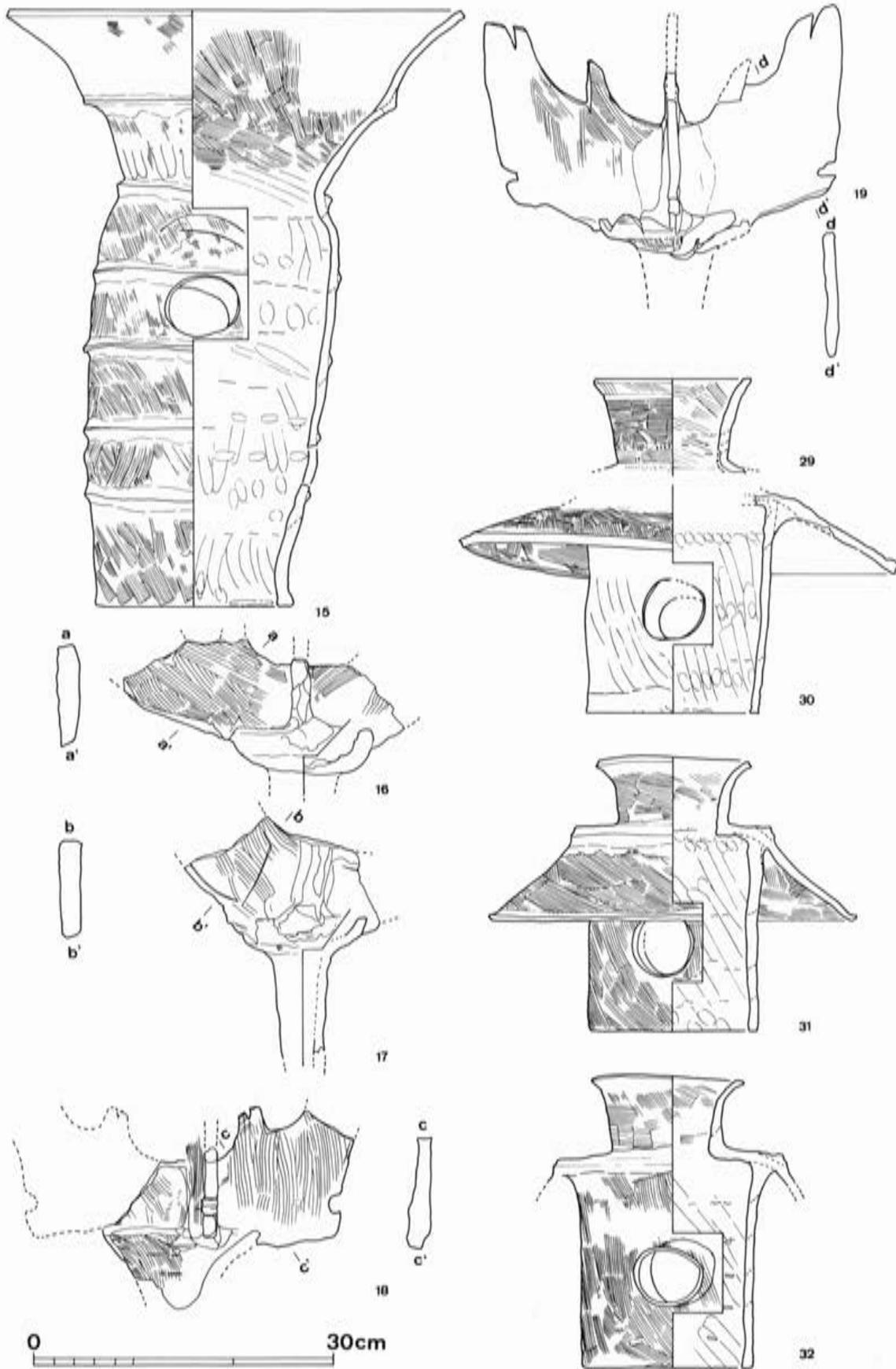
⑦焼成

硬質であるが軟質のものも多く含まれる。器表は、淡赤褐色～淡黄褐色を呈し、黒斑を有するもの(4・9・10)もある。

(久田 亨)

(2)朝顔形埴輪(第63図、図版第62)

朝顔形埴輪は円筒埴輪に比べて数は少ない。



第63図 埴輪実測図(2)

14 朝顔形埴輪(口縁部径37.4cm・残存高16.3cm)

口縁部以下を欠損している。1次口縁(頸部)は、くびれ部から直立ぎみに立ち上がり、大きく外反して内面端部がほぼ水平に近くなる。外面はタテハケ、内面はヨコハケが施されている。乾燥の後、1次口縁部内面に再び粘土紐を積み上げ2次口縁を作る。1次口縁と2次口縁との接合部では、内面に強いヨコナデが施され、外面の屈曲部はそのまま突帯となる。端部はヨコナデが施されている。

15 朝顔形埴輪(口縁部径45.5cm・円筒部最大径24.6cm・高さ51.2cm)

6条のタガをめぐらせる。円筒部の各段の幅は、普通円筒と比べて狭いが、第1段はほぼ同じ高さである。くびれ部の度合いは少なく、くびれ部の直径が円筒部とあまり変わらない。第6段は、くびれ部からやや立ち上がりながら外反している。外面調整は、全面にわたりタテハケが施され、第6段はタテナデが施される。内面調整は、ユビナデが主体で、朝顔部はナデの後にナナメハケが施されている。タガは突出度が小さく、三角形に近い台形をなす。円形の透孔が第2段・第4段に穿たれている。ヘラ記号が第5段に記されている。

(3)蓋(第63・64・67図、図版第67・68)

16 立ち飾り

4枚の飾り板を十字に合わせた後、飾り板受け部に載せて接合している。飾り板は上部を欠損している。飾り板に文様はなく、ナナメハケを施している。飾り板受け部は椀状を呈し、その直径は12cmを測る。軸部は欠損している。胎土は密、焼成はやや軟質、色調は淡茶白色を呈する。

17 立ち飾り

飾り板と飾り板受け部との接合部は、それぞれの軸線がわずかにずれている。飾り板は上部が欠損している。飾り板はハケメの後、文様が施される。文様は縁取り線が残る。飾り板受け部は口径13cmを測る。浅い皿状をなし、口唇部は角頭状を呈する。水平な端面をもち、ナデで仕上げられている。軸部は残存11.5cmで下端は欠損している。胎土は1mm大の砂粒を多く含む粗い。焼成はやや硬質、色調は灰褐色を呈する。

18 立ち飾り

飾り板は大半が欠損している。上端を直線的に裁断した後、中央に小さな「V」字形の切り込みを入れた内側縁が観察できる。飾り板外縁にも、丸みを帯びた切り込みを入れて、外側の上下縁を作り出す。飾り板は縦基調のハケメが施され、文様はない。飾り板受け部は口径16cmを測る。外反しており、軸部は欠損している。胎土は1mm大の砂粒を多く含む粗い。焼成はやや硬質、色調は灰褐色を呈する。

19 立ち飾り

対向する2枚の飾り板間は35.6cmを測る。文様はなく、一部にハケメが残る。縁を含めた飾り板の外來線は「J」字板の外形に切り込みを入れて作られている。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質。色調は淡黄白色を呈する。

20 立ち飾り軸部(直径6.0cm・残存高16.2cm)

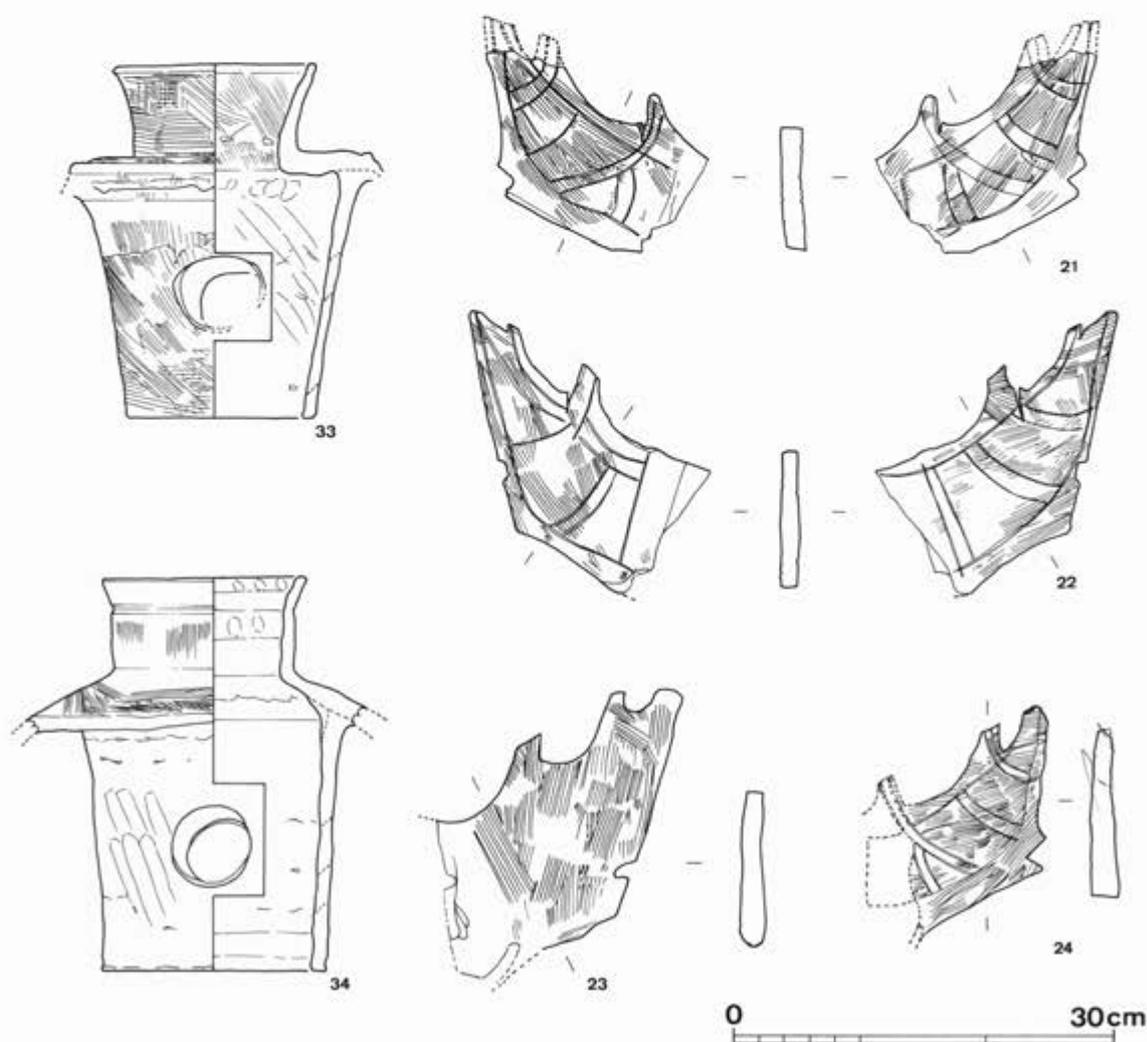
厚さ1.0~1.8cmの器壁をもち、円筒形をなす。上端はわずかに外反する。粘土板で作られ、内面に接合痕が残る。外面は縦位のナデが施されている。胎土はやや粗く、0.1~0.2mm大の砂粒を含む。焼成はやや硬質で、色調は淡灰褐色を呈する。

21 立ち飾り

逆台形の粘土板に三角形の切り込みを入れて突起(鱗)を作る。外形に沿って両側に縦に線刻を入れ、飾り板の接合部付近に一本の横線を渡し、縁取線を終わらせている。内側の二つの突起(鱗)から二本一組の線を外側の縦の線まで円弧線を引き、中間に一本線を平行に引く(もう片方の面は二本引いている)。また、下側の突起から出た二本線の途中から別の二本線を引いている。描き直しの痕が両面に見られる。胎土は密、焼成は良好。色調は茶褐色を呈する。

22 立ち飾り

両面で文様が違う。縁取り線は頂部の二つの突起から1本ずつ外形に沿って引かれ、下端には直交する縦線が引かれている。縁取り線の内側に2本一組の円弧線が三組引かれている。円弧線



第64図 埴輪実測図(3)

が縦線で一部消え、円弧線を引いた後に下半分の縦線が一部引き直されている。片面は、縁取り線が外形に沿って縦に引かれ、内側は下の突起(鱗)を境にして二組の円弧線が引かれている。最後は1本のみで、縦線の終わりと交わる。胎土は密、焼成は良好、色調は黄土白色を呈する。

23 立ち飾り

文様はない。片面はていねいなタテハケ、その裏面には不定方向の断続的なナナメハケが施されている。「J」字板の外縁は切り込みにより鱗を作り出す。飾り板と飾り板受け部との接合剥離面とナデつけ痕が残る。胎土は密、焼成は良好、色調は黄灰色を呈する。

24 立ち飾り

「J」字板の外縁に切り込みを入れて飾り板を作る。飾り板には文様が描かれる。その意匠は、外形に沿って1条の縁取り線を入れ、この縁取り線の内側に2本一組の円弧線を3本配する。最下の橋渡し線(帯)には下外方向に展開する支線帯が分岐する。飾り板受け部との接合剥離面が少し残っている。胎土は密、焼成は良好で硬質である。色調は淡茶褐色を呈する。

25 立ち飾り

外側に1か所切り込みを入れ、内側に2つの突起(内下側の方には切り込みがあり)を切り出す。文様は外形に沿って1条を引き、縁取り線内に数条の円弧線を橋渡しして入れる。橋渡し線は、2本単位の帯状表現と、1本線を交互に入れる。胎土は粗く、1～2mmの砂粒を多く含む。焼成は良好である。色調は、淡黄土色を呈する。

29・30 台部(口径15.7cm・笠部径43.6cm・基部径17.2cm)

軸受け部は口径15.7cmを測る。口唇部は水平な端面をもち、やや外反する。外面は粗いナナメハケの後細かいヨコハケを施し、内面は粗いナナメハケで調整する。口縁部はナデられている。笠部上半部は突帯で屈曲して水平となる。突帯から下の笠縁部は斜め下方にのびる。笠部上半部はナデを施し、下半部は笠部の外側から内側へかけて斜めにハケメが反時計回りに施されている(斜放射状ハケ)。笠部下半部は、高さ14.6cmを測る。1条の凹線が笠縁端部にめぐる。笠部の一部には黒斑がみられる。円筒形台部と笠部との接合部には台部の外側にのみ補強の粘土痕が残る。台部は正円筒状で、内外ともに下から上方向のナデで仕上げられている。内面は接合痕とともにユビオサエの痕跡が残る。胎土はやや密、焼成はやや硬質、色調は淡茶灰色を呈する。

31 台部(口径15.7cm・笠部径43.6cm・基部径16.8cm・高さ27.6cm)

軸受け部は、口縁部がやや外反し、口唇部はヨコナデが施される。外面にはナナメハケを施し、内面には一部ハケの痕跡が残る。笠部上半部は、台部接合部に施された突帯を境として水平となる。笠縁部は、突帯から下は下方に直線的にのびる。笠部上半部にはナデを、下半部には左上方向のナナメハケを反時計回りに施す(上位から観察すると斜放射状を呈する)。笠部縁端部は方頭形をなし、ナデを施す。笠部内面には斜位また縦位のハケメを施す。台部との接合部は、台部の外側に補強の粘土痕が残る。台部は正円筒状をなし、中位に円孔を向かい合う位置に2孔穿つ。外面はナナメハケ、内面は下から上方向に左上方向のタテナデを施している。ユビオサエの痕跡が笠部との接合部に残る。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質、色調は淡黄褐色を呈する。

32 台部(口径15.2cm・基部径17.0cm・高さ29.3cm)

笠部下半部を欠損する。軸受け部は口縁部がやや外反する。外面にはヨコハケの後にナナメハケを施し、内面には粗いナナメハケが施される。口縁部はナデによって仕上げられている。笠部上半部は突帯を境として水平をなす。笠上半部は、内外の一部にハケメが残る。台部と笠部の接合部にはナデ痕跡が残る。円筒形台部は正円筒状をなし、6段の粘土の積み上げ痕が残る。内面は下から上方向のナデが残り、外面は斜めまたは縦方向のハケメが残る。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質、色調は淡黄褐色を呈する。

33 台部(口径15.9cm・基部径14.6cm・高さ27.9cm)

軸受け部はやや外反し、口唇部はナデによって仕上げられ、やや丸味を持つが、ほぼ水平な端面を持つ。外面はタテハケを施した後、ナナメハケまたはヨコハケで仕上げる。内面は粗いナナメハケで仕上げ、口縁部はナデによって仕上げられている。笠部上半部は基底からの高さ21cmのところ約6cmの幅を持ち、ほぼ水平に形作られ、台部接合部から下の笠部下半部は斜めに下がるようであるが、この部位はほとんど残っていない。笠上半部はハケメ、台部接合部付近の肩はナデによって仕上げられているために角ができています。台部は、基底よりも笠部との接合部の直径が約6cm大きい逆台形状の側面形で、内面は下から上へのナデによって、外面は斜め方向のハケメによって仕上げている。胎土はやや粗く、焼成はやや硬質。色調は、淡茶灰色を呈する。

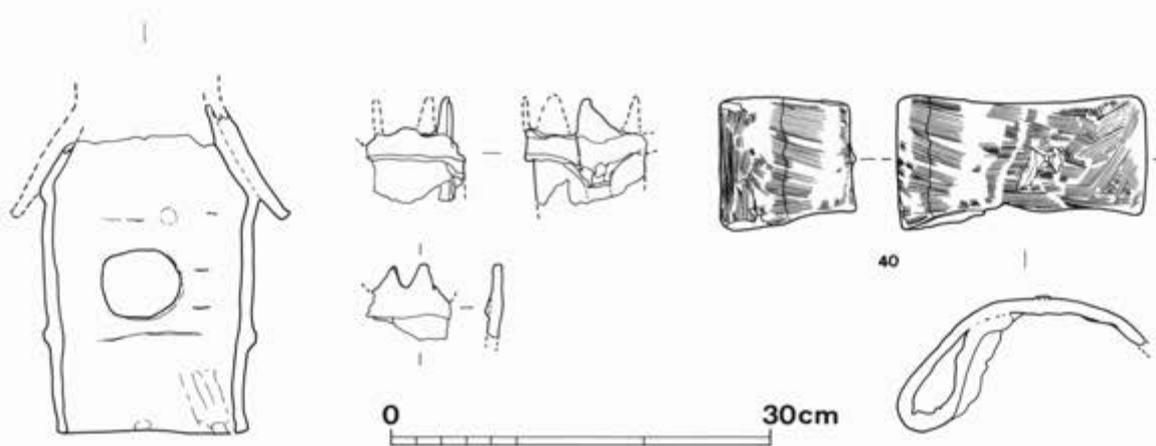
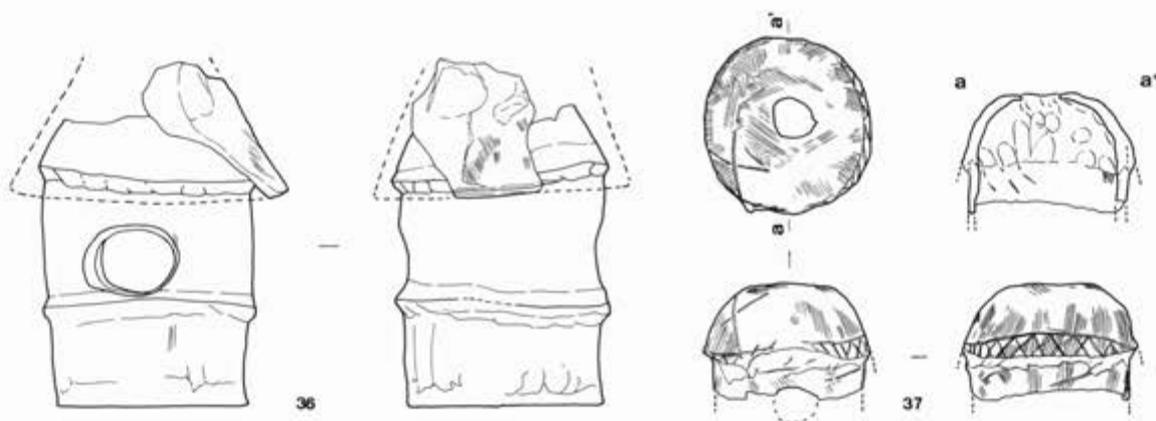
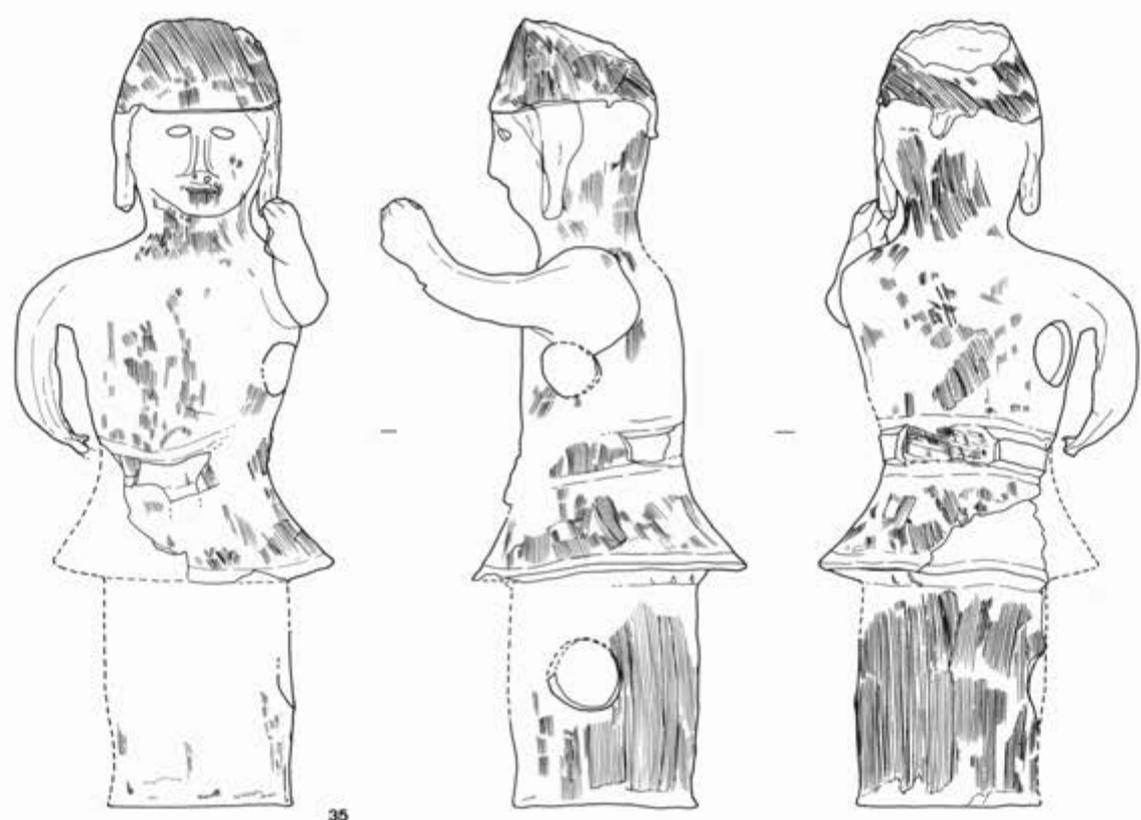
34 台部(口径16.0cm・基部径17.5cm・高さ31.2cm)

笠部下半部は欠損している。軸受け部口縁部のみ外反する。その屈曲部に1条の凹線がめぐる。外面はタテハケを施し、内面はユビオサエの痕跡が残る。笠上半部の外面にはハケメが残る。内側に台部と笠部の接合部付近に補強の粘土痕が残る。台部の形状は正円筒状をなす。粘土の積み上げ痕が4段残る。外面は下から上方向にナデによって仕上げている。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質、色調は淡茶褐色を呈する。

(4)人物埴輪(第65・67図、図版第63・66・68)

35 人物埴輪(高さ62cm)

頭部に帽子状のかぶり物が表現され、みずらを結って正立した男子像である。左手は指をそろえて前方に挙げ、右手は腰の近くに垂らしている。粘土帯の貼りつけによって腰帯を表わし、スカート状に裾が広がる装飾性のない衣服を着している。襟及び袖の表現を欠き、腕・首は衣から何の界線もなく連続的に造られている。胴部の側面(脇の下付近)に直径4cmの円孔がある。台部には、人物の前後方向と直交する位置に横方向の透孔があり、衣の裾の下縁の位置のところに台形のタガが1条めぐる。人物部分も、全体に断続的なタテハケで仕上げられており、衣の裾のみヨコナデが加えられている。スカート状に開く衣服の裾と体部上半は連続して製作され、別に製作された円筒形台部上端に載せるように接合する。接合面には顕著なタテナデが施されている。外面には縦位の断続的なハケメが施され、内面はナデで仕上げられている。胎土はやや密で、焼成はよく、硬質である。色調は、淡黄褐色を呈する。



第65図 埴輪実測図(4)

36 スカート(衣の端)(最大径20cm・腰部径17.5cm)

2本の沈線が腰部にめぐる。外面はタテハケで仕上げ、内面は粘土帯の接合のナデ付けのみで、台部との接合痕が残る。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質である。色調は淡灰褐色を呈する。

37 武人埴輪(最大径13.7cm)

頭部だけで衝角付冑を表現している。外面に「×」字状の線刻を施し、冑の三角板及び覆輪を表している。胎土はやや密で、焼成はやや硬質である。色調は淡黄褐色で、一部に黒斑がある。

38 冠

1つの山形の飾りのみが残るが、他にも4か所折損痕が認められる。山形飾りの下には鉢巻状の帯状表現が段差によって作り出されており、結束表現を欠くが垂下する帯が一部残存する。頭部の直径約8.5cmと推定される。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質、色調は淡茶灰色を呈する。

39 冠

上面を山形に刻んだ小片資料で冠の頂部の表現である。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質、色調は淡茶灰色を呈する。

40 髻(残存長19.7cm・最大幅10.7cm)

人物埴輪の頭部髻を表現したものと思われる。長方形の粘土板の小口の一端を丸味をもつように大きく折り返し、その先端を裏面に貼り付ける。いわゆる「原始鳥田髻」と称する女性の髪型を表わしている。頂部中央付近に小さな突起がある。髻中央を結束する紐の結び目を表現したものであろうか。表面(外面)は、条線の細いハケメによって平滑に仕上げられている。裏面には頭部接合部との剥離面が残る。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質。色調は、淡灰茶褐色を呈する。

41 腕(残存長10.3cm・直径3.2cm×4.4cm)

人物埴輪の左腕の残欠資料である。腕部は中空になっており、端を偏平にして指を表現している。胎土は密、焼成は軟質、色調は淡黄灰色を呈する。

42 腕(残存長10.2cm・直径2.8cm×4.6cm)

人物埴輪の左腕の残欠資料である。手の甲の一部のみ残り、指の表現は不明。上腕部を欠損する。胎土は密で、焼成はやや硬緻。色調は淡黄褐色を呈する。

43 刀(全長23.9cm・最大径2.8cm)

刀身と柄の中位までは中空に作る。柄と柄頭・鞘部が直径を違えることで表現されている。鞘口から刀身に掛けて8.0cmの幅で人物埴輪に接合されていた跡が剥離痕として残る。胎土はやや粗く、焼成もやや硬質である。色調は淡黄褐色を呈する。

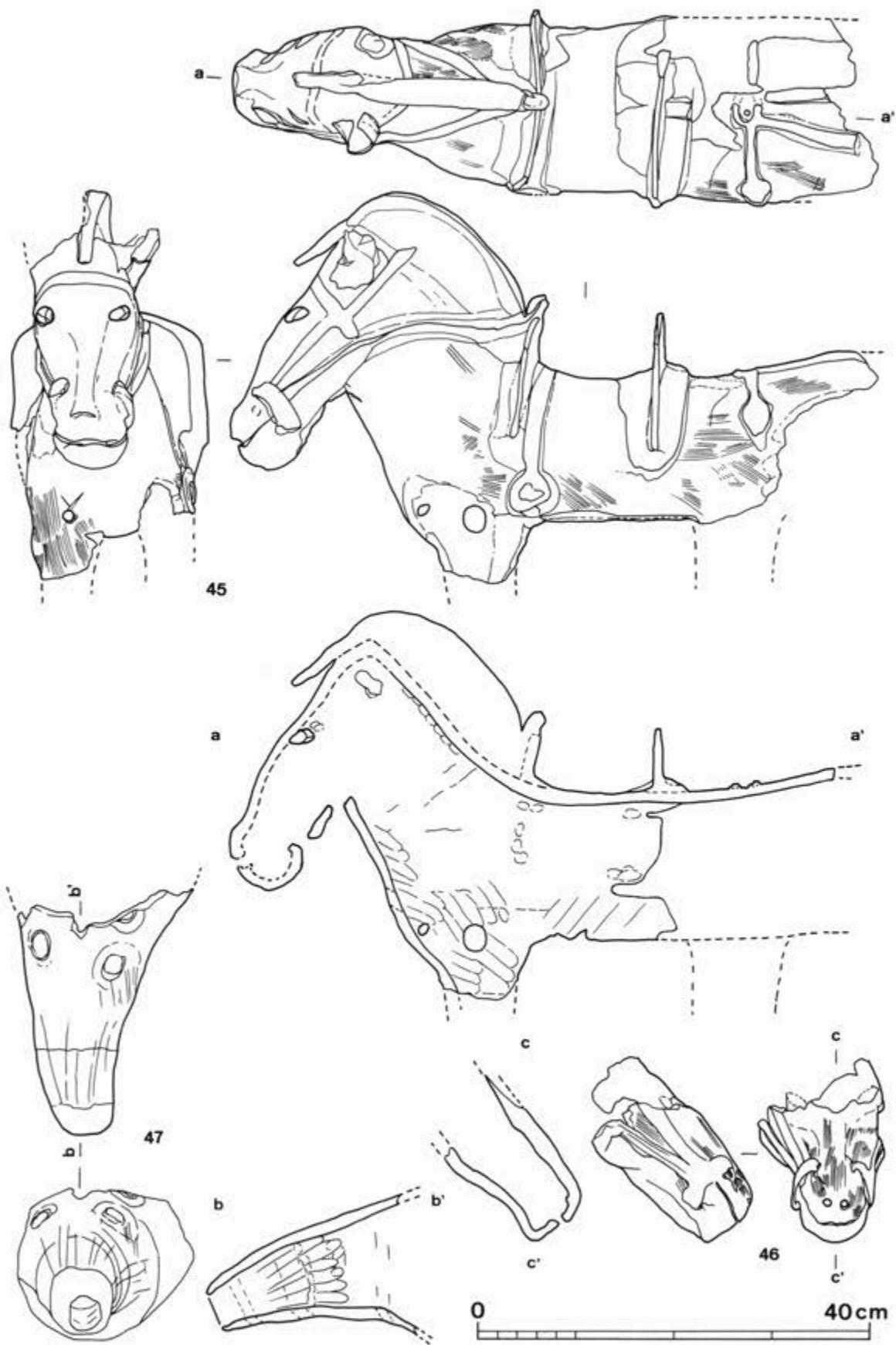
44 二弦琴(残存長10.4cm・幅5.0cm)

粘土板に2本の粘土紐を貼り付けて弦とする。裏面には剥離痕が残り、人物埴輪の付属物として貼り付けている。胎土はやや密、焼成はやや硬質である。色調は淡黄褐色を呈する。

(5)動物埴輪(第66・67図、図版第64)

45 馬形埴輪(残存長65.5cm・残存高39.9cm)

飾り馬を表現した埴輪で、胴部後端(尻部)及び脚部を欠く。馬具一式を装着しており、轡、面



第66图 埴輪実測図(5)

繫、引手、鞍、輪鏝、障泥の接合痕が残り、尻繫、菱形の杏葉などが表現されている。口は、筒状の前端を粘土で閉塞した後に切り込みによって作られている。胴部は木枠の上で作った痕跡が残る。脚部にはその上端付近の側面に小さな円孔が穿たれている。内面はナデで仕上げられている。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質で、色調は淡黄褐色を呈する。

46 馬形埴輪

馬の顔を表現した埴輪である。馬具を装着しており、轡、面繫の一部、引手の一部が粘土紐の貼り付けにより表現されている。鼻孔は、貫通しない刺突によって表現され、目の穿孔の一部がみられる。ハケメによって仕上げられている。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質である。色調は淡灰茶褐色を呈している。

47 動物の顔(残存長17.0cm)

動物形埴輪の頭部である。裁頭円錐形の中空粘土体に、粘土の貼り付けによって目?を表現している。一方の上方に中空棒状の突起の基部が見られ、耳か角を表現したと考えられる。内外面ともにユビナデで仕上げられ、内面には粘土紐接合痕とユビオサエの痕が残る。胎土はやや粗く、焼成もやや軟質である。表面はかなり磨耗している。色調は淡灰褐色を呈する。

48 鞍の前輪(後輪)

家形埴輪の屋根・破風の一部分?の可能性もある台形状の板状埴輪である。一側面の中央に縦に帯状の突起がみられる。外面は斜行する断続的なハケメが施されている。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質、色調は淡黄褐色を呈する。

49 鞍の前輪(後輪)

家形埴輪の屋根・破風の一部分?の可能性もある隅丸縦長台形状の板状埴輪である。一側面の中央に縦に帯状の突起がみられる。下側中央には馬の背(鞍)に接合していた剝離痕を残す。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質である。色調は淡黄褐色を呈する。

(6)盾形埴輪(第67図、図版第65)

50 石見型埴輪(残存高63.9cm)

右上部のみ残存する。楕円形の円筒に板状粘土を鱗状に付加して成形している。内面にはナデが施され、盾の部分は表裏ともに断続的なハケメで仕上げている。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は淡黄褐色である。

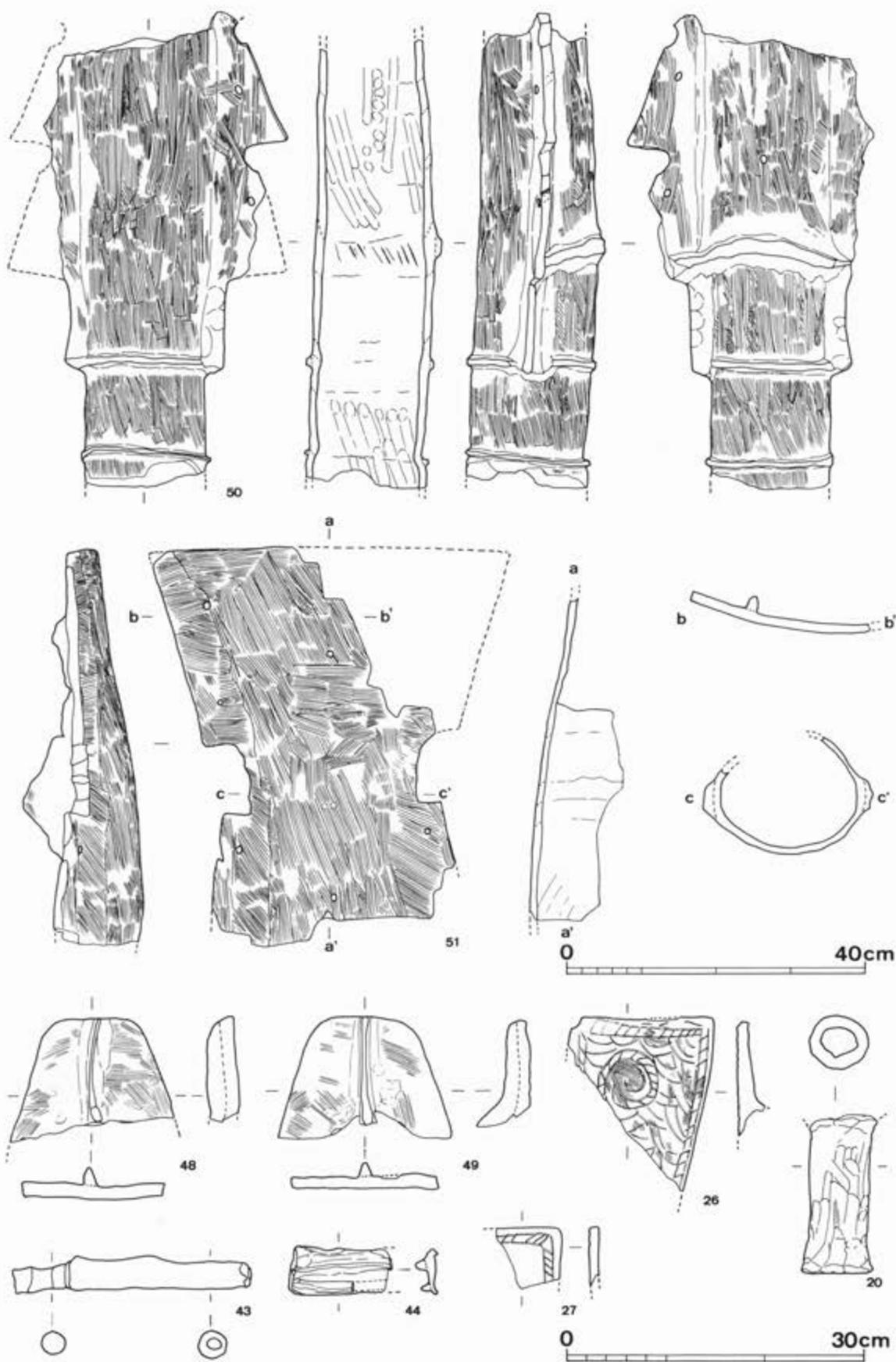
51 石見形埴輪(残存高53.3cm)

形象部上半部の破片で、その右上部と台部を欠く。下半分は偏平な円筒部に粘土板を鱗状につけて成形し、これに別に作った上部を接合する。円形刺突は外縁部と中心軸に沿って縦列するように穿孔される。外面は縦横の断続的なハケメで、内面は縦位ナデが施されている。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は淡黄褐色である。

(7)鞞形埴輪(第67図)

26 鞞形埴輪(最大幅14.7cm・残存長17.6cm)

鞞形埴輪の飾り板(背負板)の右翼部分である。表面には文様が施されている。意匠は、外形を



第67図 埴輪実測図(6)

二重平行線で縁取り、内部を斜向する刻み目で充填している。さらに、その内部中央には同様に二重線による渦巻文を配する。渦巻文を除いた縁取線に区画内部は、中心点を上位に持つ2本一組の円弧線をもって間を埋めている。右上の部位には描き直しの痕跡が残る。胎土は密で、焼成は良好である。器面は黄灰色を呈する。

27 靱形埴輪? (残存幅6.6cm・残存長6.3cm)

表面が荒れているため意匠は判別しにくいだが、外形に沿った内部を刻み目で充填する二重の縁取り線が観察できる。胎土は粗く、焼成も不良である。色調は茶灰色を呈する。

(8) 家形埴輪 (第68図、図版第64)

52 家形埴輪 (高さ53.4cm・幅41.7cm)

方形の軸部の上に切妻形の屋根が乗せられている。軸部平側の幅(約27cm)に対して屋根(大棟)までの高さ(約45cm)が大きく、全体に丈高な見を与える。また、屋根の妻のころびは小さく垂直線に対し約35°を測る。装飾は少なく、軸部に窓や入口の表現すら欠いている。ただ、軸部の上端の屋根との区切り部分に台形のタガ状突帯がめぐっている。また、棟木を表わす小さな突起が妻側の屋根の付け根部分にみられる。軸部と屋根は連続的に作り、軒先を新たに粘土を貼り付けることなく、既存の粘土を整形して表現する。外面はハケメを用い、軸部は縦位に、屋根部は横基調にていねいに施している。内面はナデのみで接合痕が残る。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質で、器面は淡茶褐色を呈する。

(9) 合子形埴輪 (第68図、図版第67)

53 合子形埴輪 (全長42.6cm・幅34.9cm・高さ19.0cm)

隅丸方形をなす容器状の埴輪である。蓋は出土していない。底部に脚状の台が付き、台部の各側面下端中央に半円形のくりぬきが認められる。内外ともにハケメで仕上げられ、粘土紐の接合痕が残る。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質である。色調は淡褐色を呈する。

54 合子形埴輪 (全長45.8cm・幅36.4cm・高さ18.5cm)

楕円形をなす容器状の埴輪である。蓋は出土していない。底部に脚状の台が付き、台部の各側面下端中央に半円形のくりぬきが認められる。台部の底面には軸線方向にそれぞれ半円形のくりぬきがある。表面は台部を除き、内外面にハケメで仕上げられている。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質である。色調は淡褐色を呈する。

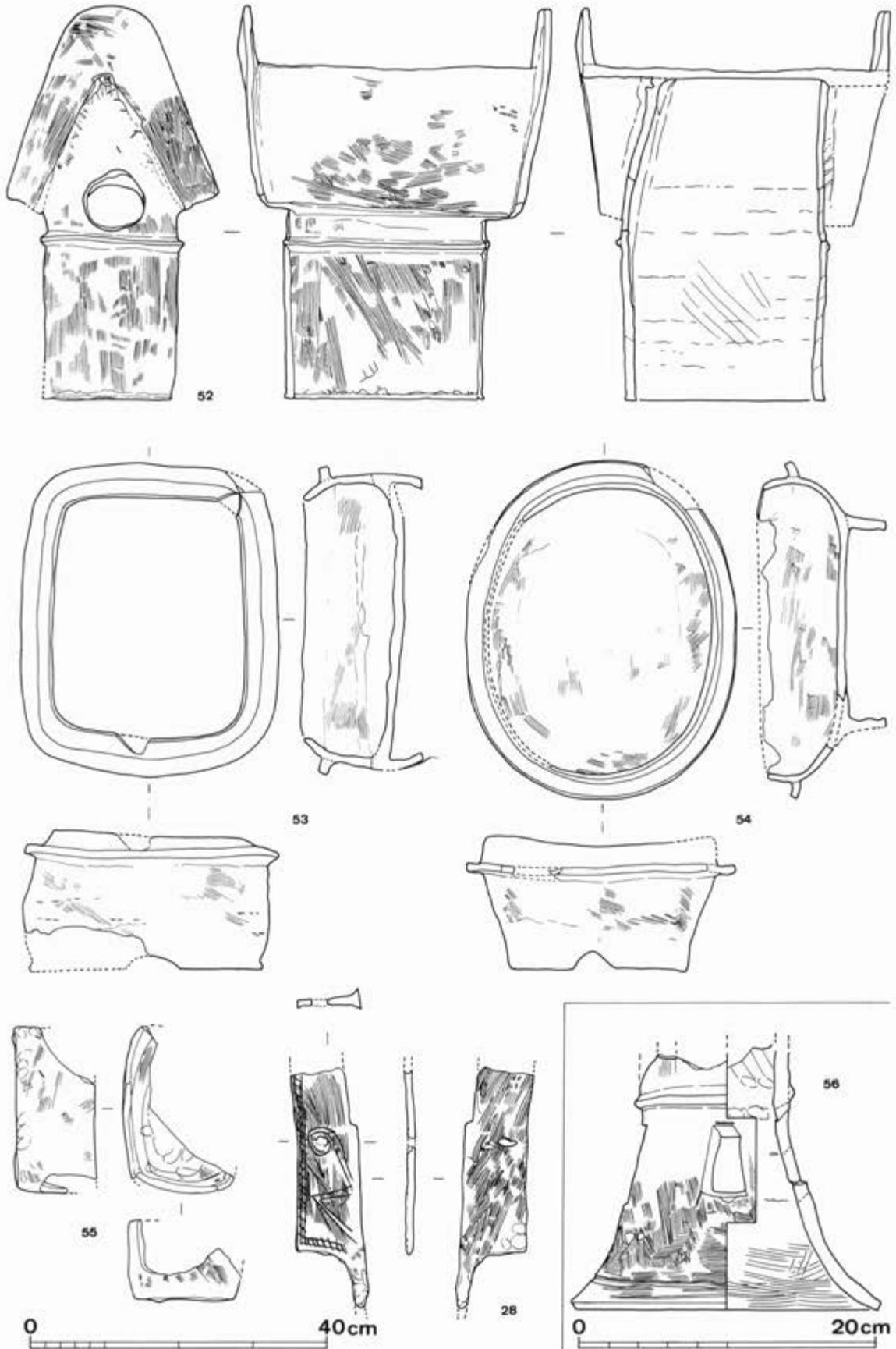
55 合子形埴輪 (全長23cm・幅15cm・高さ11cm)

隅丸長方形の容器状の埴輪である。器体の1/3強が残存する。台部の短辺側に大きな半円形の挟り込みが認められる。表面は表裏とも不定方向のハケメの後、ナデを加えられている。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質、色調は淡黄灰色を呈する。

(10) 不明形象埴輪 (第69図、図版第66)

57 不明形象埴輪 (残存幅25.0cm・高さ37.3cm)

粘土板の一端を5cmほど折り曲げて、粘土板自体が自立するように造られる。内側下端が円弧を呈する。外開きの「U」字形挟りを上端から切り込む。内外面ともに下半はナナメハケ、上半



第68図 埴輪実測図(7)

は縦位のナデで仕上げる。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質で、色調は淡黄褐色を呈する。

58 不明形象埴輪(長さ43cm・幅11cm)

一端を短く後方に「L」字形に折り曲げて自立するようにした板状埴輪である。折り返しのあ
る側の粘土板は上部が大きく欠損しているが、この破損部左端を基調として上方に立ち上がる形
跡が残る。また、一方の端には横約3.5cm・縦約4.2cmの方形の切り取りがある。表面はナナメハ
ケの後、ヨコハケ、裏側は下半部をハケメで上半部は横方向のナデによって調整している。上下
の端部はユビナデを加えて角頭状に仕上げている。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質で、色調は
淡黄褐色を呈する。

59 不明形象埴輪(残存長38.4cm)

長方形の粘土板の一端を折り曲げて自立するようにした埴輪片である。表面には折り曲げ時の
ユビの痕が、内面には折りしわが観察される。小口側の一端を欠損しており、全形は不明である。
表面はナデと縦位基調のハケメで仕上げられている。上方には突き上げたような刺突痕がみられ
る。色調は淡黄褐色で、胎土はやや粗い。焼成はやや軟質である。

60 不明形象埴輪

64と同じ大きさで、同形態を呈し、直接接合しないが同一個体と考えられる。

62 不明形象埴輪(残存長20.8cm・幅10.5cm)

一端に横約4.3cm・縦約8cmの範囲で方形の切り取りを有する。両面ともユビナデの痕が残
る。切り取った下側はケズリが残る。横断面形は、下端に向かうにつれて器厚を増し、下半部は
水平の面をなす。胎土は密、焼成は硬質である。色調は赤褐色を呈する。

63 不明形象埴輪(残存長23.6cm・幅12.6cm)

長方形の粘土板の一端を折り曲げて自立するようにした埴輪片である。

64 不明形象埴輪(残存長21.2cm・幅11.2cm)

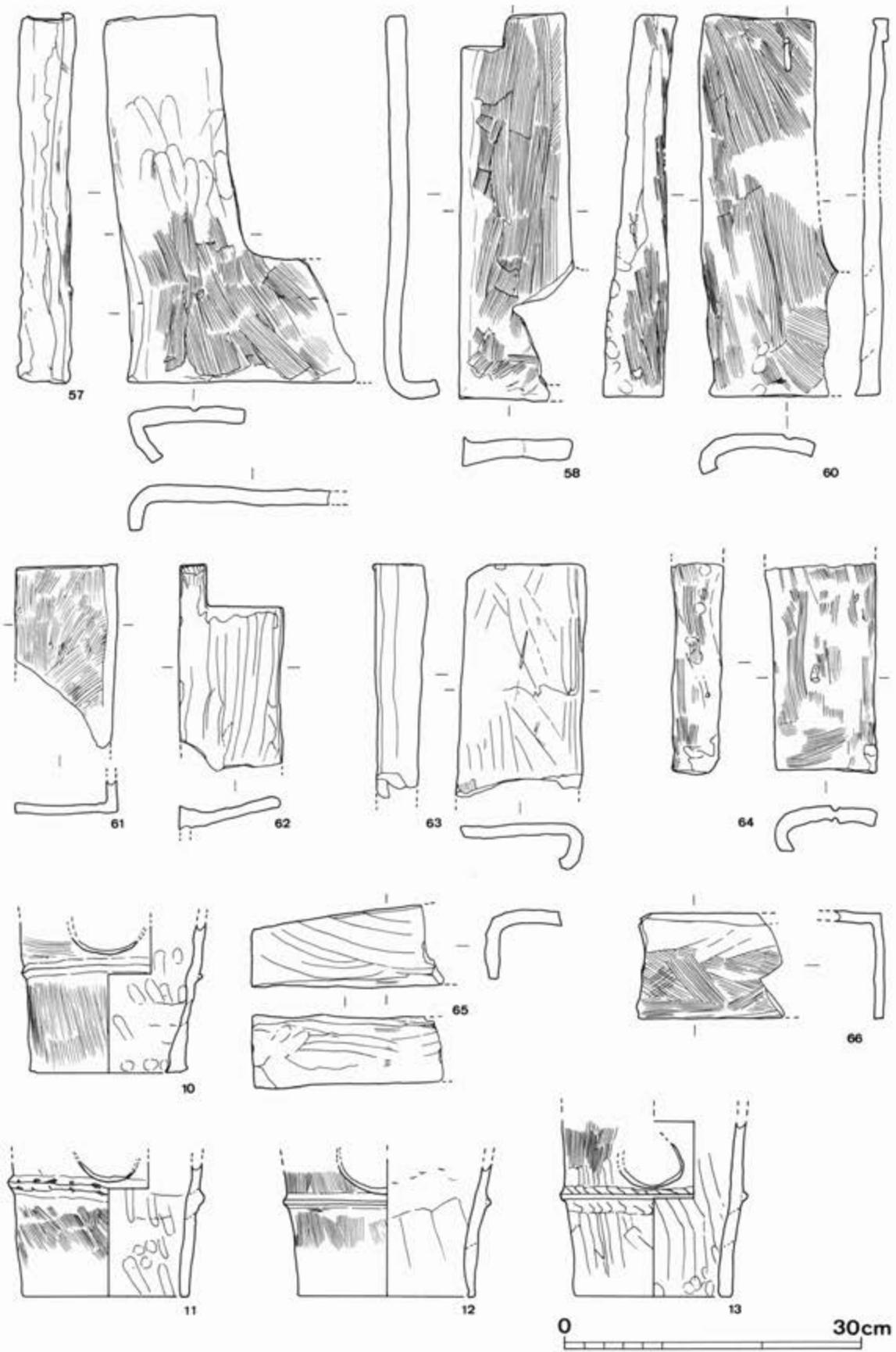
長方形の粘土板の一端を後方に折り曲げた板状の埴輪片である。折り曲げた際のオサエの痕跡
が屈曲部に顕著に残る。両面ともハケメで調整され、残存部分のほぼ中央に内外からの貫通しな
い刺突痕がみられる。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質で、色調は赤褐色を呈する。

65 不明形象埴輪(残存長19.2cm)

長方形の粘土板を、中軸ラインで直角に折り曲げた埴輪片である。屈曲部には特に調整を加え
ず、断面は丸みを帯びている。ナデで仕上げている。胎土はやや粗く、焼成は軟質で、色調は淡
黄褐色を呈する。

66 不明形象埴輪(残存長14.7cm・幅10.0cm)

直角に屈曲する板状埴輪である。特に、屈曲部の外面は鋭く折り曲げており、明瞭な稜線が見
られる。外面には断続的なハケメを用い、屈曲部付近はヘラケズリを加える。内面と端部は指頭
によるナデで仕上げる。胎土はやや粗く、焼成はやや硬質で、色調は淡灰茶褐色を呈する。



第69図 埴輪実測図(8)

付表8 円筒埴輪一覧表

| 番号 | 残存高 (cm) | 直径 | 各段幅 | タガ 形態 | 口唇 形態 | 外面調整 | | 内面調整 | | 底部調整 | その他 |
|----|-------------|---------------|-----------------------------|----------|----------|----------------------------------|---------------------|--------------------|-------------------|---------------------------------|--|
| | | | | | | 1次 | 2次 | 1次 | 2次 | | |
| 1 | 43.2 | 28.5 17.9 | 10.0→7.4 →7.3→ 9.9 | b | A1 | タテハケ | 2・3段 B種ヨコ ハケ | 口縁段 のみタ テハケ | 口縁段 タテハケ | (内) 連続指オサエ | ・タガ接合時のヨコナ デが弱く接合痕残る ・ほぼ完成 ・やや軟質、淡黄褐色 |
| 2 | 40.9 | 22.7 15.6 | 8.6→7.0 →7.2→ 10.5 | b | A1 | タテハケ | 2・3 段ヨコ ハケ | (内)左 傾ナナ メナデ | 省略 | (内) 連続指オサエ | ・第1段成形のために 粘土帯を押さえ固め ている痕跡あり。 ・やや軟質、淡黄褐色 |
| 3 | 39.4 | 27.0 17.8 | 9.0→6.3 →6.7→ 8.4 | b | A1 | タテハケ | 省略 | 3段目 以上タ テハケ | 省略 | | ・2・3段の透孔は直 交せず。 ・1/3周にわたり黒 斑(外面) ・やや軟質、淡黄褐色 |
| 4 | (25.4) | 26.4 | →7.9→ 10.7 | a | B2 | 左傾タテ ハケ | 口縁段上 1/2ヨ コハケ | 左傾タ テナデ | 口縁部 ヨコハケ | | ・赤褐色になっている 面、黒斑がついてい る面がある。 ・やや硬質、淡黄褐色 |
| 5 | 40.8 | 23.3 115.8 | 8.9→7.0 →6.5→ 9.6 | b | A2 | タテハケ | 省略 | (内)左 傾ナナ メナデ | 省略 | | ・底部外面板状工具に よるナデ ・口縁部内面ヘラによ る線刻。口縁段のみ 若干左傾タテハケ ・やや軟質、淡黄褐色 |
| 6 | 41.8 | 23.7 16.8 | 9.3→8.2 6.0→10.2 | b | A1 | タテハケ | 省略 | 口縁段 左傾ナ メハケ | 省略 | (内) ヨコナデ | ・全体に黒斑点在 ・2段目まで淡赤褐色 のところあり。 ・やや軟質、淡黄褐色 |
| 7 | 51.4 | 32.6 24.0 | 8.8→6.2 →5.7→ 5.2→9.5 | b | A4 | タテハケ | 2・5 段ヨコ ハケ | 3段目 以上タ テハケ | 不明 | | ・4条突帯5段構成の 円筒(口縁端部突帯 を除く) ・口縁端部に突帯をま きつけている。 ・倒立はされていない ・磨減で内面詳細不明 ・やや軟質、淡黄褐色 |
| 8 | (37.5) | 22.0 14.5 | 8.4→6.6 →7.2→ 8.5 | b | A3 | タテハケ | 2・3 段ヨコ ハケ | (内)左 傾ナナ メナデ | 口縁段 左傾タ テハケ | (内) 連続指オサエ | ・第1段に黒斑あり ・口縁端部残存わずか で詳細不明 ・やや軟質、淡黄褐色 |
| 9 | (31.9) | 16.6 | 9.5→7.2 →7.4 | b | | 左傾タテハ ケ2段以上 右傾タテハ ケも加わる | 省略 | 2段目 以上タ テハケ | 省略 | (内) 連続指オサエ | ・2本/cmとハケ目の 単位大きい ・基底部、布を介在さ せたユビナデ ・やや軟質、淡黄褐色 |
| 10 | (15.1) | 15.9 | 9.1→ | e | | タテハケ | ヨコハケ | 省略 | 省略 | (内) 連続指オサエ (外)基底部ヨ コナデ | ・内面全体が黒色 ・基部外面指によるヨ コナデ(幅1cm) ・外面黒斑1/3周 ・やや軟質、淡黄褐色 |
| 11 | (13.6) | 16.7 | 9.0→ | b | | 左傾タテ ハケ | 省略 | 省略 | 省略 | (内) 連続指オサエ | ・基底段外面相当剝離 ・やや硬質、淡黄褐色 |
| 12 | (13.3) | 17.8 | 8.7→ | b | | タテハケ | 省略 | 省略 | 省略 | (内) 連続指オサエ (布を使用) | ・底部調整を布で行う ・やや軟質、淡黄褐色 |
| 13 | (17.7) | 16.0 | 8.4→5.5 | d | | 2段目以上 タテハケ1 段目タテナ デ | 省略 | 省略 | 省略 | (内) 連続指オサエ | ・基底段外面1次調整 に板状工具によるタ テナデ |

(11) その他の埴輪(第68図、図版第62・66)

28 鱗付き円筒埴輪(残存幅9.4cm・残存長31.7cm)

鱗の片面には文様が施される。意匠は、左端外形に沿って2本線と右下がりの刻み目が描かれ、中央には2重の円とそこから伸びる斜め線、「く」の字形の2重線を引く。円の中央には巴形の穿孔が存在する。胎土は粗く、焼成は軟で、色調は茶褐色を呈する。

56 器台形埴輪(残存高18cm・底部径21cm)

脚部のみが残存する。中央に三角形に近い台形状のタガ状突帯がある。その突帯を挟んで上下2段に縦長台形の透孔がそれぞれ4か所配されている。底部付近には1条の沈線がめぐる。外面はタテハケの後、底部付近にヨコハケを加えている。内面は、底部が粗いハケメによって調整され、上部はナデが施される。胎土は粗く、焼成は良好で、色調は淡灰褐色を呈する。

(筒井由香)

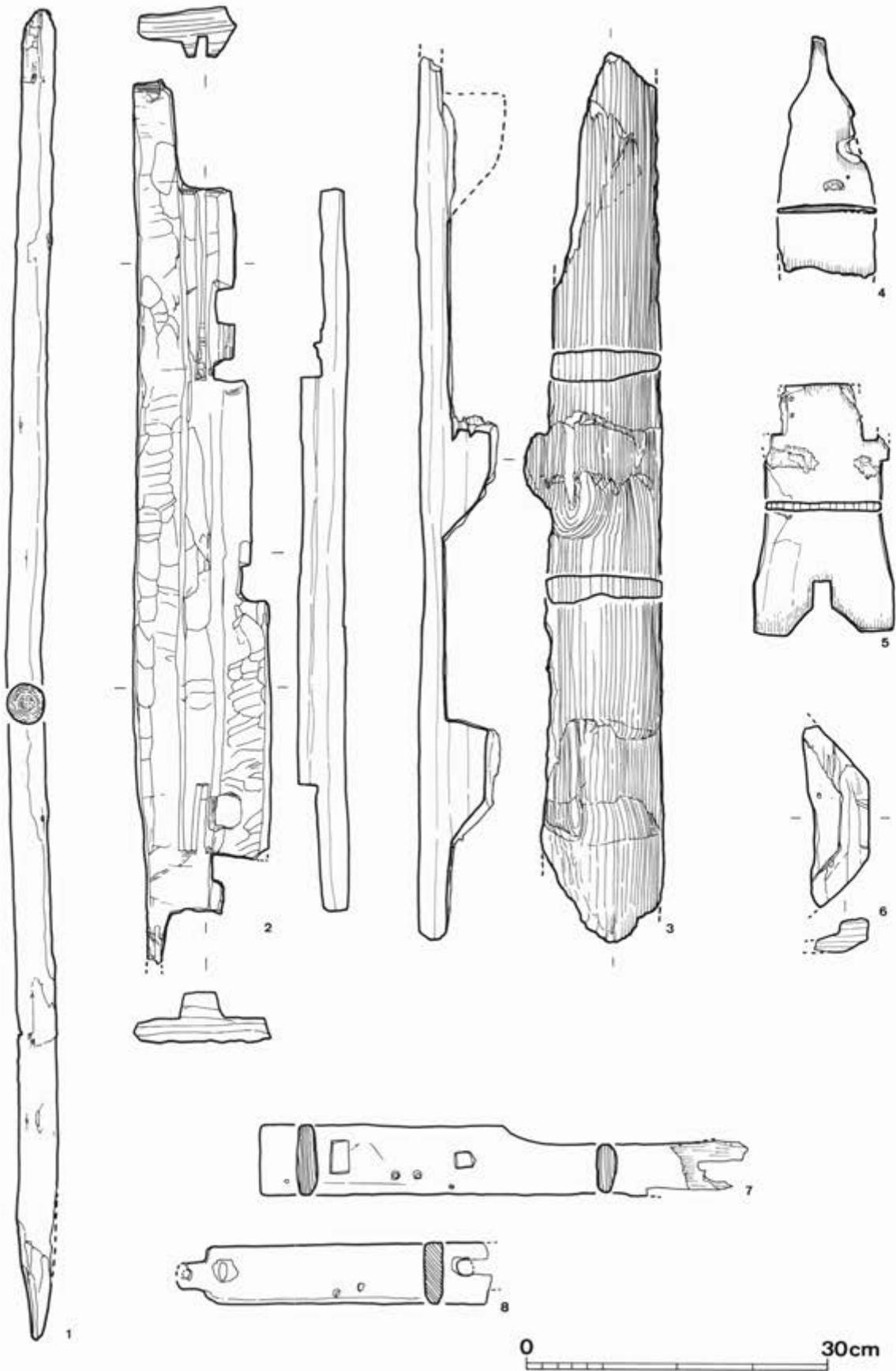
c. 木製品(第70・71図、図版第69)

木製品の出土した遺構はS E 95030、S D 95044、S K 95051、S D 95062、S X 95069、S X 95070である。取り上げた遺物は約50点に及ぶ。その大半はS D 95062、S X 95069、S X 95070からの出土であり、中でも杭材が最も多い。それ以外には、枿穴を穿った建築部材、農具、機具などがある。提示した資料は、その内の特徴的なものに限った。2は、倉庫などの扉の枿材に用いられる櫓である。S X 95069に堰の側板として転用されていた。また、梯子(3)がS D 95044から出土している。S D 95062の底からでた須恵器甕(須恵器20)体部の孔に木栓(9)が詰められていた。S D 95044から半截くり貫きの樋1が、S E 95030からは井戸枿、井筒の材料として、本来は容器である大型曲物の天井・底板、身の部分が使われ、最下部の水溜め部には円形曲物が転用されていた。

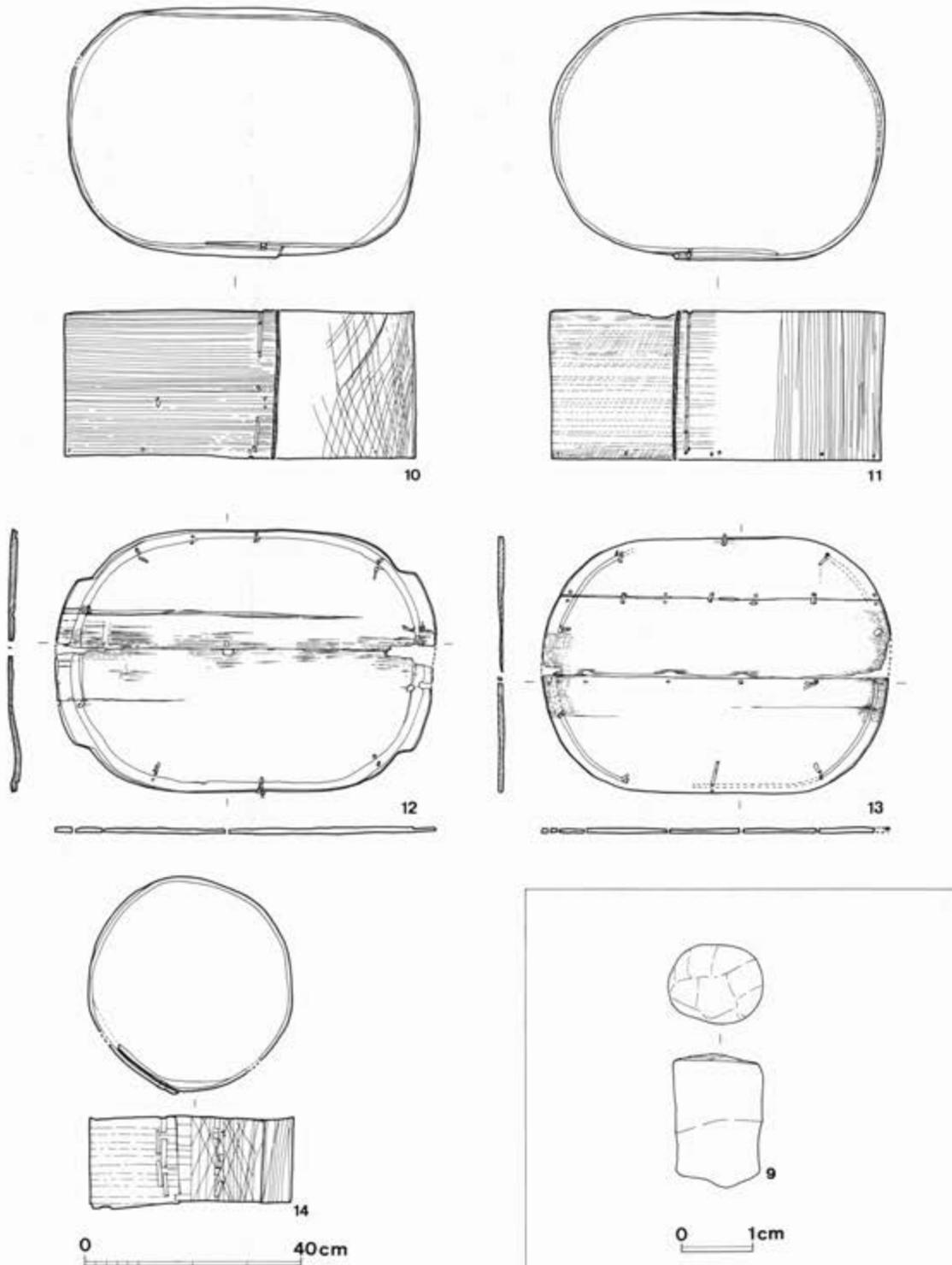
(橋本 稔)

付表9 木製品一覧表

| 番号 | 名称 | 出土遺構 | 全長 (cm) | 幅(直径) (cm) | 高さ(厚さ) (cm) | 備考 |
|----|---------|-----------|------------|---------------|----------------|----------------|
| 1 | 杭 | S D 95044 | 178.3 | 4.5~5.3 | — | 片面が炭化 |
| 2 | 櫓 | S X 95069 | 118.6 | 18.5 | 2.5~6.5 | 杭間に土留板として転用。 |
| 3 | 梯子 | S D 95044 | 118.5 | 18.4 | 2.5~9.5 | |
| 4 | 鋸 | S D 95062 | 37.3 | 13.2 | 1.0 | |
| 5 | 不明加工板材 | S D 95062 | 33.3 | 18.7 | 1.2 | 腰掛けの側板か? |
| 6 | 盤 | S D 95062 | 8.4 | 23.9 | 4.1 | |
| 7 | 機具 | S D 95062 | 32.6 | 3.3~4.9 | 1.4 | 片面が炭化。 |
| 8 | ク | S D 95062 | 20.9 | 3.9~4.0 | 1.2 | 片面が炭化。 |
| 9 | 栓 | S D 95062 | 2.0 | 1.2~1.4 | — | 甕に使用されていた。 |
| 10 | 大型曲物(身) | S E 95030 | 64.9 | 46.0 | 27.7 | 井筒として転用。 |
| 11 | ク | S E 95030 | 61.8 | 46.0 | 28.2 | 井筒として転用。 |
| 12 | ク(天井板) | S E 95030 | 67.0 | 48.5 | 1.0 | 井戸枿として転用。 |
| 13 | ク | S E 95030 | 64.3 | 47.7 | 1.0 | 井戸跡の最下段水溜め部に使用 |
| 14 | 曲物 | S E 95030 | 64.3 | 47.7 | — | 井戸跡の最下段水溜め部に使用 |
| 樋1 | 樋 | S D 95044 | 190.0 | 40.0 | 30.0 | 図版第69 |
| 樋2 | ク | S X 95070 | 140.0 | 30.0 | — | |



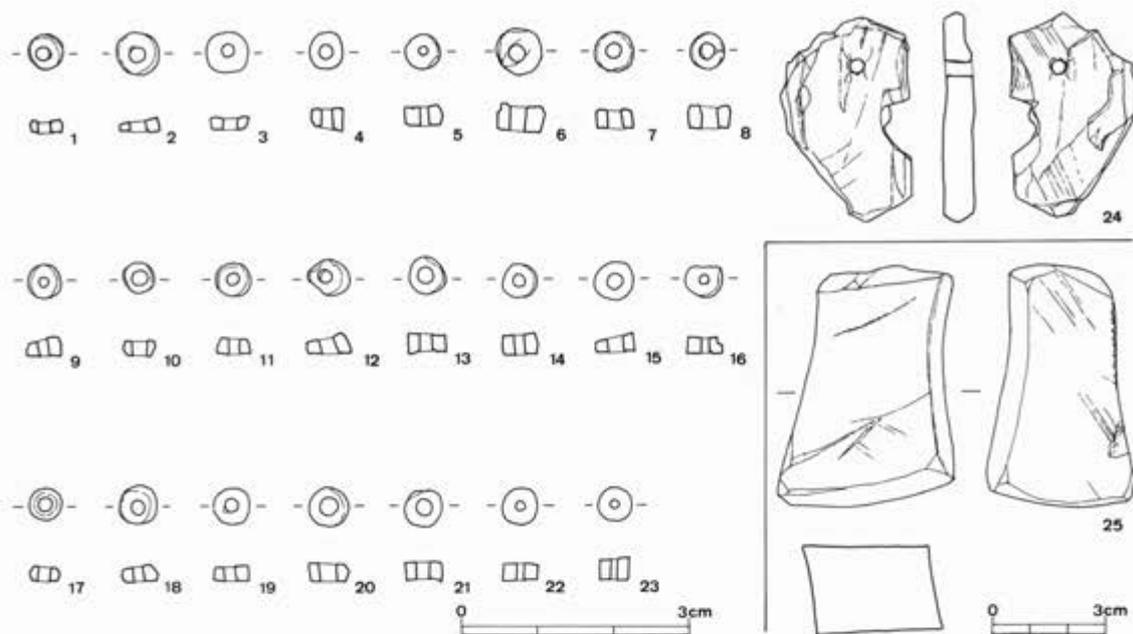
第70図 木製品実測図(1)



第71図 木製品実測図(2)

d. 石製品及び砥石(第72図、図版第69)

白玉(1~23) 合計24点で、いずれも流路跡S D95062からの出土である。大きさは、直径で最大6mm、最小のもので4.2mmを測る。平均は、4.9mmである。厚さは、最大で3.5mm、最小で1.9mmを測る。平均は2.6mmである。同じく、口径は2.2~1mm。重量は、最大0.22g・最小0.05gを測る。平均重量は0.1gである。断面の形状から、(1)普通に見られる円筒状のもの、(2)



第72図 玉類・砥石実測図

中央がやや膨らむか、稜線をもつものに大別できる。いずれも滑石製で、石材の色調から、(a) ややみどりかかった青灰色、(b) 黒みかかった青灰色、(c) 白灰色のものに分類できる(白玉計測表)。

付表10 白玉計測表

勾玉(24) 断面は、板状で、周囲を粗く加工する。加工程度が粗雑なため、腹部と背部に突起状の削り残しが見られ、一見、子持ち勾玉をイメージしたものに見えなくもない。最大長2.7cm・同幅1.7cm・厚さ4mm、頭部穿孔の径1.5mmを測る。色調は、緑灰色を呈する。滑石製。

砥石(25) 方柱状で、四面を研磨面とする。長軸の端部に向かってゆるやかに反り上がり、片方は欠損する。研磨面は緻密で、鉄器類の仕上げ用と思われる。残存部の長さ6.4cm、幅は端部で長辺4.6cm・短辺3.6cmを測る。重量は132.6g、色調は灰白色を呈する。砂岩製。

(辻本和美)

| No. | 直径 | | 厚さ | | 孔径 | 重量(g) | 形状 | 色調 | 備考 |
|-----|-----|------|-----|-----|-----|-------|----|----|------|
| | 最大 | 最小 | 最大 | 最小 | | | | | |
| 1 | 4.7 | 4.7 | 1.9 | 1.8 | 2.0 | 0.06 | I | a | |
| 2 | 5.6 | 5.2 | 1.9 | 1.1 | 2.0 | 0.08 | I | a | |
| 3 | 5.2 | 5.0 | 1.9 | 1.7 | 1.7 | 0.08 | I | a | |
| 4 | 4.5 | 4.4 | 3.3 | 2.5 | 2.0 | 0.09 | I | a | |
| 5 | 4.6 | 4.5 | 2.3 | 2.3 | 1.3 | 0.09 | I | b | |
| 6 | 6.0 | 5.9 | 3.5 | 3.3 | 2.2 | 0.22 | II | a | |
| 7 | 4.9 | 4.8 | 2.4 | 2.3 | 1.3 | 0.10 | I | c | |
| 8 | 4.7 | 4.6 | 3.0 | 2.8 | 2.2 | 0.10 | II | a | |
| 9 | 4.6 | 4.5 | 2.5 | 1.9 | 1.1 | 0.08 | I | b | |
| 10 | 4.8 | 4.4 | 2.2 | 1.5 | 1.2 | 0.07 | II | a | |
| 11 | 5.5 | 4.5 | 3.2 | 2.0 | 1.6 | 0.11 | I | a | |
| 12 | 4.9 | 4.8 | 2.8 | 2.5 | 1.7 | 0.11 | I | b | |
| 13 | 4.5 | 4.4 | 2.9 | 2.5 | 1.2 | 0.09 | I | a | |
| 14 | 4.9 | 4.8 | 2.8 | 1.7 | 1.7 | 0.08 | I | a | |
| 15 | 4.8 | 3.8* | 2.4 | 2.2 | 1.0 | 0.07 | I | a | *残存部 |
| 16 | 4.2 | 4.1 | 2.0 | 1.6 | 1.7 | 0.05 | I | a | |
| 17 | 5.0 | 5.0 | 2.5 | 1.7 | 2.0 | 0.08 | II | b | |
| 18 | 4.8 | 4.7 | 2.3 | 2.0 | 2.0 | 0.07 | II | a | |
| 19 | 5.0 | 4.9 | 2.7 | 2.6 | 1.8 | 0.09 | I | b | |
| 20 | 5.0 | 4.3 | 3.2 | 2.0 | 2.2 | 0.11 | II | a | |
| 21 | 4.8 | 4.8 | 2.2 | 2.1 | 1.5 | 0.09 | I | b | |
| 22 | 4.5 | 4.3 | 3.5 | 3.3 | 1.5 | 0.11 | I | b | |
| 23 | 4.4 | 4.5 | 2.5 | 2.4 | 2.0 | 0.06 | I | a | |

5. ま と め

弓田遺跡の2次にわたる調査では、縄文・弥生時代から古墳・奈良・中・近世に至る各時期の遺構・遺物を検出した。木津川南部の平野部では、これまで、まとまった面積の発掘調査の例が少なく、弓田遺跡の調査は、この地域の開発の歴史を考える上で貴重な資料を提供したといえる。

今回調査の最大の成果は、古墳時代の遺構群で、方形竪穴式住居跡3基のほか、流路跡・溝跡群・土坑群・堰跡などを検出した。流路跡S D95062の東側には、遺構の分布状況からみて、この時期の集落が営まれていたと考えられる。流路跡の東側の肩付近からは、大量の埴輪・土器類とともに木器・祭祀遺物・種子などが出土した。このうち、円筒埴輪は、川西氏編年の第V期に、須恵器は、田辺氏編年のTK23～MT15型式に比定でき、おおよそ5世紀末から6世紀前半(中期末～後期初頭)の時期を示す。

流路内から出土した埴輪類は、この遺跡の性格を考える上で重要と考えられる。ここでは、まとめにかえて、いくつかの点に整理しておきたい。

(1)古墳の周濠

墳丘を消失した古墳の周濠と考える。例えば、奈良県石見遺跡では、溝跡から埴輪とともに大形の木製祭祀具(鳥形・盾形など)が出土したが、当初は、祭祀に係わる遺構と考えられてきた。その後の調査の結果、墳丘が削平された古墳の周濠跡であることが判明した。しかし、弓田遺跡では、流路跡(S D95062)がゆるやかに蛇行して延びていくことや、ほぼ同時期の住居跡が隣接地で見つかったこと、また、流水の制御を行う堰跡などの存在からみて、古墳の周濠の可能性は少ないと考えられる。

(2)埴輪窯跡

調査地東側の丘陵部上の瓦谷遺跡や上人ヶ平遺跡では、埴輪窯跡(川西氏編年第IV期)が見つかるが、調査地周辺の平野部にも、地形のわずかな起伏を利用した窯跡—出土埴輪が無黒斑で硬質を含むことから窰—がかつてあり、埴輪は、ここで焼成され、その時に生じた不良品などが廃棄されたと考える。しかし、埴輪以外に、須恵器や土師器が多量に出土しており、また、埴輪にも焼け歪みをもつものはみられなかった。これらの遺物群を覆っていた流路内の黒褐色有機層は、当初、焼灰の可能性を考えて資料の分析を試みたが、結果は、植物繊維が明確に残存しており、灰原の流れ込みといったものではなかった。窯跡の存在は、現時点では明確にできない。

(3)集荷場

調査地から離れた場所に埴輪窯—立地条件としては、東側の丘陵の可能性が大きい—があり、そこで焼かれた埴輪をこの地に搬送集荷し、ここから他の地域に出荷したと考える。出土した埴輪類は、出荷前に破損し、選別後、運ばず廃棄したとみる。類例としては、鳥取県長瀬高浜遺跡があげられる。弓田遺跡の立地環境が、物資の集散場所として適していることは、奈良時代以降の様相をみてもうなずける。この説の当否は、埴輪が運ばれたと思われる古墳—平城山丘陵ないし木津川流域部—側からのアプローチが決め手になろう。今回出土した形象埴輪の中には、石見型の盾形埴輪に代表されるような製作技法や使用時期に特徴をもつものが含まれており、運ばれ

たとすれば、供給先の古墳を探す手がかりとして有力な資料になると思われる。

(4)水辺の祭祀場

ミニチュア土器(手捏ね土器)・白玉・勾玉などの玉類・製塩土器などの祭祀遺物の出土、さらに土師器の器種に高杯などの供献具が顕著な点あげられる。遺物が集中する地点は、いくつかのブロックに分けることが可能であり、土器や埴輪の出土状況も何らかの意図がうかがわれる。埴輪は、円筒埴輪以外に、古墳の祭祀にも共通する人物・馬・石見型盾・家・蓋などの形象埴輪が含まれており、また、破片からの復原度が高く、この場での使用もうかがわれる。埴輪を用いた祭祀の事例は、奈良県布留遺跡に代表されるが、弓田遺跡でも、各種の埴輪で囲まれた水辺の祭祀の場を想定することも可能であろう。あるいは、流路そのものが祭祀の対象となったとも考えられる。

以上、各説の当否は、調査範囲の限定された今回の調査では決めがたい。この問題については、各地での類似例の分析と、今後の周辺地の調査をまって考えてみたい。

古墳時代以外では、奈良時代(7世紀中頃)の建物跡1棟と井戸1基を検出した。井戸枠に転用された曲物は大形の優品であり、この遺跡の立地からみて官営の瓦生産工房である上人ヶ平遺跡や平城山丘陵を越えた平城京との関連が考えられる。

(橋本 稔・辻本和美)

注1 「弓田遺跡発掘調査概要」(『京都府埋蔵文化財調査概報』第64冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注2 調査参加者(順不同、敬称略)

五百磐明、五百磐頭一、井ノ口雄三、岸本貢一、久田 亨、小西佐和子、田島 肇、筒井由香、永沢拓志、西根正弘、芳谷達也、渡邊 努、有馬三喜子、奥村茂輝、勝山紀子、木下町子、小嶋ふゆ子、小滝初代、辻 道子、辻井和子、寺尾貴美子、中村久登、林 恵子、林 益美、福田玲子、古川良子、細山田章子、丸谷はま子、山中道代、与十田節子

注3 「上人ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第15冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注4 「木津地区所在遺跡(3)市坂瓦窯跡」(『京都府埋蔵文化財調査概報』第68冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

注5 足利健亮「恭仁宮域の復元」(『社会科学論集』4・5号合併号) 1973

注6 本出土遺物の整理・報告に際しては、加茂町教育委員会の永沢拓志氏、(財)大阪市文化財協会の辻美紀氏、(財)京都府埋蔵文化財研究所の小森俊寛氏・上村憲章氏・平尾政幸氏に諸々の面でご指導いただいた。

注7 ヘラ削りもしくはナデの区別がつきにくく、いわゆる板ナデ状の調整とすべきものを含む。

注8 野島 永・河野一隆「鹿谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第52冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993、(財)大阪市文化財協会の辻美紀氏の御教示による。

付 載

花粉分析及び樹種同定について

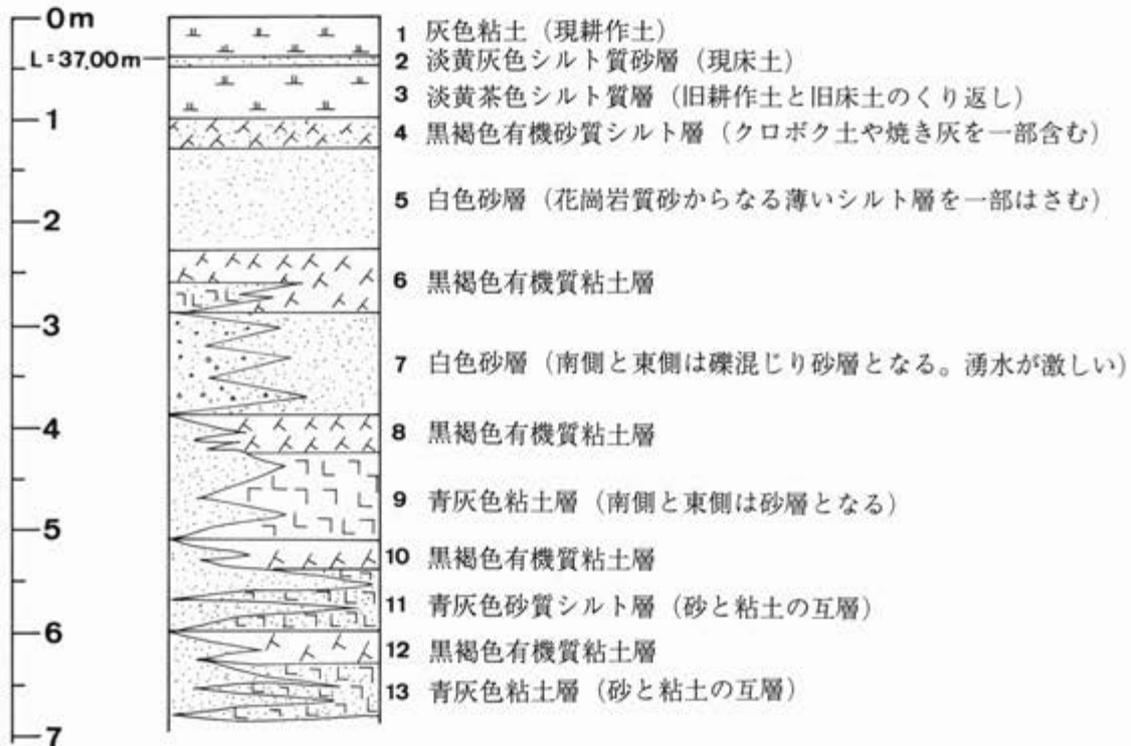
弓田遺跡では第1次調査において縄文時代(晩期)の包含層を確認している。そのため第2次調査でも遺構面より下層の様相を重機によって調査した。採取地点1(第44図)では3m×3mのグリットを設定し、地表下7mまで掘り下げて土層をサンプリングした。その時の地層は地層相関図(第73図)に示す。その中の4・6・8・12の土層資料は花粉分析を実施し、また採取地点2では堰2に敷き詰められた植物遺体の樹種同定を行った。土層のサンプリングについては京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏から協力を得た。また、これらの分析・同定の成果の概要は以下のとおりである。

(橋本 稔)

1. 弓田遺跡の花粉化石群集

(1) 概 要

弓田遺跡は奈良県との境に近接する木津町の水田地帯に位置する。本遺跡は縄文・弥生時代か



第73図 採取地点1 地層相関図(橋本清一氏作成)

ら中・近世に至る複合遺跡で、遺跡周辺の丘陵地帯には古墳群や埴輪窯跡が分布している。ここでは古墳時代遺構面より下位約6mの深掘りが行われ、そのうちの4層準で採取された試料について花粉化石の検討を行った。

古墳時代遺構面より下位層は、添付試料によると砂と粘土の互層や白色砂層が卓越し、一部粘土層が発達する。以下に分析試料の表層からの深度と堆積物の特徴を示す。

- No. 4 (約1.0~1.2m) 黒褐色シルト質粗~極粗粒砂
- No. 6 (約2.3~2.9m) オリーブ黒色有機質シルト質
粘土
- No. 8 (約3.8~4.2m) 暗オリーブ灰色シルト
- No. 12 (約6.0~6.3m) オリーブ灰色シルト(炭化物少量混じる)

花粉化石の抽出は、試料2~5gを10%KOH(湯煎約15分)-傾斜法により粗粒砂を取り除く-48%HF(約30分)-重液分離(比重2.1)-アセトリシス処理の順に行った。プレパラートは残渣を蒸留水で適量に希釈し、タッチミキサーで十分攪拌後マイクロピペットで取りグリセリンで封入した。

同定はプレパラート全面を行った。この間に出現した花粉化石のリスト(表1)と主要花粉分布図(図1)を示す。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本・胞子は総花粉胞子数を基数として百分率で算出した。なお、図表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。また、樹木と草本があるクワ科の分類群は、現時点では区別が出来ないため暫定的に草本花粉に含めてある。図版に示したPAL.MY 番号は単体標本の番号を示し、これら標本はパレオ・ラボに保管してある。

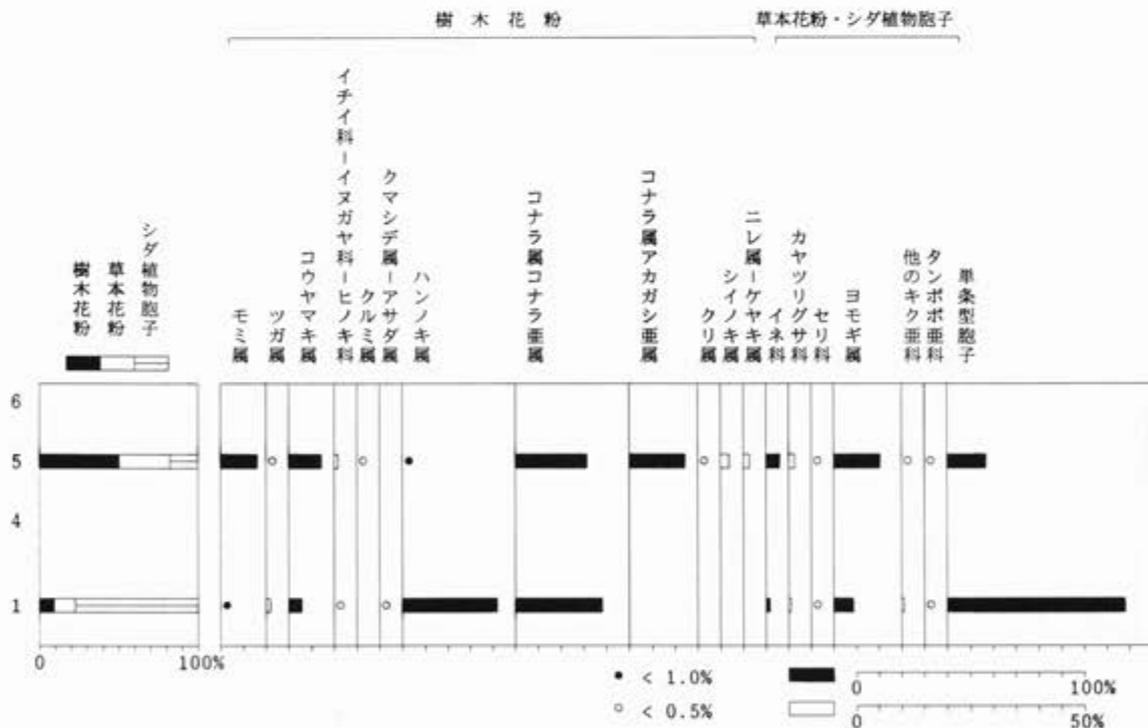


図1 弓田遺跡の沖積層の主要花粉分布図
(出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本・胞子は花粉胞子総数を基数として百分率で算出した)

表1 弓田遺跡の沖積層から出現した花粉化石の組成表

| 和名 | 学名 | 6 | 5 | 4 | 1 |
|-----------------|---|----|-----|-----|------|
| 樹木 | | | | | |
| モミ属 | <i>Abies</i> | 3 | 18 | - | 1 |
| ツガ属 | <i>Tsuga</i> | - | 1 | - | 2 |
| マツ属単維管束亜属 | <i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyton</i> | - | - | - | 1 |
| マツ属(不明) | <i>Pinus</i> (Unknown) | - | - | 2 | 3 |
| コウヤマキ属 | <i>Sciadopitys</i> | 15 | 16 | 6 | 6 |
| スギ | <i>Cryptomeria japonica</i> (L.fil.)D.Don | - | - | - | 1 |
| イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 | T.-C. | - | 2 | - | 1 |
| ヤナギ属 | <i>Salix</i> | - | - | - | 1 |
| サワグルミ属 | <i>Pterocarya</i> | - | - | - | 1 |
| クルミ属 | <i>Juglans</i> | - | 1 | - | - |
| イヌシデ | <i>Carpinus tschonoskii</i> Maxim. | - | 1 | - | - |
| クマシデ属-アサダ属 | <i>Carpinus - Ostrya</i> | - | - | - | 1 |
| ハシバミ属 | <i>Corylus</i> | - | - | - | 1 |
| ハンノキ属 | <i>Alnus</i> | - | 1 | - | 44 |
| ブナ | <i>Fagus crenata</i> Blume | - | 1 | - | - |
| コナラ属コナラ亜属 | <i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i> | 5 | 35 | - | 40 |
| コナラ属アカガシ亜属 | <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> | 3 | 27 | - | - |
| クリ属 | <i>Castanea</i> | - | 1 | - | - |
| シイノキ属 | <i>Castanopsis</i> | - | 4 | - | - |
| ニレ属-ケヤキ属 | <i>Ulmus - Zelkova</i> | - | 3 | - | - |
| エノキ属-ムクノキ属 | <i>Celtis-Aphananthe</i> | 2 | - | - | - |
| モチノキ属 | <i>Ilex</i> | - | - | - | 1 |
| ウコギ科 | Araliaceae | - | - | - | 1 |
| 草本 | | | | | |
| イネ科 | Gramineae | 1 | 13 | - | 19 |
| カヤツリグサ科 | Cyperaceae | - | 6 | - | 13 |
| クワ科 | Moraceae | - | - | - | 2 |
| サナエタデ節-ウナギツカミ節 | <i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i> | - | - | - | 1 |
| ナデシコ科 | Caryophyllaceae | - | 3 | - | - |
| カラマツソウ属 | <i>Thalictrum</i> | - | - | - | 1 |
| トウダイグサ属近似種 | cf. <i>Euphorbia</i> | - | - | - | 3 |
| セリ科 | Umbelliferae | - | 1 | - | 1 |
| ヨモギ属 | <i>Artemisia</i> | 27 | 45 | 2 | 96 |
| 他のキク亜科 | other Tubuliflorae | 2 | 2 | - | 12 |
| タンポポ亜科 | Liguliflorae | - | 1 | - | 2 |
| シダ植物 | | | | | |
| ヒカゲノカズラ属 | <i>Lycopodium</i> | 1 | - | - | - |
| 単条型胞子 | Monolete spore | 19 | 37 | 286 | 884 |
| 三条型胞子 | Trilete spore | 7 | 2 | - | - |
| 樹木花粉 | | | | | |
| 樹木花粉 | Arboreal pollen | 28 | 111 | 8 | 105 |
| 草本花粉 | Nonarboreal pollen | 30 | 71 | 2 | 150 |
| シダ植物胞子 | Spores | 27 | 39 | 286 | 884 |
| 花粉・胞子総数 | Total Pollen & Spores | 85 | 221 | 296 | 1139 |
| 不明花粉 | | | | | |
| 不明花粉 | Unknown pollen | 13 | 31 | 1 | 6 |

(2)花粉化石群集の記載

花粉化石の出現傾向は、No. 12・6の2試料では比較的多数の花粉が得られたが、No. 8・4では稀である。このうち花粉が少ないNo. 8ではシダ植物胞子は比較的多く出現し、No. 8では全般に花粉が少なく保存も悪い。また、花粉が出現した2試料では花粉組成が異なる。すなわち、下位のNo. 12では落葉広葉樹のコナラ亜属とハンノキ属が高率に出現し、他に針葉樹のコウヤマキ属やツガ属などを伴うが、出現した分類群数は少ない。また、シダ植物胞子が高率に出現し、ヨモ

ギ属を伴う。一方、上位のNo. 6ではコナラ亜属と常緑広葉樹のアカガシ亜属が比較的高率に出現し、針葉樹のモミ属やコウヤマキ属、落葉広葉樹のニレ属-ケヤキ属や常緑広葉樹のシイノキ属などを伴う。ヨモギ属やシダ植物胞子が比較的高率に出現する。

なお、いずれの試料もおびただしい炭片が含まれていた。

(3)花粉化石群集からみた森林植生に関する若干の考察

No. 12と6の花粉化石群集に基づくと、コナラ亜属を主とする落葉広葉樹林期とコナラ亜属とアカガシ亜属を主とする広葉樹林期の2つに区分される。

コナラ亜属を主とする落葉広葉樹林期(No. 12)：周辺の丘陵部にはコナラ亜属を主要な森林構成要素とする落葉広葉樹林が成立していた。この森林には落葉広葉樹のクマシデ属-アサダ属やハシバミ属、モチノキ属、ウコギ科なども混じっていたが、比較的単調な植物相から構成されていたようである。また、低地ないし河川の後背湿地にはハンノキ湿地林が広がり、山地にはコウヤマキやツガ属の針葉樹も分布していたであろう。一方、シダ植物胞子が多産するが、こうした現象は河川の後背地などの度々洪水の影響を受ける地点で多くみられるようである。こうした環境では安定した植生は形成されず、先駆的なシダ植物が分布していた可能性を示唆させる。

大阪(安田, 1978; 古谷, 1979など)ないし近江盆地(松下・前田, 1984)周辺地域では約12000年前以降に冷温帯ないし亜寒帯性針葉樹林が衰退し、コナラ亜属を主とする落葉広葉樹林が成立した。この森林は約7500年前頃以降に常緑広葉樹のアカガシ亜属やシイノキ属が分布を拡大し、約6500~6000年前頃には照葉樹林が卓越する森林に変化した。こうした周辺地域における植生変遷史に基づくと、No. 12は約7500年以前の完新世初頭ないし更新世末頃の堆積層と推定される。

コナラ亜属とアカガシ亜属を主とする広葉樹林期(No. 6)：この時期には照葉樹林のアカガシ亜属が拡大し、落葉広葉樹のコナラ亜属と共に主要な森林構成要素になったであろう。この森林には落葉広葉樹のニレ属-ケヤキ属や常緑広葉樹のシイノキ属も森林構成要素になっていた。また、山地には針葉樹のモミやコウヤマキ林も分布していたようである。この時期は照葉樹林が卓越する以前の時期であることから、先に示した周辺地域の植生変遷史に基づくと落葉広葉樹林から照葉樹林への移行期である約7500~6000年前頃と推定される。

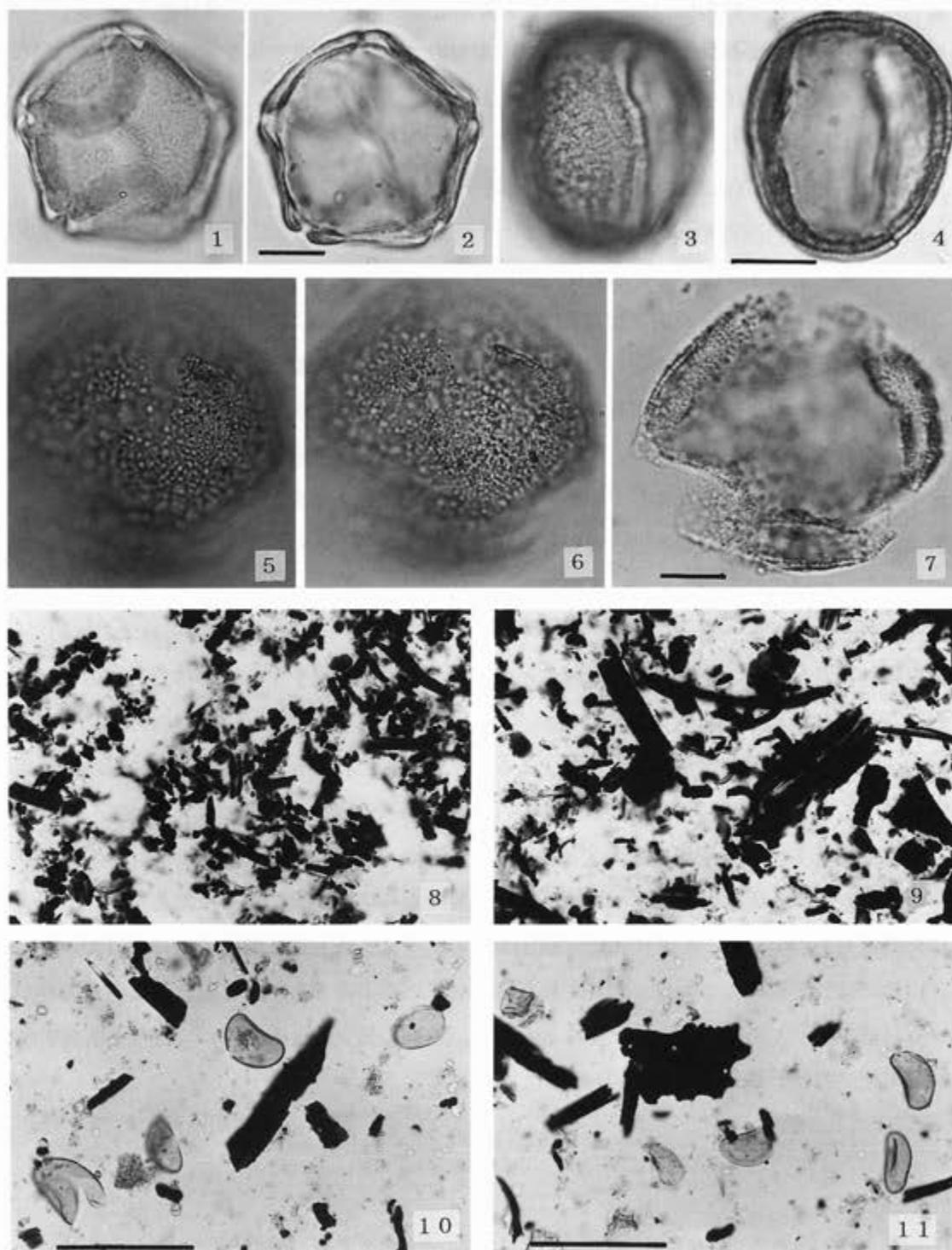
(吉川昌伸(パレオ・ラボ))

引用文献

- 古谷正和, 1979. 大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷. 第四紀研究, 18: 121-141.
 松下まり子・前田保夫, 1984. 滋賀県曾根沼湿地の花粉分析. 日本第四紀学会講演要旨集, 14 :63-64.
 安田喜憲, 1978. 大阪府河内平野における過去一万三千年間の植生変遷と古地理. 第四紀研究, 16:211-229.

2. 弓田遺跡出土植物遺体の植物珪酸体

杭列2より採取された植物遺体について、当初、木材遺体とみられたことから樹種同定が試み



図版 弓田遺跡から出現した花粉化石とプレパラートの状況

1-2. ハンノキ属 (*Alnus*), No.1, PAL.MY 2467.

3-4. アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*), No.5, PAL.MY 2465.

5-7. コナラ亜属 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*), No.1, PAL.MY 2466.

8-11. プレパラートの状況 (8-No.6, 9-No.5, 10-No.4, 11-No.1)

(スケールは10 μ m、但し状況は100 μ m)

られたが、作業前に行った実体鏡による観察からこの植物遺体は草本で、さらに単子葉類のイネ科植物ではないかとみられた。一般にイネ科植物は珪酸を吸収して細胞壁に沈積させること(植物珪酸体)が知られており、そのうち、葉に形成される機動細胞珪酸体についてはイネを中心とした形態分類の研究が進められている(藤原・佐々木 1978など)。こうしたことから、得られた植物遺体について、その植物珪酸体(機動細胞珪酸体)の検出を図り、形態を観察することによって給源母体となるイネ科植物についての検討ができると考える。

(1) 試料と方法

試料(S X95070)は、杭列2より採取された植物遺体である。

この植物遺体について、現生植物の標本作製と同様の方法を用いて植物珪酸体の検出を図った。すなわち植物遺体を乾燥後管瓶にとり、電気炉を用いて灰化するのであるが、灰化する行程は藤原(1976)にはほしたがって行った。その行程は、はじめ毎分5°Cの割合で温度を上げ、100°Cにおいて15分ほどその温度を保ち、その後毎分2°Cの割合で550°Cまで温度を上げ、5時間その温度を保持して、試料の灰化を行う。灰化した試料についてその一部を取り出し、グリセリンにてプレパラートを作製し、生物顕微鏡下で観察した(600倍)。

(2) 結果及び考察

観察の結果、多数の機動細胞珪酸体や一部単細胞珪酸体も認められた。以下にそれらの記載を示すが、各名称は図2を参照されたい。また各長さの平均は20個体を観察したものの平均である。

機動細胞珪酸体の断面形態は楔形をしており、裏面側においてこぶ状の凸部と溝状の凹部が認められる。縦長の平均は30.60 μ m(最大38.25 μ m、最小22.95 μ m)で、横長の平均が21.68 μ m(最大30.60 μ m、最小15.30 μ m)である。側面形態は長方形で、裏面側にこぶ状のものがみられるものもある。側長の平均は25.50 μ m(最大35.70 μ m、最小15.30 μ m)である。また、表面及び裏面形態は長方形を呈している。

以上のような観察結果から、得られた機動細胞珪酸体はウシクサ族と判断され、よって、植物遺体はウシクサ族に属する植物である。このウシクサ族にはススキ属(ススキ、オギなど)やチガヤ属など19属ある(北村・村田・小山 1964)が、それらのいずれに当たるのか現時点では不明である。
(鈴木 茂(パレオ・ラボ))

引用文献

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法―。考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・佐々木 彰(1978)プラント・オパール分析法の基礎的研究(2)―イネ(Oryza)属植物における機動細胞珪酸体の形状―。考古学と自然科学, 11, p.9-20.

北村四郎・村田 源・小山鐵夫(1964)原色日本植物図鑑草本編〔Ⅲ〕。保育社, 465 p.

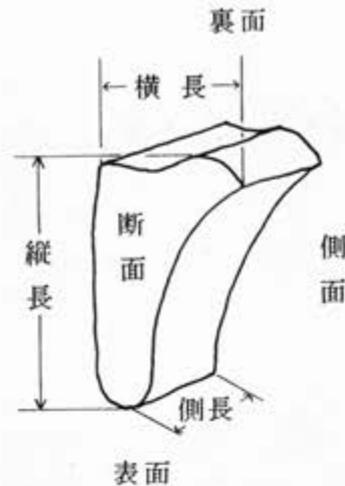
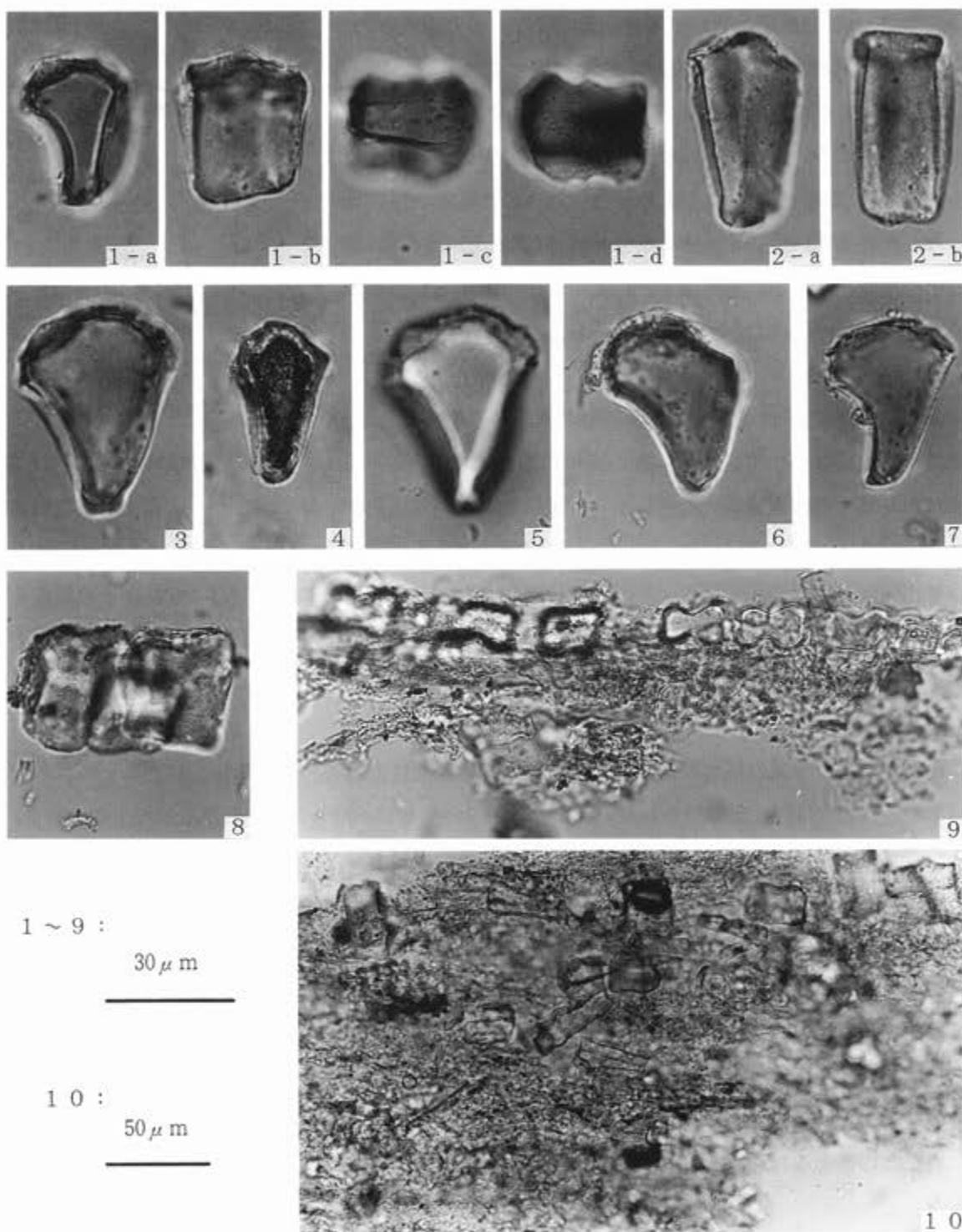


図2 植物珪酸体模式図



図版 弓田遺跡出土植物遺体の植物珪酸体
 1~8: ウシクサ族機動細胞珪酸体 1-a, 2-a, 3~7: 断面、
 1-b, 2-b, 8: 側面、1-c: 表面、1-d: 裏面
 9: キビ型単細胞珪酸体
 10: 植物遺体灰像

版 圖

図版第1 篠・マル山1号窯跡

(1)調査地遠景(南東から)



(2)調査地近景(北東から)



(3)掘削前調査地全景(北から)





(1)窯体・上層灰原検出状況
(北東から)



(2)窯体検出状況(北東から)



(3)窯体検出状況(北から)



(1)窯体内土層断面
(M-M' 土層断面)



(2)窯体内完掘状況



(3)焼成部須恵器設置復原



(1)窯体天井部検出状況
(北から)



(2)焼成部後半床面(北から)



(3)燃焼部遺物出土状況

(1) 焚き口周辺 (東から)



(2) 上層灰原検出状況 (東から)



(3) 灰原土層断面 (南から)





(1)窯体天井部断面〈N-N'〉
(南西から)



(2)窯体断ち割り〈M-M'〉
(北東から)



(3)窯体完掘状況(北東から)



(1)窯体燃焼部断ち割り



(2)窯体焼成部断ち割り



(3)現地説明会風景（南から）



22



41



8



23



36



113



27



39



49



230



27



36



113

出土遺物(1)



23



51



54



19



63



64



66



159



151



33



44



43



35



95



55



57



57



57杯部内面の
ヘラミガキ



57



9



160



81



129



130



136



133



173



83



154



154



93



93



100



169

170

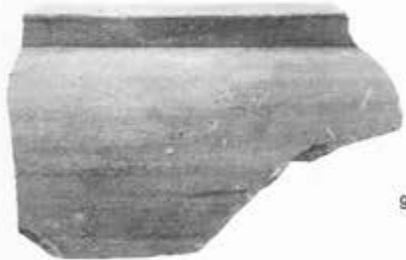
171



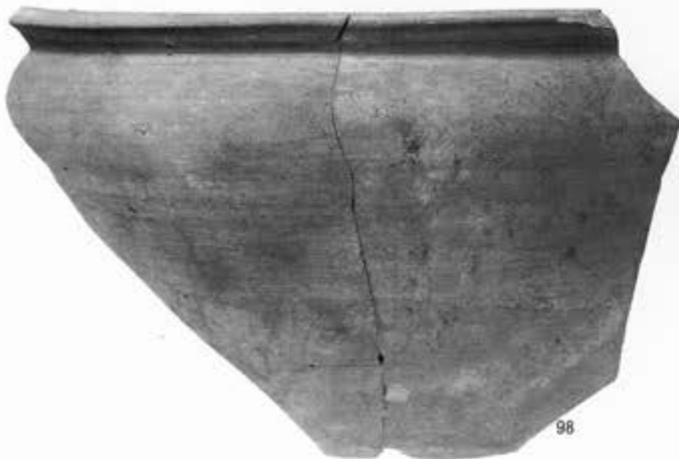
106



94



96



98



97



(1)調査地全景（中・近世遺構面、南から）



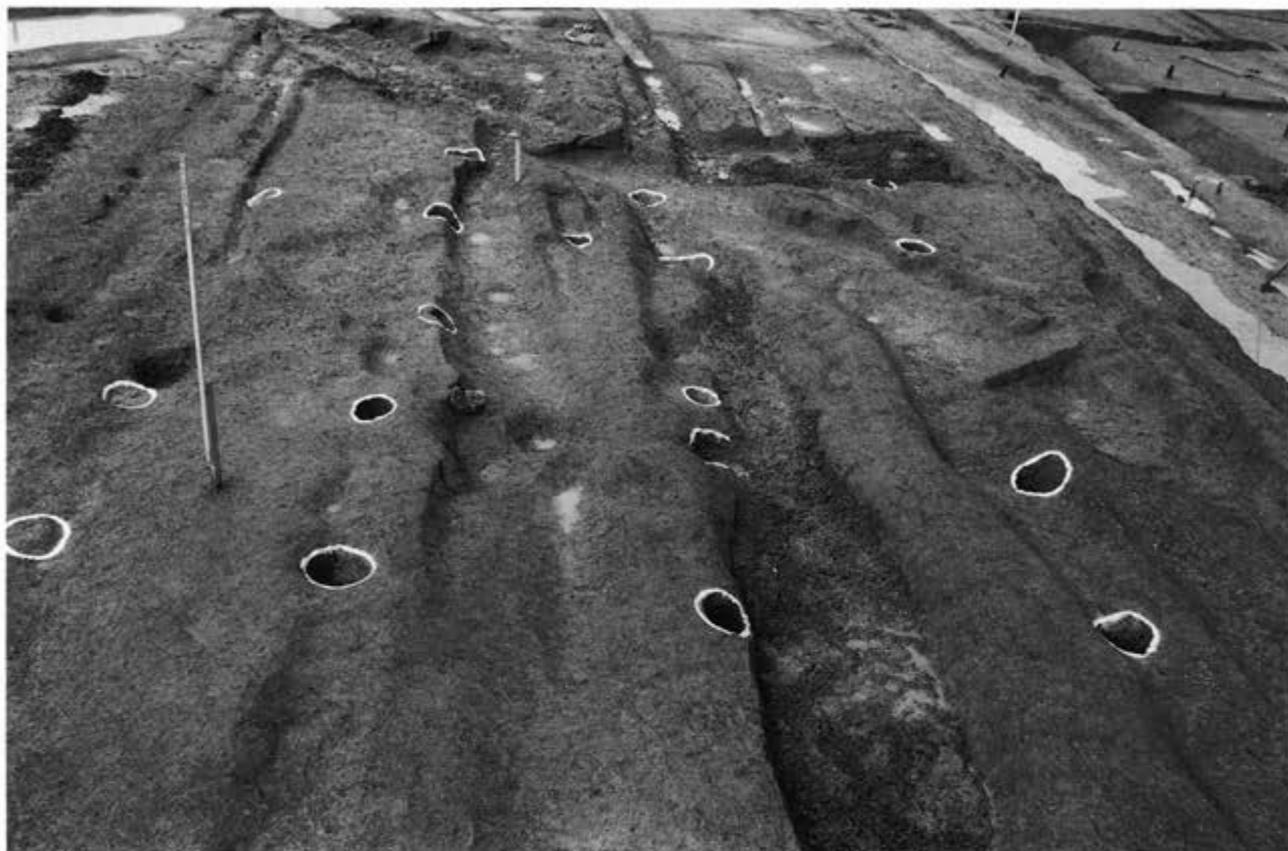
(2)調査地全景（西から）



(1)調査地全景（長岡京期・平安時代遺構面、南から）



(2)調査地全景（西から）



(1)掘立柱建物跡S B363119 (南から)



(2)井戸S E363115 (北から)



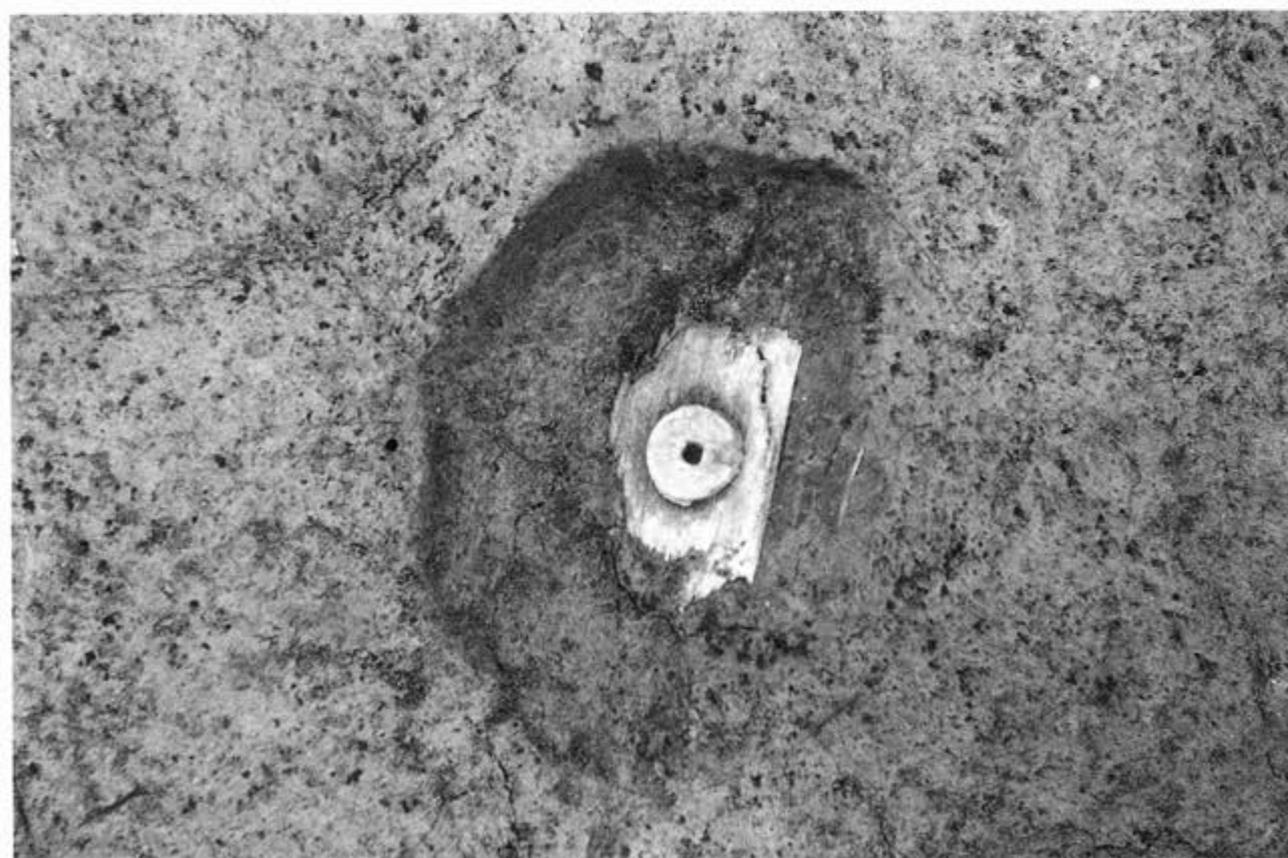
(1)南一条第二小路S F 362140（東から）



(2)南一条第二小路S F 362140楹跡（西から）



(1)東三坊大路S F 33007（南から）



(2)東三坊大路路面地鎮S K361172（上が北）



(1)東三坊大路東側溝橋跡 S X361182 (西から)



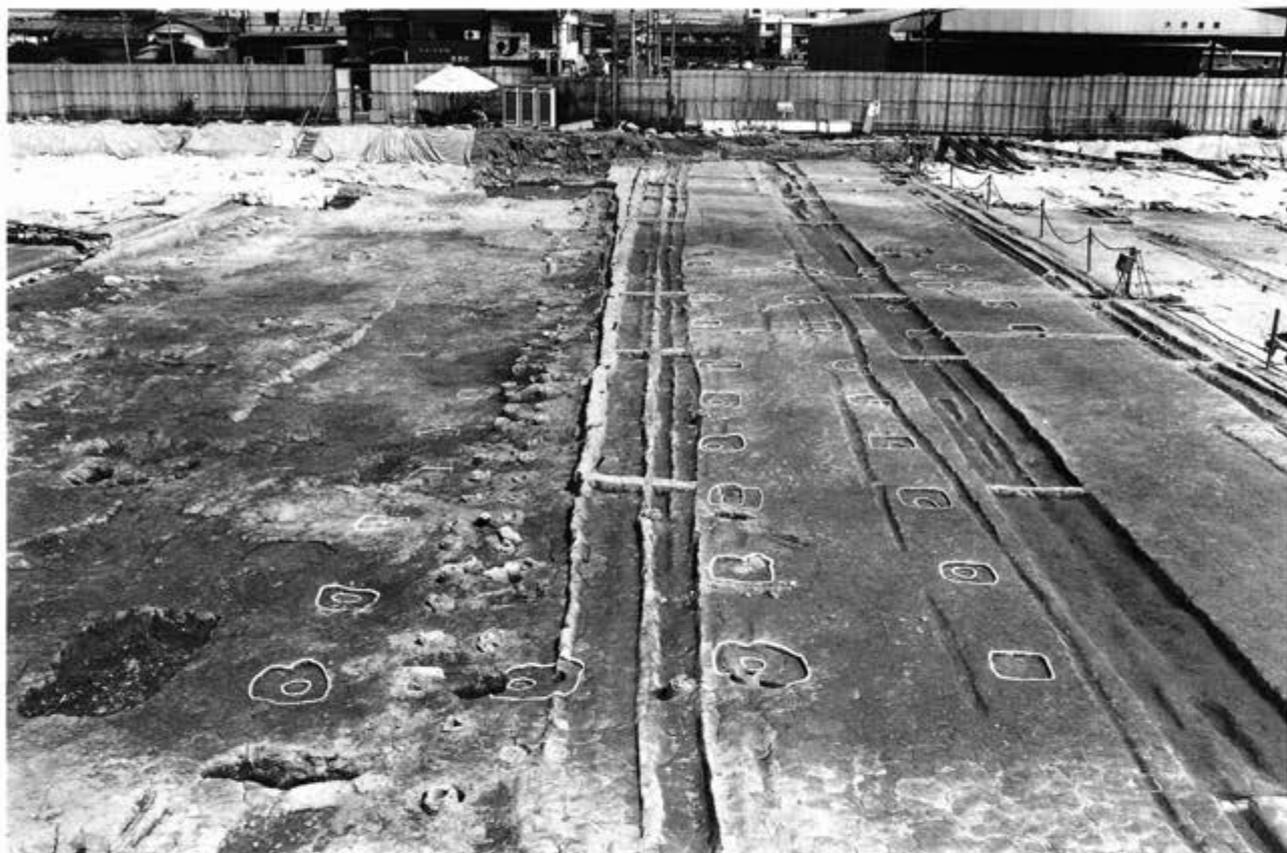
(2)東三坊大路東側溝 S D32901火舎出土状況 (西から)



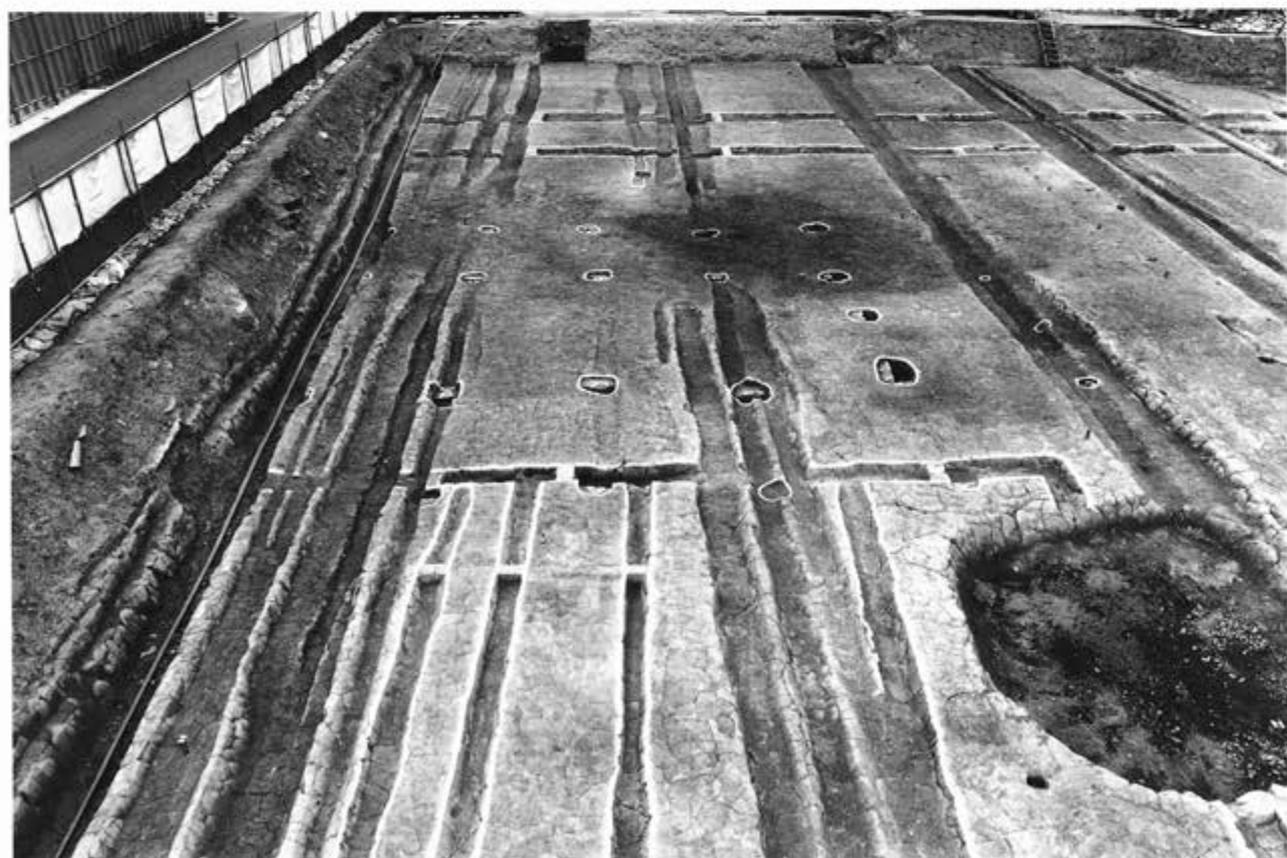
(1)掘立柱建物跡S B363081（南から）



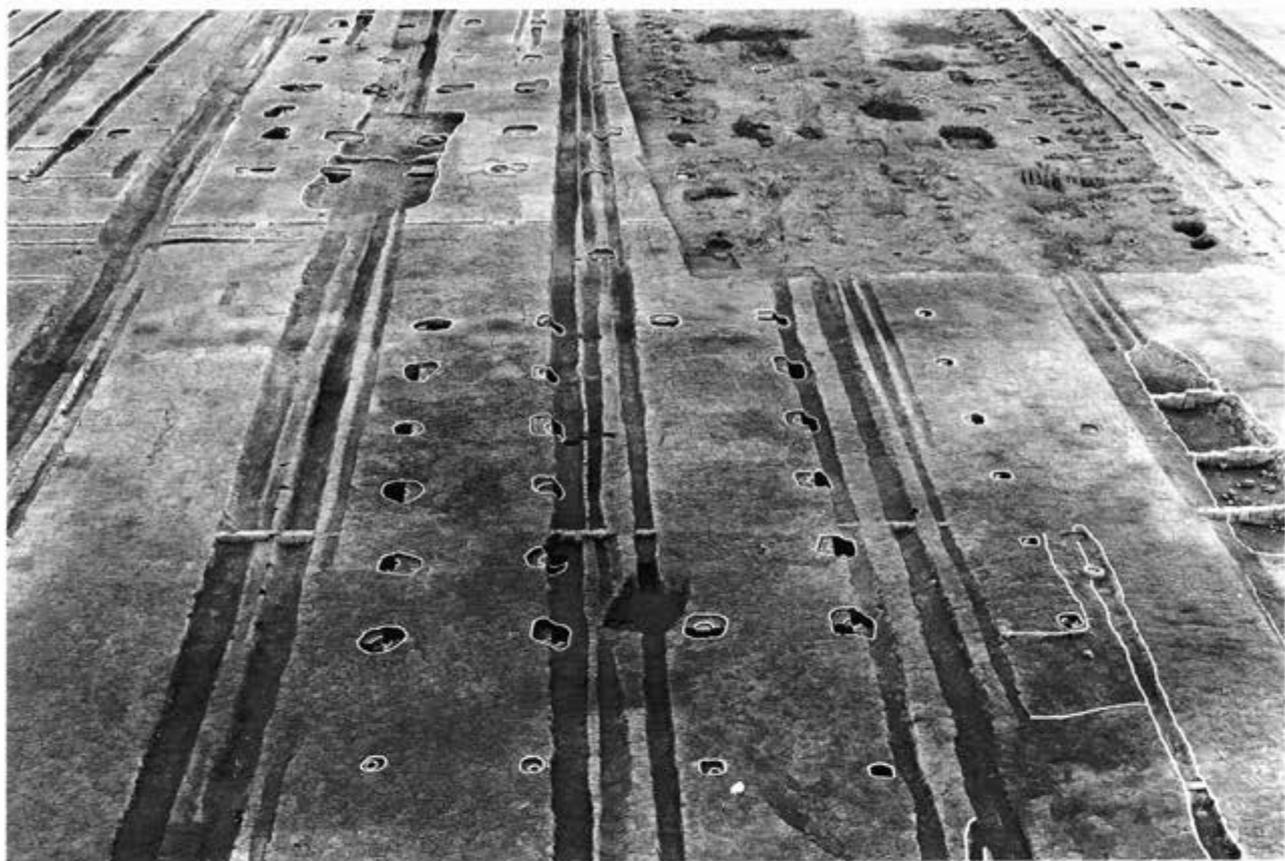
(2)掘立柱建物跡S B363078・363079・363082、溝S D363120（南から）



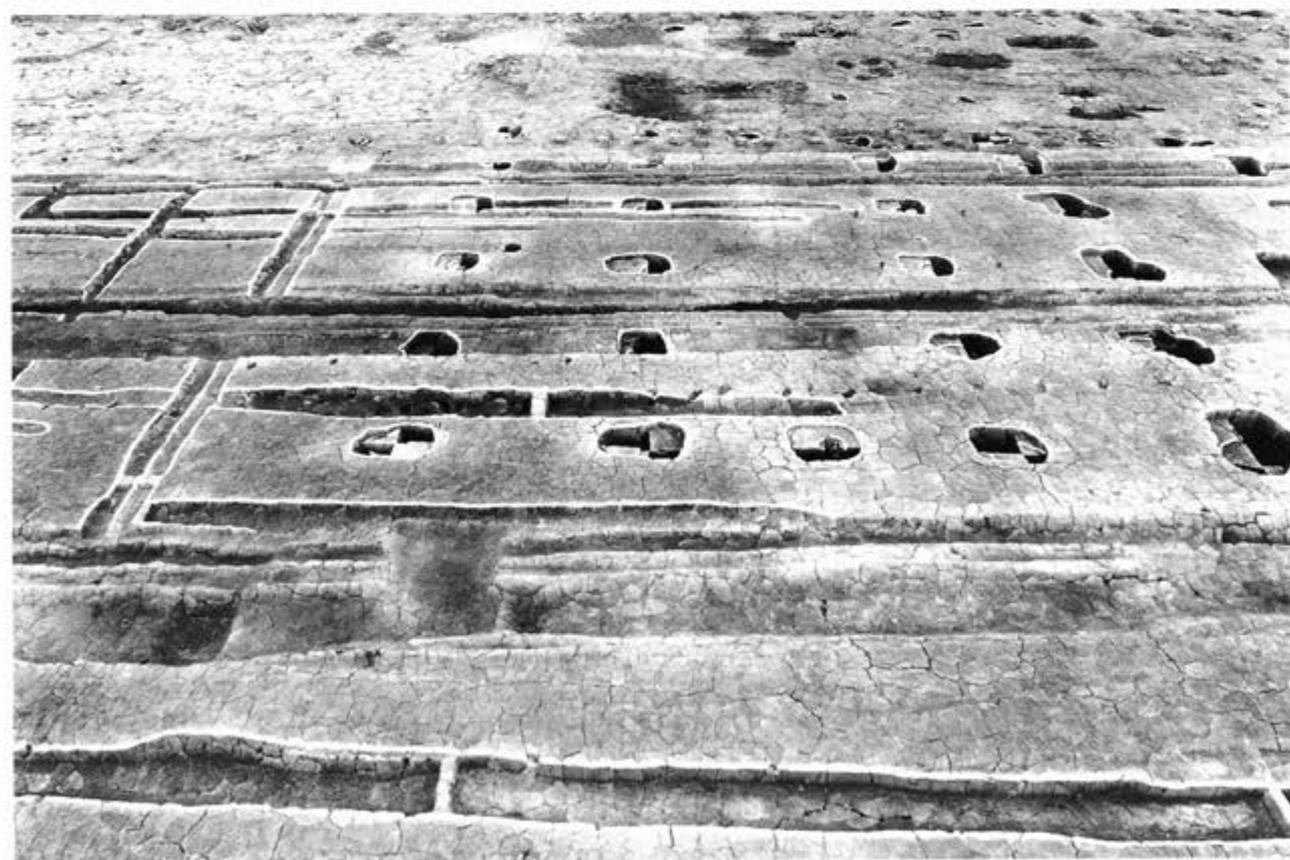
(1)掘立柱建物跡S B363079・363080（南から）



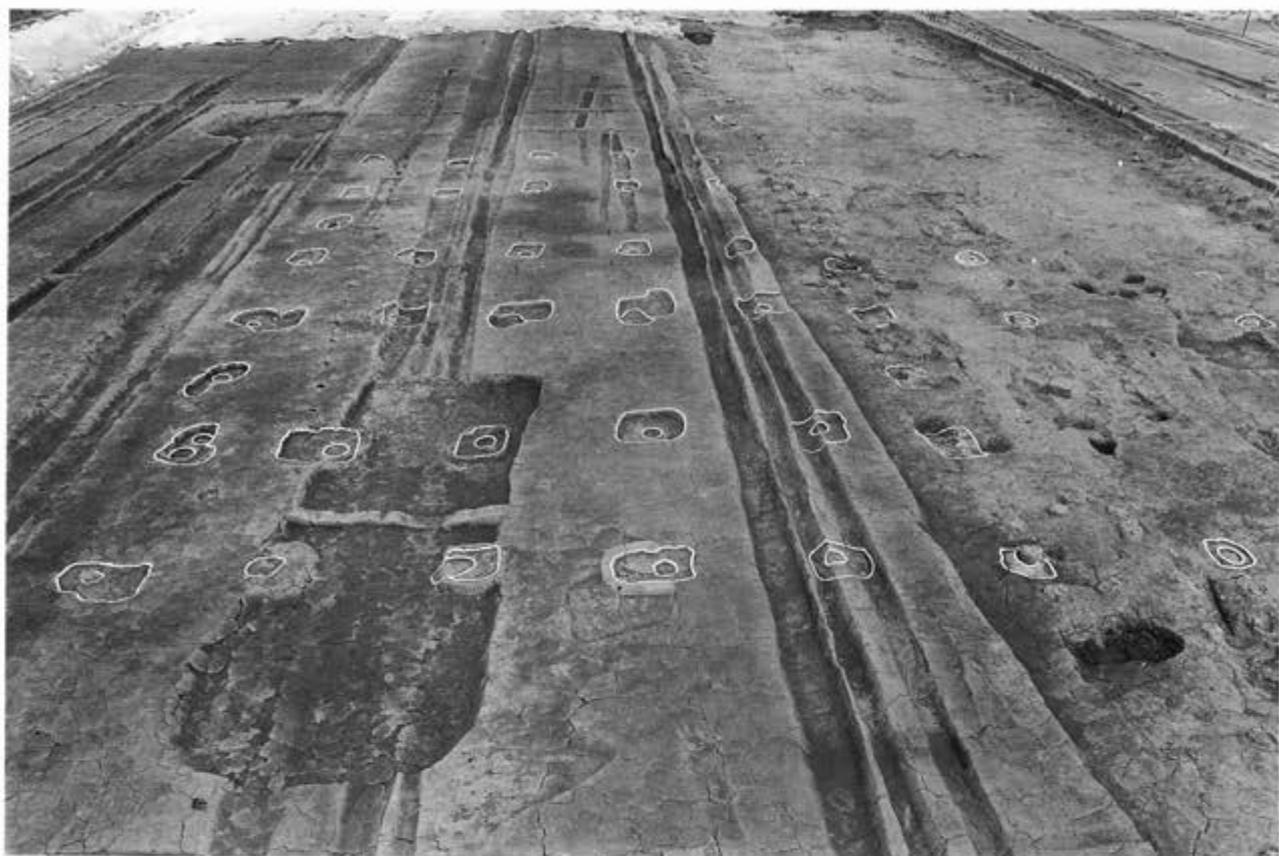
(2)掘立柱建物跡S B362104（南から）



(1)掘立柱建物跡 S B362118 (南から)



(2)掘立柱建物跡 S B362116 (西から)



(1)掘立柱建物跡S B362116・362117 (南から)



(2)掘立柱建物跡S B362116 柱穴ビット14 (西から)



(1)掘立柱建物跡S B362116 柱穴ビット5（南から）



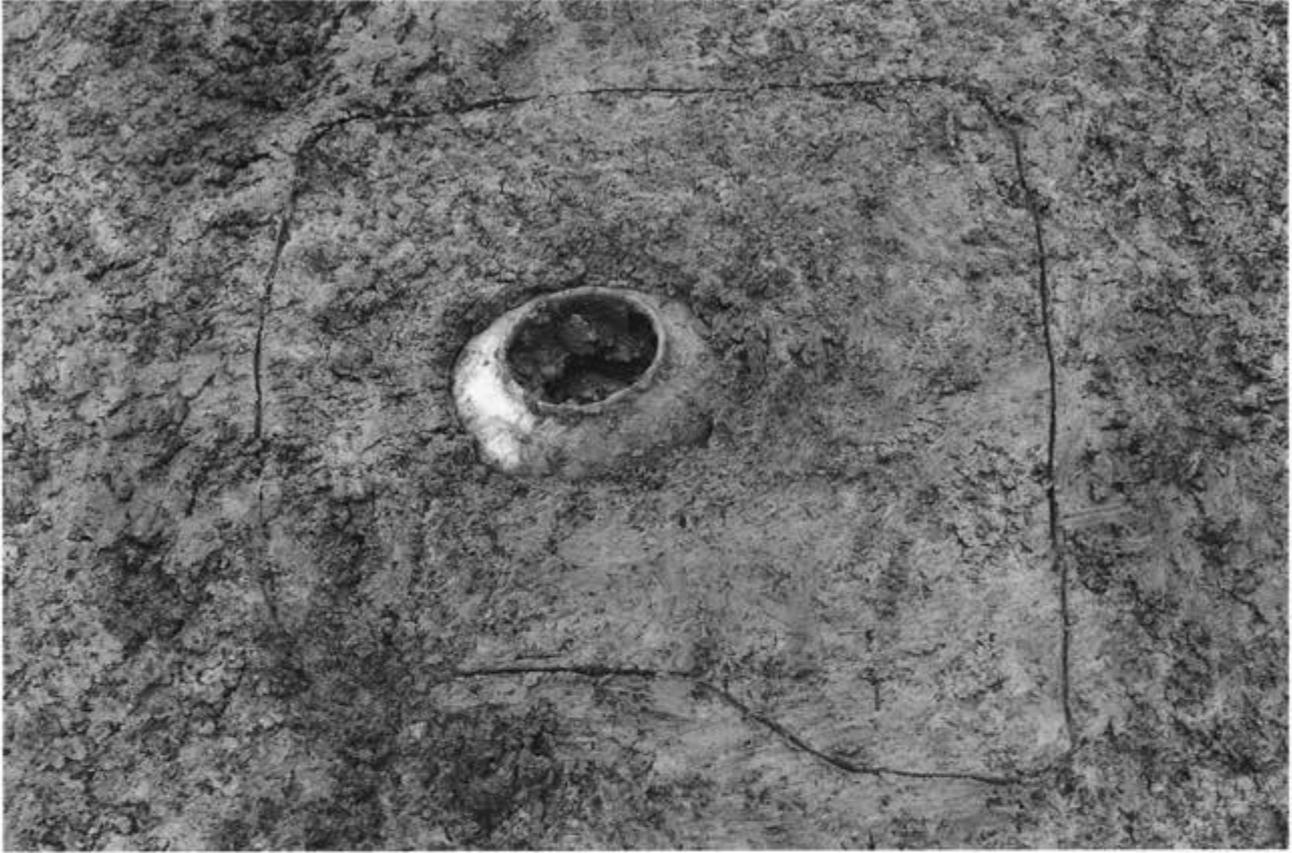
(2)掘立柱建物跡S B362116 柱穴ビット4（南から）



(1)掘立柱建物跡S B362117 柱穴ビット4（南から）



(2)掘立柱建物跡S B362117 柱穴ビット13（南から）



(1)地鎮跡S X362100検出状況（東から）



(2)地鎮跡S X362100小壺埋納状況（復原、東から）



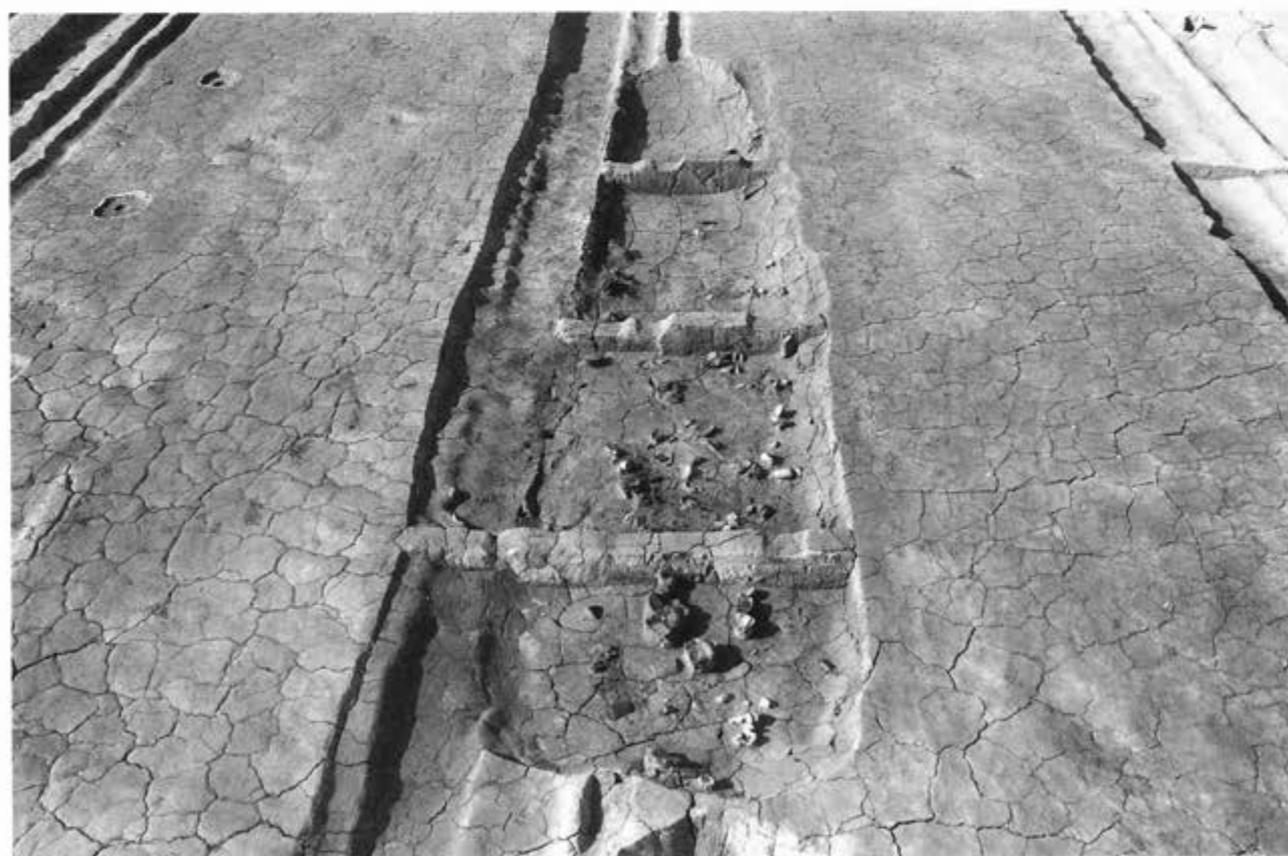
(1)井戸S E 363084（北から）



(2)井戸S E 363084遺物出土状況（南から）



(1)土坑S X363090遺物出土状況（東から）



(2)土坑S X363089遺物出土状況（南から）



(1)溝S D362105遺物出土状況（西から）



(2)溝S D362111遺物出土状況（南から）



(1) 塀 S A33609 (南から)



(2) 塀 S A33609 柱穴ビット96 (東から)



(1)調査地全景（弥生～飛鳥時代遺構面、南から）



(2)調査地全景（西から）



(1)溝 S D362201 (南東から)



(2)溝 S D363107牛足跡



(1)環濠 S D361162・361168 (南東から)



(2)環濠 S D361162断面 (南東から)



(1)方形周溝墓S D361123・S X363113（東から）



(2)方形周溝墓S D361123周溝東辺出土土器（西から）



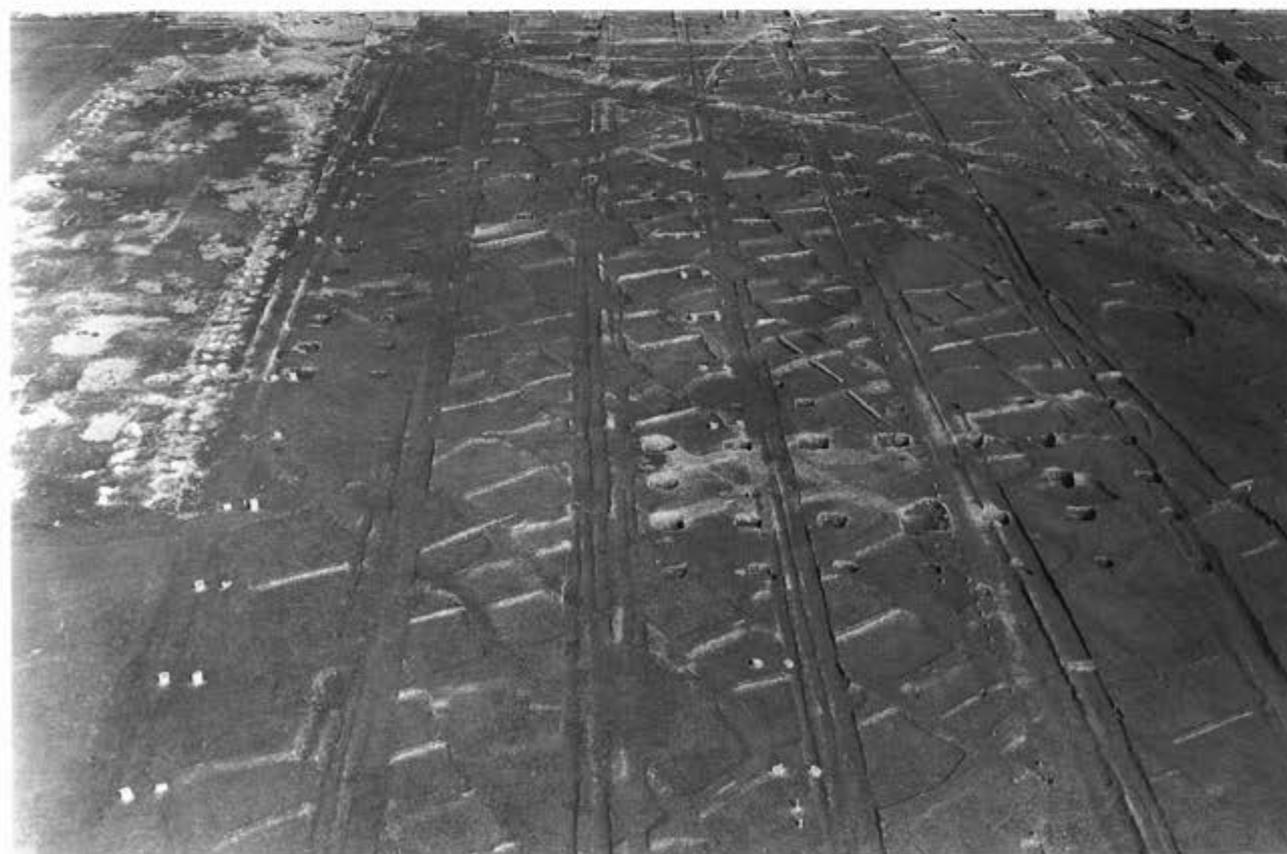
(1)方形周溝墓群（東から）



(2)道路状遺構 S F 363108・363109（南東から）



(1)水田畦畔（南東から）



(2)水田畦畔（南から）



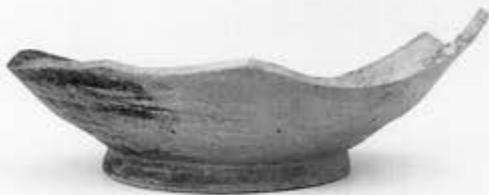
第21図 2



第21図 3



第21図 7



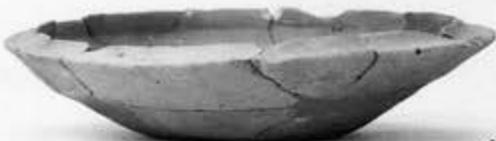
第21図 8



第35図 1



第35図 2



第35図 3



a



第24図 2



第24図 3



第24図 5



第24図 6



第24図 7



b



c

出土遺物(1) 番号は挿図番号に一致
 a・c. S D363100 (南一条三坊十三町宅地内溝)
 b. S D362101 (南一条第二小路北側溝)



第24図8



第24図12



第24図9



第24図17



第24図15



第24図14



第24図16



第24図21



第24図19

出土遺物(2) 番号は挿図番号に一致



第33図 1



c



第33図 2



d



a



e



第33図 21



f



第33図 6



g



b



h



第33図 7



第33図 8

出土遺物(3) 番号は挿図番号に一致

a・e, SX363090

b・f, SX363089

c・d・g・h, SX363087



第33図10



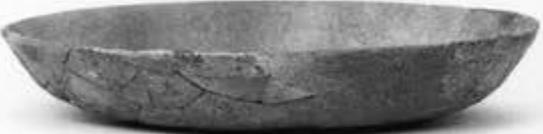
第33図11



第33図13



第33図15



a



b



c



d



e



f



第33図17



第33図18



第33図19



第33図31

出土遺物(4) 番号は挿図番号に一致

a・c・f, SX363090 b・d・e, SX363087



a



b



c



d



第33図24



第33図26



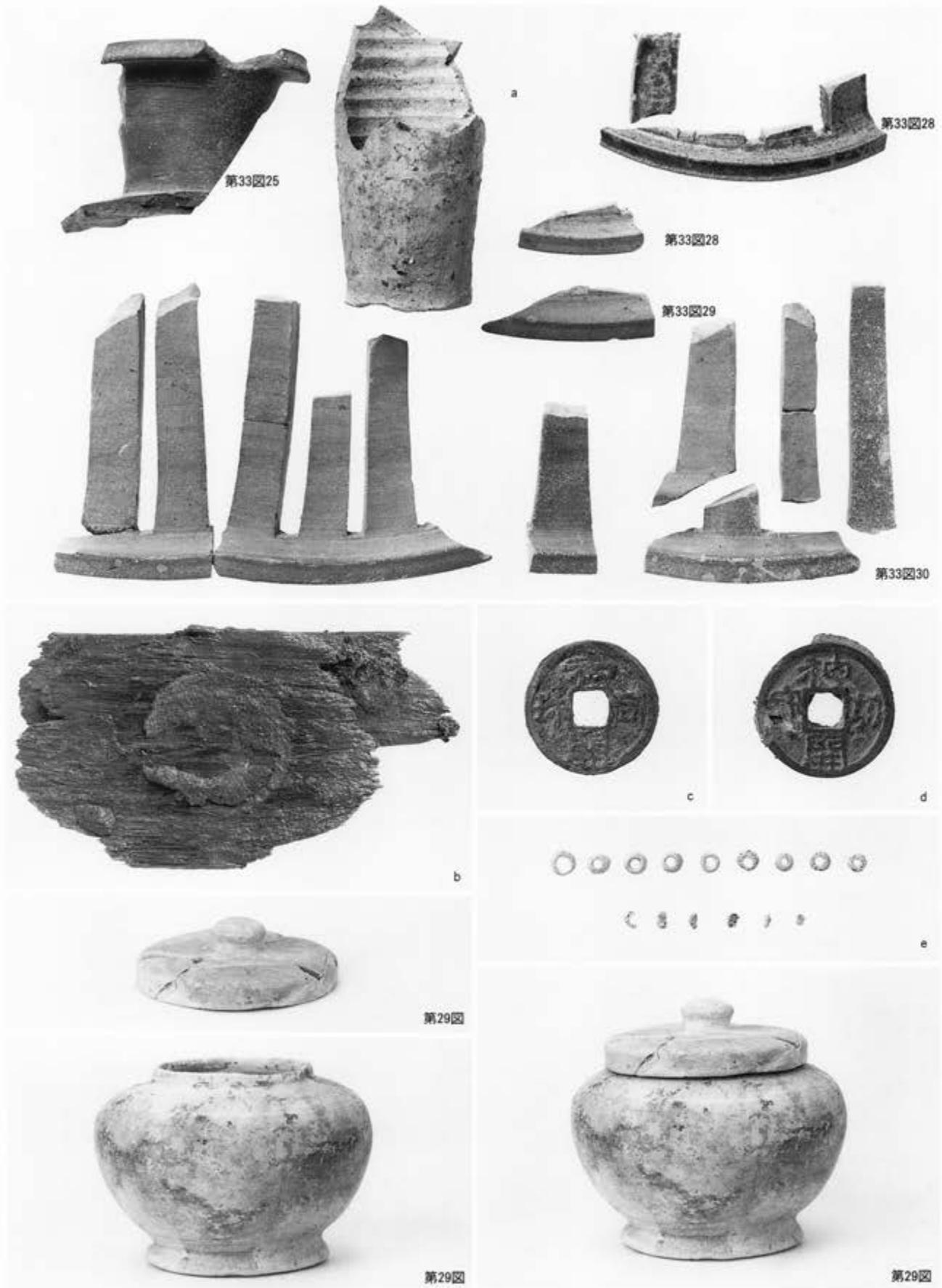
第33図27



e

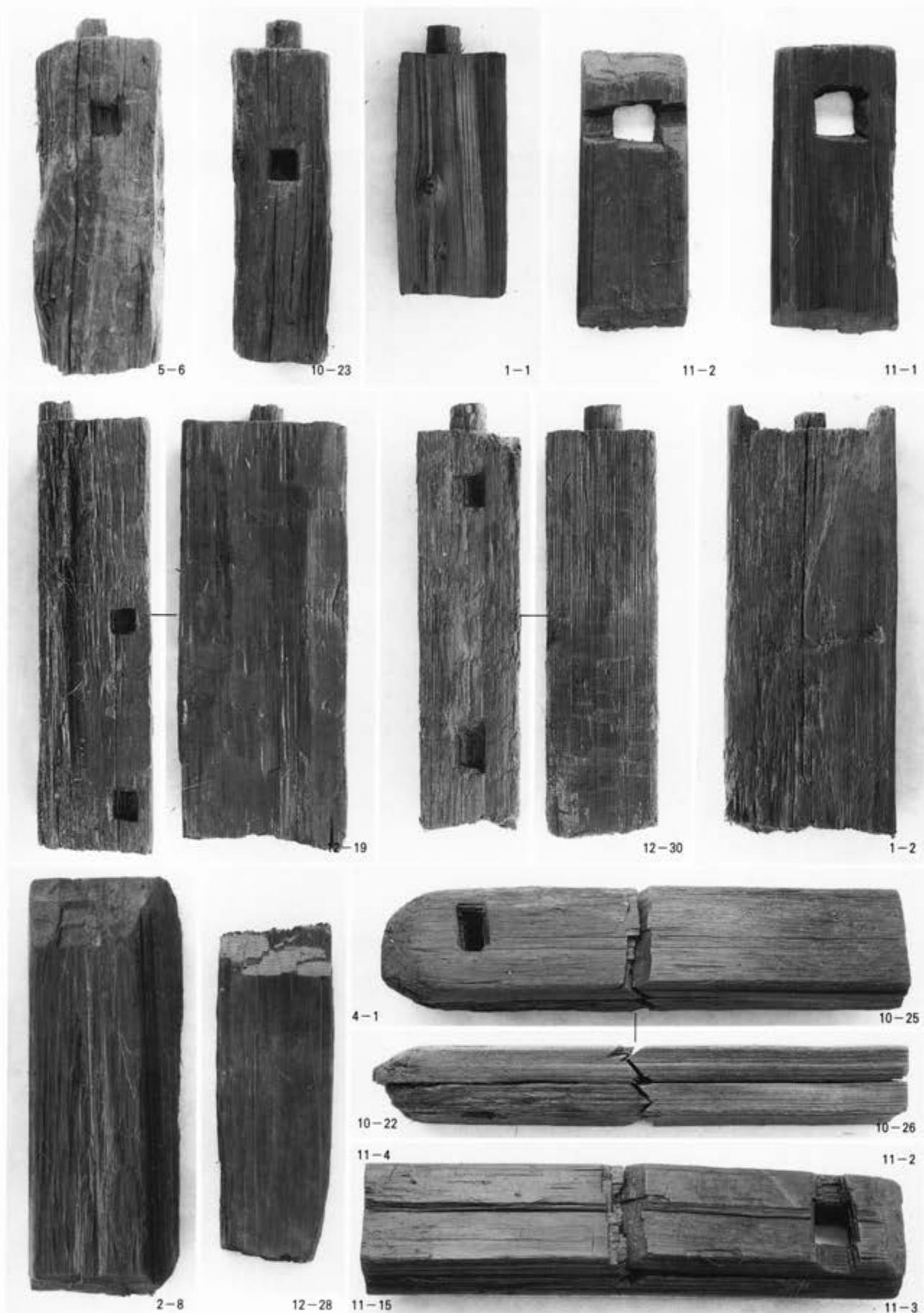
出土遺物(5) 番号は挿図番号に一致

a・d. SX363090 b・c・e. SX363089

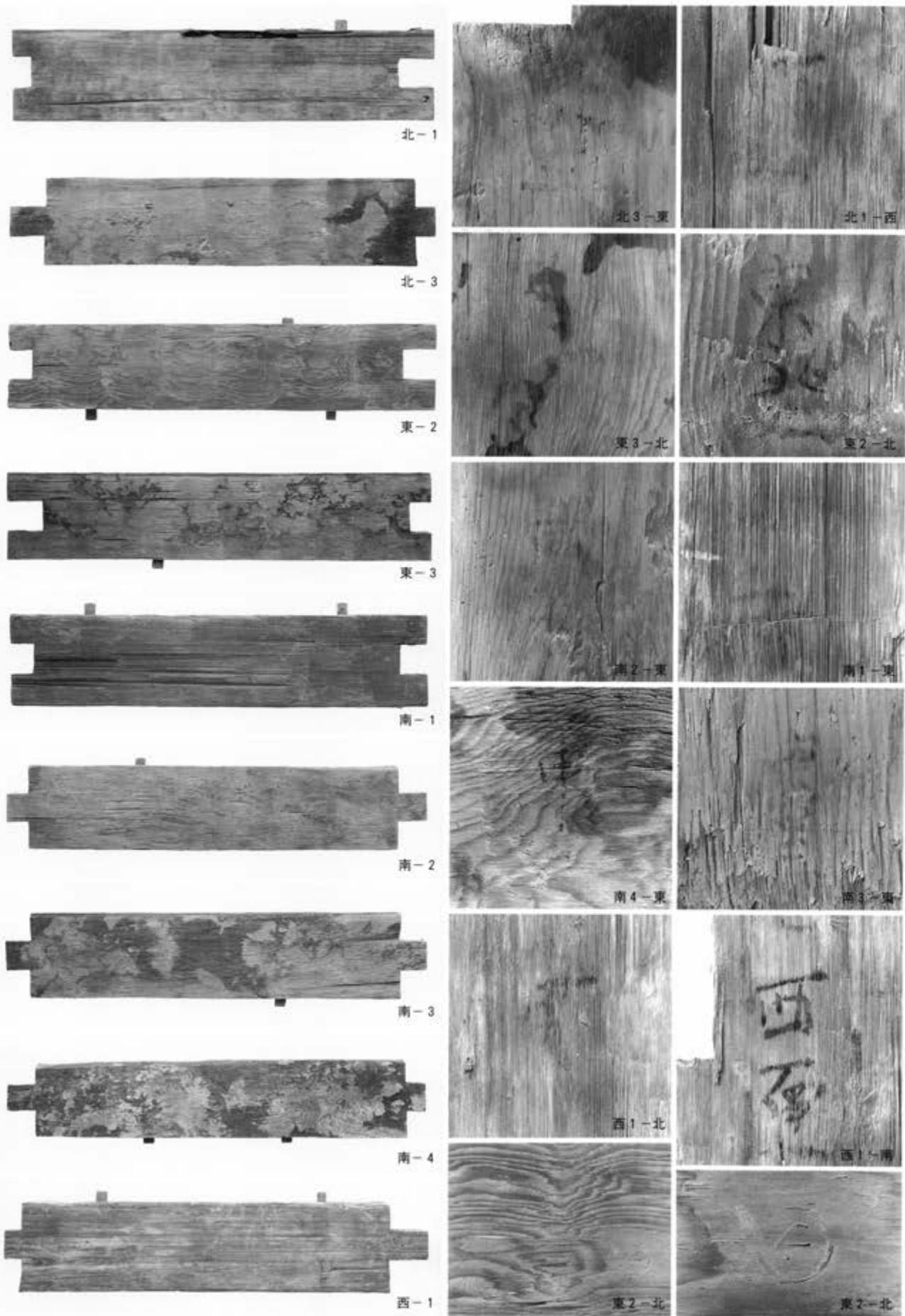


出土遺物(6) 番号は挿図番号に一致

a. SD362103 b・c・d. SX361172 e. SX362100



出土遺物(7) 掘立柱建物跡S B362116出土礎板 ※番号はビット番号-遺物番号で示した。



出土遺物(8) 井戸S E363084横板(外面)・墨書及び刻印 第30・31図に対応



39-1



38-4



39-2



38-3



39-4





(1)調査地全景（北西から）



(2)調査地全景（垂直、上が北東）



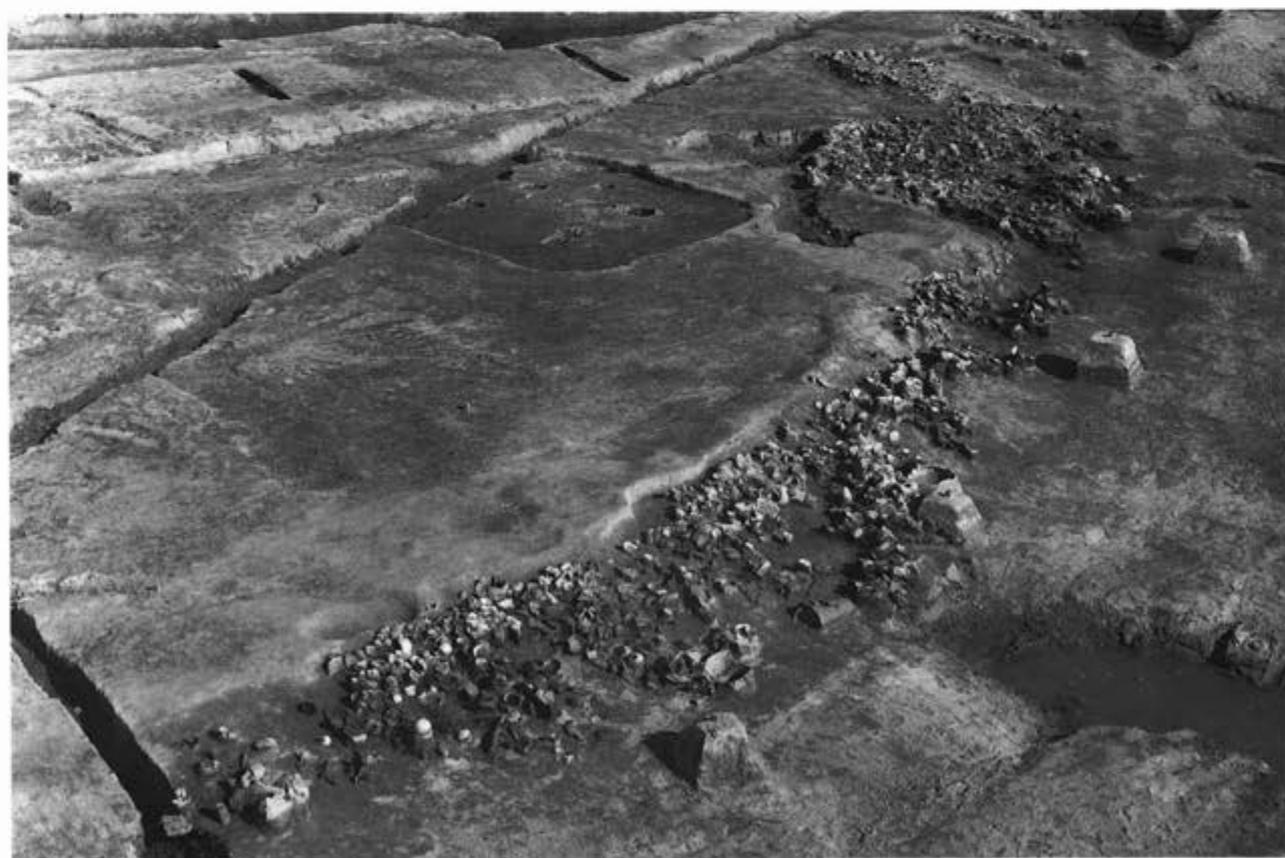
(1)トレンチ北部遺構検出状況（古墳時代、南東から）



(2)トレンチ南部遺構検出状況（奈良時代、北西から）



(1) S D95062北部遺物出土状況 (A・B区、南から)



(2) S D95062南部遺物出土状況 (D・C・F・G区、北西から)



(1) S D95062 (A区) 遺物出土状況 (西から)



(3) S D95062 (D区) 遺物出土状況 (南西から)



(2) S D95062 (B区) 遺物出土状況 (西から)



(4) S D95062 (D区) 中央遺物出土状況 (北東から)



(3) S D95062 (B区) 人物埴輪 1 出土状況 (西から)



(4) S D95062 (B区) 盾形埴輪 1 出土状況 (北東から)



(1) S D95062 (C区) 遺物出土状況 (南西から)



(2) S D95062 (F・G区) 遺物出土状況 (南から)



(3) S D95062 (C区) 家形埴輪出土状況 (南西から)



(4) S D95062 (F区) 馬形埴輪2出土状況 (西から)



(1) S D95062 (D区) 馬形埴輪1出土状況 (北東から)



(2) S D95062 (D区) 蓋・合子形埴輪1出土状況 (南から)



(3) S D 95062 (D区) 下層高杯群出土状況 (西から)



(4) S D 95062 (D区) 高杯群種子出土状況 (北から)



(1) S D 95062 (F区) 盾形埴輪2出土状況 (西から)



(2) S D 95062 (F区) 合子形埴輪2出土状況 (北から)



(3) S K95075遺物出土状況 (南東から)



(4) S X95070東端部掘出土状況 (南から)



(1) S X95069・70検出状況 (南東から)



(2) S X95069 (手前の板材が榎、東から)



(3) S D95044掘出土状況 (南から)



(4) S D95044梯子出土状況 (東から)



(1) S D95044・45・55検出状況 (南から)



(2) S K95054遺物出土状況 (東から)



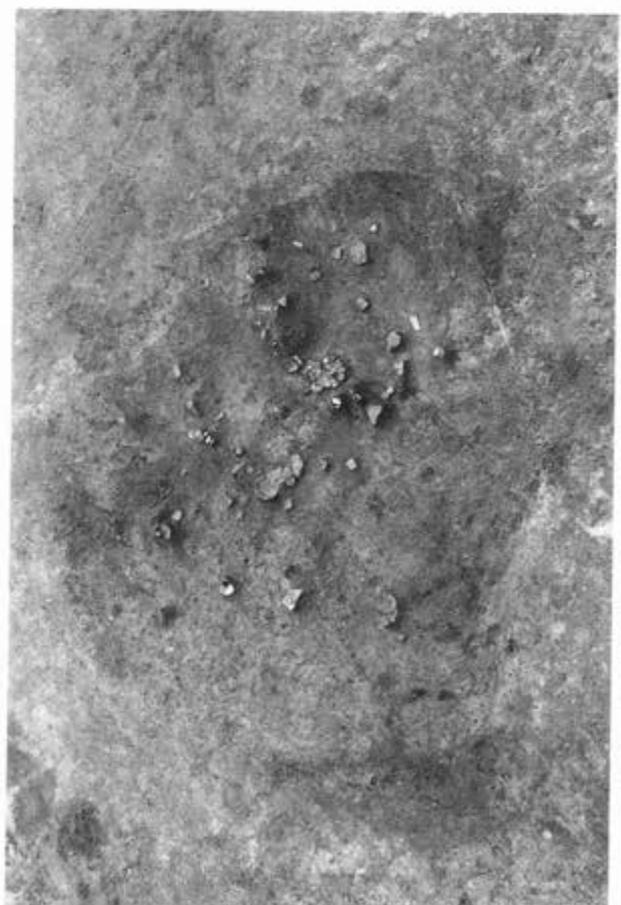
(3) S K95047検出状況 (北から)



(4) S K95048検出状況 (南から)



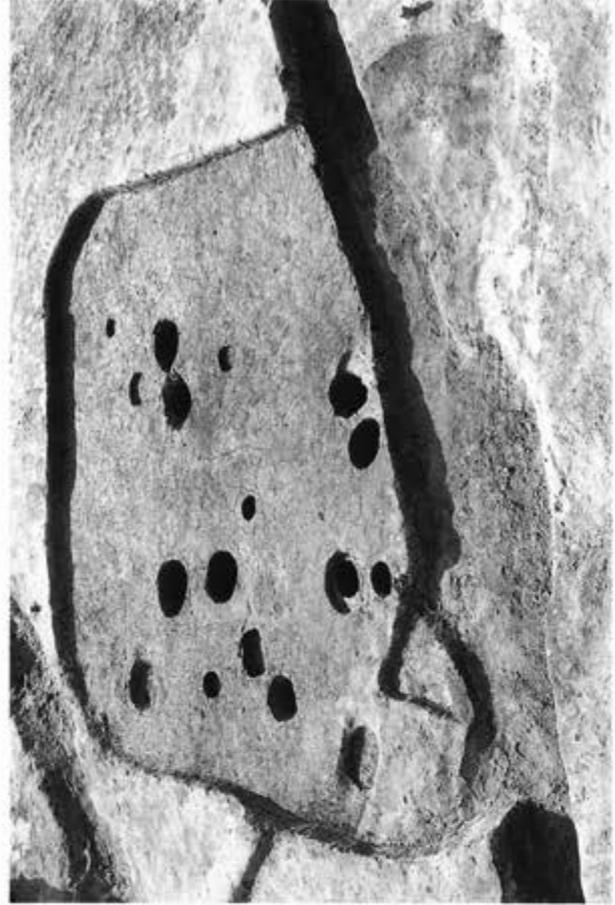
(1) S D95045、S K95049・50・51検出状況 (南から)



(2) S K95046検出状況 (東から)



(3) S H95063検出状況 (東から)



(4) S H95064検出状況 (東から)



(1) S D95055検出状況 (北から)



(2) S H95054検出状況 (南から)



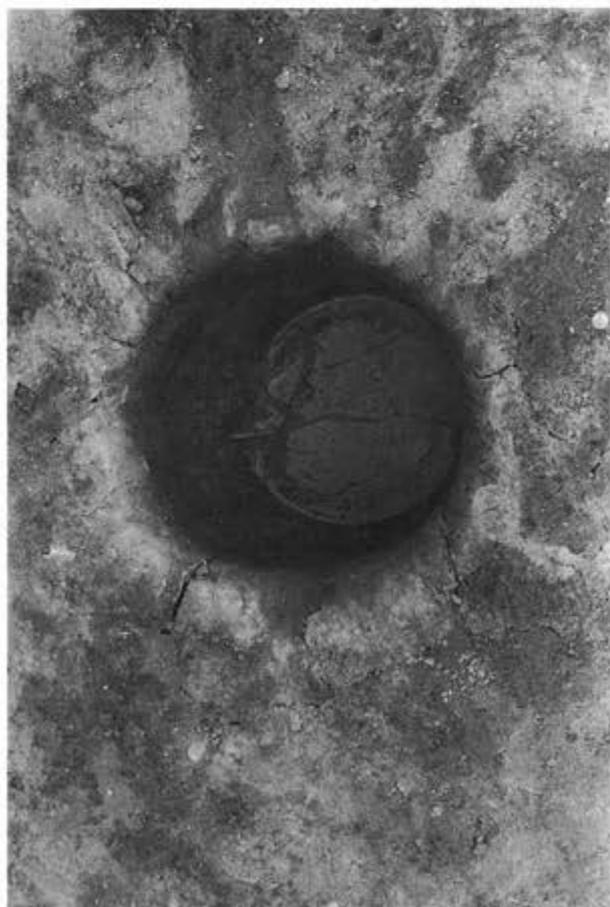
(3) S E 95030 検出状況 (北東から)



(4) S E 95030 曲物出土状況 (西から)



(1) S B 95072 検出状況 (東から)



(2) ピット1 遺物出土状況 (南西から)



出土遺物(I) 土器 1 須恵器：1~3. 杯蓋 4•6. 杯身 5. 有蓋高杯蓋 7. 有蓋高杯 18. 無蓋高杯 9. 小型甕
土師器：10. 壺B 11. 壺A 12. 鉢B 13~15. 鉢A



出土遺物(2) 土器 土師器 : 1・2. 小型丸底壺 A 3. 小型丸底壺 B 4~6. 杯 A 7. 杯 B 8. 杯 D 9. 杯 E
10~12. 高杯 A 13~15. 高杯 B 16. 高杯 C 17. 高杯 D 18. 高杯 F



1



2



3



4



5



6



7



8

出土遺物(3) 土器3 土師器：1~4. 小型甕 5~8. 中型甕



出土遺物(4) 土器4 大型甕

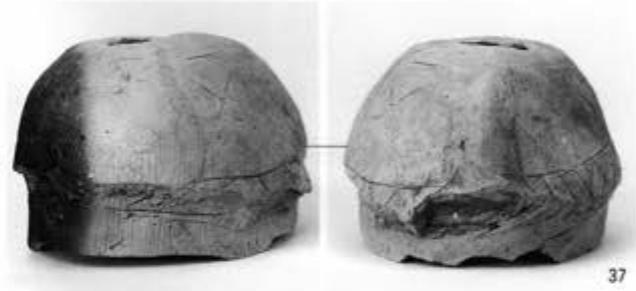


出土遺物(5) 土器 5 土師器: 2. 鍋B 1. 鍋C 3・4・7. 瓶A 5・6. 瓶B





35



37



39



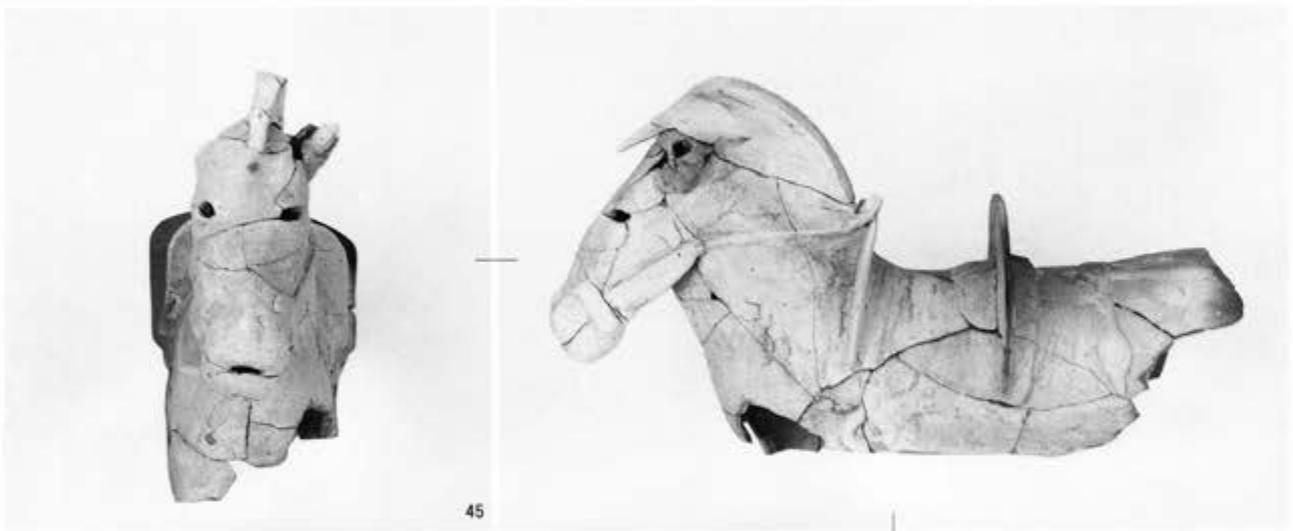
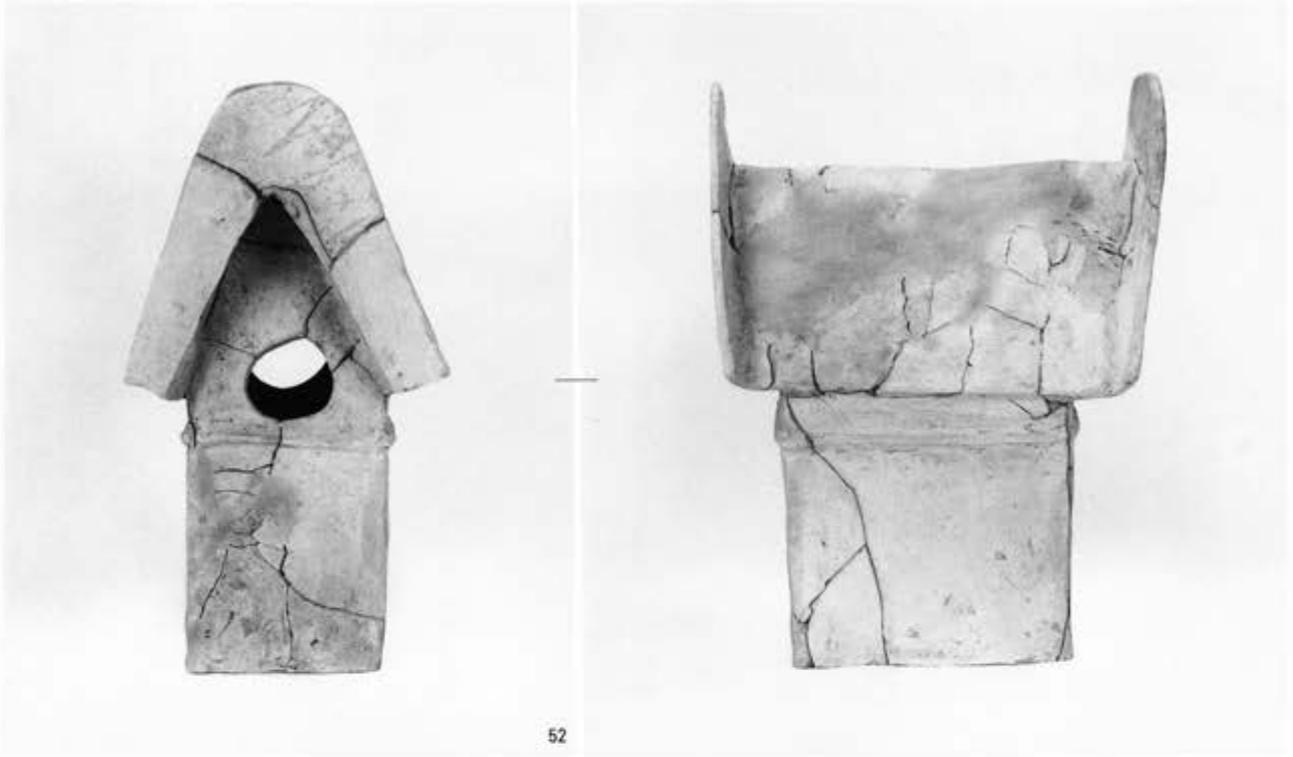
40

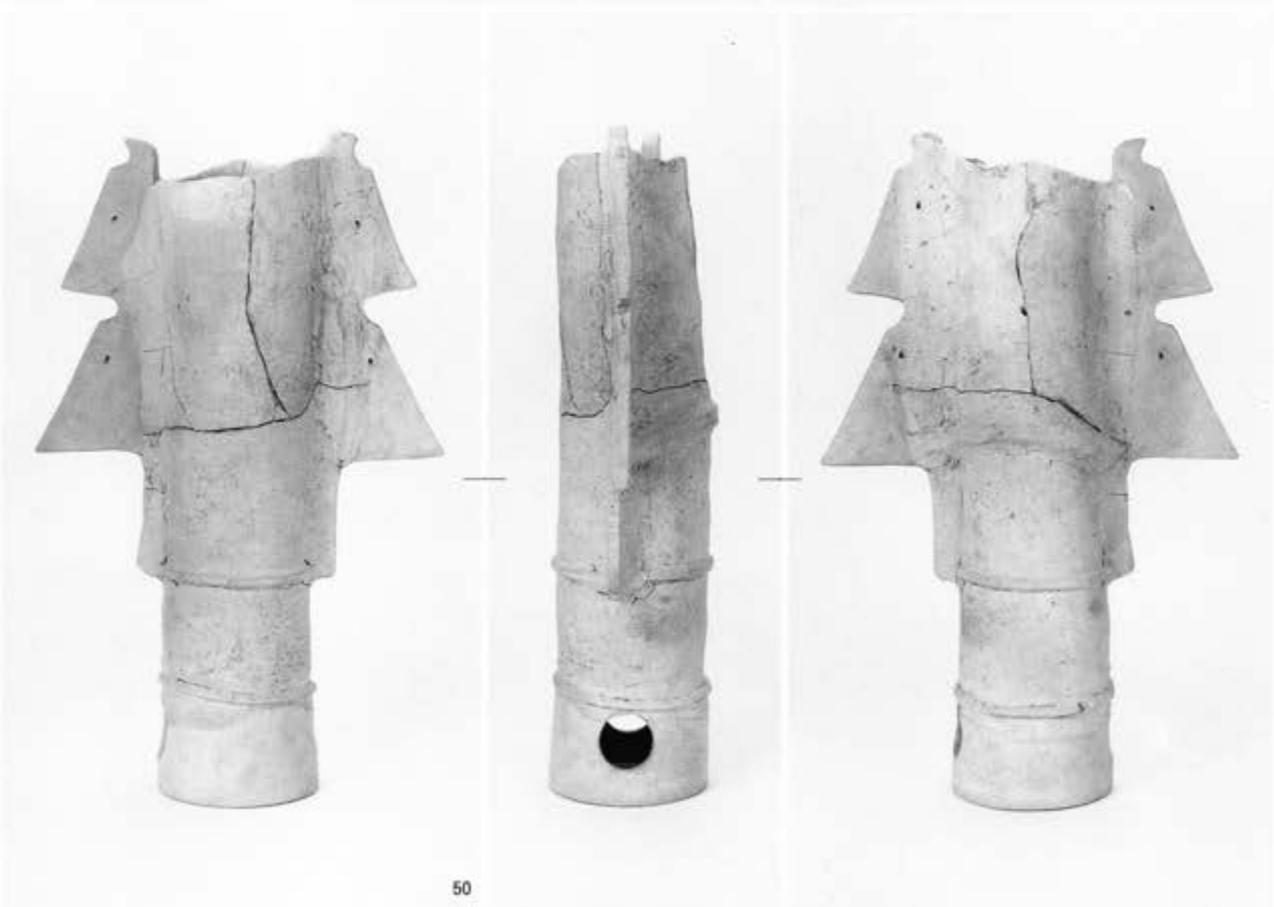
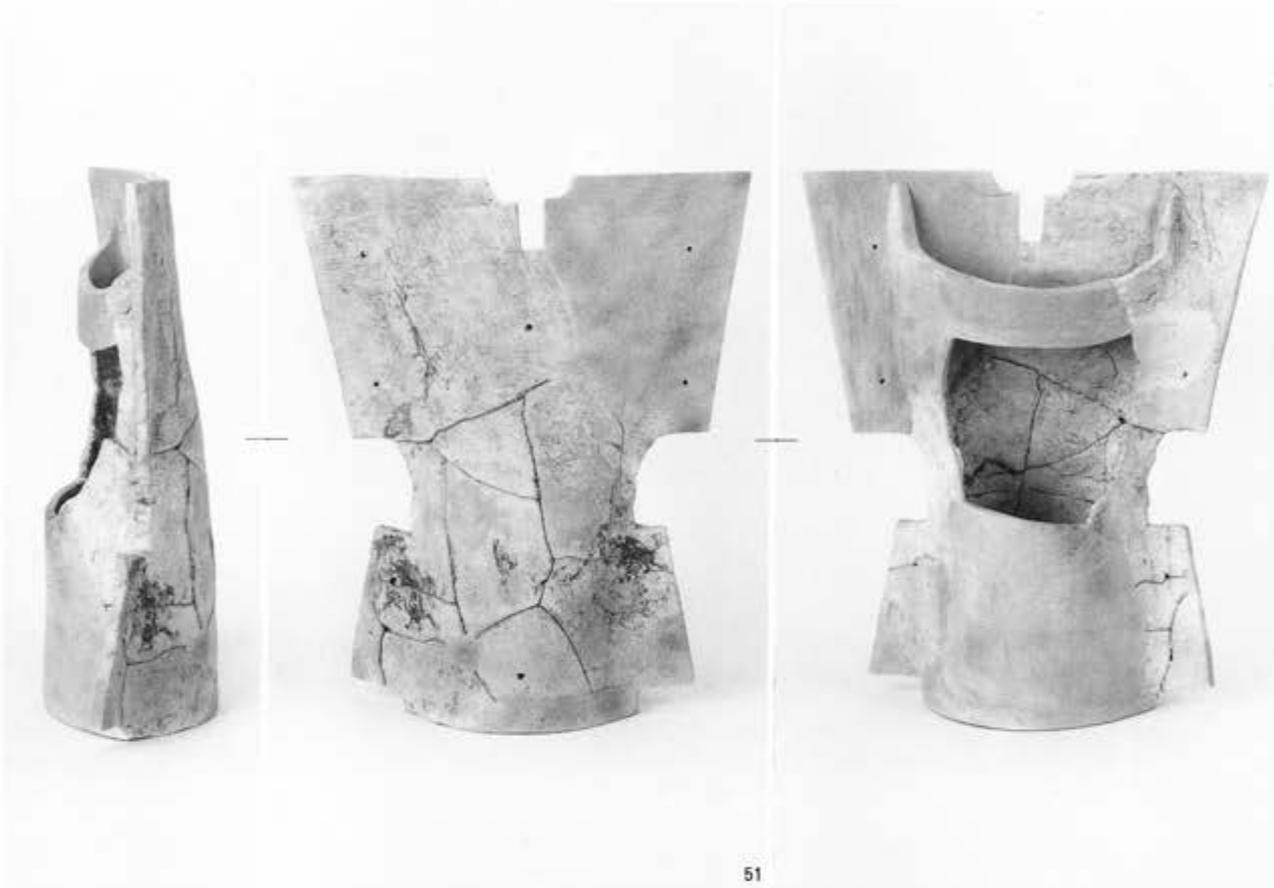


38

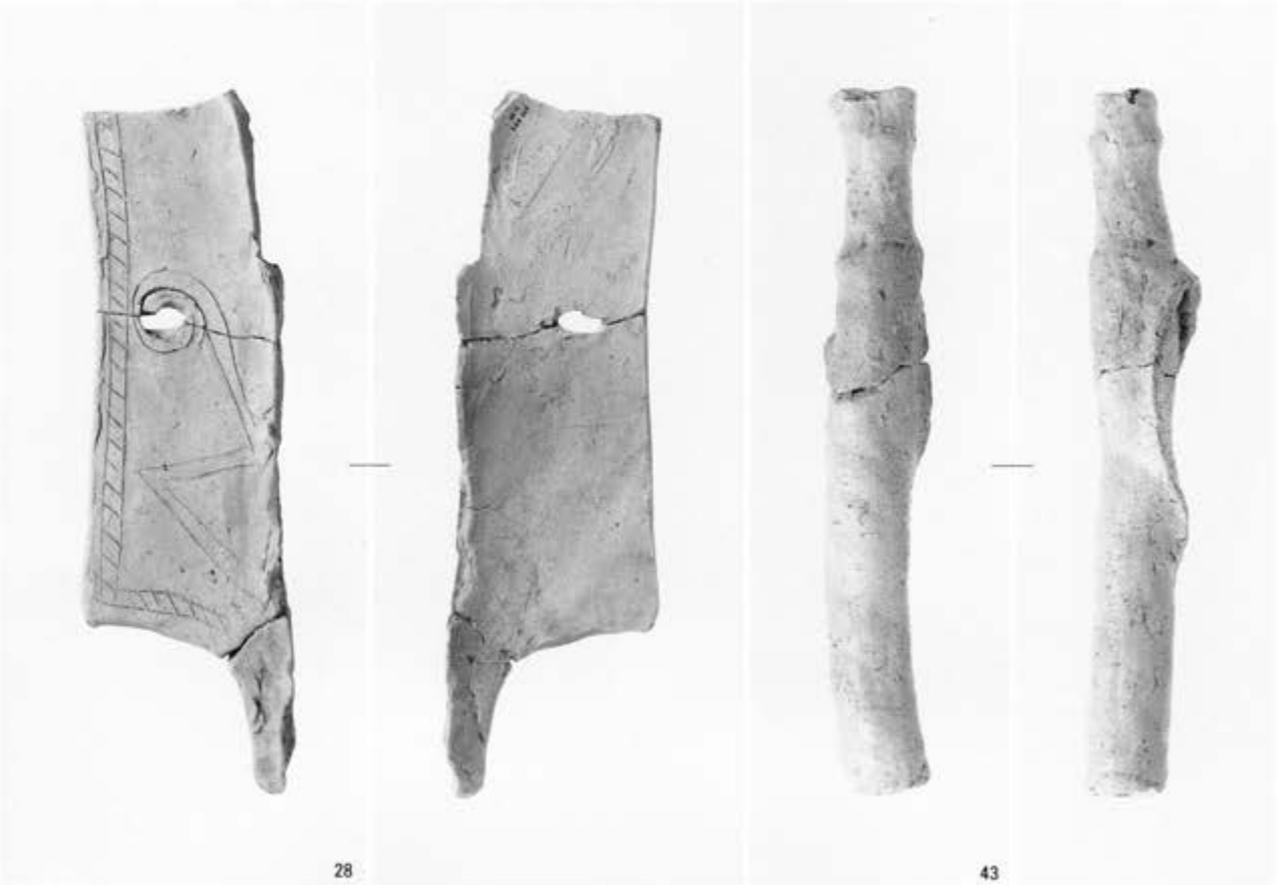
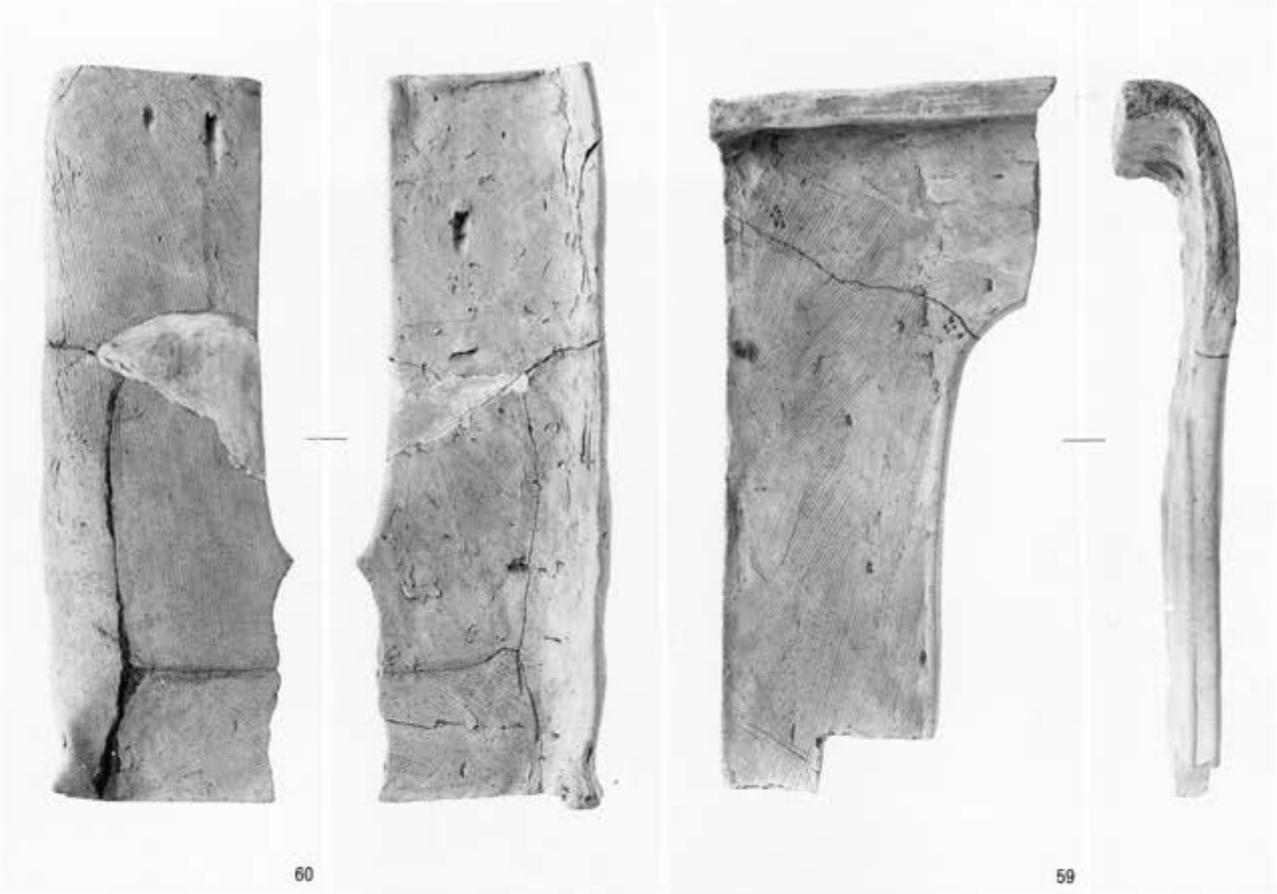


44





出土遺物(9) 埴輪 4





53



54



29

30



19

29



31

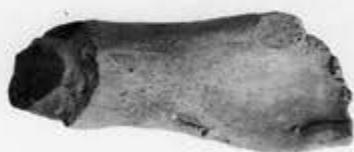
30



26



22



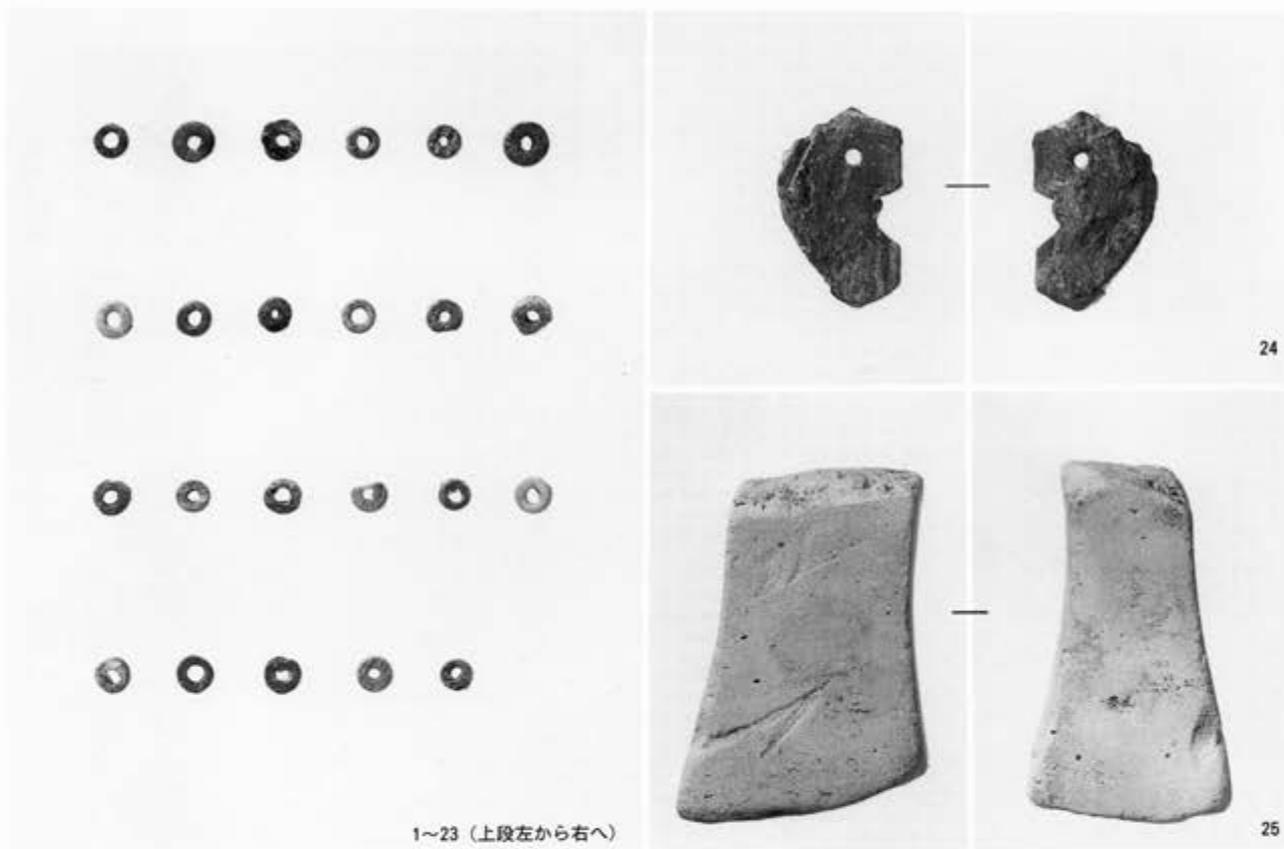
41



42

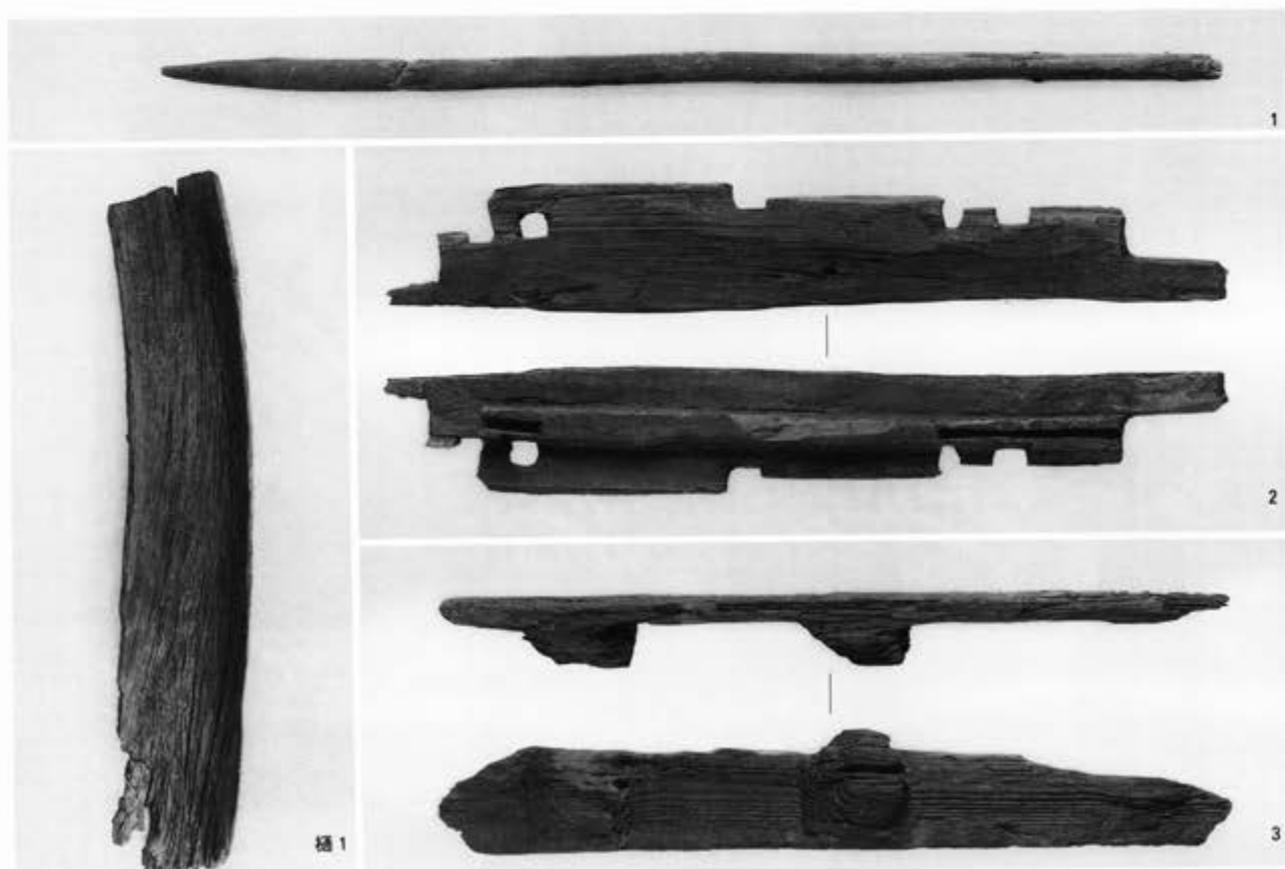


23



1~23 (上段左から右へ)

玉類・砥石



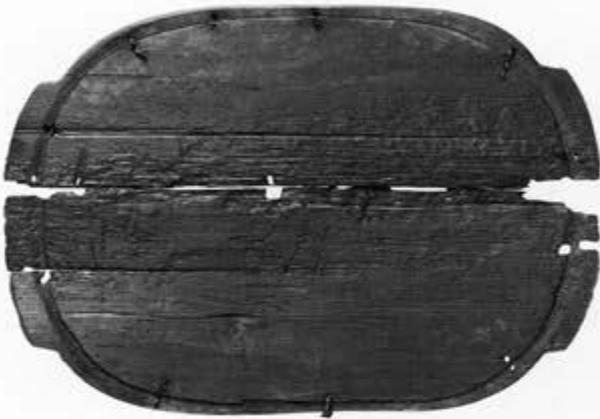
出土遺物13 木製品1



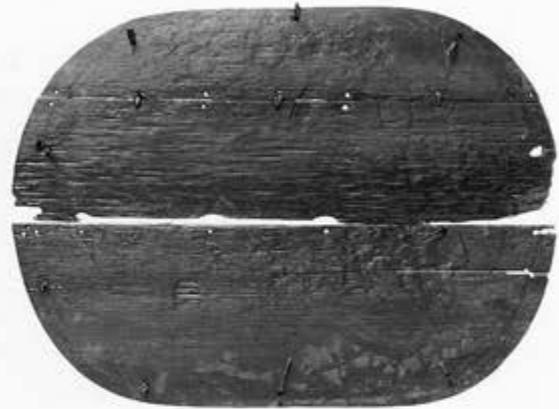
10



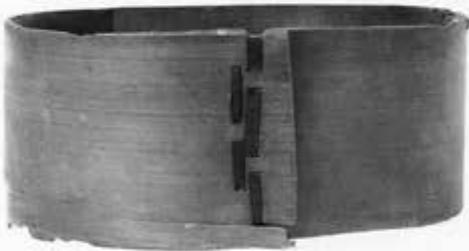
11



12



13



14



7

8



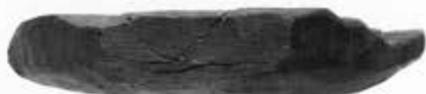
4



5



6



報告書抄録

| ふりがな | | | | | | | | |
|---|---|----------|------|--|--------------|--|------------------------|------|
| 書名 | | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京都府遺跡調査概報 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第74冊 | | | | | | | |
| 編著者名 | 石井清司・野々口陽子・戸原和人・岩松 保・中川和哉・竹井治雄・森島康雄・野島 永・岸岡貴英・辻本和美・森下 衛・橋本 稔 | | | | | | | |
| 編集機関 | (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 | | | Phone | | 075(933)3877 | | |
| 発行年月日 | 西暦 1997 年 | | 3 月 | | 26 日 | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 ° ' " | 東経 ° ' " | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| しの・まる やま1ごう ようあと 篠・マル山 1号窯跡 | かめおかし の ちょうしのくろい わ 亀岡市篠町篠黒岩 | 206 | 83-1 | 34° 59' 12" | 135° 36' 43" | 19960123 ～ 19960726 | 200 | 道路拡幅 |
| ながおか きょうあと さきょうだ い361・ 362・363じ ひがしつち かわいせき 長岡京跡左 京第361・ 362・363次 東土川遺跡 | きょうとしみな みくくぜひがしつち かわちようかない だ 京都市南区久世東 土川町金井田 | 107 | 10 | 34° 56' 27" | 135° 43' 25" | 19950410 ～ 19960228 | 14,880 | 道路拡幅 |
| ゆみでんい せきだい2 じ 弓田遺跡第 2次 | そうらくぐんきづ ちよういちさかゆ みでん・かみだい じよう 相楽郡木津町市坂 弓田・上大条 | 362 | | 35° 50' 7" | 134° 25' 38" | 19950418 ～ 19951122 | 3,700 | 道路建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 篠・マル山 1号窯跡 | 生産遺跡 | 平安 | | 登り窯1基 | | 須恵器 | | |
| 長岡京跡左 京第361・ 362・363次 | 都城 | 平安 | | 溝、道路側溝、築地塀・掘立 柱建物・掘立柱塀・井戸・祭 祀・土坑 | | 土師器・須恵器・二 彩陶器・緑釉陶器・ 瓦・ガラス玉・銭貨 ・斎串 | | |
| 東土川遺跡 | 集落・墓・生産 | 弥生・古墳・飛鳥 | | 方形周溝墓・水田・溝・土坑 | | 弥生土器・土師器・ 須恵器・石器 | | |
| 弓田遺跡第 2次 | 集落 | 古墳・奈良 | | 竪穴住居・掘立柱建物、溝、 自然流路・土坑・井戸・杭列 | | 土師器・須恵器・埴 輪・手捏ね土器・滑 石製玉・土錘・製塩 土器・砥石・木製品 | | |

京都府遺跡調査概報 第74冊

平成9年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 (代)